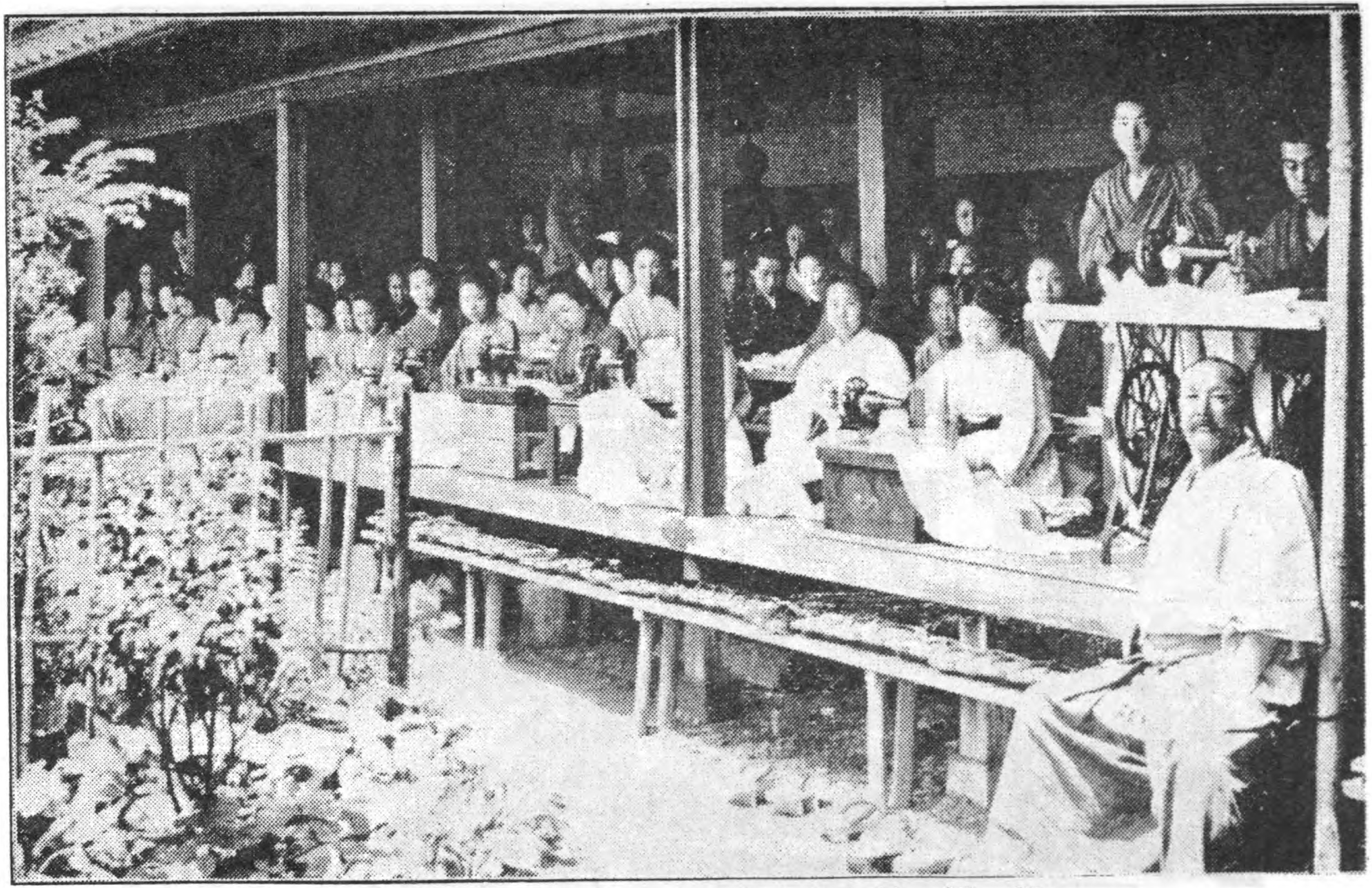
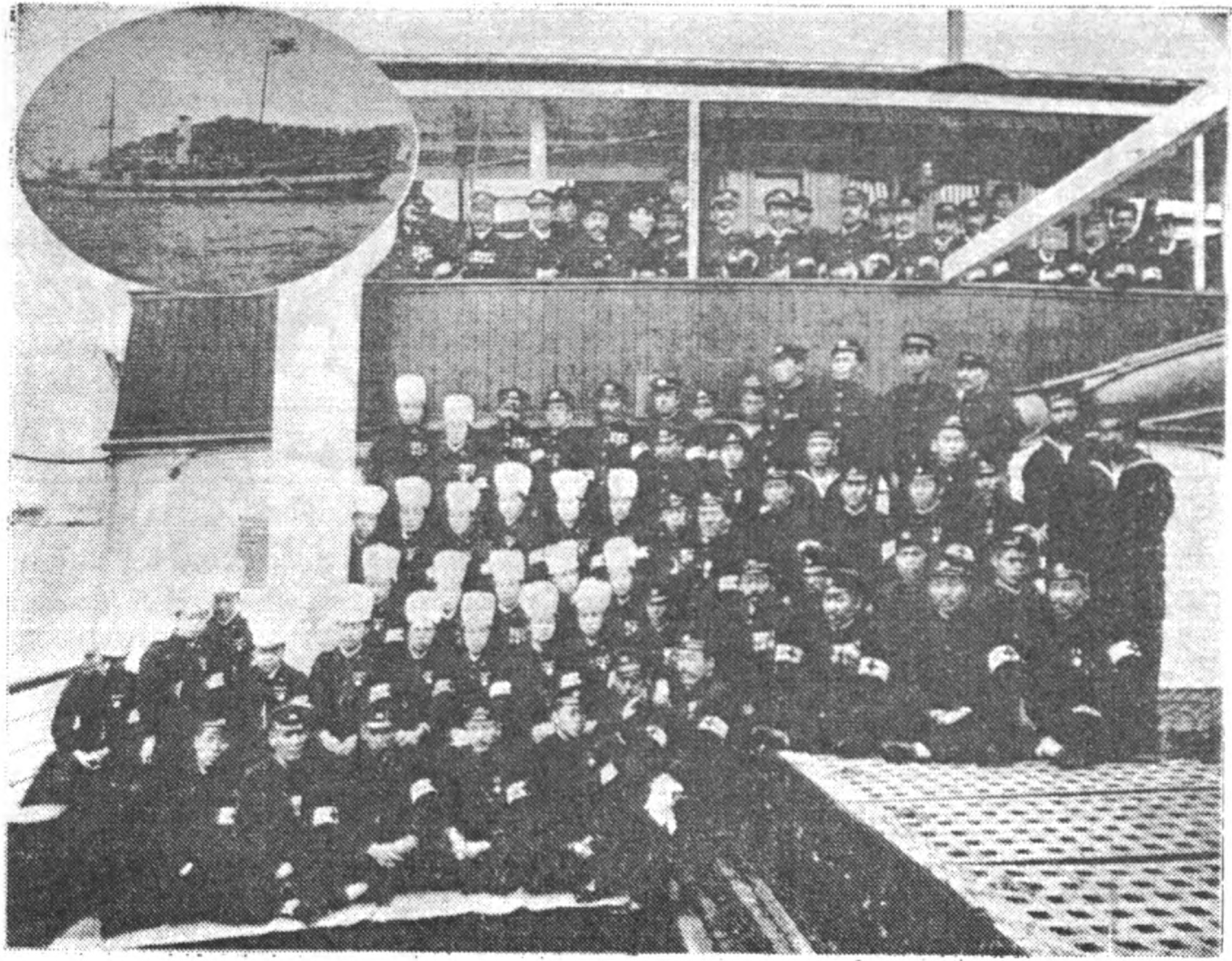

女鑑
第拾四年
第拾弐號

女鑑 第拾四年第拾四號 目次



報國婦人會々場　(雜綠內參觀)



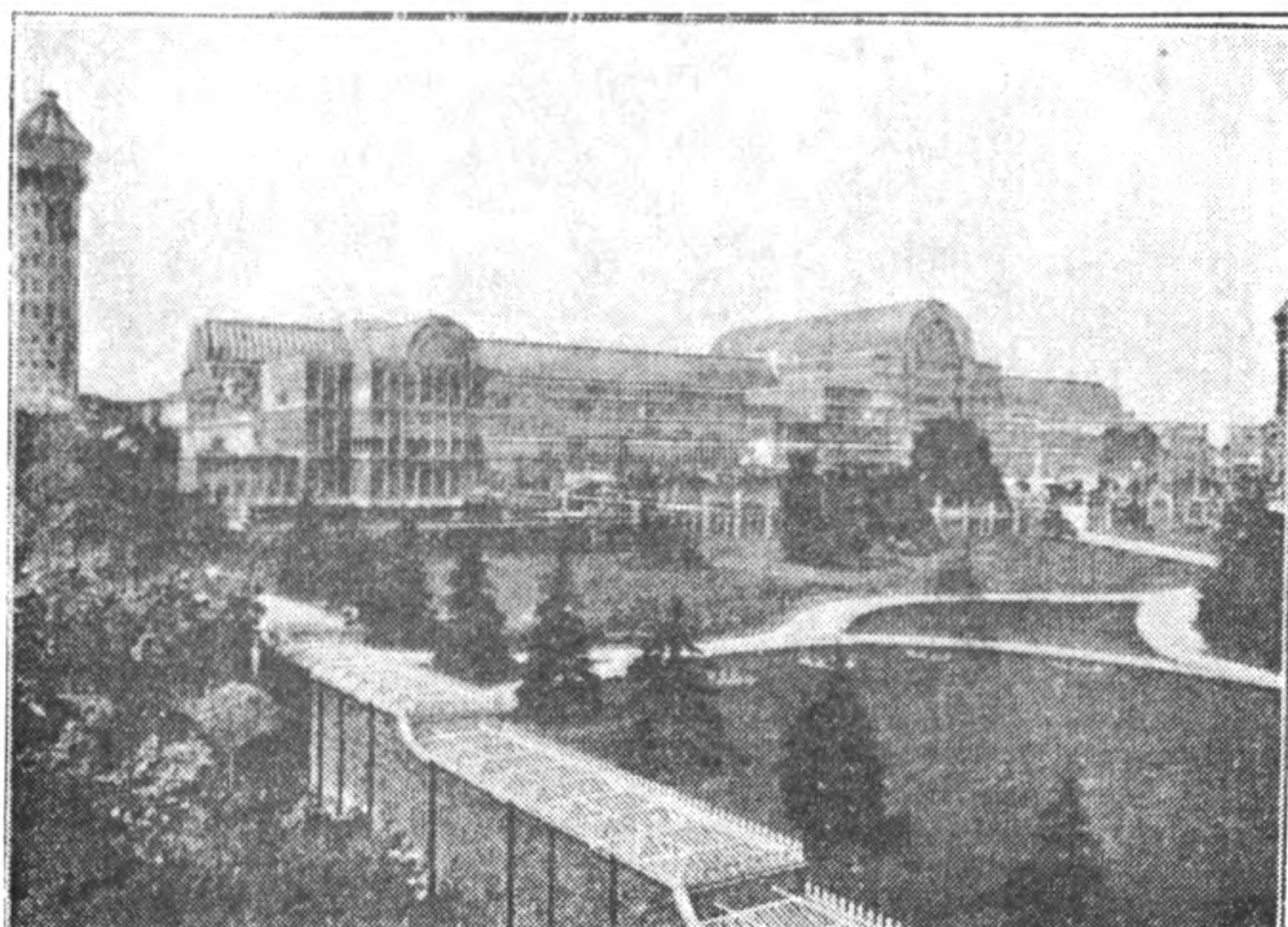
日本赤十字社病院船弘濟丸乘組員之圖



神戸婦人本公會の[illegible]夫人歡迎會



英國トラフアルガル公園子ルソン塔



水晶宮（英吉利）

輕便 瓦斯の煮焼 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮焼用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし
○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり
○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す
○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

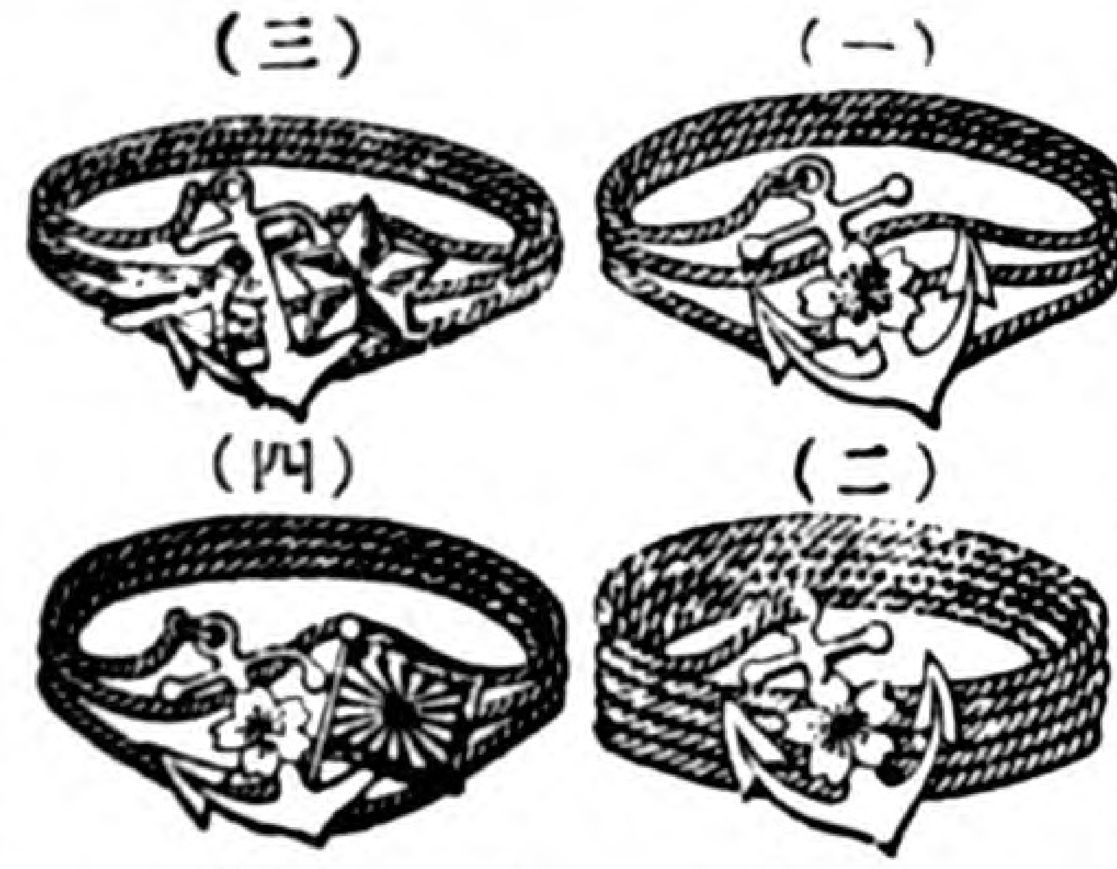
尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



神田區錦町三丁目
東京瓦斯株式會社
電話本局一三番、五四八番
二三〇三番

新案

戰捷記念指環



一、二號十八金製 ●價五圓半

全銀製金メッキ ●價壹圓廿錢

三、四號十八金製 ●價六圓

全銀製金メッキ ●價壹圓半

（市外遞送料金廿錢）

東京市京橋區尾張町二丁目

時計及寶玉類内外雜貨
貴金屬美術品銃砲火藥商

天賞堂

（電話新橋特三三一五三）



大日本圖案協會編纂

圖案

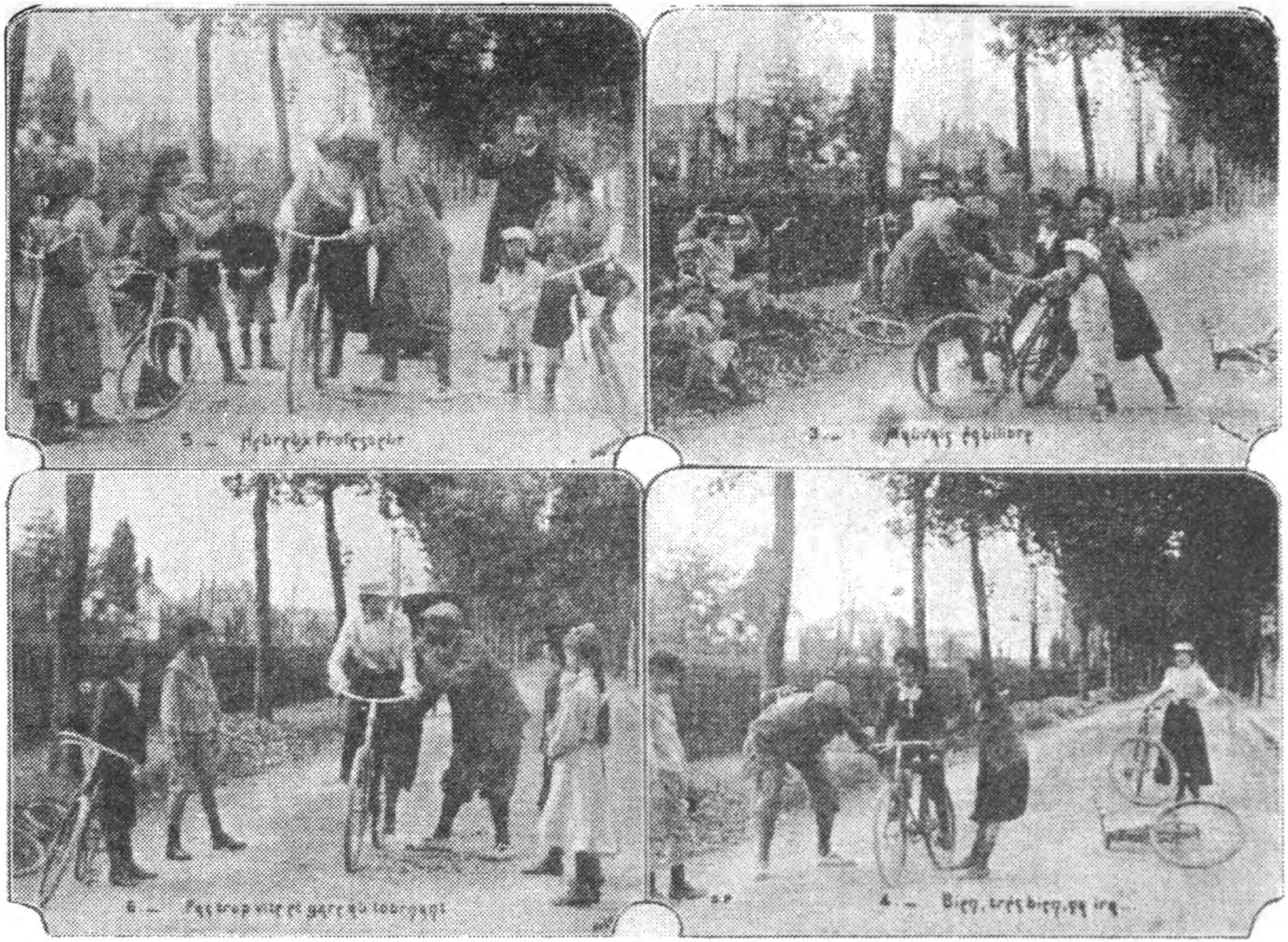
每號 定價金卅錢 郵稅金壹錢

東京築地二丁目

發行所
發賣所

國光社

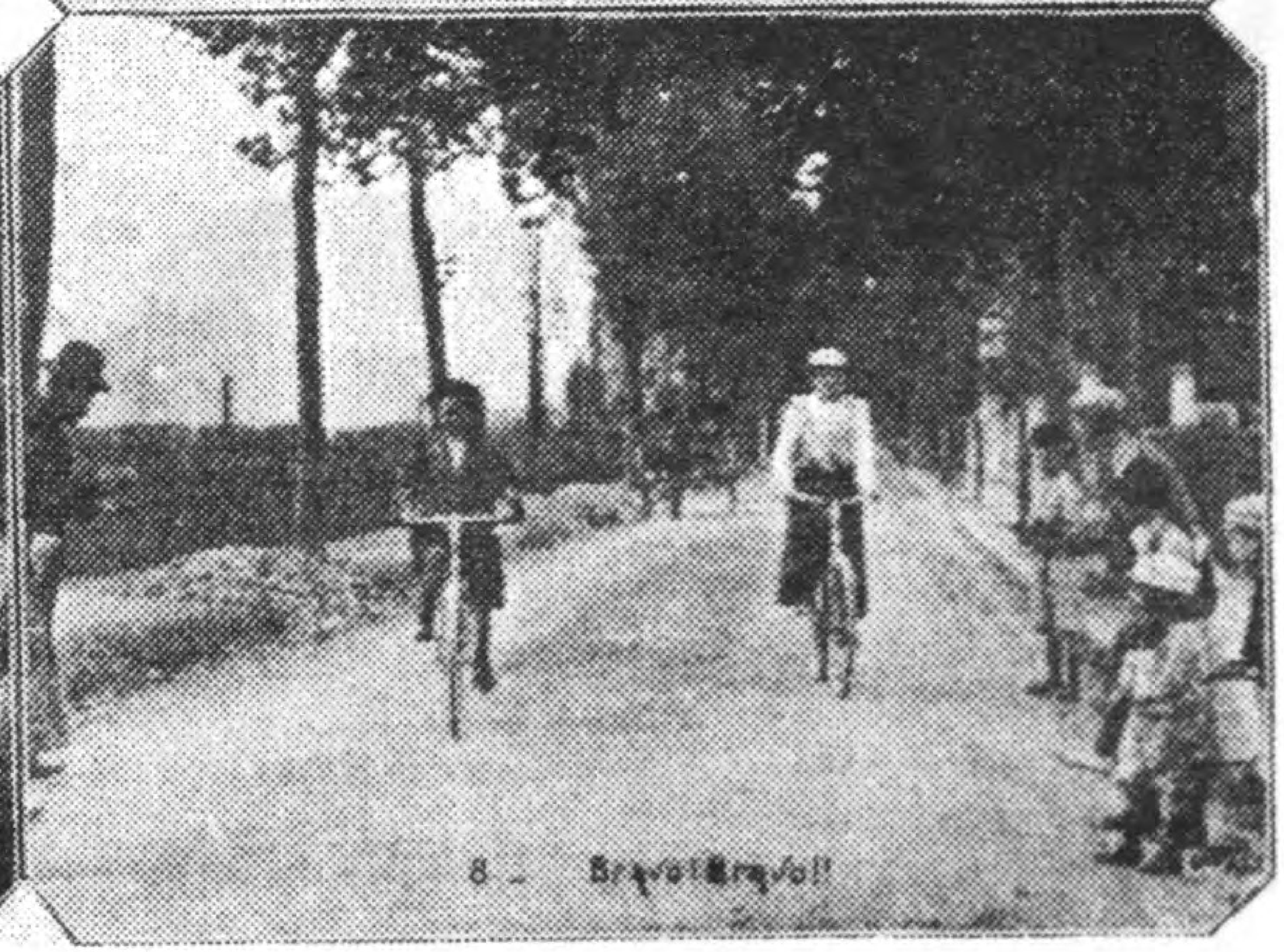
米國婦女の自轉車乘練習（其一）



米國婦女の自轉車乘練習（其二）



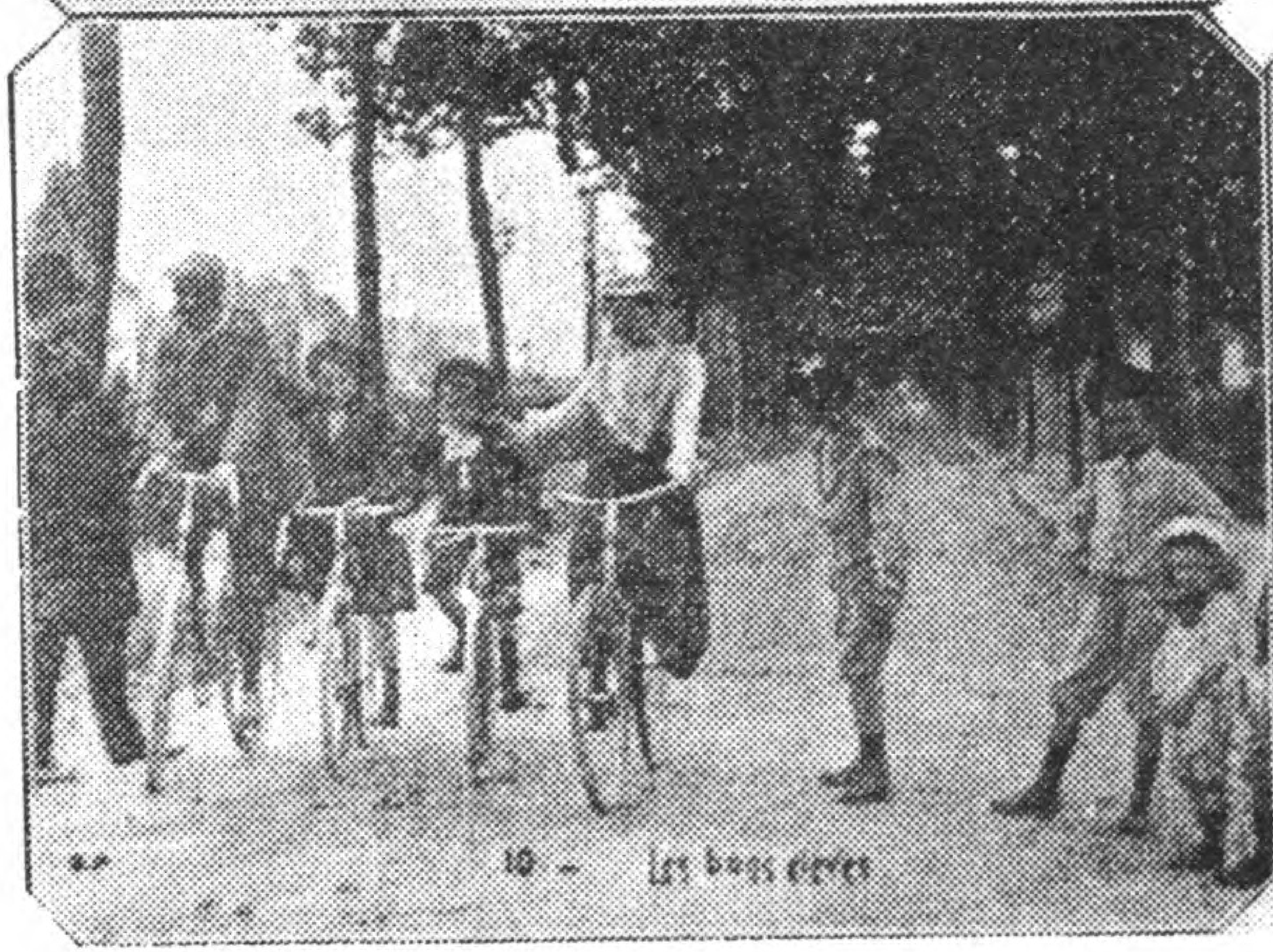
7 — Y a pas de mal



8 — Bravo! Bravo!!



9 — La pelle du Professeur



10 — Les bons élèves

女鑑兼題投稿優等者



山川敏子



寺尾きさ子

◉改良 水油（オイトリキシン 花がつら）三個箱入 一圓二十錢

在來の香油の如き髮にねばりを生せず毛髮の光澤を艶美ならしめ脫落を制止し疾患を豫防す

◉ひげ油（ブロチミン 住の江）三個箱入 九十錢

髭毛に用給へば適當の粘力を生じ隨意の形狀を保ち且在來の品とは異り洗去ること容易なり

◉改良 びん付（コラキン 玉椿）三個箱入 金六十錢

高等化粧料

◉改良 すき油（イラビリン 柳糸香）三個箱入 一圓二十錢

◉ふけとり香水（ラウリン 花たちばな）三個箱入 一圓八十錢

本品を常に御用ひたまわらば第一剛き毛髮を柔軟たらしめ且つ汚れを淨め永く清潔の狀を保たしむ

◉あかとり香油（アチモシン 春風）三個箱入 一圓二十錢

頭髮の汚れを容易に梳き去るが故に髮を洗ふの煩勞なし故に病中病後御使用には至極好適の良品也

◉新製 洗浴化粧液（エリノイン 花の露）一瓶 八十錢

本品は高尚なる芳香藥及び軟和劑の配伍し有ば朝夕盥嗽及び洗浴に際し此液を用ゆれば如何なる水と雖も皮膚をあらし肌色を損するとなく色を白くし天性よりも麗わしき色つやを生ず殊に殺菌消毒の効力を有せば當季衛生上缺く可からざる逸品也

◉凡て美麗なる箱入としたれば御進物用には至極適當の良品なり

◉取次販賣店は全國化粧品店小間物店藥店に販賣致居候

高等化粧水 ヲイテルミン

本品は高等化粧料中の化粧品なれば貴婦人令孃方の御常用に適し皮膚を艶美滑澤ならしむる効わり

三個箱入 七十五錢



◉うがひ水（エオチン しのゝめ）三個箱入 九十錢

第一口腔を清潔にし粘液を去り臭氣を防止し黴菌を撲滅し虫歯を豫防し出血しやすき齒齦を固め且つ咽喉加答兒を豫防す一名水はみがきとも云ふ

◉福原衛生 齒磨石鹼 煉製大廿五錢 同小十五錢 粉製十五錢 袋入三錢

◉新製 旅行携帶用衛生齒磨 ゴム器入 一個三十錢

處方調劑・藥品器械・衛生材料・化粧品問屋

本舖 東京市新橋出雲町角 電話新橋三二四番 資生堂 福原有信

根治確證

わきが

新治療藥 ラピヨン

本劑を塗擦すれば其成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淸驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用いよ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢丙

毛のはへる

毛髮生養液 原名ヘグチス

定價壹圓卅錢特製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグチスと稱する現今最も賞用せらるゝ

有力なる最新液にして

毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止め●はへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひて能く發生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化粧品

色の白くなる

ンドトコロン溶液

本劑は貴紳淑女粹士間に大なる高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば七性分の力に依り皮膚は次第々々に新陳代謝を盛ならしめ

皮膚を漂白するを以て如何程色黒き人もB印特製を用ゆれば白色艶美の容貌となる

男女共交際上最も必用の品也B印壹圓五拾錢特製貳圓五拾錢送料拾四錢

月やくをろ

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下ります又二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下ります猶五六ヶ月以上のとまり及び血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なし又月經不順月經不順より起る、子宮血の道を全治し惡血古血を一掃し驚くべき效驗あり藥價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢貳劑貳圓五拾錢特製參圓五拾錢送料拾錢郵券代用一割增

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 **オリエンタル藥館**

帝國貯蓄銀行

東京銀座一丁目河岸通り

(電話新橋 八一六 二八〇八)

本郷一丁目 本郷支店
三丁目飯倉 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱西田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

杉谷正隆編（再版）

家庭歌訓 修身百首

菊判洋裝美本

●この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をして其本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするは學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

定價 金貳拾錢 郵税四錢

高瀨眞卿著（三版）

學校家庭 修身一夕話

上製總クロース金文字入並製菊判洋裝美本

本書は修身倫理の大綱を說き、東西古今の偉人碩儒の事蹟を言文一致體に敍述せしものにて、趣味幾多近來稀有の好著なり、苟も子女敎育に留意せらるゝ諸氏は必ず一讀あれ

上製六拾錢 並製卅八錢 郵税各八錢

新泉堀内文應編（三版）

家庭の鑑

菊判洋裝美本

●本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、媳養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝、節義、友愛、貞操等の事實を詳敍せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて泣かしめむとするものあり世の敎育家父兄及子弟婦妻の座右には一日も此可憐の冊子なかる可からず家庭及學校にも亦た此種の册子を備へざる可らず

定價 金拾八錢 郵税四錢

松川霓州著（再版）

結婚と家庭

菊倍判三切洋裝

結婚と家庭是れ未だ解答を與へられざる一大問題なり。抑も兩性結合は天の大倫男女相愛は人の常情。誰れか又之を防遏するを得んや。然りと雖も淑女必ず吉士と遇はず。才子必ず美人と配せず。是を以て或は失戀に泣き、或は破鏡を嘆じ、終生孤閨を守りて厭世の人となる者、古來其類多からずとせず。是れ豈人生の最大不幸にあらずや、著者の麗筆を以て此の大問題の解決を試み近く證を取り遠く例を引き、縱横論議して毫も憚かる所なし、希はくば青春妙齡の士女此書に據りて以て、相愛の結婚を舉げ和樂の家庭を成さば、始めて人生の眞福を享くるを得ん歟。

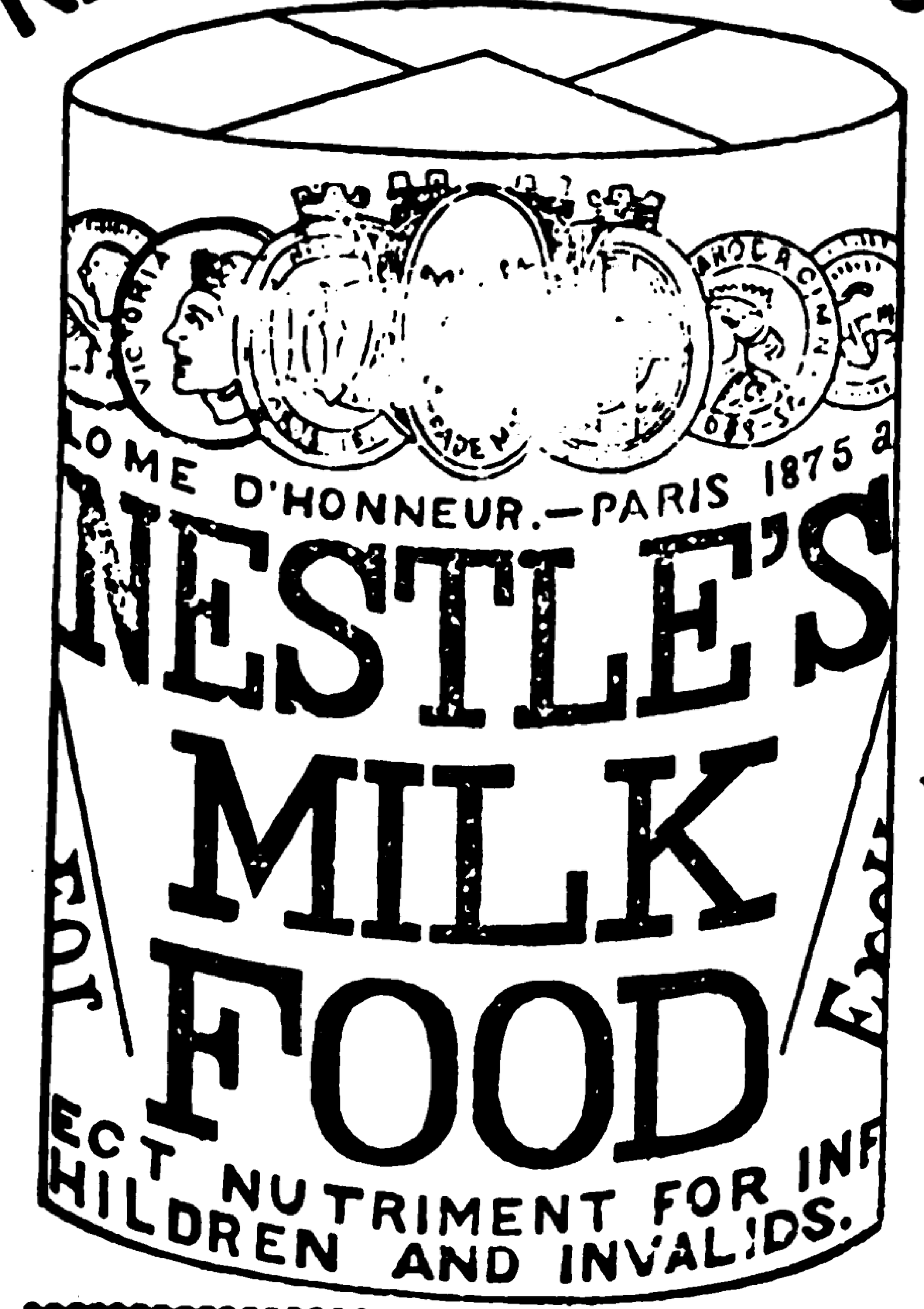
定價 金拾五錢 郵税四錢

發兌元 東京築地二丁目 國光社

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品
各國醫科大學大病院
醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

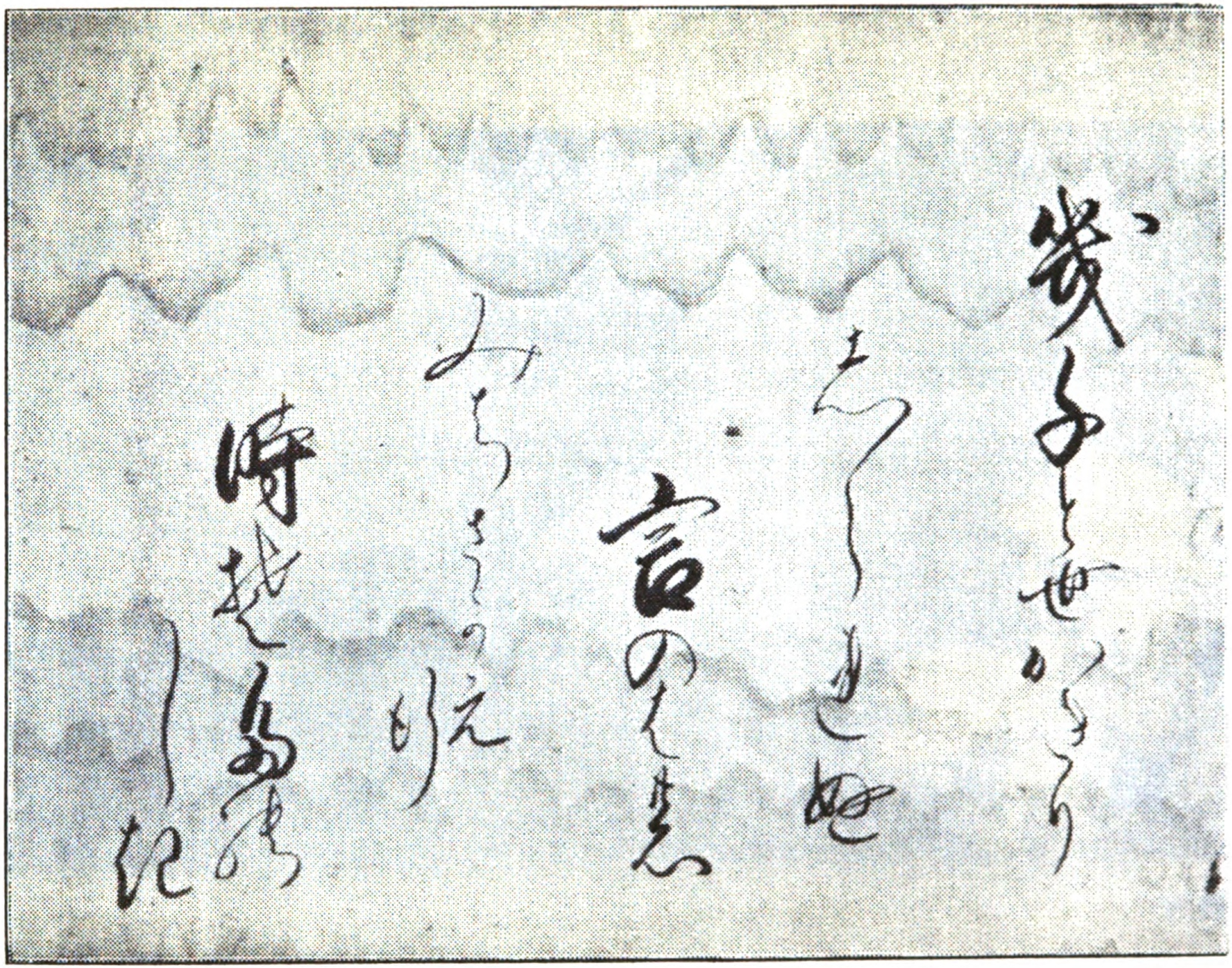
（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

天璋院遺墨（史談欄参照）



阿多廣介氏所藏

戰時紋樣



京都　荻野一水案

さくらやまあかりの
野辺の花すすき
ほのかに見ゆる
妹か袖かも

宮里三木枝子書

月經を通じ子宮病血の道を全治す



藥價
半週分 二十五錢
一週分 四十五錢
二週分 八十五錢
三週分 一圓二十錢

月やく閉止

三四ヶ月の月經閉止も二廻分にて必ず通ずる不思議の効あり

月やく遲延

常に月經閉止を苦慮するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一廻分も用ちゆれば直ちに通下す

血の道にて頭痛眩暈し

目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人處女十五六才にして月信なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病**月やく閉止・遲延、過少を患ふことなく通利を快よくし**血の道を根治**し身體强壯に**容貌爽快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舗 東京市日本橋區藥研堀町四十三 **藥劑師 高木與八郎**

御披露

立田洗粉は世間に有觸れたる品と全く異なり其如何に皮膚を細密美麗ならしむるに特別の効能あるかは今更申す迄もなく皆様高評に依りて明なれは彼是と氣をもみしでなく「リボン」の商標に御注意ありて一日も早く小川商店の淸き流れに身を洗ひ給へかし



注意　近頃弊舗の意匠に擬したるものある販賣所至る所の和洋小間物店、化粧品店及藥舗に有之候間特と右紅葉の登録商標に御注目の上御購求あらん事偏に奉願上候

東京市神田區岩本町二十二番地
貫々舎

立田洗粉製造發賣元

小川商店

電話本局百十六番

女子技藝講義

會員募集

東修卅錢會費一ヶ月卅錢一ヶ年三圓五拾錢一ヶ年卒業

本學期掲載科目及び受持講師左の如し

科目

▲裁縫　女子高等師範學校教師　谷田部順子
▲造花　女子美術學校造花主任教師　八木原靜子
▲染織　高等工業學校工業教員養成所　大塚廣通
▲編物　共立女子職業學校編物主任教師　豐原繁尾
▲繪畫　元高等師範學校囑托繪畫教師　一條成美
▲家政學　前女子高等師範學校教師　塚本濱子
▲刺繡　共立女子職業學校刺繡主任教師　木村仲子
▲割烹　治庖會第四教場主　龜井まさ子
▲和歌　石原和三郎
▲禮式　茶の湯、生花　女子消息文　本會述

本會が他の通信教授と異なるは各地方に支會を設け實地講習會を開くにあり▲初號既に發行せり見本は一錢切手ト五枚會則は二錢郵劵送れば直に進呈す

◎發行所　東京市下谷區茅町二丁目廿九番地
女子技藝會

再版出來

小畠幾次郎著

腦力增進論

菊判洋裝　定價卅五錢　郵稅六錢

沼南島田三郎氏、本書の冒頭に序して曰く、心身の二者を保養して、人初めて其發育を完全にするを得べし、心性を措て、偏に自体を説き、身體を外にして、專ら心性を論ず、二者各其半面を語る者にして、全局を蓋ふの見解に非ずと、著者茲に見るあり、世の青年學生の腦病に罹る者多きを嘆し、研究を積み、推考を重ね、廣く專門諸名家を歷訪して、其の所説を聞き、大に悟るところありて此書を爲せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學教授、岩佐告成堂病院長、鈴木胃腸病院長等の卓見高論は著者の實驗及び古今に渉れる實地談と共に輕妙快活なる文章によりて描寫され、一讀の下精神の頓に壯快なるを覺ゆ、

發兌元　東京築地　國光社





定價•金五十錢•金廿五錢•金十五錢•金十二錢

戰後の日本女子

戰時に於ける日本婦人の高潔なる特性が、遺憾なく發揮せられたるは、近く我が國民の實見するところに止まらず、遠く歐米諸國人の齊しく喧傳して感嘆するところなり。夫の出陣を送りたる妻の覺悟の殊勝なることや、子の名譽ある戰死の報知に接したる母の擧動の勇ましきことや、其他貴婦人の病傷兵看護に於ける、篤志婦人團體の恤兵慰問の擧に於ける、みな能く軍國婦女の龜鑑としてその面目を發揚するものならざるはなし。若しそれ今回の戰爭をして、五年十年の長きに渉らしむるも、此點に於ては、予輩毫も憂ふべき理由あるを見出す能はざるなり。

されば早くも戰後の女子に就いて、憂慮するものあるも、良に以ありといふべし。戰爭は縱ひ長日月間繼續するも、猶一時の現象たるを免かれず、たゞ戰後の歲月は永遠にして際限あることなし。名譽ある一時の戰爭は手段なり、光榮ある永遠の平和は目的なり。縱ひ手段たる戰爭に於て、女子の面目を發揚するも、目的たる平和に於て、之が効果を收むる能はずんば、未だ俄に完全なる

日本婦人を以て許す能はざるべし。譬へば一家の貧苦困難の狀態に陷いるに當りては、慘憺たる苦楚をも凌ぎて、能く內助の力を盡せしも、一旦家運の回復するに及びては、遊惰に流れて、家政を治めざる主婦の如きは、決して愚婦とはいふべからざるも、賢婦と呼ばれ、良妻と曰はるゝものと、相距るや甚だ遠し。此の一例は戰時と戰後との婦人に適用するを得べし。戰時に於ては世界各國民をして、感嘆措く能はざらしめながら、一たび戰爭收結して、平和の時代となるに及びては、當日の擧動に似ずして、卑屈、野卑に流れ、怯懦、因循の風に陷いるが如きことあらば、戰時に博したる名譽は、偶々以て世界物笑ひの種とならんは必定なり。故に女子敎育當局者が、戰局漸やく闌ならんとするの今日に於て、戰後の女子に向ひ熱心警告するところのものあるは、寔に當然のことゝいふべし。

成瀨女子大學校長は曰く、我日本人は樂天的と、悲觀的との反對せる二方面を有せる國民なり。是を以て悅んでは能く笑ひ、又悲みて能く泣くは、輕浮も亦甚しからずや。今夫れ世界の大舞臺に上り、列國と肩を双べて馳驅せんとするに臨み、斯の如き態度を以て當らんか、勢劣敗の位置に立たざるを得じ、宜しく自働改進の方針を採つて、奮進奮鬪するの覺悟なかるべからず。而して社會は凡て其の根源を家に置く、家の本は母にあり、母は則ち女子なれば、女子は自ら社會の根源ならざるを得ず。日本女子たるもの、幸ひに其の人生觀に一新面目を開かんことは目下

の急務なりと。

三輪田眞佐子刀自は曰く、古來戰勝國の憂とするところは、奢侈淫佚の風の瀰漫して、百年の害を殘すにあり。日清戰役後の如き、以て一例とするに足るべし。斯の如きは戰勝後の女子たるものが、最も注意すべきところのものなり。女子にしてよく男子の慰藉者となり、放縱なる男子の燕遊盤樂に換ゆるに、洋々として樂極りなき家庭の快樂を以てせんことを勉めなば、暗々裏に淫靡の風を防ぎて、多大の効果を收むること亦疑ひなかるべし。又た新興國の婦人は、從來の舊習慣を脫却して、盛んに海外思想を養成せざるべからず、男子が外國に出稼ぎする場合の如きは婦人も亦之と共に相携へて其地に赴くの覺悟あるを要す、夫妻共同して、殖民地に生活するに至らば、天涯地角と雖も、何ぞ又望土懷鄉の思に堪へざるが如きあらむや、殖民の基礎は是に於てか定まりて、中外に於ける大和民族勢力の發展する期して待つべし。故に吾が新興國の婦人は一面海外に雄飛して、列國と共に世界の富の分配を受け、以て國家を富ますの謀を爲さゞるべからずと信ずと。

女子學院長矢島楫子刀自の說くところ亦三輪田氏と粗々相似たり。曰く戰捷ちて國驕る、戰捷國の人民が放蕩に陷いるの實例は、各國歷史の證するところなり。されば斯る弊害を防遏して、風敎を維持するは、自から婦人の責任ならざるべからず、其の手段方法の如きは種々なるべしと雖

も、其の根本は實に女子の自重心に歸せざるべからず、然るに古來吾國婦人の缺點は、男子の翫弄に一任して、重要なる此の自重心の缺乏せるにあり。是れ女子が其の天職に對する確固たる信念なきが爲なり。故に戰捷後の日本婦人は、自重心を奮起して、事に當らざる可らずと。

以上の三說を概括すれば、成瀨氏は大國民たるの態度を論じて、將來の希望を婦人に措き、三輪田刀自は、男子の慾念を制裁するの力を奮起すべきこと、及び此機に乘じて大に海外思想を養成せんと欲すと云ひ。矢島刀自は、確固たる信念を起し、自重自尊して、男子の翫弄を防ぐのみならず、却つて其の不正なる慾念に對抗すべしといふにありて、說くところは同じからずと雖ども、戰捷後の婦人が、自ら奮勵して以て、婦人たる本色を發揮すべしといふは則ち一なり。

今は旅順の要塞、全く重圍に陷いりて、吾軍已に其の死命を制し、殘喘正に旦夕に迫りたれば、旭旗の黃金山上に飄へるも遠きにあらじ、而して千古未曾有の大戰爭は、世界の耳目を聳動して、遂に遼陽數十萬の敵兵を潰敗せしめ、殆んど向ふ所敵なきの形勢を示せり。近ごろ媾和談判の中裁者を出さんとするの噂さへありて、戰局の意外に速に收まらんも亦知るべからず。日本女子たるもの今に迨びて、思を戰捷後の如何に致すなくんば、悔を後日に貽すの憂なきにあらざるべし。予輩聊か愚見のあるあり、本紙上に揭げて以て大方の敎を乞はんとするに當り、先づ此の問題の大體を概記し置くこと爾り。

女德論

跡見花蹊

女子教育とは何ぞと問ふ人あらば、私は躊躇せずして女德の養生であると答へませう、女德の養成を離れて女子教育なく、女子教育にして如何に深遠なる學理を說き、如何に高尙なる技藝を敎ふるとも、其深遠なる學理、其高尙なる技藝が女德の養成に資する處のものでなかつたならば、そは女子教育とは申されません、女子の專門教育と云ひ、女子の獨立生活と申しまするも、畢竟女德の如何にある、女子に專門の教育を授くる事が、女德を養成するの道であるならば、專門教育も宜しう御座いませう、女子の獨立生活が女德を發揚する所以の道であらば、獨立生活も妨げは御座いますまい、要するに女子の一擧一動は、女德を全うする所以のものでなければならん、是れ男子の一擧一動が、男子としての德を顯揚すべきであると同じ事で、今更らしく申す迄もない、平凡極る談で御座います、其の平凡極る、知れ切つた事を、事新しく述べまするのは、其平凡極まる知れ切つた事を、履き違へて御いでなさる御方もある樣に思ひまするので、よし履き違へて居ないまでも、教育の方法を過つて居るところから、女子教育の主意に反する樣な結果を生ずるの事實を目擊いたしまするので、女子教育の根本に遡つて、女德とは如何なるものであるか、少しく考へて見たいと存じます。

女徳とは何であるかを知る前に、先づ徳とは何であるかを知るの要が御座います、支那の書物を見ますると、徳は得なり内を得るなりと解釋して御座います、して見ると徳とは人の心に得たものであつて、天然に具はつて居るものである、既に人心に受け得たる處のものであるならば、善惡の兩面がなければならん、左らば韓退之も徳に吉あり凶ありと述べて居ります、斯の如く論じ來りますると、徳の解釋もなかく六ケ敷いものになりますが、單に徳と申しまするど、世間普通には凶徳、惡徳などの意味には解しない、直に美徳の意味に解します、玆に女徳と申しまするも、女子の美徳を意味して居る、即ち女子が天より受けたる美しき品性である、然らば女子の性質の美は如何なる點で御座りませうか、女子は其天禀の美質を發揮する爲に何を爲さねばならんでせうか、世の女子教育の任にあるものは、如何にして其美質を培養すべきで御座いませうか。

天の人間を造るのに、男女の別を置いたのは何の爲であるかと申しまするならば、互に其本性に従つて相助け相愛する事に依つて、人生を全うせしめんが爲である、是自然の妙用であつて、若し人間に男女の別なく、互に相助け相愛するの用がなかつたなら、人生は如何に寂しく、如何に荒涼たる沙漠と變じませうか、左れば古人も、戀せずば人は心のなからましと申しました、誠に男女相愛するは人情の根本で御座いまして、これ有つて始めて親子あり、これ有つて始めて兄弟姉妹あり、一家此處に於て成り、社會此處に於て生じ、國家此處に於て興るので御座います、斯く男女一體となる事に依つて、始めて人生が全くされるものであるからは、人間社會に於ける男女の價値は同等のものでなければならん、けれども其の天禀の性質に至つては、男女各異つたる特徴を有して居る、今その天禀の上より見まするならば、女子の徳は明かに柔順を專一として居ます、是れ女子の徳を稱して淑徳と申しまする譯で、淑は淵ふと云ふ事を

意味して居る、即ち『しとやか』と云ふ事が女子の德でありまして、其の反對にはしく〳〵と『はしやいで居る』ことを、俗にお轉婆と申しまするので、女德の欠けて居る事を表す言葉で御座います、既に女子の本性は柔順なるものであり、其の德は『しとやか』なるものであるとしまするならば、女子の男子に對する地位も、自ら定つて參りまする譯で、其地位は男子に對して、常に從者の地位でなければならん、尤も此處に申しまするのは、家族の中に於ける地位で男女互に獨立して居る時の事では御座いません、凡そ何れの家族にも、その首長あるべきは勿論の事で御座いますが、その權勢は一に歸して確固たるべきものでなければならん、家に二人の命令者あるは、國に二人の君主があると同じ事で、其の間に必ず意見の衝突が起り、權力の爭ひが生じて、何うしても圓滿に遣つて行く事は出來ません、斯の如きは家庭の不幸此上も無い事で御座いまするから、一家の命令者は必ず一人でなければならん、此時に當て、女子は其の天禀上、從者の地位に立つ可きは當然の事で、何人も之を怪しむものは御座いますまい、唯怪むべきは極めて少數の人々が、之を以て女性を壓伏すると樣に申す事で御座います、それ等の人々の申す事を聞きまするに、女子の今日の如く、男子に對して從者の地位に立つに至つたのは、積年男子の暴力に依つて、壓制せられた結果であつて、女子の本性は決して斯の如きものではない、其の能力も男子に比して、少しも劣る所は無いのであるから、之を男子と同等の地位に置き、之に男子と同一の權利を與へねばならんと申すので御座います、成る程我國の之迄の女子教育は、少しく壓制に過ぎた樣な傾きも御座いましたらう、又其れが爲に、女子の因循姑息なる惡質を助長し、獨立の氣象に乏しく、徒に男子に依賴するものとならしめたのでも御座いましよう、之れは明かに舊來の女子教育の弊害である、弊害は元より除かなければならん、けれども其弊害の故を以て、更に他の一方の極端に走り、女子を男子と同一の地位に置き、之に男子と同等

の權利を與へねばならんと云ふ理由が何處に御座りませうか、柔順、謙遜、柔和は女子の大なる美徳であつて、敢て社會の表面に立たず、靜かに家庭の裏に隱れて、見えざるに其の力を盡すのは、女子本然の性に從ふところの、最も貴き事業である、決して男子の暴力に依つて壓制されたる結果ではないので御座います。

女子は人間社會にあるは、花の樹木に咲くにも比べ得べきもので御座いませう、花は其の幹は薪炭となり材木となつて、人生に益するが如き用のある者でもなく、其果實の人の口に甘く、食品となつて世を益するが如き用のある譯でもない、如斯き實用的の方面より見ますると、花の用は極めて微細なもので、まあ有つても無くつても良さゝうなものだ位に思はれます、左れど若し世の中に、花と云ふものが絶えて無かつたら如何でせう、果實結ばず、種子生ぜず、地球上の植物は遂に亡びて仕舞はなければならん、啻に是れのみならず、花その者は人心に及ぼす感化は、どれ程で御座いませうか、其の美しき色と、其の馨しき香は、人をして恍惚として己れを忘れしめ、世を忘れしめ、利を忘れしめ、名を忘れしめ、あらゆる俗念より遠ざからしめて、日頃は唯浮世の利祿にのみ忙殺されて居る人をすら、暫時俗塵の外に超然たらしむるので御座います、若しそれ多情多恨の詩人に至つては、彼の西行をして『願くは花の下にてわれ死なん』と狂せしめ、在原業平をして『世の中に絶えて櫻のなかりせば』を歌はしめたるを見ても、花の人心に及ぼす感化の力の、如何に大なるかを知る事が出來ます、女子も亦斯の如きもので、唯實利實益の點より見まするならば、其能力は到底男子に及ぶ譯のものではない、之を歷史に徵しても、又現在の社會に見ましても、あらゆる功業、あらゆる偉勳、一として女子の手に依つて、成されたるものは無いと云つても宜しう御座いませう、古來世界の歷史を飾つて居るところの人物は、殆ど全く男子のみである、けれども斯の如きは、唯

これ表面の現象に過ぎないので御座いまして、一度人生の裏面に入り、深く人心の奥底を覗ひまするならば、人類社會に於ける女子の勢力が、如何に深く且つ大なるかゞ分りませう、まあ思ふても御覧なさい、人にして誰か母の感化を受けないものがありませうか、如何なる英雄豪傑も、是を産みたるものは女子では御座いませんか、又如何なる男子の鴻業も、内助者として女子の力を待たなかつたものはありますまい、更に大なる女子の勢力は、見えざる心の作用にある、其優しき同情は、失望せるものに希望を與へ、勞れたる心に勇氣を起させ、苦しめる人の慰籍となるので御座います、左れば彼の殖民事業の如きも、若し是れに女子が伴はなかつたなら、必ず失敗に終ると申しますが、誠に左もあるべき事であらうと存じます、美人の一笑は國を傾くるの力があると云ふ事は、女子の力が善くない方に働いた場合でありませうが、是を以ても其勢力の如何に強いかを知ることが出來るので御座います。女子の勢力は、如斯く強大なるものである、強大なる事を知ると共に、我等は又責任の大なる事をも感ぜねばなりません、若し此力を悪い方に働かしたならば、弊害の及ぶ處量り知る事が出來ません、古來幾多の妖女毒婦が、人心を傷り、風教を害し、甚しきは國家を亡ぼすに至つた實例は、擧げて數ふる事が出來ない程御座います、左れば我等は此勢力を發揚して、世道人心を益する爲に、天より受けたる使命は何で御座いませうか、申す迄もなく人の妻となり人の母となる事で御座います。

此頃女子の獨立生活を、主張する人がある事を耳に致します、勿論少數の人では御座いませうが、是等の人々は、女子を教育するに當つても、彼の赤十字社の鼻祖たる、ナインチンゲール女史の如きを、女子の標準と致して居る様に御座いますが、是は少しく誤つた見解ではなからうかと存じます、何故ならば、女子の獨立生活と云ふことは、或特別の事情ある、極めて少數の人の爲すべきものであつて、決して一般の女

の爲すべき事では御座いません、其の特別の事情と云ふも、夫を有つては何うしても遣つて行く事の出來ん事業に、從事しなければならない場合に限りますので、斯かる場合に於ては、其の事業を以て夫に替へ、夫に注ぐ樣な愛情を、其の事業の上に注いで居ります、ナインチンゲール女史の如きも、赤十字社事業は我夫なりと申して居りますが、穴勝形容の言葉とのみは申されますまい、此言葉の内には、夫なき心の淋しさを、自ら云ひ現して居るでは御座いませんか、女史の如きは、全く事業の爲に、身を犧牲に供したのであつて、彼の一種の驕慢心より獨立を主張する人などとは、全然その動機を異にして居るので御座います、故に一般の場合に於ては、女子は必ず人の妻となるべきものであつて、人の妻となる事以外に於ては、女子の爲すべき職務の範圍は極めて狹少なるもので御座います、元より女子と雖人間である以上は、學べば如何な仕事でも、出來ない事はありますまい、けれども強て其本性に逆ふて、不得意の地位に立つ事は、本人の不幸は云ふ迄もなく、人類全體の上より申しましても、是程の不利益は無からうと存じます、矢張女は何處迄も女らしく、人に嫁して良き妻となり、兒女を擧げて賢き母となる事を、心懸けねばなりません、女子教育の大眼目も、矢張り此處に御座います、女德を養成すると云ふ事、平たく云へば、女らしき女を作ると云ふ事の外に、女子教育なるものは御座いませんから、學問や技藝を教えるにしても、學者や技藝者を作る目的でなく、賢母良妻たる資格を備へしめんが爲めで御座います、此處が男子を教ゆるのとは、違ふ所でせう、男子が學問や技藝を學ぶのは、其れを以て社會に立たんが爲で御座いますが、女子は其れを以て、直ちに社會の表面に立たんが爲ではありません、他日その夫に死別れるとか、病氣や何かで夫が働けん樣になつた場合とかに、夫に爲り替つて一家を背負はんが爲であります、尤も平素事のない場合でも、習ひ覺えた藝能を働かして、家を助くるのは宜しう御座いますが、此場合でも妻たり母たる

の勤を盡して、其餘暇でなければなりません、然るに此頃見受けますところでは、或女學校の如きは、大變立派な名目の下に、無暗に高尚な學問や技藝を、敎ゆることに勉めて居る、實際に彼れだけの科目が、充分に生徒の頭腦に這入るか何うかは、別問題として、假に彼れだけの學問技藝を、完全に學び得たとした處で、果して女らしき女が作られ得たと云はれませうか、甚だ疑はしう存じます。

學問の必要は元より之を疑ふ人はありません、けれど學問をした爲に、反て世事に疎い事理に暗い人間となりまして、世を渡る上に於ては寧ろ學問が邪魔になると云ふ樣な事は、男子にも往々あることですが、之は學問の弊害で御座いませう、此弊害に最も陷り易いものは女子で御座います、男子の方だと、假令學問に食傷して、實務に疎い人になりましても、純粹な學者として立派に世の中に立つて行く事も出來ます、また人類世界は斯かる學者を要するので御座います、けれども女子の方は、左樣は參りません、一度學問に食傷して、途方もない考を持つ樣になると、手も着けられんものになつてしまゐます、其れで男子の樣に純粹な學者として立てるかと云ふに、女子の腦力は到底其れを許さない、斯う申しますと、或人は又云ふでせう、其れは女子壓伏の結果であつて、女子本來の腦力は決して男子と違つたものではないと、けれども私は斷じて左樣でないと思ひます、若し果して左樣であるならば、天の人間を作るに方つて、獨り女子のみに厚くして、男子には薄かつたと云はねばなりません、何故と云つて御覽なさい、女子は男子のもつて居ない力を有つて居ます、能く人は之を魔力と申しますが、私は之を感化力と云ひたい、此力は男子の有つて居ない力である、その惡く働く時は、所謂國を傾くる力である、如斯き威力の上に、更に男子と同等の腦力をも具へて居ると云ふ事は、何うも受取り兼ねる事で御座います、假りに又それを有て居たとしても、其れは或る時代の事で、現在の事ではない、少くも歷史初まつて以後の事ではない、論よ

り證據には古來の歷史に、其う云ふ實例は御座いますまい、偶ま一藝一道を以て世に現はれた人もないではないか、藝道の種類が殆ど極つて居ます、大抵は文學美術音學の類で、之等は女子には至極相應しき仕事ですが、それすら必ずしも男子を凌駕して居るとは申されません、他は推して知るべきのみで御座いませう、斯の如きものこれ女である、その女が學問の弊害を受けた時は何うで御座いませうか、深く詮索する迄もなく、實例は明治の今日に於て最も多いでは御座いませんか、女學生は生意氣の代名詞となり、海老茶式部は嘲笑の好題目となつてしまいました。

昔の人は、いや今の人でも一部の人は、女子に學問は有害無益なものだと主張いたします、これは勿論間違つた考に違ひありませんが、而し其中に一面の眞理は含まれて居やうと思ひます、畢竟學問の弊害を厭うた結果で御座いませうが、學問が何う云ふ具合に女子の心を害するかと云ふ事は、注意すべき事でありまず、全體女子は感情の強い、想像力に富んだもので、從つて誠に空想に耽る性質を有て居るもので御座います、ところへ學問と云ふ實際界から遠かり易いものを學ぶのである、紫式部や、清少納言も朋友とする事が出來る、小野小町や揚貴妃とも交る事が出來る、聞くところのものは、烈女節婦の話であつて、學ぶところのものは、高尚なる學理である、感情鋭い女子として、何うして之に醉はずに居られませう、大金を取扱かつて居る銀行の小僧などが、自然と氣が多くなると同じ利屈で、女子も斯んな話を聞いて居る中に、自分も何時しか清少納言や紫式部になつて仕舞うのであります、學問の爲に生意氣になると云ふのは、まあ斯んな具合のものかと存じます、其れを防ぐのは、家庭と學校との責任で御座います、家庭の方では一々父兄が監督して居るのですから、注意さへすれば充分に手も屆きますが、學校の方では餘程注意して居ても、之を防ぐ事はさて置き、反て其弊害を助長するに了るので御座います、であります

から當局者たるものは、自ら生徒の模範となり、生徒ひとり〳〵に就て充分に注意し、生徒をして決して慢心することなからしむる樣に力めねばなりません。

先年私の學校を卒業しました婦人に某と云ふがありました、是は學校に居ます頃から、何でも能く出來まして、分けて繪畫が得意で、繪師としても立派に遣つて行ける位の腕前でありました、卒業後間も無く他家に嫁しましたが、結婚後四年も經つまで、その夫は自分の妻の繪畫に堪能な事を知らなかつたさうで御座います、總て女は自分の藝能に對しては、斯う云ふ風にありたう存じます、少しばかりものが出來ると直に慢心を起し、獨身生活を主張するが如き、或は虛榮の念に驅られて、社會の表面に立て働くが如きは、淑德なき恥づ可き行爲で御座います。

女子の人間界にあるは、花の自然界にあるが如きものである、花はその美しき色と、馨ばしき香ひに依つて人を喜ばす、女子もその容貌の美を以て、人を喜ばす可きで御座いませうか、實に容貌の美も賤しむべきものではありません、けれども更に貴むべきは心の美で御座りませう、心の美しさは愛にある、愛の極致は犧牲である、身を以て家の爲に、夫の爲に、子の爲めに、將た舅姑の爲に犧牲となる、女子の行爲に增る美しさは御座いますまい。

經濟上より見たる風俗改良（上）

第十五銀行頭取　園田孝吉氏述

我が國民は今や非常なる國難に遭遇して居る。國家の爲め憂慮に堪へぬ次第である。乍併幸に上至尊

の御稜威と下陸海軍將士の忠勇義烈とに依りて最終の勝利を占むる事は疑ひもない事と信ずる。然れば此秋に於て吾人國民たるものは貴賤上下を論ぜず、充分の熱誠を灑いで、軍資の供給を充實ならしむる事に努め、國家最終の目的を遂せざれば已まぬとの覺悟を爲すことが肝要であらうと思ふ。

我國の財力及國民の勤儉

我國の財力なるものは決して缺乏して居るものではない。縱令幾億の軍資を要するとも國民が之に堪へ得られぬと云ふ事は決してあるまいと思ふ。要は唯だ如何に繰廻はしを附けるかと云ふ事が問題である。是は當局者の匙加減にも依り、又一つは吾人國民の決心如何にも關するは無論の事であるが、果して拙者の考案の如く全國の人民が空に死藏して居る所の金銀類を献げて、此軍資の募集に應ずると云ふ事にならば、啻に國民が苦痛を感ぜざるのみならず、寧ろ利益を受けて軍資を充實し、且つ日本銀行の兌換準備を豐富ならしむると云ふ事も出來る。是が即ち刻下帝國の財政經濟を整理して行く所の一手段である。此外尚ほ種々の方法もあるであらうけれど、兎に角此際に於て國民が最も力を盡さねばならぬのは勤儉である。而して此勤儉と云ふ事は、方今の流行語にて示すと、消極の經濟と積極の經濟の二種となる。即ち一は冗費を省いて萬事節略する事、又一は稼ぐ事、即ち精々生產力を增す事である。夫れで先づ消極の經濟より論緒を啓き、所見の一斑を陳べて見る積りであるが、凡そ此一國の經濟なるものは、一家の經濟が基本である。一家の經濟齊はずして一國の經濟齊ふと云ふ道理はない。故に立論の順序として先づ家庭經濟の改善より討究の歩を進め、次に國民の經濟及風俗にまで說き及ぼさうと思ふ。

一家二樣の住居

今日我國民は衣食住に就て如何なる狀態の下に在るやと云ふに、非常に不經濟なる事をして居りはせんかと拙者は思ふて居る。第一は先づ住居の事である。下級の人民は姑らく措いて、中流以上の生活をする人々の住居の情態は如何であるか、大抵は西洋風と日本風との二樣になつて居るやうだ。家屋の構造が既に二樣に別れて居れば、家具其他衣服萬端に至るまで、亦皆二種の設備を要し、恰かも一軒の家屋で二軒の生活を爲して居ると云ふのは、我國今日の實況である。然らば今後如何なる改良を此の生活、此の住居の上に加へねばならぬかと云ふに、無論是は椅子卓子の文明的住居に改めねばならぬと云ふ事は、時勢の明かに示す所である。既に上は帝室を始め、諸官廳より、小學校に至るまで、今日は皆椅子卓子を使用し居るのみならず、苟も日本が文明列國の伍伴に入りて、內外人との交際を開くに就ては、椅子卓子を使用するより他に方法はあるまいと思ふ。大勢の示す所既に斯の如くなる以上は、我國民たる者は、國家經濟の上より考へて、將來如何しても此の方嚮に生活の方針を向けて行くと云ふ事に努めなくてはならぬ。若しも依然として在來の弊風を墨守し、何十年經つても、和洋二種の設備を要すると云ふ事になつては、此上もなき不經濟なれば、日本國民たる者は、是非この千載一遇の機會を利用して、着々此方針を執つて進まなければならぬ事と思ふ。唯だ下級の人民に至りては、其通りには往くまい。願はくば國民一般と云ひたいけれども、夫れは迚も實際に行はれ難き事なれば、下級の人民は日本風でも宜しい。一旦日本風と決したならば、其方針に依つて改善を加へて貰ひたい。外國人との交際もなく、洋服を用ゐる必要もないと云ふやうな生活狀態の下に在る人々は、其方針で、可成生活機關を一樣にして、二重に渉らぬやうにするが、至極得策であらうと思ふ。

妾宅の弊害

方今の富豪と稱せらるゝ人々は、獨り其一家内に於て、二重の設備を爲し居るのみならず、本宅の外に大抵妾宅と云ふものを構へて居る。是は經濟上に於て、益する所なきは勿論、道徳上に於ても、列國に對し甚だ恥づべき事である。苟も日本が文明國の班列に入つた以上は、斯樣な醜風汚俗を存して居つては、國家の面目にも關する事と思ふ。故に此等の惡風俗は、日露戰爭といふが機會に際して、斷然之を打破して了はねばならぬ。或は富豪の人々は「ナーニ、自分が稼いで、自分が儲けた金である、其儲けた金を自分で勝手に使ふに何の支障があるものか」と云はるゝかも知れぬけれど、乍併國民たるものは、各々其國家に對する責任義務と云ふものを有つて居る。然れば此國家の汚辱、又は損害になるやうな事は……自由は自由として……決して行ふてはならぬ。苟も國家を思ふものならば、斯かる不利益、不面目なる事に、金品を投つては濟まぬと云ふ事位は、他人の說を聽かずとも、充分心得て居るべき筈である。希はくは此等の惡習陋俗は今日の如き場合に一掃して了ひたいものである。

贈答の惡習慣

我が國民の習慣中より惡習慣を拾ひ上ぐるならば、枚擧に遑なき程あるであらうが、此には主として經濟上の利害に關する事を說いて見やうと思ふ。第一は盆暮の贈答品である。彼のお年玉とかお歳暮とか云ふ物は誠に無益なものであらうと思ふ。舊來の習慣で盆暮等には必ず何か贈物をする事になつて居るけれども廢止て貰ひたい。唯だ從來遣り來つたから遣らうと云ふ丈けの事で、他に何も意味はない。故に遣らぬからと云つて、何の支障もないことである。又他家を訪ふに菓子箱を持つて行くとか、雞卵箱を持つて往くとか云ふことがあるが、此等も無益な事、交誼を結ぶに物品の贈答をしなければ結ばれぬと云ふ道理はな

い。拙者の意見では、斯樣に物品の贈答をするが故に、却て交際が仕難くなる。前回に鷄卵箱を持つて往つた、今度は何品に爲やうかと云ふ考慮を起す丈けでも、尙且交際の妨碍になつて、終には往來が出來ぬと云ふ事になる。實に不便利で、且つ不經濟で、社交の發達を圖る上に於て、斯樣な事は廢止しなければならぬと思ふ。乍併他家に何か慶事があつた塲合に、紀念の爲め物品を贈ると云ふやうな事は、之は別である。一代一度の婚姻の時杯に、何ぞ紀念物を贈ると云ふやうな事は一向支障ない。此事に就きて、拙者は一つ實驗上の所感を述べて見やう。

夫れは愚娘が先頃他家に嫁付いた時の事である。其時分には、誠に容易ならぬ親切を多數の人より受けた。幾百品と云ふ贈物を貰つた。其の厚意は千萬感謝に堪へざる次第である。故に決して惡口を云ふのではないが、此事に就ては恐らく世人も同感想を抱いて居らるゝ事と思ふから述べる。實は當時此の被贈品の中に、鰹節の大箱が何百、紅白の綿のやうな物が幾百包、其他朱縮緬とか、何とか云ふ物が多量あつて、是等の物品の處分に甚だ窮した。或はお禮として其物品に鳥子餅を添へて返へすが宜いと云ふ説もあつたけれども、拙者は左樣云ふ事は大嫌ひであるから廢めた。他人が折角厚意を以て贈られた物品に對し、返禮をすれば差引何にもならぬ。況や他人より貰つた物品を贈り返す如きは非常な失禮である。獨り婚禮に限らず、葬式の塲合でも同一である。我國では香奠なり何なり折角親切に贈つて呉れた物品に對し、菓子を遣るとか、茶を遣るとか云ふ事があるけれども、拙者は夫れと反對の意見を持つて居る。他人が折角好意を以て贈つて呉れた物に對して、返禮をすれば、結局好意を以て贈つた者は、其の答禮品を受くる爲めに贈つた形になる。かゝる事なら、寧ろ最初より贈らぬ方が宜しい。然るに此の答禮に關しては、荆妻杯は非常に苦んで居つたが、拙者は左樣な事は無益であると云ふて、唯だ被贈者に對して一通の禮狀を頒つ

ことに改めた。夫れでも極少數の人には鳥子餅と云ふやうな物を配つたやうであつた。左樣しなければ如何しても家族の者が承知せぬので、夫れ丈けは例外とした次第である。が扨て其の禮狀を請取つた人々が什麼なる批評を下したかと云ふに、孰れも甚だ冷評を下され、之が爲め妻抔は終に神經を起して困つた位である。而して其冷評を加へられたのは多くは婦人方で『貴女方へも禮狀を……さうですか、私の處へも禮狀丈け……ハヽア左樣ですか、お珍らしい事で御座います』と云ふやうな譯で、是が即ち非常な厭味を帶び、園田の所爲は怪しからんと云ふ意味を含んで居る。乍併拙者の精神は其處にはない。前陳の如く、折角他人が厚意を以て贈られたのに對して、返禮すれば差引ゼロになつて、先方の所志に反する事になるから爲ないのだ。拙者は平素家族の者に對して『死んだ時は香奠抔を貰ふか知れぬが、決して返禮をするに及ばぬ、此事は書面で遺言するよりか今口で云つて置く』と云ふ事を屢次誨へて居るが、婚禮に關しての被贈品抔も同じ事である。其享けたる厚意に對して酬ゆる時節は又無いとも限らない。知己の人々に同種慶事のある場合に返禮をしても、決して遲い事はないと思ふ。されば是等の贈答は斷然廢止するが宜しい。

虛を去つて實に就く事

此婚禮の贈物に就て拙者には聊か希望がある。贈答をしては不可ぬと云ふ事ではないが、贈物をするなら可成虛飾虛禮に亘らぬやうにして貰ひたいといふ事である。誠意を以て他人に物を贈ると云ふならば、廉價でも構はぬ。可及的實用に適して其人の好意を紀念として遺れぬやうな物品が欲しい。遺憾ながら拙宅で貰つた幾百種といふ贈物の中で、紀念となりさうな物品、永く役に立ちさうな物品は極少數であつた。

貰つて小言を云ふのは甚た怪しからん理であるけれども、一斑以て全豹を窺ふべしと考ふる故に、忌憚なく自己の實驗談を掲げて、世人の注意を促がす次第である。西洋では婚禮の贈物は、他の贈物と違つて、特に叮嚀にするが、其物品は、孰れも實用的のものを撰ぶ。新婚に贈る紀念品中には、隨分高價な裝飾物等も多數あるが、多くは食器具とか、日用品とか、男女共に皆相當の實用品を贈る慣例なれば、贈つた者の志望も届き、且つ其物品は何時までも紀念として遺さるゝ譯である。然るに我國の舊例の如く貰つて直に消失して了ふやうな物品では其處分に困る。鰹節には實に弱つた。長く保存すれば蟲が付く。如何考へても賣拂ふ外はない。他人の贈物を賣ると云ふ事は實に言語同斷の話であるけれども、仕方がないから明けて見た。明けて見た所が、計らずも其中には全然鰹節の形狀を備へぬものもあれば、蜂巢のやうに化つて蟲が一杯居るもの杯もあつたには驚いた。贈つた人は勿論知らぬであらうけれど、若し之を知つたならば、面目なき話である。斯樣な錯誤は世間には屢次起る事である。鷄卵箱を貰つて明けて見たら、其中から雛子が飛出した杯と云ふ滑稽談もある。

故に此鰹節や鷄卵函を贈ると云ふ樣な陋習は是非廢止せねばならぬ。今後我社會一般が可成虚を去つて實に就くと云ふ方針で、着々改善を圖るやう切望せざるを得ない。尙一つ婚禮の時に、迷惑を感じた事は、祝物を持參した使者及び輓夫等に祝儀を遣ると云ふ事である。五人や十人なら左程の事でもないが、幾十人、幾百人と到來する使者に、一々包分けて祝儀を遣ると云ふ事は、非常の手數にして、家內の混雜も普通でない。是等も仔細に吟味すると、矢張折角厚意を以て贈つた物品の代物を取ると云ふ理由であるから蓋し寄贈者の本意ではあるまい。斯かる事理故若し使者の勞に報ゆる必要があるならば、寄贈者自身にて之を辨じ、先方へ迷惑の掛らざる樣注意すべきである。かくてこそ其の厚意も始めて充分貫徹くことが出

來るのだ。此種の無益なる舊習慣は此際是非革めたいものである。

茶菓に伴ふ無益の手數

又世界廣しと雖も、日本程茶を喫む國民はない。朝往うが、晝往うが、晩に往うが、又人足でも輓夫でも誰が來ても、茶を呈さんければ承知しない。彼處に往つたけれども、茶一杯喫ませないと云つて、小言を云ふものもあるが、其樣に咽喉の渇くものではない。唯だ之は習慣である。習慣と云つても實に無益な惡習慣である。來客に必ず茶を出し、火鉢煙草盆を出し、又少し立派な家になると、茶菓子を出すと云ふのは、隨分厄介な話ではあるまいか。華族の邸宅抔を訪問すると、必ず恭しく奉書紙に包んだ菓子が出る之を頂戴せんと主人が立腹さるゝと云ふ話、難有迷惑であるが、仕方がないから貰つて來る。故に毎日の訪客に一々菓子を呈す準備をするとすれば、一ヶ年内には相應な失費となるであらうと思ふ。實に無益且つ煩雜な話ではあるまいか。上の好む所下焉より甚だしきものありで、斯樣な事がある。拙者が華族銀行の頭取となり、華族方と交際を結び、毎時も菓子を頂戴して來るより、妻杯は華族方來訪の時は必ず菓子を呈さんければならぬものと心得て了つて、華族外の人が來ても矢張菓子を出すやうである。幾ら小言を云ふても、之は止まぬ。冗事と知りつゝ爲さねばならぬと云ふのは、困つた話であるが、斯くせざれば、華族方も世人も承知しない。之を要するに、我等は現存の儀式風習に依らざれば、世人より惡評を買ふ虞あるが爲め、不得已衆愚を學び、理想を斷行しかねて居ると云ふ始末である。

禍を轉じて福と爲す事

我國に於ける家庭經濟の改良に關して、拙者は種々考へて居る事もあるが、一件も實行は出來ない。我等が此社會に出で、公衆と交際を結ばねばならぬ必要ある以上は、矢張泥水に住めば泥水に染まねばならぬと云ふ諺に洩れぬ。世人と行爲を同うせざれば、此社會に立て生存活動するに適せざるより、不得已舊慣を守ると云ふ實況である。而して此度の國難は不幸な事變ではあるが、併し社會の各方面に存在せる弊害及び不經濟なる事物を芟除する爲めには、誠に得難き好機會であると考へる。之を我國今日の民情に徴するに、如何しても非常な事變が起らぬ以上は、非常な改革は覺束ない。この點より云ふと、這回の大戰爭は、或は禍を轉じて福と爲す導火線かも知れぬ。幸に此の好機會を利用して、戰爭にも勝ち、且つ社會の弊害をも除去する事を得たならば、日本國民の慶福之に過ぎぬ事であらうと信ずる。獨り經濟上の事に限らず、行政上及び立法上の事にせよ、又司法上若くは教育上の事にせよ、方今の日本社會には到る處に醜風惡俗が滿ちて居る。之を約言すれば、人心が腐敗して了つて居る。然れば若し此狀態のまゝ幾十年を經過するに於ては、帝國は遂に自滅するかも知れない。自滅せざるまでも決して强大なる國民になれないと拙者は始終憂慮して居る次第である。

金剛石及金時計の贅澤

次に日本人の裝飾品即ち贅澤品に就き一言を加へて置きたい。他でもない彼の金鎖、金時計等に關する事である。此等の裝飾品は現今餘程外國より輸入されて居る。統計は未だ調べて見ぬけれど、日本國民の富力の程度より考へて見て、此金鎖、金時計抔と云ふものは甚だ不釣合ではないかと思ふ。時計は固より必要品ではあるけれども、時刻を見ることが出來れば夫れで足る。何も燦然金色を輝かさねばならぬとい

ふ必要はない。又金剛石も大分輸入されて居るだらうと思ふ。此統計も調査しては居らぬが、併し先年拙者が英國へ駐在中に日本から隨分注文が來たのでも解かる。處が其時分より拙者は、日本の婦人が金剛石を以て装飾品とし、歐米の婦人と競爭する抔と云ふ事は迚も出來ない、國を傾けても恐らくは難かしい、之は實に不經濟極まる誤想である、と云ふ意見であつた故に、金剛石を購入るゝ事は、中止した方宜からうと云ふて、其の希望者に注意を與へ、他の廉價なる飾物を購つて送つた事がある。然るに其の希望者は之に對して、「誠に御尤の御勸告に預り、委細承知致した、以來其方針を執る積りである」と云ふ回答を送られたが、後に聞て見ると、其夫人は如何しても金剛石を求めなければ承知しない。婦人社會の流行物になつて居る物品を自己一人のみ着けて居らぬのは恥辱であると云ふので、到頭他者の手を藉りて之を購入れたさうだ。斯る事情なれば、幾干忠言を加へた所が、社會の弊害を除去すると云ふ事は、却々容易の事でないと思ふ。

抑も金剛石なるものは、世人の知れる如く、外國産の非常に高價な品で、夫れに外國人の細工を加へた物である。之を日本人が、歐米人と同樣に装飾品として使用すると云ふのは、非常な誤想ではあるまいか。英吉利の如きは、喜望峯の傍なるケープ、コロニーと云ふ殖民地より、多量之を産出して、本國に送る。而して本國の人民は、無論代金を拂ふて之を求むるに相違ないけれども、其金圓は殖民地即ち自國民の居住して居る土地に落ちて行くが故に、結局矢張り本國に落ちると同じ理由で、他國に送金するのとは大に事情を異にする。其殖民地が繁榮するに隨つて、本國の繁榮することは自然の勢なれば、國家經濟上些も痛痒を感ずる事はないと云つて宜いのである。此點は日本抔とは大に趣を異にして居る。夫れ故にや、英國の上流社會に於ては、金剛石の流行する事非常なものである。貴夫人抔は殆ど金剛石の裡に埋まつ

て居ると云つても宜い位で、一人で何拾萬圓何百萬圓を之に投ずるのは敢て珍らしい事でない。王宮に於て催さるゝ舞踏會杯に行つて見ると、瓦斯燈電氣燈の光輝よりも貴夫人の附けて居る金剛石の反射の光輝が強い位に思はれる。如此處へ五千圓や壹萬圓の金剛石を着けて行つた處が、却て見苦しくて少しも眼に立たぬ。拙者が英國在勤中、某皇族殿下が、妃殿下と一緒に來られて、英國皇帝に謁見するのだから、是非金剛石を購求なされたいと云ふ仰である。因て拙者は陪従して行つた。一體英國宮廷の慣例として、服裝物は一回しか使用されない。再び謁見する時分には、復た違つた裝飾品を着用しなければならぬ。然るに其一回しか用ゐられぬ髮飾胸飾等一揃で、代價二萬何千圓と云ふ事であつたやうに記臆して居る。爾殿下も頗る驚かれて、是丈けの物品に斯る大金を擲つては堪らぬ、如何しても謁見せねばならぬから購ふたが、誠に困つた次第であると仰せられた事があつた。爾他の事情は多言せずとも推して知べきである。日本は美術國である。日本人自らも世界の美術國を以て任じ、又諸外國よりも同樣に認められて居る邦國である。斯くまで立派なる美術國が何故に婦人の裝飾品や何かを自ら製作することが出來ぬであらうか、拙者は少しく之が解釋に苦しまざるを得ない。何も燦然輝つて居らなければ粧飾品でないと云ふことはない。一種精巧なる美術的細工を加へた物もまた好裝飾品である。之が日本の美術なり、日本の裝飾品なりと云ふて、歐米人に示すやうな物品はあるまいか。この議論は、拙者は始終持つて居るけれど、今日に至るまで、快く實行されぬのは遺憾である。希くは日本人は、今後金剛石杯を無暗に輸入することは廢めて貰ひたい。拙者は物貨を輸入することを不利として拒む理由ではないが、輸入するならば、尚少し實用的の物品に改めて貰ひたいのだ。此一事は我中流以上の人々に向つて、拙者の切に希望する所である。尚ほ一つ金剛石の使用に就て、注意して置かねばならぬ事は、英吉利邊では、多くは金剛石を婦人の粧飾品に

は使用して居るが、紳士社會に於ては、酷く卑んで決して使用しないと云ふ事である。時としては指輪に附ける事あれども、之には金剛石よりも、廉價な地味な寶石を入れるのが常である。金剛石を光らして得意になつて居る者は、紳士社會には殆んど無い。男子にして指輪、又は襯衣の釦に、金剛石を使用するものは、多くは藝人で、手品師とか、俳優とか云ふ種類の人物に限られて居る。日本人は貴重品として、之を用ゐざれば人格關らざるやに考へて居るか知れぬが、之を使用すれば歐米人には、却つて輕蔑さるゝ譯である。英國の貴顯紳士杯は決して左樣な眞似はしない。

葬式の弊

又今日の葬式と云ふものは葬式ではない。殆ど御祭騷ぎである。夫れは如何なる原因に基くかと云ふと、必竟虛榮を博せんとするの目的に外ならぬ。死亡者あると、平素交際も何もしない人物にまで、黒縁を取つた通知狀を送る。是は暗に會葬して呉れよとの意味合である。故を以て平素往來をしない人でも、不得已弔意を表する爲めに其家を訪ひ、又は墓地までも行くと云ふ工合である。世上人の死を見て悲まぬものは無い。弔意を表することは人情の自然である。然れども自ら好んで平素交際もせぬ家にまで往つて、弔慰すべき必要はない。之は全然一種の流行に過ぎぬので、何處其處の葬儀には何百人、何千人の會葬者が有つて盛大であつたと云はれたいのが目的である。實に之は無益な事ではあるまいか。贈花は一丁も二丁も行列を作つて往き、又鳥類を壯麗な籠に入れて、之を墓地に持つて行つて放つ。何の爲やら拙者には些とも理由が解らない。

（未完）



上古の後宮

文學士　濱田紅於

後宮とは即ち皇后宮を云ふなり、皇后宮は天子の御在所より北方即ち後方に在りつれば、この名出できにけり、太古の内裏の御有様はつまびらかに知ること能はねども、大かた平安朝の内裏と大差あるまじければ、これによりてかれを類推するとを得むか、平安朝に於て、天子の御在所は仁壽殿にして、皇后は常に常寧殿におはしませり、その位置は仁壽殿前即ち南にありて、常寧殿は後即ち北にありき、當時の思想によれば、男子は陽にして女子は陰、南は陽にして北は陰なれば、その御住所にまでも規定ありしなり、すべて婦人は幽深に住むを操とせしゆゑに陰に配せり、坤德と云ふ言葉これより起りける又公卿の夫人を「北の方」といひしも、その一例にして、良人の居所なる寢殿の後にある、北の對屋こそ夫人の居所なりしか、又高貴の夫人を「御臺所」といふ、これは婦人は臺盤所をつかさどりて、中饋をとゝなふるものとの意より出でしものにして、所謂幽深にすむを操とすといふに異らず、後世中等以上の夫人の敬語に「奥方」或は「奥樣」といふも、上古の風俗の名殘なり、談枝葉にわたれど、後宮の起源は概ねかくの如し、但しこの語は、我邦が隋唐

と直接に交通してより、その制度に倣ひしものにして、その以前には何と稱へしにや、今明ならず、さて我邦後宮の沿革をたづぬるに、國初より今日にいたるまで、凡そ六回の變遷ありたり、こゝに上古の後宮を述ぶるに當り、便宜のため二章に分つ。

(一)律令以前の後宮

(二)律令以後の後宮

律令以後の後宮は更に數節に分るれど、こゝに一々かゝぐるは却てわづらはしきを以て、その箇所にいたりて節目を擧ぐることゝせむ。

(一)律令以前の後宮、

律令以前の後宮の御有様は明かならざれども、古事記又日本書紀等によりて、その大概を知るべし、古へ天子の御讌褻にはべりし婦人は、キサキ或はミメと申しぬ、キサキは君幸の義にして、古事記などには后の字を充つ、ミメは御妻にして、後世の妃にあたるなり、かく多くの御妻おはしゝが、その中におのづから嫡庶の別ありて、御嫡妻をオホキサキと申しき、古事記には大后、嫡后、皇后などの漢字を充てたり、かく嫡庶の別の嚴格なりしことは、かの支那の上代に於て、舜が堯の二女娥皇、女英を娶りて、後世より一夫多妻の誹を受けしとは、同日の談にあらざるなり、今二三の實例を擧げむに、神武天皇はいまだ日向の高千穗宮におはしゝ時、阿多の小椅君の妹阿比良比賣(吾平媛)を娶り給ひしが、畝火の橿原宮に皇位に即かせ給ふに及んで、更に大后にすべき美人を求め給ひて、事代主命の女媛蹈鞴五十鈴媛を納れ給へり、仲哀天皇は前の大中津姫命を娶りて、鹿弭坂忍熊二王を擧げたまひ、後息長足姫命を納れて品佗別命、品陀別命を擧げ玉ひぬ、この中息長姫命ぞ大后にておはしき、仁德天皇のキサキには、磐之媛、髮長媛、八田若郎女、宇遲若郎女おはしき、その嫡庶を尋ぬるに、爲二大后石之日賣命之御名代一定二葛城部一とあれば、御嫡妻は磐之媛にして、他は皆御側室なりしなり、かくて歷代の天子みな大后を立てたまひしが、弘文天皇の如く、御在

位短かき時には立后なかりしこともありき、日本書紀によれば、妃は神武天皇の時、夫人は反正天皇の時、嬪は履仲天皇の時に始まりしやうなれど、これは誤りなり、書紀はわが國史を外國に誇揚せむがために、漢文體にものしたれば、大寶以後の名稱を溯り記したるものにして、當時これらの名稱あらざりしと知るべし。

當時大后を立てらるゝに制限ありて、必ず皇族より選びたまひき、凡そ大后は天子の御嫡妻にして、天子と同等の御資格を有せらるゝことなれば、殊にその種胤を重んぜられしなり、たとへば、息長足姫（神功皇后）は開化天皇九代の孫、舒明帝皇后寶皇后（皇極天皇）は敏達天皇の曾孫、天智帝皇后倭姫は舒明天皇の孫、天武帝皇后鸕野ノ皇女は天智天皇の女なりしが如し、唯仁徳帝皇后磐之媛は葛城襲津彦の女にして、臣下より入り、大后の位に立ちたまひしは異例と云ふべし、私に考ふるに襲津彦は武内宿禰の第四子にして、孝元天皇の玄孫に當り、皇別の錚々たれば、已に臣下に降りしも、特に殊遇を加へられしならむ、磐之媛薨御の後、異母妹八田若郎女大后に立ち給ひぬ、上代人文いまだ開けず、後世のごとく一定の倫理なしと雖も、夫婦の別存じ、婦人は一夫を守るの操も立ち、同母兄妹の婚姻は嚴禁せられたり、允恭天皇の御宇、太子木梨輕王同母妹輕大郎女と通じて、伊豫國に流されたり、されば道なき中にも自然の道は儼として犯すべからざりしなり、しかはあれど、叔姪相婚し、異母兄妹の相嫁することは、當時の常習にして、道徳も刑法もこれを咎めざりき、試に次の例を見よ、

（一）事代主命
- 神武天皇
- 媛蹈鞴五十鈴媛（事代主命の女）
　— 綏靖天皇
- 五十鈴依媛（事代主命の女）

（二）
- 仲姫
- 應神天皇
　— 仁徳天皇
- 宮主宅姫
　— 八田若郎女

(三)舒明天皇─┬─天智天皇─鸕野皇女
　　　　　　　└─天武天皇……………

以上三例の中、(一)は姉甥の御結婚、(二)は異母兄妹の御婚嫁、(三)は叔姪の御婚姻なり。

（二）　律令以後の後宮

文武天皇大寶元年大寶令成りてより、後宮の制度も定められければ、その御有樣もやう／＼明になりゆけり、そも／＼こゝに律令以後の後宮と題したれど、唐の制度を採用せしは、孝德天皇の大化改新以來なれば、後宮の制度も、その時より定まりつらむも、史料殘らざるを以て、これを述ぶるに由なし、大寶令は大化の新政を改正增補したるものなれば、これに據るも大差なかるべし、さて大寶時代より、中古の初めに至るまで、後宮の御有樣は二三回變遷したり、故に便宜上これを三節に分ちて說かむと欲す。

第一節　令制の比較的に能く行はれし時代

天子の御嫡妻を皇后と申し、必ず皇族より選び給ひしことは、前代の如し、故に當代の元老藤原不比等の女宮子、文武天皇の後室に入りしも后位に登ることなかりき、大寶令の後宮職員令によれば、後室には皇后の外に、妃、夫人、嬪の三等の后おはしけり、妃は定員二人、必ず內親王を以てこれを充て四品以上を授けらる、夫人は三人にして、臣下の然るべき家の女子を選び、三位以上を授け、嬪は四人四位或は五位に叙せらる、この規則は毫も犯すべからざるが故に、大臣の女子にても、夫人以上にのぼるを得ざりき、しかれども、大寶令は條文こそうるはしけれ、これを實行することはいと困難なりしかば、後宮の制度の如きも、遂に勢燄なりし藤原氏によりてうち破られたり。

第二節　令制の破れし時代

大化以前蘇我氏の勢を振ひし時代にすら、その女子を皇后に立てし例は非ずして、先王の制よく守られしに、聖武天皇神龜六年八月、夫人藤原安宿媛（光

明子）皇后となりぬ、これ誠に古制を破りしなり、安宿媛は藤原不比等の女にして、不比等は大寶令の制定者なるに、自らこれを犯すは罪人なりとて、古今の學者の指彈する所となりぬ、その當時朝廷にても、議論大に起りて、皇族中にも反對せられしもの少なからざりき、されば天皇は諸臣を召し、仁德天皇の朝の磐之媛の故事を引きて、立后の詔を下し給へり、實に後宮制度の大變にして、本居宣長はいとめづらかなることと評せり、藤浪のゆかりの色はこれより益濃やかになりまさりぬ。

皇后の位已にかくの如くなれば、他の制度いかでか破れざらむや、嵯峨天皇の時、多治比の高子妃となりしより、制度弛みて、醍醐天皇以後の史には見えず、夫人は嵯峨天皇の時にやみ、嬪は文武天皇一代のみ置かれたり、されどこれらに代りて、後宮に侍りしもの出で來にけり、女御、更衣これなり。

女御は桓武天皇の時、紀乙魚、百濟敎法等を始とすいづれも從四位下たりしかば、その始は嬪に代へられしものならむ、仁明天皇の時右大臣藤原三守の女貞子、女御となりて寵を被り、遂に從三位に進みたれば、曩の夫人の地位を得るに至れり、されば文德天皇以後は、顯貴なる藤原氏の女は、選ばれて女御となるを榮とし、藤原多美子（攝政良房の女）は、清和天皇の女御とあり、御覺殊にめでたくて、正二位に陞り、關白基經の女穩子は、醍醐天皇の女御たりしが、延長元年遂に皇后に立てられぬ、されば女御の位地はやう〳〵尊くなりて、皇后に次ぐに至り、圓融天皇以後は、攝政關白大臣の女たりとも、必先づ女御となりて、皇后或は中宮にのぼる例となれり、更衣は光孝天皇の朝にはじまる、もと卑姓の女を以て充てられ、位は五位或は無位なるもありき、されど後ちには四位に陞りしもあり、又女御にすみしもありしかど、村上天皇以後は全く置かれざりき。

光明子皇后となりてより、藤原氏のみ、後宮の寵を專にせしが、藤氏の四家の競爭は、後宮にも及

び、互にその女を納れて勢を得むと欲し、終には皇后中宮併立の奇觀を呈することゝなれり。

第三節　皇后中宮の併立

この事實は前節に含まるべきものなれども、あまりにめづらしき現象なれば、別にこゝに述ぶることゝなしぬ。

凡そ中宮とは元來宮閤門の内即ち禁中を指したる言葉なり、この言葉は支那に起りしものにして、漢時代既にこれあり、漢書の顔師古註に、中宮皇后宮也とあるにて知るべし、我邦唐制にならひて律令を定むるに及び、亦この言葉を用ひぬ、令義解にはおなじ解釋を施したり、故に中宮とは皇后宮なること明なり、されど又尙廣き意義に用ひしこともありて、太皇太后、皇太后、皇后の三宮を中宮と云へり、太皇太后とは、天子の御祖母にして后位に登られしもの、皇太后とは、天子の御母にして后位に登られしものと云ふ、その事務を掌り官府に中宮職ありき延喜天暦以向に至りては、中宮は專ら天子の御嫡妻の稱となり、皇后は大かた御生母の尊稱となりにき

この頃は藤原氏の勢は天子をも左右せし折なりければ、稀有なることもやう／＼顯はれぬ、圓融天皇の時、關白兼道の女媓子皇后となりしが、その崩御の後、關白賴忠の女遵子を中宮とせられぬ、御一代に二宮の稱あるは、これよりぞ始まりける、一條天皇の時、關白道隆の女定子中宮となりて寵を專にせしが當時藤氏家門の爭はその極に達し、中宮の兄伊周は叔父道長と權を爭ひて、終に配流の辱を被りければ、中宮はこれをなげきて、尼となり給ひぬ、されど中宮たること元のまゝにておはしき、道長は伊周を退けて關白となり、その女彰子を入れて女御となしゝが、これを定子中宮の下に置くを屑とせず、乃ち口實を設けていへらく、我朝は神國なれば、神事を先とすべし、中宮は正妃におはせども、已に佛道に歸依し給へば、重ねて后を立てゝ、祭祀を掌らしめらるゝこそ、宜しからめと、こゝに於て長保二年三月、女御彰子を中宮に立て、定子中宮を皇后

と稱しぬ、皇后の御座所は弘徽殿、中宮は藤壺におはしければ、兩宮相對立して、天子は一時に二人の御嫡妻あることゝなりぬ、北畠親房評して、本朝並二置二宮一太無二其謂一と云へり、かゝる奇觀も皆藤原氏が專横の所以ぞかし、かくて三條後朱雀の兩朝には、兩宮併立の事ありしが、後冷泉天皇の時、後一條天皇の皇女彰子内親王先づ中宮に立ち給ひ、次で關白頼通の女寛子皇后となりつるが上にも、關白教通の女歡子更に入つて皇后となりければ、寛子皇后を中宮と改め、中宮章子内親王を、御母の尊稱たる皇太后と稱しぬ、三宮鼎立は名分の正しからざる極みにして、しかも濫稱の甚しき、皆藤原氏の犯せし罪なりけり、かゝる大罪は神人共に容れざる所、いかでか報のなからむや、後三條天皇いたくその權を抑へ給ひしより、この世をば我が世ぞとほこりし藤原氏も、やう〳〵衰へて、春日の神威もまた昔のまゝならざりけれど、歴代の後宮にはなほ、濃紫のしなひゆかしく咲き匂ひける、戚威の程こそいみじかりけれ。

平家時めきし頃の後宮は、別に變れる節なければ說かず、星月夜鎌倉山に白旗うちなびきし頃より、江戸紫の榮えし時に至るまで、後宮の御有様はたいみじうあはれなること多けれど、そは他日に讓らむ。

天璋院

牧子

我國前古に比類なき明治聖代の基礎は、實に嘉永安政以來二十餘年の間に渉つて据ゑられしものなるが、其間内憂外患は交々至り米魯英佛蘭の諸國、外より通商條約を迫るあれば、將軍家定の薨去、繼嗣の紛擾、國内の分裂、浪士の跋扈など、相踵いで内に起りし爲め、内外多端人心動亂只だ刈菰とみだれ行く世の有樣は、亦た前古に比類なき程なれば、當時爲政の衝に膺りし德川一家の苦心が、想像の外に在りしは言ふまでもあらじ、此際同家の大奥に在

つて、蚤く將軍家定に別れ、爾來幼弱なる將軍家茂を陰ながら補佐したる天璋院の心遣ひ、實にや深窓に人となつて、浮世の事は露も得知らず、嫁して鴛鴦の情の濃かなりしも、蝴蝶の夢の暖かなりしも僅に是れ一年有半、將軍家定を思はぬ病に奪はれて後、維新の際江戸城明渡しに至るまでの事跡を考ふれば、大奥に隠れたる此の女傑の働き振が、如何に傳ふべき事柄に富みつゝあるかよ。

天璋院は徳川十三代將軍家定の御臺所、名は敬子、篤姫と稱し、島津薩摩守齊彬の女にして、天保七年十二月十九日鹿兒島に生れたるが、其の麗質誠に絶世の美なりしことは、大奥に仕へたる或女房が、此姫は實に絶世の美人にて、三十二相を備へしとは此姫のことなり、只だ少しく語音に薩摩の土音ありて何となく耳にさはりしのみ玉に瑕なりき、と語りしといへるにても知るべく、父なる方の血を享け繼ぎたる性來の賢さいとゞ頼母しかりしまゝ、父薩摩守には、早くより深き慮りのありしと見え、藩士の中より然るべき人々を選み出して姫に附置き教育おさおさ怠りなかりしをもて、手跡も麗はしく、學問は唐本をも讀ませられ、武術は長刀を使ふこと殊に巧みに、其他香、茶、生花などの小技に至るまで、通じ玉はぬはなきが上に、京師よりは數名の婦人を呼下して、之をも左右に侍らせ、言語起居を教へまゐらせければ、誠に京女﨟の如く、少しも鄙びたるふしはなかりき、安政元年近衛忠熈公の養女となられ同じ三年の十二月十一日といふに、將軍家と結納の御取換せあり、同じ月に御入輿、其の十八日合卺の式は擧げられしが、此の御入輿の事に就ては、父君薩摩守總ての周旋を自らし、衣服器具などの末に至るまで、悉く調達の勞を執られ、當時居室の床の間には、他日姫より將軍家奥向の女房に遣はさるべき銀製の箸さへ堆く積み置かれきと傳へらる、只だ此の入輿に關する薩摩守の深慮が、事實となりて顯るるの機なかりしは、いとゞ遺憾の極みなり、是れより先將軍家定は、天保十二年十一月に鷹司關白政

通の女を迎へ給ひしが、幾程もなく薨し給ひ、更に一條前關白實道の女を娶りしに、是亦薨じ給ひし故さてこそ篤姫君の御入輿とはなりしなれ。

當時世の有様を如何にといふに、前年米將ペルリ兵艦七隻を率ゐて浦賀に入りし以來、近海の警衛事漸く繁く、折衝に折衝を重ね、遂に規約十二款を制定して之れを與ふるや、間もなく露國の軍艦は南海より大阪灣に入り、轉じて亦浦賀に來り、是亦和親通商を請ひ、終に下田、長崎、函館の三港に碇泊し、錢を入れて缺乏の物品を購求すること、及び下田大走島方七里、函館方五里の地を貸すことを許したる時にして、翌けて安政四年にはペルリ江戸に來りて家定に謁見し、幕府の蕃書調所は九段坂下に設けられ、之れより將軍家と、外國使節の間は、日を追ふて往來の度を重ね、ペルリは國書を奉呈して優遇を受け、先の條約を改めて十六款に增訂したり、是より先細川齊護は兵を發して米艦を攘はんことを請ひ德川齊昭は外國和親の事皆重大に係る、宜しく朝廷に稟して而る後に事を決すべしと諫め、幕府有志の中にても、川路、筒井などの面々は外國和親の事を聞て、國體を損ずること之れより甚しきはなし、天下の志士必ず怒りて卒に擾亂を釀さんと謂ひ、事態漸く困難に陷りしを以て、幕府は使を派して、外使請ふ所の條款について、仔細に之を京都に奏問せしに、奏する所の諸件宸憂殊に淺からず、宜しく衆議を酌んで後之を裁すべしとの勅命に接したる爲め、幕府の震駭は一方ならず、折柄鍋島齊正も亦書を幕府に致して、和米の非を極諫するあり、陛下よりは再三條約締結の非について勅諭を降され、外交締結の如きは、朕の斷じて許さゞる所なり、若し奇變を生せば、則ち宜しく國力を竭して以て攘夷を擧ぐべしとまで宣せられ、一方ペルリは江戸に迫りて、條約の捺印を促がし、兩國既に條約を結びながら、遷延定約の期を緩くするは、萬國の未だあらざる所、大府若し信を證すること能はずとならば、吾直ちに京師に詣り、之を斷決せんのみ、因循此に至りては

際限なしと迫りしまゝ、まことや、幕府は世話に所謂板挾みとなり、詮方全く盡きんとせし折柄、阿片事件にて淸國を討ちたる魯英の軍艦は戰勝の威を驕し、殆んど同時に神奈川、小柴に入港し、暗に强迫の態度を執りしより、幕府の有志は、遂にペルリの言を容れて、通商條約を定むるの止むなき始末となりしが、之れに反抗する諸侯有志の面々數を知らず、やがて恐ろしき安政の大獄起り、蟄居、遠島、切腹梟首、聞くだに身の毛の慄つ世の有樣、女性の身として大奥にある天璋院の仄かながらも聞かれし時の心細さ、世は將た如何に成り行くらんと寢ても覺めても思ひ續け玉はぬ間とてはなからんを、况て偕老の契りを忽焉無情の天に奪はれて、將軍家定の薨去に會ふぞうたてき。

時は安政五年の七月三日、家定不例にましませばとて、侍醫岡櫟仙院といへるものに診斷せしめしも、病症判然せず、進めたる藥劑も功を奏せず、戸塚靜海、伊東玄朴、遠田澄庵、靑木春岱など召出され、尙は竹内玄同、伊東貫齋なんどいふ名ある醫師ども召されしが、六日の朝拜診の際、本日はお表に出給ふも故障あるまじきやとのお尋に、故障あるまじきよし答へ奉りしに、此の日外殿に於て、病俄かに革り、遂に薨去の悲みに會ひたるが、畢竟今の所謂虎列刺なるを、時の醫師病理に闇く、それぞと診斷するもの丶なかりしため、流言は流言を生みて、幕府の恐慌一方ならず、岡櫟仙院は隱居謹愼を命せられ奥祐筆志賀金八郎といへるものは自殺したり、斯る悲しき將軍の死に會ふたる御臺所天璋院の心の中は推し測るさへ愚かなるが、此の年五月より九月の頃まで、虎列刺流行の爲め、江戸市中の死者十二萬餘人の多きに達したれば、此の噂を耳にし給ふ女性の嘸や頼りなくこそ覺さんに、越えて九月の廿三日には當時國許におはせし父君齊彬公が亦時疫(虎列刺)に罹りて、七月七日逝き給ひし旨の報に接す、憂世の波のうたゝ安からぬに、所夫を失ひ父を失ひしさへ、女性としては氣も心も狂ひ玉はん程ならんを、

將軍繼嗣の事については、一家一門の間は更にも言はず、世の取沙汰の穩かならぬこそ、返す〳〵も痛く悲しき。

勿論繼嗣定めの事は、外國和親の問題に引續きて、少なからぬ紛擾を釀したるもの、先に家定病に罹り外事愈よ急迫し、內情亦た穩かならぬ折柄、幕府の方針たる開國和親とは、全く反對たる鎖國攘夷の意見を固く執りたる一橋慶喜公を以て、將軍の繼嗣となさんとの說、有志の間に行はれしが、將軍家定も亦時世につきて考ふる所のありしものか、一旦此の說を納れたれども、當時開國和親の避くべからざるを見たる面々は、大に之れに反對し、幼少なれども將軍家には血緣深き德川慶福を擁立せんことを謀り奧向婦女等と結托し、家定の母堂に當らせらるゝ本壽院をして、若し慶喜を養君とするならば、妾は只今自害して相果つべしとまで强迫せしめたる爲め、將軍家定の意嚮も玆に一變して、慶福を立て、井伊直弼を大老とすることゝ定まり、八月八日久しく深く秘し置きたる家定の喪を發し、其の十八日に葬儀を營みし後、十二月に至りて、將軍宣下の事あり、慶福は名を家茂と改めしが、天璋院は此の時を以て從三位に敍せられたり、斯くて將軍薨去の前後に、井伊の强硬なる政策は遠慮なく行はれ、爲めに井伊は反對派の激怒を受けて、萬延元年三月三日櫻田門外の雪と消え、間もなく將軍家茂の上洛となり、引續きて長州征伐の事ありしが、天璋院は平素規律正しく物事の規矩を外れ、又は超えたるをいたく氣に觸へらるゝ氣質なれば、此の頃より政事向にも深く心を注がれ、家茂再度の上洛の時などは、心痛に得堪えずして、時の老中を大奧に召し、心づかれしままを、かにかくと物語られしことあり、老中は只管院の氣質を稱へたりと傳へらるゝが、斯くてこそ、父上齊彬公が御心にも叶へるならんか。

其の後、世の有樣は刻一刻に移り變りて慶應二年の七月二十日には、將軍家茂大阪城に薨じ、翌年正月十二日の夜半には新將軍慶喜海路より品川に着し、

其の夜も更けて二時頃とも覺しきに新將軍より天璋院に對面の儀を申出られしも、深夜なればとて其事なく、翌けて十三日早朝對顏ありしに、伏見戰爭のこと、朝敵の汚名を蒙りたることなど、聞く事毎に驚きの種ならぬはなきに、朝敵の稱を赦免せらるゝやう京都へ歎願してよとの賴みさへあり、斯くと聞きたる幕府は、奥表の別なく狼狽を極め、兎やせむ角やと、此の一年はあらぬ思ひに駈られて、四年の正月には嘉例の祝もなく、初午の催ふしも忘るゝとはなしに打過ぎ、雛の節句も物淋しく哀れに暮し、只管世の取沙汰にのみ耳傾むけて、面白からぬ日を明し暮す中、新將軍が賴みのことなど思し召し、あるに甲斐なき女性の身として、差出がましき願の筋など其の効あるべしとは思ひも寄らねど、去ればとて棄て置くべきにもあらざれば、天璋院はお使として御年寄二人を選び、之れに歎願書を帶ばしめ、木曾街道より京都に旅立せられ、同時に和宮（家茂の室も）亦た新將軍よりの依賴により、使して同じ旨を願はれしが、何れも大津に到り着くや、供の者の入京を差止められ、使の人々のみ身を以て京地に入りぬと聞えぬ、去るに兩使の未だ歸東せざる程に、京都にては征東の儀仰せ出だされたれば近きに攻寄らるべしと傳へられ、新將軍は嚮きに上野に立退せられ、大慈院にて謹愼し、閣老近親にさへ對顏を許し玉はで、專ら恭順の意を表せられしが、近き頃水戶へ退隱されしとの噂さもあり、今は全く賴らん方なき大奥の方々、濕るゝ袂は雨やさめ物憂かりける卯月の空、心も曇る九日の朝まだき、暫しなりとも征東軍の中止を願ひ奉らんと思しつき、天璋院と和宮とは同時に使を立てられしも時は旣に遲かりき、東海道の官兵は早くも箱根の前後に進み、木曾街道のは蕨宿まで攻め上りつゝありしなり。

是より先、閏四月八日大總督より江戸城明渡しの命と共に、天璋院其他夫々御立退あるやうとの沙汰を受けたる閣老參政の面々は、協議の上和宮、實成院（家茂の生母）を田安御殿に、天璋院を一橋御殿に、

又當時一橋御殿にありし新將軍の室は、小石川梅の御殿に移すことに定め、其旨諸院に申出しに、獨り天璋院はお聞入なく泰然として容を改め、將軍家には當今御謹愼中にて、未だ何分の御沙汰もなく、水戸表へ御出立あらせられしは、思召ありての事ならんに、其御先途も見屆け奉らず、先づ早や空城を明渡す所存なるや、言甲斐なき者共かな、吾身不肖ながら斯くてある上は、いかな明け渡し申すまじと、更に變る御氣色もなかりしかば、閣老參政は且つ慙ぢ且つ困じ、殆ど途方に暮れ果てしが、當時彼等の得意とせし一時の方便は忽ち浮び、御用人を以て改めて對面の儀を願出しに、漸くにして拜謁は許されしものから、院には御座の間の上段に御簾を卸して其の下に着座せられしまゝ、只だ膝下を拜するのみにて、拜顔は更に叶はざりけり、さて一同下座に伏して、御城明渡の義、臣等一同恐懼仕り朝廷の御主旨承りしに、三日間にても御立退遊ばされなば、それにて御旨意に叶ひ申すべし、あはれ僅かばかりの間なり、まげて御承知の儀願ひ奉る、と恐る〳〵述べ畢りしが、當時世上の事に少なからず心を傾けられつゝありし天性怜悧の院として、いかで其の間の消息を推し玉はぬ事のあるべき、去るを何の仰せもなく、即時に御承諾遊ばされ、只だ三日が間の立退とよ、手廻りの器具のみにて事は足れり、暫しの不自由を忍ばずてや、と更に頓着なき御有樣なれば、お附の者も着換の衣類化粧道具を用意せしのみにて一橋へ移らせられしが、最初に凛として明渡しを拒絶せられ、次に簾中より臣下の言を聽き、三日間の立退と聞かれて、何の造作もなく立退かれし院の胸中まことに尋常婦人の企て得べき所にあらず、御心遣ひの程は知るものこそ知らめ、現に和宮の如き、流石に名殘を惜み玉ひて、天璋院よりは遙かに後れ十一日の午時頃漸くにして御立退ありしといふにあらずや。

翌十二日より江戸城は全く官軍の手に占められ、廿二日には徳川家臣の輩自今官位の儀差止らるゝ旨達

せられて、同時に天璋院は從三位を褫はれ、お附の役も是までに比べては、數にも足らず、淋しき佗の住居に、世の墓なさを嘆ち玉ふ折も少なからず況して不自由の事ども更に多かりつれども、明暮れ溫恭院殿(家定)の御菩提を弔はせ玉ふのみ、去れば御生家島津家にては、其の不如意の程を察し、協議の上御手當として一ヶ年三萬圓宛進らせたきよし、使を以て仰せ越せしも、院は固く辭して受け玉はず、身德川家に在るからは、此上如何に不自由を重ぬるとも、更に厭ふ所にあらず、當家の賄にて事足れりとて使を歸し、其の後西郷吉之助(隆盛)態々一橋に推參して、拜謁の上、切にお手當金お受けありたき旨を請ひしも、嚴として聞屆け給はねまゝ沙汰止みとなりしとぞ、程經て院は築地なる一橋家の下邸に移り、豫て城內二丸に預け置かれし道具など取寄せられ、御不用の品々はお附の者へ賜り、或はお拂ひ下げと相成り、爰に明し暮し玉ふこと幾年なりけむ、後千駄ヶ谷なる德川家の別邸に入らせられ、遷り變り行く世の有樣には、耳もかし玉はで、只管後世をのみ願ひて、諷誦讀經の外は他念もましまさず、斯く行のいみじきのみか、下々を憐み玉ふことも深かりければ、仕へ參らする者も御恩に感じて、主從といはんよりは、寧ろ母子の如く思ひ參らすが多かりしと傳へしに、明治十六年十一月十七日お湯を參りし節お湯殿にて躓かせられ、俄かに劇しき中風症となり、種々手を盡されし療養も其の甲斐なく、廿日の午前八時といふに、まだ御老衰と申す御齡にもましまさぬ四十九年を一期として失せさせらる。

院の履歴は斯くも悲慘を極めしが、生前特旨を以て從三位に復せられ、葬儀に際しては、勅使として東園侍從及び皇太后、皇后兩陛下よりも、女官を差遣はされ、式は幕府の古例によりて、十二月五日盛大に營まれ、溫恭院殿の御靈屋內に執行はせられしが誠に稀有の御葬送なりしと、誰人も申し合りとなむ傳へいふ、當時御道筋に充滿したる拜送者中、麻上下肩衣を着けし人もあり、角隱しせし媼の珠數爪ぐ

りて、落涙せしも見受けしと、又たいふ、從來院に仕へたる女中は、御逝去の悲しみに、かねて七々のお日柄も經たば、御暇にも成べきかと嘆きあへりしに、當主家達君は之を不愍とや思しけん、女ども一同は三年間此迄通り召使ふべし、尤も銘々の都合により暇申出るものは、勝手たるべしとありしかば、一同の喜び大方ならず、殊に上臈達は感涙に咽び、心永く御菩提を吊ひ參らせんことの嬉しさよとて、皆其忝なきを謝し奉りしと、亦以て院の德の如何に勝れておはせしかを偲ぶに足らむ。

尊王の鉅族を父とし、幕府將軍を以て夫となし、覇權と王政との過渡時代に身を置きたる天璋院の苦節は、そも如何なりしぞ、其の心事の慘憺たること、其の境遇の困難なりしことは、何人も推察するに餘あらん。

附言　本誌卷首に挿入したる院の眞筆『いくちとせ』の詠歌は將軍家へ御入輿の際鹿兒島藩士三木原氏へ賜はりしものなり。

○獨逸兒童樹栽事業の起源

兒童の樹栽事業に就て殖產上敎育上有益なるとは已に認められ我が文部省にては益々奬勵しつゝあり此の事業の有益なるは田園生活の學齢兒童に限らず都市生活の人民に向つても必要なる事業なり今日庭園市として世界に嘖々たる獨逸エルフルト市は此の事業を起したる率先者なり千八百九十二年五月十七日園藝會の大會に當り決議して曰く爾來鉢に培養したる植物を無代價にて學校に分配し學校と家庭の秩序あり組織ある園藝術を紹介す可しと市司園藝會及びエルフルトの園藝師たる男女敎師の熱心は遂に此の決議を實行するの運に至らしめ千八百九十二年六月第一の試驗として第二市民學校及び國民學校の上級の女生徒に千五百本の鉢植を分配し十月の初め第一展覽會に出だされたるもの全植物九割にして其の內賞を得たる者百三十二人なり之よりして一般の流行となり千八百九十三年には三千四十二の鉢植を男女生徒に分配し千八百九十九年には三千四百六十九の植物中千六百七十四は女生徒に千七百九十五は男生徒に分てり其年の展覽會に集まりしもの女生徒の部百分の十六男生徒の部百分の七十九とす其內賞を得し者女生徒百九十人男生徒百七十三人なりといふ



漢文講義

近世叢語拔萃

阿井笛村

湯淺常山、母瀧氏、性行端愨、好讀書、常山之少也、語之曰、昔者永延天皇、雪後望山、誦曰、香爐峯雪、侍女清原氏、起而卷御簾、不亦慧乎、當時婦女尚爾、況丈夫乎、今苟爲士、而椎魯不文、可耻之甚、汝勉哉

本文の湯淺常山と云へる人は其の昔備前岡山の領主池田侯に仕へたる有名なる儒者であります此の先生の母瀧氏（其傳は下に記載す）性行端愨＝其の性質と行ひが餘程正しくありまして（端も愨も共にただしと訓ず猶ほ方正といふが如し）好んで書物を讀みました其の子の常山先生が少也＝小さい時に之に向て申し聞かせましたには昔者永延天皇＝昔者永延天皇が（永延は一條天皇の御代の年號にて永延天皇とは即ち一條天皇の御事なり）雪の降り積りたる後に誦曰香爐峯雪＝御口ずさみに香爐峯の雪と仰せられたれば侍女清原氏＝御腰元の清原氏（清原の元輔と云へる人の女にて清少納言と呼ばれ百人一首抔にも出で、紫式部と共に名高き才女子なり）が起而卷二御簾一＝起ちて御簾を卷き上げたと云ふことがある不二亦慧一乎＝何とす

ばしてきとではない乎（支那の唐の代に白居易字は樂天と呼ばれたる詩人あり其の白樂天の詩に香爐峯雪揚簾看と云ふ句がある今天皇が雪の朝たに對ひの山を御簾越しに御覽じて座ろに白樂天の詩句を思召し出させ給ひ香爐峯の雪と宣ひたるを御傍に侍りたる淸少納言は忽ちに御意を喩り起ちて御簾を卷き揚げたるなり）當時は婦女ですらも斯の通りに學問を胸に蓄へてかゝる美でたき行ひを爲したるに況してや丈夫ではない乎今苟りそめにも士と爲りて居りながら椎魯不文＝愚鈍にして何も知らず無學文盲のまゝで居るのは誠に恥づべきの甚しきであるから汝も勉めて學問をせねばならぬと斯樣に謂つて其の子をば勵ましました。

これより瀧氏の傳に移りて講述します。

瀧氏、名瑠璃、備前人、祖如次、父陳良、皆仕國侯、任吏事、瑠璃生、而父有江都之役、以妻拏行、居數歳、歸乎備前、瑠璃時八歳、所歷山川、頗能識之、年二十八、適湯淺英、敬事之如事君、英亦待之如賓、及英爲目附、數如江都、瑠璃居守其室、門內之事、大小皆有法度、英老免、後寢疾、瑠璃衣不解帶、扶持抑搔、唯其所欲、莫不盡心、凡六年如一日、英死、而瑠璃亦老矣、子元禎未室、瑠璃視事如故、性行端愨、居處未嘗有惰容、日夜執婦功、不敢荒寧、暇則讀女史、誦和歌、或時鼓箏以自娛、不聽淫樂、不詣佛寺、不近僧尼巫祝、惡奢華、好施予、聞人之窮、則無親疏恤之、其弟出繼中村氏者、家貧、妻死而二子少、瑠璃愍焉、取而養之、皆至成立、元禎有所從遊、瑠璃審問其益損、而定其可否、有客至、則留之、爲設酒饌、唯恐失驩、未嘗厭倦、雖愛元禎、未嘗以姑息、及其有過、則不

少假貸、性好圖書、病中猶置貝原益軒岐岨紀行於床上、以其少所經也、寛保元年年七十二歿、

瀧氏は名を瑠璃と申て備前の國に生れた人であります其祖父の瀧如次其の父の瀧陳良と申た人は皆備前の國の領主池田侯に仕へまして任吏事何役かを勤めて居りました瑠璃生而父有江都之役以妻挈行瑠璃が生れた後間もなく父の陳良と申人が江戸詰の役廻りと爲りまして妻や子供即ち家族を殘らず以て行きました居數歳歸平備前其の後江戸に居ることが五六年餘りでありまして再び備前の國に歸りましたが此時は瑠璃は年が八歳の幼女でありましたけれども所歷山川頗能識之通り過ぎて來た所の山に川に地理の模様を頗る能く記臆へて居りました。

年二十八歳の時に湯淺英と申人の妻と爲りて適きましたが敬事之如事君其の夫に敬ひ事ふることが君に事ふる様に物事丁寧でありますそれ故に夫の英も亦待之如賓妻の瑠璃を待遇ことが賓客に對する様に丁寧でありました及英爲目附數如江都夫英がお目附と云ふ役に爲りましてから度々江都に如くとがありましたが瑠璃居守其室門内之事大小皆有法度其度毎に瑠璃は留守を致して勝手に餘所に出掛ける様な事は致しません家の門内の事は大事も小事も皆夫々にチャント法度が附けてあります英老免後寢疾夫英が追々老年に及び御役御免となりまして其の後疾に罹りて床附と爲りましたそれより瑠璃は衣不解帶着ものの帶を解て休むこととてはありませぬ扶持抑搔唯其所欲扶持は寢起きの時に手を助けて病人の骨を折らぬ様に爲し抑搔は撫でさすり又は癢き所を搔きたりすることにて夫が唯病人の思の儘になりまして心を盡さぬ所はありませぬこれが短かひ月日ならば左まで珍しくもありませぬが凡六年と云ふ長き歲月の間只一日の如く少しも變りなく續けました。

英死而瑠璃亦老矣＝其の後英は終に歿くなりまして瑠璃も亦隠居の身分となりましたが元禎未レ室瑠璃視レ事如レ故＝其子元禎（即常山先生の實名）が未だ妻を迎へませぬ故に瑠璃の家事の世話をすることは矢張り元の通りでありました性行端愨居處未二嘗惰容一＝隠居の身分となりましても性行端愨（前に記す）行がたゞしく嘗しの間も容をくずして不行作なことをしたことはありませぬ日夜執二婦功一＝日となく夜となく婦の功を執り行ひて不二敢荒寧一＝決して荒寧にする樣なことを致しませぬ暇則讀二女史一誦二和歌一＝暇のあるときには昔しよりの女の行を書き記したる書物を讀みたり又は和歌を誦みなどし或時鼓レ箏以自娯＝或は又時として箏を鼓きて自ら娯みます不レ聽二淫樂一不レ詣二佛寺一不レ近二僧尼巫覡一＝淫樂とは三絃大鼓などにて淨瑠璃都々逸の如き野卑なる文句を歌ふ音曲のことにて是等のものをば決して聽かず又自身に一と見識を備へて居ります故尋常の老女などが爲す如く佛寺へ詣でるともしなければ僧尼や巫覡の類の荒誕不稽とて取り止めもなきたは言を吐き世の愚夫愚婦を迷はす樣なる者をば近けませぬ惡二奢華一好二施予一＝奢華を惡み施予（予の字はあたふと訓ず）を好みまして聞二人之窮一則無二親疏一恤レ之＝人が窮りて居るとを聞けば親しき人でも疏き人でも之を恤んでやります其弟出繼二中村氏一者家貧妻死而三子少、瑠璃愍焉取而養レ之皆至二成立一＝瑠璃の弟の其の家を出でゝ中村家を繼ぎたる人が其家が貧乏で妻が歿くなりて三人の子供が皆幼少で有つたのをば瑠璃が愍れに思ひまして自分の家に引き取りて之を養育してやりましたが三人共に皆成人して夫々一人立の身分となりました。

元禎有レ所二從遊一瑠璃審二問其益損一而定二其可否一＝其子元禎が從ひ遊で交際する所の朋友がありますと瑠璃が審しく其の朋友は益になる人か損になる人かを尋ね問ひまして其の可し否しを定めます

(朋友に益友と損友とあり智識德行己れに優りたるは益友にて其の己れに如かざるものは損友なり)有レ客則必留レ之而爲設二酒饌一唯恐レ失レ驩未二嘗厭倦一＝客の來ることがあれば必ず之を引留めて態々酒や饌を設けて色々に持てなし唯々其のお客の驩びを失んことを恐るゝばかりにて未だ一度にても厭ひ倦む樣のことはありません雖レ愛二元禎一未三嘗以二姑息一及二其有一レ過則不二少假貸一＝其子元禎を育てるにも愛するとは愛するけれどもかりそめにも姑息なる愛し方を致しません(姑はしばらく息はやすむにて後と先きの考へなく一時の氣休めにすることなり)夫れ故若し過ちがあるに及びましては少しにても容赦しませなんだ。

性好二圖書一病中猶置二貝原益軒岐岨紀行於床上一以二其少時所一レ經也＝瑠璃は生れ付て圖書好きでありました故死に前の病中にも矢張り貝原益軒先生の著されたる岐岨紀行と云ふ本をば床の上に置きて讀んで居りました岐岨は木蘇にて木蘇海道の道中記であります然るに自己は八歳の幼年の折から父母に伴はれて江戸より歸りがけに經り過ぎた處なれば昔懷かしく此の本を讀んで居たものと思はれます其後寛保の元年に年七十二歳にて瑠璃は歿くなりました。

江都二城留守、小出大助妻淺羽氏、敎レ子尤有レ方、稍長課業或荒、輙亟督レ之、猶不レ可、則自責二其身一曰、嫗何物邪、生二遊惰兒一、涙數行下、諸子皆感悟、不二復懈一、其學二射騎刀槊一、方二冬月一、毎晨趨二演場一、淺羽氏必起自吹レ火、煮レ饘食レ之、未三嘗委二勞於傔媵一、其勤勉誠切如レ此、以レ是諸子皆爲二良士一、

江都二城留守＝江戸の西丸御留守居(江戸城には本丸と西丸とありて本丸は將軍家の座所西丸は世子の座所たり世子なきときは西丸に留守居を置く)を勤めて居りましたる小出大助と申た人の妻君淺羽氏は敎レ子尤有レ方＝其の子供を育てるに尤



も宜しき仕方を致しました其子が稍々成長して課業或荒＝稽古事を致すのに或は抛りなことをすることがありますと輒亟督レ之＝いく度も之を督てます、そをして猶不レ可則自責二其身一曰嫗何物邪生二遊惰兒一涙數行下＝矢張り不可ときには自分で自分の身を責めて曰すに嫗（嫗は母と云ふことにて其子に對して自ら此の母と云ふなり）は何物なれば（何たる因果でと云ふの意）斯様な遊惰兒を生だのであらふかと涙を數行下してまをしました諸子皆感悟不二復懈一＝それで子供等が皆感じ悟りまして復たび稽古事を懈らぬ様になりました其學二騎一射一刀一槊一＝其子供だちが騎や射や刀や槊を學ぶ爲に方二冬月一毎晨趨二演場一＝冬の寒天に毎晨夜の明るか明けぬ内から演場に趨ますのに母淺羽氏は必起自吹レ火煮レ饘食レ之＝かならず起き出て自分手に火を焚き附け饘を煮て之を食べさせます未三嘗委二勞於僕媵一＝たゞの一度でも其の勞を召し仕の僕媵に委せた事はありませぬ其勤勉誠功如レ此以レ是諸子皆爲二良士一＝母親たる淺羽氏が立派なる身分にて召し仕の男女も澤山あるに拘らず己れ自ら勤め勉めて誠を盡し親切に子供を勵ましたことが此くの通りでありましたる故に其の子供達が成人して皆な良士となりました。

英文雜錄

慶應義塾大學講師
宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamori.

I. Letters.

ORDERING BOOKS.

Tokyo, April 10th, 1899.

To Messrs. George Routledge & Sons,
London.

Gentlemen :—

If you have "Dialogues of Plato," an English translation of "the Shi King" by Confucius, and "William Tell" by Schiller, will you please forward me one copy of each at your earliest convenience. I will remit the price and postage on the arrival of the books.

Yours very truly
A. Miyamori.

55 Sangenyacho, Azabu,
Tokyo, Japan.

書籍を注文する文

拜啓プレトー對話錄、孔子著詩經の英譯及びシルレル著ウィリアム、テル貴店に有之候はゞ各壹部宛至急御送附被成下度願上候代價及郵税は書籍到着之上御送金可申上候

千八百九十九年四月十日　宮森麻太郎拜

倫敦

ジョージルートレッジアンドサンス商社御中

ANSWER TO THE ABOVE.

7 Broadway, Ludgate Hill,
London, E. C., May 12, 1899.

A. Miyamori, Esq.
Dear Sir,

In reply to your esteemed favor, we regret to say that "Dialogues of Plato" is reprinting. "The Shi King" and "William Tell" are not published by us now, but by Messrs. Harmsworth Bros., Tudor Street, E. C., in Sir John Lubbock's 100 Best Books, which they supply in sets only.

Thanking you, we are,
Yours faithfully,
George Routledge & Sons, Limited.

同上返事

拜復書籍御注文被下難有存候得共生憎プレトー對話錄は目下再版中に御座候詩經及ウィリアムテルは當今弊社にて出版不仕倫敦東區チユードル街ハームスウォース兄弟商社にて出版致居候但し同書はラボツク撰百種叢書の一にして同社は百種纏めてのみ販賣致候此段御返事申上候

早々頓首

ジョージルートレッジ社

年月日

宮森殿

ASKING TO ENGAGE ONE AS TEACHER.

Tokyo, Oct. 24,'01.

Secretary Keio Gijuku,
Shiba, Tokyo.

Dear Sir,

Please allow me to ask if you are in need of a teacher of English in your school.

I am open to engagement. Am 37 years of age, am a college graduate and have taught Englsh for nine years.

If you wish I will call on you.

Respectfully yours,
W. D. Cunningham.

130 Hara Machi,
Koishikawa.

敎師として雇はれんことを乞ふ文

拜啓貴校に英語敎師の必要無御座候哉伺度候小生は年齡三十七歲にて大學卒業生に有之九ヶ年間英語敎授致候者なるが御聘用希望仕候御都合にては貴下を御訪問可申上候

早々頓首

カニンガム拜

年月日

慶應義塾書記殿

ANSWER TO THE ABOVE.

Mita, Shiba, Tokyo, Oct. 25'01.

W. D. Cunningham, Esq.

Dear Sir :—

As we are now looking for a teacher of English, President Kamada wishes to speak with you concerning the terms etc. Will you please come and see him at the school office to-morrow morning between 8 and 10 o'clock.

Yours very truly,
S. Akaba.

Secretary of the
Keio Gijuku.

同上返事

拜復當塾にては目下英語敎師相求め居候につき鎌田塾長は報酬等に就き御面談致度候間明朝八時より十時の間に於て當塾事務所まで御出頭被成下度願上候

慶應義塾書記
赤羽俊良拜

年月日
カニンガム殿

II. **Pleasantries.**

THE ART OF WAR.

" And if one is unable to keep the enemy from crossing the river?" asked the pupil.

" In that case," replied the master of strategy, " the press censor should allow rumours to circulate that you are trying to lure him across."

軍略

弟子問ふて曰く「もし敵軍の渡河するを妨ぐること能はざる時は如何にしてよろしきや」
兵法先生答へて曰く「其の時は味方は敵軍を誘ひて渡河せしめんと欲する計略なりとの風評を新聞紙に載せしむべし」

EASY.

" And to think," said the Czar, sadly, " of the debt we are piling up!"

" Don't worry about that, Your Majesty," said the Minister of Finance. " We have only to increase the traiff and make the foreigner pay the tax."

易々たるのみ

露帝愁然として云へり「戰爭の爲めに國債大に嵩めることを考ふる時は……………」
大藏大臣曰く「陛下請ふ憂ふること勿れ此に處するの法は易々たり唯だ關税を增し外人をして之を負擔せしむるにあるのみ」

THE SMACK IN SCHOOL.

Teacher.—Tommy, you should not smack your lips.
Tommy.—Well, I'm too young to go around smacking other people's lips!

學校にて唇鳴し

敎師——富吉さんあなたはあなたの唇を鳴らしてはいけません
富吉——でも私は小供ですから皆さんの唇まで鳴らして廻ることは出來ません

HER CURIOSTY.

" Mrs. Chellus looks bad, doesn't she?"

"Yes, and no wonder. She's been awake every night for a week past."

"The idea! What was the matter?"

"She discovered about a week ago that her husband talks in his sleep, and of course she had to listen."

彼女の好奇心

「白須の奥さんは顔色が惡いぢやありませんか」

「惡いのも不思議でないです。あの方は此一週間毎夜眠らないのですもの」

「へーイ其れはまーどうしたのですか」

「かう云ふわけです。一週間ほど前あの方は良人が寢言を言ふことを見附けました而して毎夜眠らないで其寢言を聽いたのです」

STRICTLY BUSINESS.

Old Jones.—Did n't you see the sign, "No admittance except on business?"

Young Nervie.—Y-yes, Sir;—but I c-called to ask you for your daughter's hand, yon know!

本當に要務です

老紳士城氏「君は『要務ノ外入ルベカラズ』と書いてある掲示を見ませんでしたか」

若紳士那珂氏「はい見ましたしかし私が今日伺いましたのは令孃貰受の御相談に參いたのですから要務じやありませんか」

NO LONGER FRIENDS.

Tom.—No, I never see Jack any more. We're no longer friends.

Dick.—Indeed? Does he owe you money or do you owe it to him?

最早友人でない

富太郎「否私は此頃は一切宅君の所へ參りません。最早私はあの人と友達ではない」

德一「さうですか。ではあの人に君は金を貸して居ますか但しは君が借りて居るのか」

ALL HAVE TROUBLES.

"Everybody worries about money."

"Oh, I don't know; some men are so rich——"

"That's just it. Poor men worry because they can't get money, and the rich man worries for fear that it will get away from him."

誰でも心配はある

甲「誰でも錢に付ては心配します」

乙「否私は左樣思はない。大層富有な人は………」

甲「サーそこです。貧乏人は錢が無いが爲めに心配

し富有な人は錢が無くなることを氣遣ふて心配します」

THE ABSENT-MINDED MAN.

" Poor old Professor Dremer went home the other night and he knew there was something he wanted to do, but he could'nt think what it was."

" And did n't he remember it at all ? "

" Oh ! yes, after thinking about two hours he realized that he had wanted to go to bed early."

ボンヤリした人

「老教授盆槍氏は先夜歸宅の時何か爲したき事わッたことに氣附きたれども其何事なりしやを思ひ出すことが出來ませんでした」

「而していつまでも思出すことが出來ないでしたか」

「否思出しました凡そ二時間も考へた後で其用事とは早く床に就く事でわッたのです」

III. Proverbs and Maxims.

Beauty is like the flowers of spring ; virtue is like the stars of heaven.

容貌の美は春の花の如く德は天上の星に似たり

A friend can not be known in prosperity ; and an enemy can not be hidden in adversity.

富貴に居ては眞の友人を知ること能はず貧困なる時は仇敵は隱るゝこと能はず

It is not what we earn, but what we save, that makes us rich. It is not what we read, but what we remember, that makes us learned.

人をして富有ならしむるものは其の得る所の錢にわらずして其の貯ふる所の錢なり。人をして博學ならしむるものは其の讀書するが爲めにわらず其記憶するが爲めなり。

The evil that men do lives after them ;

The good is oft interred with their bones.

人の爲す惡事は死後に傳はり

善事は其の遺骨と共に葬らる

A man cannot leave his wisdom and his experience to his heirs.

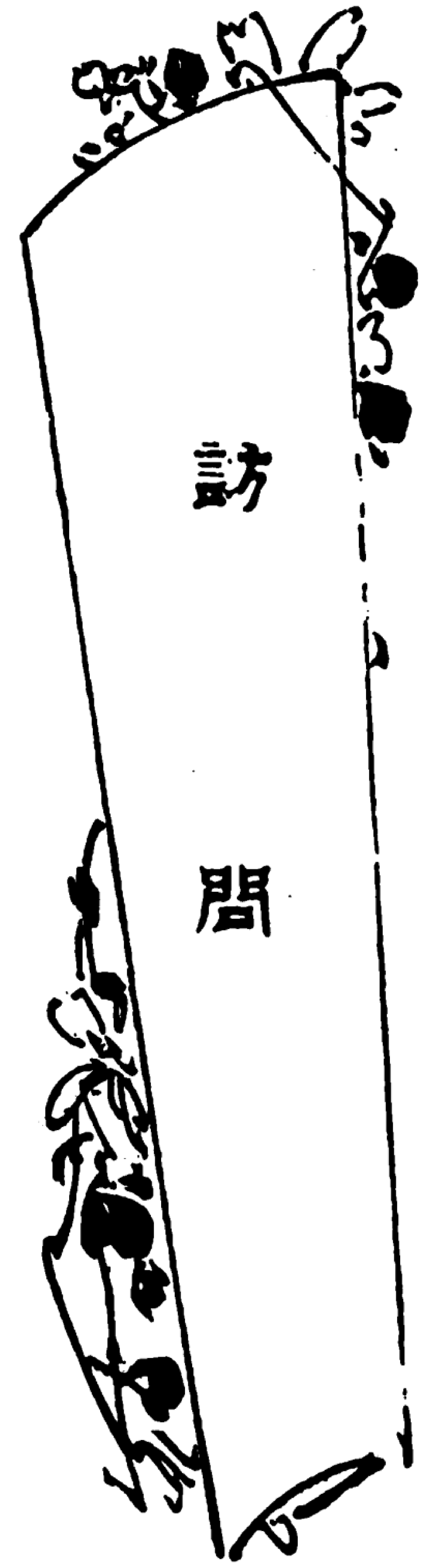
人は其智慧と經驗とを子孫に傳ふること能はず

A man of words and not of deeds is like a garden full of weeds.

能く言ふも行はざる人は雜草の茂生せる花園の如し

Every man is the architect of his own fortune.

人は各己れの運命の建築者なり



淺田陸軍中將夫人を訪ふ

一記者

第一軍黑木大將の麾下にありて、長谷川近衞師團長と共に鴨綠江の役に於て、大に敵を破り、更に長驅して遼陽なる敵の大軍の背後に出で〻、その退路を斷ち、過る八月下旬より連日に亘る振古未曾有の大戰に參加して、彼のクロパトキンの統率する敵の大軍を打ち破つた同第一旅團長淺田中將(當時少將)君の夫人を牛込區市ケ谷仲ノ町の邸に訪ねましたのは八月の廿二日で遼陽の大戰の前でありました。

市ケ谷合羽坂を廻りて、幼年學校の箱馬場を左手に見て、ぐるりと其を押し廻て仲の町に至り、何所であらうと、車上から、一々表札を覗きつ〻行きますると、向から赤帽の近衞の一等卒が來ましたので彼の人ならばと思ひまして、「もし、ちと物をお尋ね申します、何所か此邊に淺田少將のお邸はございませんか」と云ふや、否や、「はあ、淺田閣下ですか、」それはと、右手を伸して顧返つて、指しながら「此右側で、三十メートル否、一町ほど行かれますると、大きな門があつて、表札も出て居りますから……」と、丁寧に敎へて呉れましたので、其言に從うて一町ほど車を驅けさしめて、右手を見るに、嚴しき檜の門に「淺田」とのみ記したる表札が出て居りま

すので、車を下りて門より七八間ばかり進み入り、玄關に取次を乞ひますると、年頃三十前後の召使の下婢出て來ましたので、私は形式の如くに名刺を出して、夫人に面會を願ひましたところ、直ちに『さあ、此方へ』とのことで、請ぜらるゝまゝ玄關へ上りまするに、右手壁には大勒小勒、さては洗轡、ちうゝげん繩など雜然として懸けてあり、その下には洋鞍が二三口並べてあり、その他鞭や棒の如きものが所狭きまでに並んでありました。やがて、それより左手の十疊の

▲應接室

に打ち通りまするに、此所も玄關と同じく綺麗なる緞通を敷きつめてありまして、中央には圓形の卓子を据ゑ、其周圍には花車な椅子が五六脚。私は、先その一脚に腰を卸して、さて正面の床の間を見まするに、墨繪の古めかしき趣味ある老松の幅が掛けてあつて、その前の方には大鷲の剝製したのを飾つてありました。その他、軍人の寫眞額や、牡丹の扁額などが、掲げてありました。

さて、下婢が莨盆、茶を運んで、やゝ有つてから、後の方の襖の蔭から徐に出て來られましたのは、即

▲中將夫人

で、年頃は三十七八と覺しき、眉目美しき丸髷の婦人、お召の鼠色の單衣に白縮の半襟、茶が勝た單の夏帶を召されてゐましたが、それに又指環の光、パチン留の光、金簪の光、それに人品の光も添はつてゐて何となく立派な扮裝でございましたから、私は一禮するや否や直に『何所かへお出掛ではございませんか』と問ひまするると『いゝえ、只今歸つたばかりの所ですから……』とのことで、さて私は、今度の戰爭に就いて中將殿のお見舞を述べ次に我軍の連勝を共に喜びまするると、夫人は『ハイ、今度の戰爭は大變な戰爭でございますから、海軍の方も、陸軍の方も皆樣非常なお骨折でございませう、しかし、何うかして早く最終の勝利を見たいものです。……大分旅順の方でも死傷が多いやうですが、早く陥ち

れば宜いと思つてゐますが、なか〳〵堅固とした防禦だそうですね、また、遼陽の方でも既う戰爭が始まつてゐるさうですが、良人なんかも嘸々喜んで戰つてゐることでせう、……しかし、第一軍の方の行軍には大變に骨が折れると申して寄越しましたが、その疲れた揚句に敵の待つてる方にぶつかるのですから、攻る方ではなか〳〵お大抵ではございませんでせう、……まあ、陸軍もとん〳〵拍子ですが、海軍も始めから上手に戰はれ、また上村さんの方でも本當に甘くやられまして、私、彼の時の號外を見ましたら、それこそ、いゝ、ぐつと溜飲が下つたやうな心持になつて、本當に良い氣味と思ひました……。』と、冴え〳〵した語調で話されました。そこで

▲中將の略歷

に就いて伺ひまするに、君は舊川越の藩士で、西南の戰役の比は中尉で出陣せられました。次に二十七八年の時には、丁度歩兵大佐で第七師團の參謀長でありましたから、別に出陣なされなかつたさうですで西南以來一度も出戰の機に遇はれないので、轉た骨鳴り肉動くの歎に堪へなかつたが、今度は、愈々眞先に出征すべき命を受けられましたので、飛び立つばかりに喜んで其途に就かれたといふことです。

▲中將の嗜好

に就いてお尋ねすると夫人は、『ハイ、別にこれと云ふほどのことはございませんが、乘馬は嗜きで、天氣が宜くつて、閑暇がありますければ、必らず略服で遠乘に出かけます、また大弓も嗜きで時々引きます。……そして、一體に身體が健康と云ふ方でございませんから、體育を重んじまして、謠曲もやりますし、また毎朝早く起きて冷水摩擦をやつて居ります……そして、今度出征ますときにも、俺の身體は普通にし養生しなかつたなら、屹度死んで居るかも知らんが、いろ〳〵と工夫して居たから今まで持ち堪へて、今度の戰爭の間に遇ふやうになつた、なんかと云つて喜んで居りました……』などと。

▲その家族

中將(五二)と夫人幾子(四二)との間に、長男良逸(二五)長女幸子(二七)次女稔子(一八)との三人ありますが、長男良逸君は歩兵の中尉で、近衛の第二旅團の副官で、長矢張遼陽の方に向はれてゐられます。そして長女幸子の君は既に歩兵少佐中島正武といふ人に嫁して、一男二女を擧げられてゐますが、此中島少佐も既に征露の軍に從うて滿洲の野にあるといふことですが一門凡て軍人となつて、君國の爲に盡さるゝことは實に以つて光榮とすべきであります。因に曰ふ、次女稔子の君は、麹町區の中六番町なる成女學校へ通はれてゐらるゝとのこと。

▲討てや懲らせや

私は、夫人の飽かざるお話に氣を取られて居りましたが、大分長居したと思ひまして、急躁しく暇を乞ふと、夫人も自ら玄關まで送られて、召使の下婢をして車夫を呼ばしめられました。

門を出ると、年頃十二三歳の少年が五六人隊を組んで、旭日旗をひら〳〵させて、一齊に討てや懲らせや露西國を…………

莊司海軍中佐夫人を訪ふ

一記者

日露戰爭の劈頭第一に方りまして、敵艦ワリヤーグ、コレーツの二隻を仁川港外に於て物の美事に擊ち沈められた彼の瓜生中將(その比少將)の聯合艦隊第四戰隊に加り、初陣の功名もその艦名に相應しき新高艦長海軍中佐莊司義基君の夫人操子殿をその留守邸なる芝區三田綱町一番地に訪ねましたのは、過ぐる八月三十日で、上村中將よりの歸途でありました。

檜の未だ新しい門に「莊司義基」との瀨戶札が掲げられてありますので、此處ぞと思つて正門に向ひましたに、ぴつたりと鎖一枚も入るべき間隙もありませんので、右手の潛戶を押し開きて、すつと門內に入り、敷石を傳うて左手へ鍵の手に押し廻り、玄

闕の格子戸を明けて取り次を乞ひますと、ハイと答へて、出て來ましたのは、年比は十七八の、召使の婢丁寧に挨拶して御用向はとわ尋ねられましたで、私は先づ刺を通じて、これ〳〵と來意を述べて、夫人に御面會をおねがひ致しました。

やがて、また此婢出で來まして『サアどうぞ、此方へお上んなすつて下さいまし』と、立膝となつて左手の襖を徐に開けて、請せられましたから、私は遠慮なくつか〳〵と其處へ打ち通り、薦めらるゝまま、麻の夏蒲團に座りました。そして、見るともなしに、その

▲座敷の有樣

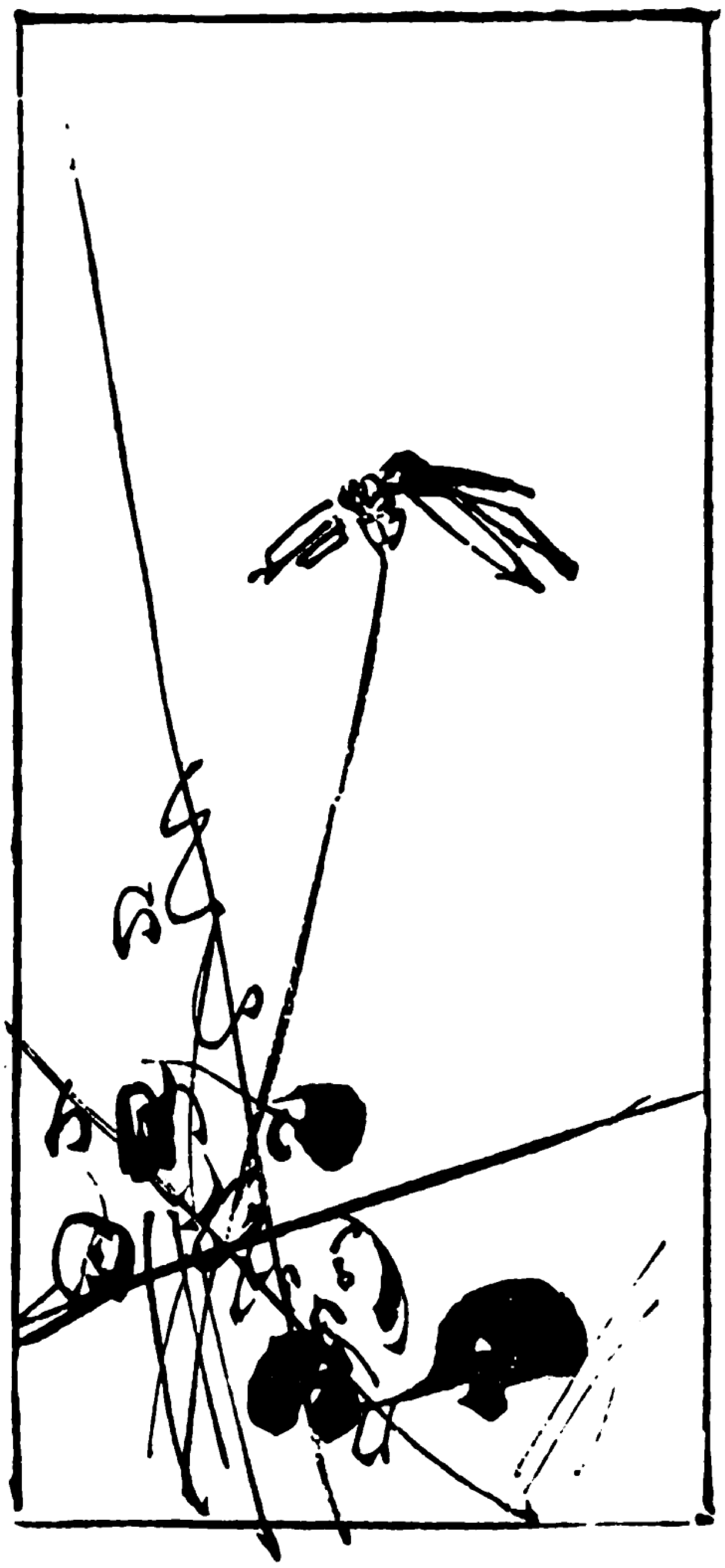
を、見まするに、正面の床には、狩野流の雅なる山水の幅、その前には緑滴るばかりの姫松の一鉢、又その横には、金線の寫眞帖が幾冊となく堆高く積み重ねてあり、また仰げば、楣間には山水の額や、軍艦の寫眞額や、海軍々人の寫眞額などが掲げられてでございます。

やがて、先の下婢が火入、珈琲など運ぶかと思ふと、間の襖の左手の隅の方を徐に押し開き、悠然として出て來られましたのは、即ち

▲中佐夫人

で、年頃は三十七八の、面長な、頭髮を洋風に束ねた、人柄賤からぬ婦人、私は、即ち蒲團を滑べるやうに、退いて、先づ初對面の挨拶を致しまするると、『まあ、どうぞ、そのまゝで被居つて下さい、まあ、どうぞ……。』と、優しげなる右手の甲を疊に擦り付けて薦めながら、自分も横におつた蒲團を手早く引き寄せ、『私もお相伴いたしますから……。』と、云はれて蒲團の上へ徐に座られましたので、私も、また元のやうに座りまして、さて、今度は御主人樣には御大層なお骨折と、先づ中佐のことを持ち出しますると、『いえ、何に、良人なんかは、別にお役にも立ちませんで……しかし、今度は皆樣非常なお骨折でございます。……初めから、ずつと海軍も陸軍も勝ち通しで實に結構なことでございます、まあ海軍も

お骨が折れませうけど、陸軍のお方は、何でございますな、一層お骨が折れてゐるやうでございますな、新聞で見まするに、旅順の方のお方などは、隨分死傷なすつたさうですね、また、遼陽でも、大戰がありますさうですが、これも亦大變なことでございませう……」と、云はれましてちよつと柳眉を顰められて「……ですがまあ、これも皆お國の爲で、軍人の義務でございますから、別に彼是と愚痴を云ふ方もございませんが下級の方の兵卒さんなんかには、却つてお氣の毒なのもあるやうで、時々新聞に、「憐れなる軍人の遺族」とか、いろ〳〵其樣やうな題目の下に、可哀さうな



家族の記事を書いてありますが、本當に可哀さうで思はず知らず涙が出るのでございますよ、上級の士官以上の方は、そんなに哀れな方も少なうございませうけど、私は下々の方の戰死なすつた後の事を思ふと、可哀さうで堪りませんのに……」と、夫人は、はき〳〵とした語調で、お話なさいましたが、何か早や感に打たれられたかのやうで、双の眼はいつしか濕んで居ました。さてまた、次に

▲中佐の畧歴

に、就いて伺ひましたところ「ハイ、良人でございますか、良人は越前福井の松平さんの藩の者でござ

います、ハイ、年齢ですか、今年が四十二になりまして、……ハイさいでございます。矢張海軍兵學校の出身で、たしか二十一年の頃少尉になつたかと思つてゐます、古い所は存じませんで、……ハイ、日清戰爭の時ですか、彼の時は丁度龍田艦が亞丁の方に居るのを受取りに參りまして、戰爭に出ませんでした。けれども、其時龍田を早く回航して來て、どうかして一度支那海へ浮べて戰爭の間に合はしたいと思つて、氣を揉んで居ましたが、丁度回航して廣島へ來ますると、凱旋と云ふ工合で、實に殘念がつて、いつも悔しい悔しいと、云つて居りました。しかし今度といふ今度こそは、出征の命を受けましたので、飛び立つばかりに喜ろこんで、出て參りました。ハイ、北清事件の比ですか、彼の時は、良人も既う中佐になりまして、初瀨の回航員となつて英國へ往つて居りました。ハイ、今の新高の艦長になりましたのは、去年の暮で、それまでは高雄の艦長も兼ねて勤めて居りました。ハイ、私ですか、さうです、良人と同國で……。』さて、また、つぎに、

▲中佐の平生

を伺ひまするに、『左樣です、平生と申しまして、まア宅に居ます時は、別に自分の娛樂として致すこともございませんが、唯、既う始終机に向うて何か致してゐますハイ、嗜好ですか、自轉車、寫眞、狩獵なんかも嗜きは嗜きでございませうけど、何分にも閑暇がございませんのでハイ、子供ですかこれは、至つて嗜ぎでございまして、閑暇さへありますると、子供達を連れて散步に出掛けます、お酒ですかこれは、頂かんこともございませんけど、近頃は薩張止めましたが、本當に嗜きといふのではありませんと思つてゐます。』

▲その家庭

次に私は、お子供さんは幾人被居いますかと、伺ひましたところ、夫人は、双頰に溢るゝばかりの微笑を湛えながら、『ハイ、私ですか、大變居りますよ、……オホ……』と、一際聲高に笑ひたまひて、直ち

にまた聲を低くめて、なんです、長男が健吉と申しまして、これが二十歳、次男秀二が八つ、それから長女の綾子が十六、次女に幽閑が十三、三女か幾子で十歳、その次の四女これは梅子と申しまして三つでございます、都合男二人女四人六人の子供でございますから、どうもなか〳〵騒々しいことで、始終落付いて居ることが出來ません、別けて、此度は學校が夏休業でございますから、餘り何うも賑か過ぎて困ります、オホ……これで學校が始まりますと、晝間は幾分か寂平になりますから宜うございます。……ハイ學校ですか、健吉の方は旣う中學も卒業しまして、此間兵學校の試驗を受けましたが、まア、どうか合格すれば宜いがと思つてゐます。綾子は三田四國町の東京高等女學校へ參つて居ります、それから幽閑と幾子と秀二との三人は、皆麻布小學校へ通つて居ります』

▲令孃梅ちやん

私は夫人と、種々談話てゐました時に、間の襖を少しあけて、『母樣と』顔ばかり出されましたのは、三歳ばかりの少女で、卒而一人立の出來る位、夫人は顧返つて見られて、『梅ちやん、被居い』と、兩手を其方へ向られますと、梅ちやんは林檎のやうな紅の頰に靨を見せながら、さも〳〵嬉しさうに『母樣』と、云つて、よろ〳〵と歩んで、夫人の手につかまり、そして、笑ひながら、俯向いて夫人の膝に其顔を埋められまして、少し耻しげに、ちよつと頭を擡げて、私を見られましたので、私は、『お孃ちやん〳〵』と、呼びますると、夫人は『これ梅ちやん』と、梅子孃の體をぐつと抱き上げて、此方に向せ、梅ちやん、お客さんに御辭儀を』と、云はれて、孃は、小さき双の手を揃へて疊に突いて、挨拶されましたので、私もそれを受けて、思はず微笑みながら『お孃さん、お父樣が何うなさいましたの―』と尋ねますると『お父さんは、お船！』と、廻らぬ口元の愛らしさと、實に例へやうもない位でありました。

▲令孃綾子の君

これは六月の下旬のことでございました。彼の凶暴なる浦鹽艦隊が、金州丸や、常陸丸などを襲うて撃ち沈めた後のことであります、世の愚昧にして軍事の何物たるを能く知らない人達が、唯々これを一に上村艦隊の怠慢に歸して、漫に攻擊したり、罵倒したり、するものがありましたで、同上村中將には愛孃の敏子の君とて、今年十三歲なる花のやうな少女がありまして、此綾子の君と同じく東京高等女學校に通つて居られましたが、矢張口惡き朋輩などに、時々厭ふべき事を言はれまするので、到頭學校へ登ることを止めて了はれました。綾子孃と敏子孃は同級でもありまするし、また、同町でもありまするし又いろ〳〵の關係で、此上ない親しい親しい姉妹よりも親しい間でありましたが、詰らぬことから敏子孃が學校を止されたのを甚く悔しく思つて、自分も何となく不快の念に打たれて、何時の冴え〳〵した顏もしないで、平生の通り、敏子孃と連れだちもせず、唯一人悄然と、深張の洋傘を肩にして、學校の方へ參りましたが、ある朝のこと。綾子孃が四國町の方へ急ぎますと、後の方から、

『莊司さん』と、呼ぶ人がありますので、綾子孃は、顧返つて見ますると、これは、同級の、倉田稻子さんと三村弘子さんといふ二人の口惡き友達で、呼びかけたのは倉田といふ少女でありました。『ハイ』と、綾子は小さく答へて、『お早う!』と丁寧に挨拶しますると、彼方の二人もそれを受けまして、やがて、倉田の稻子は、少し笑ひながら、思ひ出したかのやうに、

『莊司さん、綾子さん、あの上村さんは今日は何うなすつて?』

と、問ひました。

綾子孃は、面伏になりまして、

『はあ、どうなさいましたかしら。』

と、小聲に云ひますると、

『オヤ、莊司さん、知らないの。上村さんのことを可笑しいわ、』

と、稲子は笑ひかけて、獨言のやうに、
「ロタンの子なんか出ない方が宜いわね、」
と、弘子の顔を見ますと、弘子も亦、
「さうね、ロタンなんか可厭ね、」
と、云つて聲高に笑ひかけて、今度は、綾子孃に向ひ、
「莊司さん、あなたも上村さんの仲善だから、矢張ロの字だわ。」
と、云ひましたので、綾子孃は既う泣き顔になつて耳垂まで紅に染めて、默つて齒を嚙みしめて首垂れました。そして、さて心陰かに思ふやうには、はじめ倉田さんや三村さんなんかで、上村さんをロタンだロタンだロタンの子だと云つて、さんざ、苛めていじめて苛め拔いて置いて、到頭學校も止さして、そして敏子さんが出校られないことを知つてゐて、上村さんは今日何うなすつてと問ふとなんか、實に憎らしい言分、本當に彼の唇へ喰ひ付きたい位、憎々しい、悔しいことだ、と、稲子等を憎く思ふと同時に、また敏子さんのことが、いとしくて、いとしくて、ならないやうになりましたので、綾子孃は漸く口を開いて、
「倉田さん、上村さんがロタンですつてのーそんなお可哀相なことはないわ。」
と、思ひ切つて斯う云ひまするど、倉田は、なかば、取り合はぬやうに、
「ナニ、ロタンの子だから、ロタンだと云ふの、小ロタンなのよ。」
「オー、お可哀さうに。」
と、既う綾子孃は泣聲になりまするど、
「ナニ、可哀なことはないわね、ロタンですもの、貴孃は何爲上村さんを其樣に贔負なさるの？」
と、稲子が云ふ尾に跟いて、弘子は
「稲子さん、だつて、矢張、莊司さんの父樣も上村艦隊なのよ。」
「オー、さうですか、ぢや、そんなに惡く言んでなかつたつけ。」と、少し笑ふ。

綾子孃は、今は悔しさの念に堪ないかのやうで、袂を顔に押しあて、、
『ロタンでも何でも宜うござんすわ、何でも勝手なことお云ひなさい、
……覺えて被居い、倉田さん！三村さん！』
と、云ひ捨て丶綾子孃は涙を拭ひながら、其日は途中より引き返して、此事を夫人にも告げて、そして、早速上村敏子孃を訪ねて、其日は一日いろ〳〵と遊技をなさつて共に樂しく遊ばれましたと云ふことでした。

綾子孃も敏子孃と親密であるだけ、朋輩同士からいろ〳〵と蔭口を聞かれまするので、綾子孃も自然登校するのを好みませんでしたが、夫人などの說諭を受けて學校だけは休みもせず、倉田孃などが何と云はうと齒牙にかけないで、登校して其日に習つたことを早速敏子孃の所へ行つて、之を知らせて居りましたから、敏子孃の方では、登校して居ると少しも違つたことはなかつたさうです。

其後八月十四日の號外が如何なる快感を綾子の胸に運んだでありませう。上村艦隊が浦鹽艦隊と蔚山沖に戰うて、その一隻リユリックを擊沈し、他二隻ロシア、グロンボイを滅茶滅茶の目に遇はしたとのこと、まあ敏子孃の喜びは無論のことでありましたらうけれど、これがまた綾子孃に取つて如何ばかり喜ばしかつたでありませう、で、此報直に新聞號外に由て綾子孃の宅に知れますと、綾子孃は早速敏子孃の所へ馳せて行つて、敏子孃の手を堅乎と握りまして、

『ねえ、敏子さん、嬉しいね、今の號外は、私、嬉しくつて、嬉しくつて堪りませんの、──貴孃の阿父樣は、此位なことをなさることは、別に不思議ではありませんが、これまで、向が逃げて歩いて居て遇はれなかつたのですもの、遇へば屹度敵の負けるは當前ね、──敏子さん、──それに本當に倉田さんあの憎らしいわね、──私、學校が始まつて、倉田さんに遇つて、ロタン艦隊が何う

しました、と斯う云つて遣つて、この胸を晴らして遣りますわ、――ね、敏子さん、私、早く〳〵學校が始れば宜いと思ひますわ――ほんとに、憎らしい倉田さん――」

と、綾子孃は、嬉しさの餘りでありませうか、斯う長々しく心の信を露して話れましたが、眞に同情の深き、涙ある、やさしい心立ではありませんか、大方敏子孃を惡樣に云つた朋輩たちは、自ら心に耻づるところがあつて、其胸には多大の打擊を蒙ることでありませう、浦鹽艦隊のそれの如くに。

○上村艦隊の衷情

去る八月二十九日新潟縣刈羽郡荒濱村の海濱に意味有り氣なるビール瓶の漂着したるより漁夫等拾ひ上げて中を檢めたるに左の如き一篇の文字を記したる紙片ありて正しく上村艦隊乘組員が其の衷情を天下に訴へたるものなりしといふ

百萬の敵恐るゝに足らず、

況んや輕佻なる國民の聲をや、
ア、我れに涙あふれたり、
井底の痴蛙もと大海を知らず、
燕雀なんぞ大鵬の志を知らむ。」
天をうらみじ命なりとして、
輕浮の國民又うらみざらん、
彼等が心事遂に濟度すべからず。」
曾てわれを何とか罵りし、
はた我れを何とかはづかしめし、
あらゆる汚名、われ忍びぬ、
あらゆる嘲笑、むしろ我れ汝等を、
あはれみてこそ泣きにたれ。」
蔚山沖振天動地の砲聲を、
汝等聞きしか、かくてもなほ、
吾れ等の高き砲聲に、
うち勝つまでの嘲笑の、
聲つゞくるに堪ふるや。」

上村艦隊の當時の苦節は推知するに餘あるべし

演壇

新日本婦人の覺悟は女傑たるにあり

阿多廣介

社會は活動し活動は進歩の原動力であります、曩きに吾輩は戰時に於ける婦人の覺悟として、戰爭當初より數々意見を述べましたが、今我が國は如何なる狀態に在るのでありませうか、正義の爲め、東洋平和の爲めに、大に活動し、曾ては世界の最大强國を以て自ら任じ、他の國々も默々の裡に然か許して居た處の露國を敵として、現に干戈を交へつゝあるのは、國家としても、國民としても、實に容易ならぬ艱難に遭遇して居るので、幸に勇猛なる將士の働きと、忠烈なる國民の後援とに依て、戰へば必勝ち、攻むれば必取り、彼等の金城と賴んで居た遼陽も已に我が軍の占領に歸し、天險と誇つて居る旅順も今ははや囊中の鼠で、日ならず陷落の快報を見るのは申すまでもなき有樣である、既に戰局に一時期を畫し第二期に移らんとする樣になつたのは眞に慶すべく祝すべき事で、活動と共に世界に對する地位を進步さして行きつゝあるではありませぬか。然し一期を畫するは即一期を畫するので、戰の終局を意味するのでないから、頑强なる敵は尙武備を整へて奉天に邀へ哈爾賓に屯し、隙さへあれば南下せんとするは必然の事であるから、苟も是等の小成に狂喜し安堵するやうな傾があつたならば、國家の前途は實に憂ふべきもので、國民は夢寐の間も、勝つて甲の緒を締めろ

と云ふ諺を忘れてはならぬのであります。飽くまでも活動し進歩し早く敵をしてハルビン以後、否バイカル以後に迄撤退せしめ、厭はしき永き闘爭と復讎との禍根を斷たなければならぬのである、是は實に容易の事でないから、國民は此際に於て、耐久の念を以て大なる覺語を要する次第でありまして。從て女子にも大に活動進歩し其の覺語も亦多大ならんことを要するのであります。

試みに東洋地圖を開いて地物上の血脈とも申すべき鐵道布設の狀況を按じまするに、京釜鐵道京義鐵道は今や布設中で、進んでは義州より大石橋に向つて設けらるべく、遼東に於ては已に靑泥窪を根據として南は土城子より北は普蘭店を經て大石橋附近に通じ之より北は遼陽奉天に進むべく、西は營口より直隷省に連絡するのも遠からぬことであります。而して他方面に於ては、我が海陸軍は浦鹽斯德を占領して、ニコルスクより哈爾賓に至るまで、鐵道に沿ふて露軍を掃討せらるるは見易き事で、又樺太占領に次で沿海州を略取し烏蘇里鐵道の占有せらるゝのも東方策上緊要の事と信ぜられます、加之、軍はよく進退につきて萬全の策を計らなくてはなりませぬからニコルスクより更に日本海に沿ふて元山を經て京城に至るの鐵道を開通するの必用を來すは免れざる事であります。

一方には斯の如く多くの經營を控ゆると共に、他方には露軍を遠く貝加爾以北に追放して茲に對抗持久の計を策するの必要を生じ、兵家の經驗によれば少くとも敵の三軍團以上に敵すべき守備兵、即我が國に換算して七師團の兵を要し、又滿洲より朝鮮の平和を保つに於て一師團の兵を要するそうであります。而して、駐屯軍の一師團に就ては經常費一ケ年四百五十萬圓を要する故に、八師團にして實に三千六百萬圓の巨額となり、又海軍も補充をなすのみならず、今後の平和を保持するには更に改良擴張をなすの必要を生ずべく總て之等の新經營に付ては甚だ尠なからざる經費を要するのであります。

されば此等の經費は、何れより出づるかと云へば、内外國債と租税とに據らなくてはなりませぬが、畢竟するに農、工、漁、商等國民の實業を發達せしめ國民の勤勉節約を奬勵して之れを償ふより外に道はありませぬから、國民は唯に國内の計をなすのみならず大に外國貿易に着眼し、殊に韓國、滿洲、樺太並に沿海州方面の經營をなし、勇猛耐忍戰鬪員と同じき覺悟を以て各 其の業に勵み、大に手腕を振はなくてはならない、若し此覺悟がなければ、幾億圓の巨金と、幾十萬の人血とを以て贏ち得たる賜を空しく人手に渡し、東洋の平和も是が爲に破られ、戰捷國の美名は徒に歷史を飾るのみにて、吾人並に吾人の子孫は哀れなる境遇に呻吟し、却て戰捷前の境遇に安んずるの勝れるが如き場合に陷り、世界の笑となるも計られぬ譯であります、されば吾人國民の責任や實に重大であつて、之れを兩性に分ては、男子の責任は素よりであるが、女子の責任も亦決して輕からぬのである。

女子敎育の革新　古來我邦の武士敎育を案ずるに、實に英雄崇拜でありました、英雄崇拜の決果は、即ち金甌無缺の我國體を形成したるもので、三歲兒の靈も、桃太郎の鬼征伐や猿蟹合戰で出來、俗謠戲曲も、忠臣藏や太閤記の如きよりなり、野史小說も源平盛衰記とか太平記とか、又は八犬傳や弓張月など持てはやされ、日本外史日本政記の如き殆ど盡く英雄傳と申すも宜しかるべく、女子敎育に於きましても從て男子の影響を受け、縱令ひ其身分職業は卑しくとも靜、巴、板額、虎御前などの人口に膾炙し、神功皇后二位の尼若しくは山内一豐の夫人など尤も尊崇され、男女共恰もスパルタ流義でありまして、現に今日の戰爭に於きましても父とし、母とし、妻とし、子として笑て出征の士を送り、名譽として戰死の屍を迎ふるのではありませぬか、是れ即ち皇軍が連戰連勝を得るの原因でありまして、彼の敵國の將卒が戰場に夫人を携ふるが如き痴態を演ずるのとは比較にもならぬ次第であります、然るに近頃普通敎育と稱するもの丶主義は、此等

の精華を惜氣もなく放棄して、何の眞似やら皮相のハイカラ流を以て申すには、普通教育は尋常普通の人間を養成するにあれば、英雄豪傑を模範とするのは宜くない、英傑は養成すべきものではない、英傑は天性なれば、之を作らんとすれば、却て亂を好むものを奨勵する樣なものだとて、現に小學校の教科書の如き、英傑の傳は皆抹殺してしまひました。然し其謬見は如何なる愚者と雖ども、今度の戰爭に於きまして男子教育の方針は國粹に基かねばならぬ事は首肯するでありましようから、其れは別問題として、女子教育も必ずや國の精華により、時勢に鑑み、大に活動すべき人物即ち女傑を養成する事を目的とせねばなりませぬ。之れ即ち吾輩が女子教育の革新、否復古を唱ふる次第であります。

古今の英雄豪傑なる者を見るに、一見其の時代に於て其者一人傑出して居るやうな觀を呈せるもの往々にしてあるが、實は皮相の見で、皆部下に傑物があつたからである。智略や、意志や、博愛や、是等を多く供へた傑物の部下を統一するが偉人にて、即偉人の偉人たる働きを顯はす所以であります。

例之へば、太閤秀吉は、彼れ一人丈け偉人ではなく、其の臣下に、加藤清正、福島正則、小西行長、石田三成等の豪傑あり、又其の臣下にも傑物ありしを、よく統御して行きし處が即秀吉の秀吉たる處にて、又彼の大業をなした所以である。西郷南洲も其の部下に大久保、桐野、篠原を直參とし、木戶、高杉、坂本、橋本、勝など諸藩に數多の豪傑ありしのを合縱連衡の策を以て統御したる爲め初めて維新の鴻業を成したのである。今度の戰に於ても、東郷、上村、黒木、奥等の諸將は、ナポレオン、ネルソン、ワシントンに比しても決して劣らないが、是も部下には海陸軍士卒の傑物あり、他には將卒をして内顧の憂なからしむる處の豪雄なる國民有るに依てゞある。

是に反して、露國側に就て見るに、アレキセイフ、クロパトキン、マカロフ、ステッセル等の諸敗將は個

人性に於ては豪傑的の處あり、即ちサイベリア鐵道や、東清鐵道や、或は旅順、靑泥窪の經營は、流石はペイトル大帝の意志を繼ぎたるザールの親任を得し程ありて、島國的根性を有する者の理想とだもすべからざる經營だが、然し、臣下、部下、及び國民の腐敗して居る爲に、乃ち豪雄なる國民を有せざる爲め、思ふ如く胸中の策を施し、手腕を振ふことも出來ず、滿洲の利權を失し、世界に汚名を流したのは、皆部下及び國民の罪で、彼等のみの罪ではありません。

實業家に就て云へば、岩崎彌太郎の如き實に明治の豪傑である、之れも所謂三菱の四天王や、及び四天王の俊秀なる部下の爲に三菱を形成し、今日の如き有樣に至らしたのである、又婦人としてはナインチンゲルの如き博愛慈善の方面に一大事業を創め、今日赤十字社の根據を作つたのも、亦其の部下に女傑ありし故であります、のみならず多くの豪傑の歷史は概ね母なる女性の感化訓育の宜しきを得たるのは歷然として明かであります、而して我邦は前述の如く、滿韓及びサイベリア即ち東洋の經營に就て重大の責任がありますが、其責任を盡すには國民は今後、一層强固なる意思、遠大なる智略、健全なる身體を有する幾多の人材を要するので、凡て夫等の人材傑物に需たなければならぬから、男女に拘らず豪傑を標準とするやう敎育の方針を一變するは焦眉の急である。豪傑と云ふも、畢竟は智、德、體の三要素の充分なる發達に他ならないのであります。

斯くて國民が、皆此の三要素の充分なる發達を目的とする、即傑物養成方針の敎育を受けた時、其上にそれを統一する處の人物現はるれば、其人は即萬世に傳へらるゝ處の偉人であります。

國家をして尋常以上の國家たらしめんとならば、尋常以上の國民を作らなくてはならない、尋常以上の國民を作らんとならば、第二の國民を產み、之を養成する、國民の根本たり母たる女子其の人を尋常以上に

敎育せなくてはならない、又其の人に、大抱負、大覺悟がなくてはならない。母の身體は子女の身體、母の智慮は子女の智慮、母の慈愛は子女の慈愛で、母は國民の基であるから、新日本の經營に就ては須らく女子敎育の方針を革新せなくてはならぬ。

終りに臨んで國家の治亂と云ふ事に付て一言しますが、戰爭は必ずしも治亂の標準ではありませぬ。上に國法整ひ、下に忠良の臣民あり、正と義に向て社會が活動するときは即ち治世にして、上下の秩序整はず民心離反し、社會が不正不義の利欲に沈淪するときは即ち亂世なり、戰爭の悲劇は必ずしも干戈に訴へ、砲煙彈雨の下に輸贏を決するのみにあらず、或は外交に、或は商業に生存競爭をなすに當りて、其勝敗は大に國家の命運に關し、暗々の裡に干戈以上の悲劇を演ずるものなり。而して生存競爭は、生物の存する限りは靜止するものにあらざれば、人世二六時中は戰鬪場裡にあるものにして、世の所謂亂世にあるものと覺悟せざるべからず。故に吾輩の所謂豪傑は、男と云はず、女と云はず、生存競爭に大勝利を獲得すべき國民にして、換言すれば治民にして亂世に活動進歩すべき人物を稱揚するのであります。

○食物と消化

食慾が消化を助け、消化に對して、緊要にして且大なる關係を有する事は、世人の熟知する所なるが、此頃露國の或る研究家は、數多の人に就て味覺、視覺、聽覺等諸種の方法に依りて、食慾を催進せしめ置き、其胃液を試驗したるに、其分泌の量多きのみならず、鹽酸とペプシ子を最も多く含有し居たりと、然れば食慾を催進せしむるは、食物消化に、密接の關係を有し、之れに反し、己れの好まざる時、又は好まざるものは、品質貴きものと雖も、消化遲鈍なる事明なり。(キヨルニシエツアイトウング)



空氣と健康

菅原雅輔

人は貧富、賢、不肖、學者、文盲を問はず、多くはその呼吸する空氣の良否に注意を拂はないのは甚だ不注意千萬なことであります、この不注意からして健康、氣力に莫大なる損害を受くることに氣附かないものであります、凡そ氣管、肺臓の諸病は云ふまでもなく、人の不健康は重にその常に呼吸する空氣の不潔なるに因るものでありますから、今その恐るべき事實の一斑をお咄し致さう。

吾人の呼吸する空氣は、酸素と窒素との二元素から成つて居るので、さて酸素は吾人々類生命の實用をなすもので全量の五分の一を占めて居ります、又窒素は酸素を調和するはたらきをなすもので全量の五分の四を占めて居ります、この外に一千分の四許りの炭酸と『オーゾーレ』と稱する變形酸素の少量とを混合して居ります、そこで吾人が旦夕空氣と稱するこの混合物を呼吸する分量を申さば驚くべき莫大なるもので、博士フォスター氏の説によれば、一人に付き二十四時間に呼吸する分量は六十五石餘り即ち四百二十五立方英尺餘であります、此空氣が吾人の肺臓に這入りますと其混合の比例を變へまして、酸素が減じて炭酸が増加し、再び體外へ出で來るの

であります、併し吾人の居室にあつては、この酸素の減少、炭酸の増加は、吾人に有害なる程甚しいものでありません、然らば害悪は何れより生ずるのであるかと申しますと、それは吾人が空氣を肺に吸入して再び之を吐き出す節にそれと共に吐出す一種の毒質ある有機物があるのです、博士フォスター氏は此生物は肺の中にて成形し、或は肺中一種液體の腐敗より發生するものであると申されて居ます、又博士ランケム氏は呼吸ごとに身體の全面より發する水蒸氣には細微なる有機物を含んでをる、この有機物が激烈なる毒物と云ふことは、實驗によつて證せられてあるので、吾人が新鮮なる空氣より出でゝ人或は他の動物の群り居る場所に入ると一種不快なる臭氣を感ずるのは即ち此の生物の臭氣である、この生物を含有して居る空氣は諸種の病氣の原因であつて、衆人群居せる都會に死亡者の増加する重なる原因は、此の生物にあるのだと申されました、又ガルトン氏は肺より吐き出す此の生物の分量は、成年の

平均一日に三四十「グレーン」だと申されました。今人ありて、高さ一丈、幅一丈、長一丈五尺の密閉した一室内に五時間座して居たと想像して御覧なされ、その時間の終りには、其人は正當に含むべき分量よりも、百分の一個二を減じた酸素を含める空氣を呼吸するのみでなく、更に甚しきは、一旦肺より吐き出した毒生物を含みて居る空氣を呼吸するのでありませう、害悪の要點は此に存するのであります、天然は肺中の毒物を自ら躰外へ排出させますが、居室はこれに反して同じ一人に二回も三回も同じ空氣を呼吸するやうにさせます、今室内の人が二十四時間に五百立方呎の空氣を呼吸すると致しますれば六時間には百二十五立方呎、即ち一室の空氣の十二分の一を汚穢にするでありませう、若又二人ならば六時間にして一室の六分の一の空氣を汚すのであります、この比例を以て一室内の空氣は次第々々に汚穢し盡くすのであります、即ち同じ空氣が幾回も肺中へ出入して、遂に室内は毒氣を以て充さる、

に至るのであります。

人の肉體は間斷なくかはるものでありまして、舊き筋肉は崩れて體を離れ、新鮮なる筋肉がこれに代ることは、皆人の知る所でありますが、さて此の變化は吾人日常の食物によりて起るものであつて、吾人が食物を喫へば、その養分は種々の變化を經た後に血液となりて大血管を通り、其末數多の毛細管に達した時は、その管を透して近邊の筋肉を洗ひ、且つ養ひて、新鮮なる筋肉を生ずるのであります、これと同時に舊來の筋肉にして不用となるものは、次第に溶解して體外へ排出するのであります、故に吾人の肉體は日々生出し且つ死亡しつゝあるので、一部の我身は新たに生れ、一部の我身は死體となつて失せ去りつゝあるのであります、而してこの死體は、尿素、炭酸、水の三より成つて居ります、尿素は尿道より、炭酸は肺と皮膚とより、水は右の三道より何れも體外へ流出するものであります、然しこの死肉の内には尿素、炭酸、水のこの三つの外に肺と、皮膚とより排出する激烈な毒物があります、此の毒物は何であるか容易に知ることができませぬが、人の筋肉には常に一種の毒物がありまして、彼の肉體中の死肉が、炭酸と水とに變るまでには、必ず體中で種々の物體を通過するのであります、そして物體の或物が激烈なることは、溺死人に就いて證することができます、すべて人の肉體の全部は、間斷なく消耗すると共に一種の毒物を發生するものでありまして、もし血液から酸素を受けて、この毒物を酸化することがなかつたならば、數分間たゝぬ間に全身を殺すに至るのであります、さて酸素の働きは通例人は一分間に殆んど五升の空氣を呼吸して此の毒物を酸化いたすのであります、彼の溺死人は、その全身に發生した毒物が最早や酸素を得る能はずして、直に腦髓に赴き其毒を及ぼした結果であります、故に溺死人は實際一種の毒害に遭つたものであります此の毒害はあながち炭酸が超過するに因るのでありません、炭酸のない場合でも酸素の供給がなければ

同一の結果を生ずるのである、是れ博士フオスター氏の説であります、故に此の害毒は一種の活動せる毒物があつて、これを酸化せざるより生ずる所の結果に外ならんのであります、彼の一時血液を失つて精神の衰弱を來すことのありますのは、血液が不足なる爲めに彼の毒生物が脳髄を襲ふからであります又人の死に際して痙攣を起すなどは、是れも酸素がなき爲めに、彼の毒生物が神經の各部を刺衝するところから起るのでありまして、此毒生物が神經に打ち勝たば、身體は忽ち死するものであります。

されば(一)吾人は充分なる酸素を有せる間は、肉體の日々に消耗するのを、安心に無害ならしむることが出來ます、(二)若し體内に酸素が不足を來さば、筋肉の各部に毒物を發生して、その毒生物の烈しき時は、幾か數分時間に生命を取られます、(三)肉體が健全なる時でも、吾人は肺と皮膚とより、常に危險なる一種の毒物を吐き出すものですから、吾人もし不潔なる空氣の中に住まば、此の毒物を再び吸ひ入れて大害を蒙るものであります。

却説一室に數多の人が群居することの有害なること空氣の流通せざる臥床が不快の臭氣を感ぜしむること、呼吸と衣服とには一種の臭氣のあること、呼吸したる空氣中に動物を置くときは、炭素を除くも直に死すること、病院には斷へず新鮮なる空氣を流通せしむる必要あること、此等のことは何人も疾くに知れる所で、彼の有名なる印度カルカッタ府の闇室中の死亡者は、所謂肺及び皮膚より出ずる毒生物の有害を證して餘りあります、當時闇室の中に密閉せられた者は百四十六人で、其中百二十三人は直に死亡し、其他の者は其後熱病で盡く死亡したのであります、これ衆人が吐き出した毒物を酸化する酸素が缺乏して、此の毒物を再三再四呼吸したからであります、されば他より不潔なる空氣が侵入せずとも空氣の流通を拒ぎたる一室の内に蟄居するとの大害あることは明であります。

運動と清潔なる空氣とは、吾人の體内に生ずる毒物

を防ぐに大切なるもので、兩者は共に酸素を含める血液の循環を速にするものであります、故に彼の筋肉より生ずる死肉を溶解して安全なる水、炭酸、尿素となるの時間を減じ、隨て其死肉が彼の肉中の有毒なる物體を通過する時間を縮むるのであります、されば人々殊に靜座の職業を執れる人は、新鮮なる空氣と運動とを要することは甚だ大切であります、常に呼吸する空氣に注意せずして、不潔なる空氣中に棲息せるものは、其健康が次第に衰弱するばかりでなく、著しく肺と氣管とを害し、又窒扶斯、ジブテリヤ、赤痢、虎列剌等の下地を作るものであります、殊に不潔なる空氣と、虎列剌とは密接の關係があります、西歷一千八百四十九年の秋、合衆國タオレオンに虎列剌が流行いたしましたことがありましたが、同市に極めて空氣の流通惡しき工場がありました、其工場の空氣は一人に付六十八立方呎以下の割合でありましたが、虎列剌が此處を襲來したときは非常の勢を逞しういたしました、發病より四十八時間たゝぬ間に患者六十一人、內死亡者十九人を生じ、一週間を經て死するもの六十人、其餘の人々は大抵患者の容態となりました、其工場の中にても男子は多く窓を破りて空氣の流通を計りましたから、其死亡者は女子より比較的少數であつたと云ふことであります、又同市の一端に獄舍がありましたが、其獄內の空氣は四人一人に付八九百立方呎の割合で其上空氣の流通も可なりであつたから、流行病の感染は同所に極めて薄かつたと云ふことであります、博士カルペッター氏はこれに類せる數多の例を舉げて、居室の空氣を淸潔にするは、最も重要なる流行病豫防法だと申されました。

さて以上述べました道理からして、人は室內におつて勞作する時は、凡ての窓を開きおくこと、又簡略なる外衣を着るは甚だよろしい、もし此等のことが出來ねば、室を出づる時、窓なり戶なりを十分に開きて呼吸した空氣を拂ひ去ると、さもなくば室內にて吐き出した毒生物は、幽靈の如く常に室內に住ん

で、遂には其主人を殺すに至るのであります、故に常に注意して衣服と臥床とを清潔なる空氣中に洒すがよろしい、又外より侵入する不潔の空氣は避けねばなりません、常に此等の心掛を怠らなければ、健康上、莫大なる利益を知らず／＼得て、長壽を保つ幸福を受くることは、疑ひありません。（をはり）

家庭瑣話

内田茂文

▲婦人と齒　齒は體育上大いなる關係を有するもので、他の部分が幾ら發達して居つても、一部僅かに齒に欠點があれば、體格試驗に不合格となるのである、齒は常に目口鼻耳などの如く外部に現はれて居らぬ故、自然注意を怠られて居る傾きがあるから呉々も警めねばならぬ。

殊に哺乳兒を養育して、第二の國民を造る所の大責任を抱へた婦人は、小兒が乳齒の發育に就ては、大いに注意せねばならぬ。歐米の文明諸國にては、家庭の要書として『マウズ、エンド、チース』（即ち口と齒）と云ふ小冊子を備へ付けて無い家は殆んどない宛かも日本の家庭に『綴暦』を備へ置くが如くに、是を見ても如何に齒に付て注意周到なるかゞ判る。

此『マウズ、エンド、チース』と云ふ書は、齒と口との關係、齒の發生から、齒の種類、變化など、齒に就て注意すべき要件が悉く記されてある。予が知れる齒科ドクトル某氏が、予に對つて齒に就て語られた二三を玆に紹介しやう。

齒は總ての食物を咀嚼して腹内に運ぶと云ふ衞生上必要の任務があるから、充分咀嚼に耐え得る堅牢でなければならぬ。萬一も齒にして咀嚼力が鈍かつたならば、胃は忽ち其不消化の食物の爲めに、大損害を受ける事となり、延て身體全部を疾病と爲すに至るものである。

斯る譯であるから齒は大に注意せねばならぬ。殊に小兒の齒に至つては、其直接に大關係ある母親たる

ものは深く〱氣を注けねばならぬ。小兒の齒には乳齒と成齒との二種がある。乳齒と云ふのは所謂乳呑齒をいふので、拔けては生へ拔ては生へする、生變る齒、成齒と云ふのは、一名永久齒と言つて、一度生へたッきりで脫けたら再び生へない齒である。小兒には常に「味噌ッ齒」と云ふのがある。是は何でも無いやうなものだけれど、成齒に對つて尠からぬ害を與へるものである。で、この味噌ッ齒は如何いふ原因から出來るかと云ふに、小兒に乳を呑ませた跡を、其儘にして其口を拭てやらぬ不潔から生ずるので、畢竟母親たるものゝ懈怠と云ふ不注意から起るのである。此味噌ッ齒の爲めに、再度と生變らぬ大切な成齒の發生を妨ぐる事がある。世の母親たるものは須らく注意すべきである。

斯の如く齒は人體衞生の上に於て重大なる要具たると倶に、又容貌の美を整へる上に於ても缺くべからざる資格を備へて居る。古い書にも「齒は瓠犀の如し」などと記す如く整然として居るのを美貌の一とされて居る。それ故に脫た齒があれば直ちに之を塡充る事であるが。この塡充するに就ても、昔は齒の白い〱のが美とされて居つたから、義齒は總て陶製に限られて居つた。

然るに近來は齒學の進步するに從ひ、義齒の塡充材料は金屬が宜と云ふ事が研究され、我も〱と金屬を塡充し、今では義齒と言へば純金に限るが如き流行の有樣である。勿論純金は齒の塡充には、衞生上第一の好良材料であるが、今の世の人の多くは衞生的より金義齒を用ふるのでは無く、唯偏へに粧飾形容の點から塡充するに至つては頗る笑ふべきの至りである。而已ならず甚だしきは、患ひもせず痛みもせぬ完全な齒を、態々拔き除りて代るに金義齒を塡充し、口を開く度に、燦然たる金色を輝き放ちて、誇り顏に得意然たる者がある。是等は笑ふべきよりも寧ろ其愚に歎息せざるを得ない。

斯樣な心得違ひを以て義齒を爲すものは、比較的男子よりも婦人に多い樣に思はれる。多くの婦人中に

は金義歯を以て宛も金の指環と同様に、全然一種の粧飾物とのみ考へ、中には歯の治療に赴くを理髪床へでも行くが如くに粧飾に行くと一般に心得て居るものがあるは言語同断である。

▲女の身だしなみ　身だしなみとは、其身に就て心得深く用意周到なるを云ふのである。常に心得べき事を心得、注意すべき事を注意し居るは、是れ普通の道にして採り立てゝ賞めちぎるほどにあらざるも、而も世の人の多くは此たしなみを殆んど無視せんばかりに顧みない。特別て男子よりも婦人は此點に於て際立つやうに思はれる。故に其身だしなみの有無は、直ちに其婦人の人格をも想及さるゝに至るものである且つこの身だしなみと云ふものは、其時と場合とに



依て、人格の價値を發揮し甚だしく世の感情を動かすものである。是に就て時代は古いが左に記す一話がある。

寛延二年と言へは、今を距る百五十六年前である、大阪のかしくと云ふ遊女が重罪を犯して永く囹圄に繋がれて居つたが、愈々裁判確定して、かしくは死刑を宣告さるゝ事となつた、當時の掟として罪人の刑を執行する場合には、何なりと罪人が欲する儘の願望を一事聞き届けてやると云ふ事で、罪人かしくにも何なりと願へと言はれた時、彼は油揚を三枚ほど與へられたいと願つたから、係りの役員は直ちに油揚をかしくに與へ、定めし食するのであろうと思つて居た所かしくは其油揚の油を絞り取つて、自分の梳上髮の

上へ塗り付けて髪の光澤を添えた、之を見たる役人等は其意外に驚き、今死する身に必要もなき事ながら、その身だしなみを大に感じたとの事である。コハ其場合が非常であるだけ夫だけ社會の同情を惹くことも深く、彼が平素の心掛をも推し計られて床しい想ひがする。

▲茶の湯と動作　茶の湯は家庭に於ける上品の技藝として、又娯樂として行はれ、將又之れに依りて慰藉をも與へらるゝ事であるが、已上の外、更に動作の修養に於ても、亦大いに學ぶべきものである。茶道一派の祖と言はるゝ千利休が、斯道の憲法とも見るべき『茶の湯百首』と云ふものゝ中に左の歌がある。

　器物をば出して其手を退く時は
　　戀しき人に別るゝと知れ

これ動作のがさつなる疎暴を深く戒めたるもので、下句「戀しき人に別るゝ」云々、何たる趣味ある語にあらずや。起居動作且は總ての器物を取扱ふ上に於て、戀しき人に別るゝの情を以て行へば、如何に優しく靜に、而して其間言ふべからざる床しき趣味の存するものである。此點に於て茶の湯は弘く一般に應用し得べき、尤も興味ある家庭の技藝であらう。

▲食物と品性　品性の修養は言ふまでも無く、諸種の學術より得る所決して尠くはないが、又平素の食物によつて、大に影響を與へ食物の爲めに、其人の性格を一變し、延ひては品性を墮落し、遂には無能無識の惰夫と成り果てるに至るものである。

總て辛味の強いものは、胃を害すると云ふ事は常に醫師から聞く處であるが、啻に胃を損ふ計りでなく其性格を一變すると云ふに至つては、驚かざるを得ない。彼の支那人中の馬鹿な者の多くは韮や蒜を無暗に食ふた結果であるとの事、又佛蘭西、西班牙等に懶惰者の多いのも、矢張、蒜、南蠻、葱などの類を多量にムシャ〳〵と喰ひてはグイ〳〵と酒を呑む所から來つたのが、無能無氣力の確に一原因を爲して居る事は、動かざる確例を具躰的に示して居るも

のだそうな。又彼のアイルランド人の如きは、他の食物に比して割合に勞働を要せぬ馬鈴薯ばかりを作つて、夫で滿足して生活して居る結果、同國人の多くは懶惰漢だと云ふ事である。實に恐るべく警戒むべき實例ではあるまいか。

室内の地雷火

梅の舍主人

是れは耐まらない。偖恐ろしや。御座敷から地雷火が起るとは、日露戰爭の飛火が疊の上まで舞ひ込んで來たのか。一家丸燒人間の黒焦などとは甚だ感心しない。君子は危きに近寄るべからず、と云ふて一概に見捨て給ふ御方も有らうが、古歌に幽靈の生體見たり枯尾花と。斯る名吟を味うても、徒らに其聲に驚いて、理由因縁を究めずでは、聊か早計に走るの嫌ひが有るやに思はれる。況してや時局の影響は紙卷煙草にまで、敷島とか大和とか、朝日とか、云ふ人氣に叶つた名前を選んでさへ、人の心を引立てやうと努めて居るでは無いか。地雷火……室内の地雷火！コンナ研究でも煙草の名前のやうに、時の好みに適ふたなら、ソレコソどんなに嬉しからうぞ。

▲室内地雷火の學理

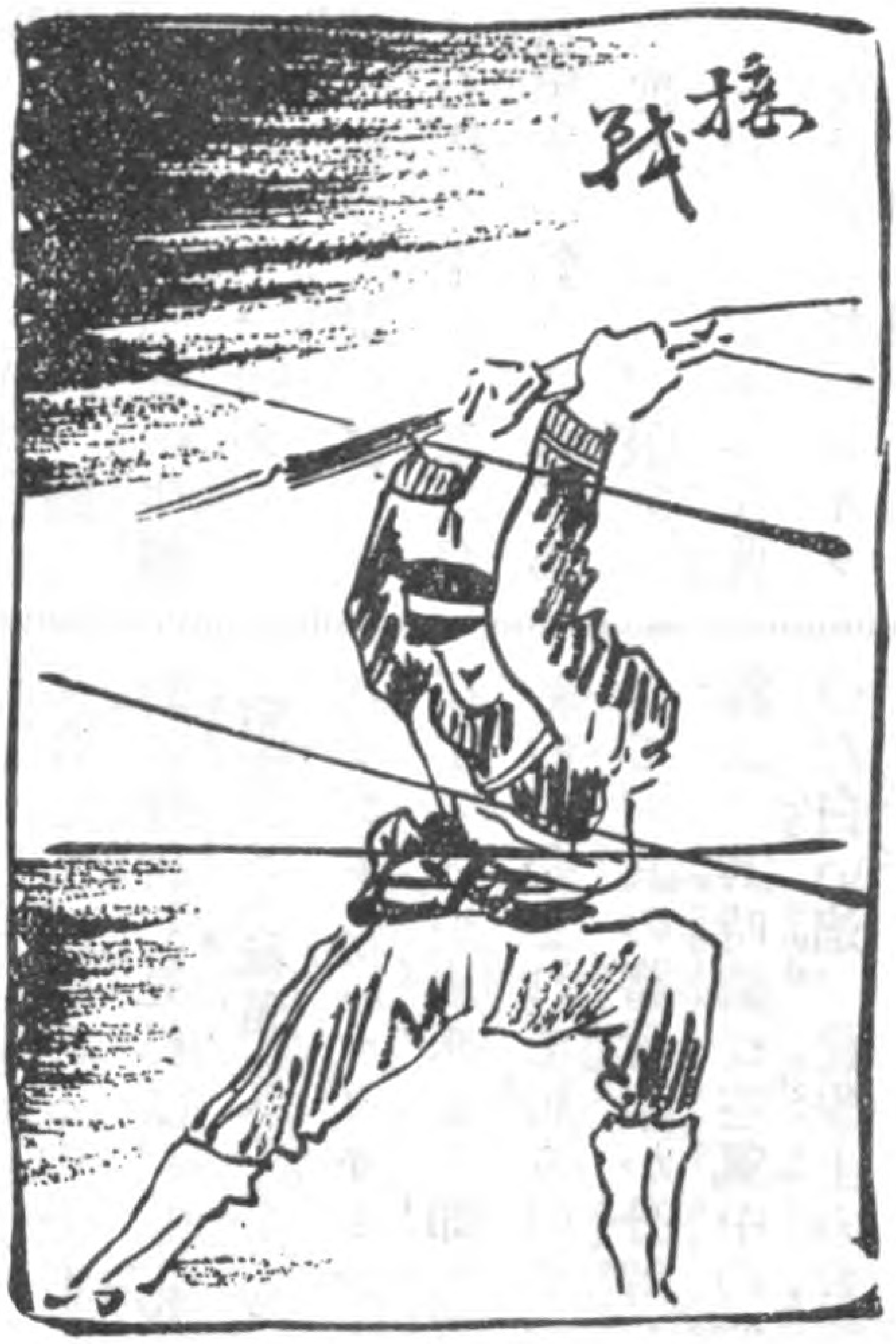
私の古里に與吾作と云ふ農夫があつた。律義一筋の男であつて朝に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸り、只管農業にいそしみて、何時もながら農産の品評會などには優等賞を外したことはなかつた。或日照の夏、與吾作は夜水を引く爲めに、字渡場下と云ふ所にさしかゝつた。既に里を離れて廣野の翠かげ暗く、田毎の落水力なげに響く。與吾作ナントなく淋しげに思ひつゝ、行く道の彼方の森かげに、何やらポカリ青火が光つたオヤと思ふ間に、其火が左右に別れて、二つになつたやうに見えたが、一つは高く、一つは低く、消えるかと思へば又燃えて、其間

にニューと恨めしさうな姿のものが現はれた。與吾作ゾットばかり縮み上り、擔ぎし鍬を抛り出し一目散に逃げて歸つた。スルト里の若者等が幽靈の生體を見屆けんと、手に〳〵得物、炬火提げて渡場指して馳せ向つた。若者等は與吾作の案内に、其處此處と尋ねたが、是れと思ふ手掛りの無いのに、圖を拔かして小言居ると、若者の一人「ヤア幽靈の生體見屆た〳〵」と聲高に呼ばはつたので、一同ソレッと言ふまゝ、バラ〳〵そこに驅け寄つて見れば、コハそも如何に、幽靈と見えしは石塔の上に、なだれかゝる松が枝に、散々敗れた古單衣が釣るされてある。シテ下には女乞食が赤兒を抱きながら、眼をパチ〳〵として居る所であつた。一同「コレダ〳〵此古單衣が鬼火の爲めに、幽靈に化けたのだ。コイツは一本やられたな」とドット笑つて引き上げた。

コンナ話は随分何れにも有りがちの事實だが、幽靈の生躰は、何時も枯尾花や破簑、さては古單衣ぐらゐが相場らしい。が、それとは事變つて、此鬼火と云ふものは、決して代玉や、クハセものに非ず、歴歴とした自然界に起る原因結果の理法に支配せられる、一つの現象である。此現象こそ本題に解決を與へる唯一の材料である。ソコデ此鬼火とは、ドンナものかと申すに、燐と申すものが、空氣中の酸素と化合して、燃えるのである。今吾々生物の躰を化學的に分析し見れば、C(炭素)O(酸素)H(水素)N(窒素)S(硫黄)K(カリウム)Na(ナトリウム)Ca(カルシウム)Mg(マグ子シウム)Fe(鐵)などの諸元素になすことが出來る。即ち吾々の躰の中には燐と云ふものが含まれて居るので、墓場の屍が腐敗するに逆れて、其の諸元素が分解してソレ〳〵に遊離して仕舞ふ。其時燐は空氣中の酸素と化合して、靑みがゝつた白い焔、化學上の言葉で、無水燐酸と云ふものを拵へ出したのである。所が丁度人間の屍を埋めた墓場から、フワリ〳〵と物凄い光が現はれるので、偖こそ亡靈の怨念が行く先きに迷ひ、幽靈になつたものと、一も二もなく合點して、コンナ迷信を生じ

たに過ぎないらしい。ソレユヱ幽靈の配合と云へばキット燐の光で、サナガラ鹿のあしらひに紅葉を添へ、虎には竹がおつきあひに、梅に鶯、月に兎と云ふやうなこゝと異ならない。シカシ此燐はアナガチ墓場より現はれるものと限らぬので、牛馬狐狸などの屍も腐敗すれば、矢張燐が遊離されて、空氣中の酸素と化合して燃えるから、野山に於ても折々此現象を實見するのである。

ソコデ此燐と云ふものは、酸素とは極中が善いので、互に化合する力が強いから之を蓄へ置くには、常に水の中に入れ置いて、絶緣しなくてはならぬ。從つて其取扱も、一切水の中でしないと直接消え失せて仕舞ふ。今燐を使用せんとならば、所用の分量を水中より切り出し、吸取紙もしくは濾紙を以て、手に觸れぬやう、其水を拭き取り、ソレ〳〵思ひのまゝに使ふのである。ヒヨット燐がクッツキでもすれば、手の中から大火事を引き起して、トンダ珍事が出來るから、十分用心をしなくてはならぬ。是れにて燐とは如何なるもの、又ドンナ働きをするものであるかゞ略明瞭したことゝ思ふ。室内の地雷火は、乃ち此學理を應用して、裝置したものに外ならぬ。



▲室内地雷火の裝置

(一)燐の小片を前のやうに取扱ひ、其乾いたものを試驗管に入れる。

(二)之と同時に、少量の硫化炭素を加へる。

(三)スルト燐は直ちに硫化炭素に溶けて、一つの液が出來る。

(四)此溶けた液を手に觸れぬやう注意して、白紙の上にあげ、之を其全面に塗る。

サア之で地雷火の仕掛がスッカリ濟んだ。イザ之から片唾を呑んで拳を握るところ。……アラ不思議〳〵其の白紙は忽ちペラ〳〵と燃え揚つてアタリは火だらけに物凄いばかり。サレド此地雷火は爆發もせず音もしない。從つて危險もなく少しの焦げ跡さへ認めない。さても珍しい手の放れた仕掛では有るまいか。コンナ小六ケ敷學理が御座敷のなぐさみとなり、時節から戰爭遊技の一案ともならば、小供の志氣を興起せしめ、膽玉の鍛錬に多少の裨益があらうかと思ふ。ソハ兎も角彼の白紙は何故に自然に燃え出したのか。機敏の方々は最早思ひ半ばに過ぎたであらうが、更に之を詳しく説明しやう。

サテ燐と硫化炭素との溶液を紙面に塗れば、硫化炭素は暫くにして發散し去り、紙の上には唯々燐のみが殘る。即ち硫化炭素は揮發し易い性質のものゆゑ燐は獨りで居殘りになり、仲善の酸素を空氣中から呼び出して、茲に化合の働きを起して燃え出すのである。

ソコデ一つおことはりを爲て置きたいのは、是迄話の順序として、何時も燐が主になつて居たが、化學の研究の上では、燐が客であつて酸素は主になるべきはづなもの。言ひ代へれば、酸素が他の物と化合して、酸化物を拵へる一つの實驗である。序に猶其二三を左に揭ぐ。

燃燒匙に硫黄を入れ、ソレに火を附けて後、酸素を集めた集氣筒の中に入れると、硫黄は美しい青藍色の烟を發して燃え上り、無水亞硫酸と云ふ刺戟性の酸化物を造る。燃燒匙と申すのは、太い針金の一端に匙を附け、他の一端には蓋を着けたもので、之を集氣筒内に入れると、自然に其蓋となる工合に出來て居る。

さて又細い鋼鐵を螺旋狀に捲き、其一端に木片を附け、之に火を點けて後、酸素を集めた集氣筒の中へ入れると、鋼鐵は火花を放つて燃燒し、磁性酸化鐵

と云ふ酸化物が造られる。

ソレカラ木炭の皮を針金の一端に結び附け、ソレニ火を點じて後、酸素の中に入れる時は、パチ〳〵云ひながら火花を出して燃える。モシ其中へ石灰水を入れると、白い濁りが生ずる。之は木炭が酸素と化合して燃燒したので、炭酸瓦斯を生じ、其炭酸瓦斯が更に石灰と化合して、炭酸石灰が出來たのである。かやうに酸素が、他の物と化合するを酸化と云ひ、其際出來たものを酸化物と云ふ。前例の無水亞硫酸磁性酸化鐵炭酸瓦斯などは、皆酸化物である。

さてコンナ蠟を嚙むやうな、面白くもないことを云ふのも、説明の順序として勢止むを得ないからだが、ヨク〳〵吟味して見れば、酸化と云ふことは、吾々に取りて、中々おろそかに出來ぬ。分けても火を發する上には、是非とも無くてならぬことは、以上の例に考へ見ても十分明らかで有らう。サレドこゝには酸化の一般を説明したのでなく、本題に要求する部分、即ち火の發するは、ドウいふ理由であるかを科學的に説明したに外ならぬ。ソコデもう一つ火を歴史的に研究したならば愈々興味が出るばかりでなく、學問の體裁も備はるから、更に項を改めて火の歴史に付て、其大要を研究して見やう。

▲火の歴史

アフリカに一種の猿ありて狒々と呼ぶ。其體は人より大きく、其力も亦人に優る。自ら木の枝を集めて巣を造り又數多の石の中から役に立ちさうな石を拾つて、果實を破り貝殻を割りて其食を求むるの仕方が、ナカ〳〵他の獸類の企て及ばぬ智識を有つて居る。人類でも劣等な野蠻の種族になると、とても狒々の智慧に及ばぬものがある。狒々はかやうに其智識が進歩して居るにも係はらず、火に付てはおかしい程たはいが無い。

曾てアフリカの廣野に、旅人の一群が野宿の折、火を燃いてゆふげの仕度に取り掛つた。一匹の大狒々が、遙に之を認めて木の上より羨ましげに眺めながら、ジット旅人の様子を窺つて居つたが、ヤガテ皆

テントの中に入りて眠に就いた。スルト狒々は其たき火の側に、左も嬉しげに火焰の登るを見て、兩手をさし延べたり、お腹を撫でたりして、其赤い顏を愈々赤くし、ホト／＼夢中になつて居たらしい。所がアタリに薪の山が積で有つても、之をたき添へて其火を保存させやうと云ふ考も無く、テダテも知らない。ヤガテ薪は燃え終り、焰が消え果たので、以前の機嫌はドコへやら、シホ／＼としてソコを立ち去つたと云ふ。

アハレ狒々の智にして、未だ火を用ふる道を解せぬのか、之ぞ乃ち人類と競爭の出來得ぬ主なる原因で若しも其利用の法を知りたらば、或は生存上吾々人類の一大敵手として、立派な發達をしたのかも知れぬ。然り吾々人類とて、世に火と云ふものが無かつたなら、獅子、虎と等しく、生肉を食ひ狐狸と同じく洞穴に住まひて、永く禽獸と共に山野の間に馳驅して居つたに違ひなからう。

チト穿つた說らしいが、人と云ふ言葉の源は「火取り」の略即ち「り」を省いて「ひと」と呼んだので、其昔人類が禽獸に立ち勝つて自ら誇るに足るものは火を取るの術を知る位が特に著しいことで有つた。夫故彼等と區別せん爲、高く自ら標榜して「火取り」と稱へたのを言語の發達より、音便省略の結果「ひと」と云ふ言葉が出來たのではあるまいかといふ人がある。其說の當れるや否やは兎も角中々面白い解釋であらうと思はれる。シテ見ると人類は餘程の上世に在て、已に火を使用したと云ふことがボンヤリ分るであらふ。

ソレデは人間はドレ程古くから居つたものか。シテ火の發明は何時頃で有つたのか。之がスラ／＼分らうなら、誠にタイシタものであるが、昔から多くの學者さへ靑息を吹いて居た難問である。所が文明の進步に連れ、流石の問題も人類學者の研究に依つて有益な報告を得ることになつた。即ち人類學者の說には、人間が始めて此世に現はれたのは、地質學上の第三紀中、新世とて今より凡そ二十餘萬年ばかり

前のことで、其地層の中から、人類の使つた古器物を掘り出すと同時に、木炭がまじり居たのを發見して、當時已に火を用ひたに違ひないことを斷定された。爾來ドンナ人種でも、タトヒ多少の差こそあれ、一般に通じて火を用ひぬものは無いやうになつたが、中には火取りの法を知らぬものが有つて、先祖傳來の火を虎の兒のやうに存續して居るものも有る。去りながら多くの場合では、ドウヤラ火を出すことの工夫が備はらないやうなことはなかつた。サレバ何時の世、如何なる人が、火の發明をしたのか。ソハ素より分るべき筈はなけれど、



此發明の人類に偉功を與へたのは、タヾに蒸氣や電氣の發明の遠く及ばぬのみでない。超然として人類を禽獸の上に立たしめた一大原動力たることは、疑ふべからざる事實であらうと思ふ。有史前に於ける此物の歴史的研究はザットこんなことに考へて差支が無からうが、有史後に至ると竹冊のおかげで一ときはハッキリと成つて來た。即ち上古の支那史を閲すれば「某を以て火正となし火を司らしむ」とあるは、數千年の昔に於ける火の値の如何に貴とかりしかを説明し居る。勿論今日より考ふれば、ドウして火を司る役人などを置く必要

がおつたのか、甚だをかしなことに考へられるが、此當時は火を取るの法極めて幼稚と見へて、誰れでもオイソレと參らぬこと、丁度今日の瓦斯燈や電氣燈が素人の手では間に合はぬと同じことで有つた。ヨシ爲し得るとするも、役人を置いて火を配布させた方が、却つて便利であつたことも、矢張專門の技師を置いて、瓦斯や電氣を拵へて貰ふ方が得策であるのと、變らないであらう。

今上古の火取り法の一斑を見るに、程よい二本の支柱を建て、之に一木を横に架し、次ぎに他の一木を其上に置き、二人の壯者前後より之を支持し、エイ〳〵の掛聲で、ヤミクモ引いたり押したりすること丁度樵夫の鋸を使用する如くで、木と木との摩擦に依つて、火を取るのが先以て上乘の仕方で有つた。山國などでは間々見ることであるが、山林の檜などが木と木と擦れ合つて、自然に火を發し、所謂山火事などを起すことがある。上古の人類もコンナ所に心附いて、發火の方法を發明したものであらう。

却説また我國の昔はドンナ風で有つたのか。歴史上著明の事實としては、日本武尊が東夷征伐の時、叔母君倭姫が出陣の門出に餞として、村雲の劍と燧袋とを贈られたと云ふことがある。今日より見れば燧袋の如きは、飛騨山中の杣か、狩人でもなくばソンナものを携へさうにもない。ソレを仰々しく征東總督と云ふ最高の名譽を負へる大將軍に捧げたのを見ても、其當時に於ては容易に得がたいもので、玉葉金枝の方々と雖も手に入ることが六ケしかつたに相違なからう。思ふに金石相擊ちて、火を取るの方法は、寶劍と同じく天下の寶物として珍重されたものに相違なからう。シテ尊が燒津が原に於て、燒擊の災に逢ひ給へる折、直ちに燧袋を出して火を打ち、賊を逆へ燒きになし給ふを見て、賊は之を神火と稱して驚き恐れて逃げ去つたとは、矢張其反證を説明して居るのである。何となれば此神火とは、人間業で及ばぬことを意味して、然かも賊どもが、己は拙い摩擦法を用ゐて居るのに、尊は巧みな相擊

法を以て、咄嗟の間に發火し給へるを見て、其神變不可思議なのに驚かぬことが出來ない。是等のフシブシを考へて見れば、尊の以前に在りては我大和民族は摩擦法の火に依て、僅かに生存して居たに違ひなからう。彼の伊勢の大廟とか出雲の大社とか云ふ歴々の神々は、其祭日の折、神前に供ふる火を祖先の遺法に從ひ、摩擦法に依て發火する、今日に至るまで重典の一つとして行ひ居るが、是れ亦其考證には十分餘りあるでは有るまいか。

シテ見れば、我國の神代より日本武尊の頃までは、摩擦法が一般に行はれ、然かも僅に相擊法が其曙光を漏して、世運の一轉を促したことゝ思ふ。かやうに人類學者や、歴史學者の研究を彼れ是れ取り集めて、判斷を下す時は、人類が始めて此世に出現すると間もなく、火の發明をしたものらしいが、此初期の發火法は最も幼稚な摩擦的形式の範圍を超脱することが出來なかつた。ソレカラ第二期に進んでは、相擊的形式が發明され、第三期に及んでは、一躍して附木マッチのやうな、藥品の力に依て發火することが發明された。茲に於て人類は全く其道の技師や役人などの手を離れ、誰れでも思ふまゝに、惜氣なく使ひ得て、其祖先が火取りに困却を極めたことなどは、夢にも知るものがない。今日では瓦斯や電氣は勿論太陽の火でも、自由に取る法が研究されて、第四期の科學的形式が發明され、先々火の全盛時と申すも、强ち言ひ過ごしでは無からうか。火取の歴史はコンナ風に四つの段楷を踏んで進歩したのであるが、人類も亦此段楷に伴うて、野蠻より未開に、未開より半開に、半開より文明と云ふ風に、四つの段楷を踏んで發達し、開展したもので、キチンとは申し悪いけれども、野蠻時代は摩擦法、未開時代は相擊法、半開時代は藥品法、文明時代は科學法と、對照して差支が無いやうである。夫故火力利用の進否は、移して人類發達の如何をもトし得ると共に、文明史の内容に於て、有力なる地位を占めて居るものである。

家政學資料

磯部　武者五郎

（一）食物の研究

（一）總　說

食物の人に於ける最も大切のものにして、之れあり
で生活することを得、之に依りて病を醸して死する
あり、其の他精神の强弱身體の健否、品行の良否、
皆食物の原因する所たり、かゝる大切の食物、然も
一日に三度其他の間食等にて終日概ね食物に關係せ
ざるはなきことなれば、食物のことは決して忽に
すべからず、然るに從來我が邦にては單に粗食する
を善しとし食物の事などは一向關はぬを以て大人君
子なりと爲す風習ありて食物の撰擇調理等敢て注意
せぬもの多し、食物に注意するは奢侈と心得るは大
なる誤なり宜しく衛生と經濟とを鑑みて爲すべき
なり、

食物の研究はなか〳〵容易のことにあらず、若し詳細に之を爲さんとせば其の關係する學科及び範圍甚だ多大なるべし、其關係せる學科を擧ぐれば

動植物學　水產學
農學　化學
生理衛生學　藥劑學

食物研究の範圍亦廣きものにして先づ其項目を擧ぐれば

食品の撰擇　食品の鑒別　食品の價格
食品の獻立　食品の調理　食品整理法
食事衛生　食事禮法　食器整理法
臺所整理法

此の諸項を研究して衛生、經濟に適ふ樣にし以て其の大成を期せんとせば必ずや前記の諸學科の一斑を心得居るにあらざれば能はざるべし

さて前にもいふ如く我邦は食物の研究甚幼稚にして其の調理法又甚不完全なり、されば現今女子敎育の盛なるに方りて食物の研究を盛にし行末は食品學とでも稱すべき一學科を家庭必須の學科として開設するは當世女子の責任にして又愉快なる事業といふべきなり、

さればこれより女鑑紙上を借りて食物の研究に關する事項を逐錄して讀者の參考に供すべし、

二、人體の成分

食物は人體に供給さるゝものなれば食物の研究に先つて先づ知るべきは人體の搆造なり、併し人體の搆造といつても骨とか血とか筋とかいふものゝ搆造を知るは勿論なれども食物に關聯して第一に知るべきは人體の化學的成分なり、人體を形成せる化學的成分即ち元素の重なるものは

炭素　水素　酸素　窒素　硫黃　燐素
及び其他

此の重なる諸元素はすべて化學的抱合物となりて人體に存在し、而して之を供給するは多くは食物なり食物に此等の諸元素抱合して營養分を含有せるなり而して人體中の此等の諸元素に無機物、有機物の別あり、無機物は炭素を含まざるものにて水、鹽の類有機物は炭素を含めるものにて蛋白、脂肪含水炭素之が主要なるものにして其の種類亦多けれども先づ此の三種を重なるものとすべし、

以上の成分の人體中に含まれて居ることを簡單に說明すれば、

炭素、水素、窒素、酸素等は人體の細胞組織及び諸の液中にあり、硫黃は血液細胞組織間の液中にあり燐素は血液、神經、骨、齒、及び分泌物中にあり、水は身體に入る食物及び其の他を溶かす用をなし、血液其他百般の液となりて居る、鹽類も容液となり、又は固體となりて骨を造る蛋白質は細胞の實質を形成するに必要なる成分なり、又血液及び其の他の液となりて居る、脂肪は一定の細胞中に存在し特に皮下に在る、含水炭素は血液乳汁中に在るなり

三、消化器の搆造及び作用

食物の研究を爲すには先づ消化器の搆造と作用とを知らざるべからず、極めて簡單に之を說明せん

消化器は口腔に始り肛門に終る、
消化器は消化管と消化腺の二つに分る、
消化管は口腔、咽頭、食道、胃、腸の五つより成る
消化腺は以上に附屬せる各種の腺なり、

口腔にて重なるものは舌、歯牙なり、

舌は自由に運動出來る筋肉より成り、上面に多くの乳頭あり、

歯牙は其の數三十二枚なり小兒の乳歯は二十枚なれども成長して永久歯生え揃ふて三十二枚となる、

歯牙の數及び並び方は左の如し

臼歯	五枚	上十六枚
犬歯	一枚	下同じく
門歯	四枚	十六枚合
犬歯	一枚	せて三十
臼歯	五枚	二枚

咽頭は口腔より食道に連なる狹い洞道、食道は咽頭より胸を通り、胃に連なる洞道其の長大凡七寸五分位といふ、内部の面は粘膜を以て覆はれて居る、

胃は左より右へ横る嚢なり、其の長大凡八寸四分位幅は三寸四分弱、深も其の位といふ、食道に連なる口を噴門といひ、小腸に連なる口を幽門といふ、噴門の端にある腺を胃液腺といひ、胃液を分泌す、胃液は一日中に大抵十二磅を出すといふ、幽門の端にある腺を幽門腺といふ、

腸は腹の大部分を占む、小腸 大腸 の別あり、小腸は非常に長く腸の五分の四を占め大凡二十一尺餘ありといふ、小腸は十二指腸、回腸 の別あり、十二指腸とは胃に連る所にあり、此の名の起りは其の長さ人の指を十二本横に並べた程あるに依るといふ回腸 は腸の下部曲りたる故に此の名あり、小腸には多數の腺あり、腸液を分泌せり、

大腸は其の長さ六尺餘あり其の初端小腸の 回腸に連る所を盲腸といひ、其の終り肛門に連る所を直腸といふ、大腸にも粘膜を有する腺あり、

以上は消化器の構造の概略なり、以下其消化作用を述ぶべし、

先づ食物口中に入れば下顎運動を始め上下の歯相接して嚼み砕く之を咀嚼といふ、此の時唾液分泌を生じて食物と混和して食塊を作る、食道内面の平滑なる筋質は食塊をして食道を容易に通過せしめて胃に下送す、之を嚥下といふ、

さて食塊の胃に入ると胃液は自然に分泌せられ、

幽門は鎖づるが如くなりて、食塊を胃中に止めて胃液と混和する樣に爲すなり、かくして食塊は濃厚なる一種の液汁に變化す之を糜粥といふ、

凡二時間を經れば幽門自ら開けて糜粥は十二指腸に送らる、此の時膵液膽汁分泌して糜粥と混和して全く食物の消化を終る、是れより小腸を經て大腸に達し糞塊となる其大腸に在る時間は十二時間より三十六時間位なりといふ、

此の消化作用中に食物の營養を主どるの狀は、初め口腔にては唾液の作用に由り澱粉(含水炭素物)は砂糖に變化して溶解せられ、胃中にては胃液等に由りて蛋白質は溶解せられて「ペプトーン」に變じ砂糖と共に胃壁の毛細管内に吸收せらるゝなり、

膵液は唾液胃液と同じく澱粉を砂糖に蛋白質を「ペプトーン」に變ずる作用を胃液の作用外に於て爲す又脂肪を極めて微細なる小球に分離して乳劑と稱するものを作る、

膽汁は重に食物中の脂肪を乳劑に爲し、又腸壁を潤ほし、腸内にある糜粥の腐敗を防ぐ、

腸液も澱粉を砂糖に蛋白を「ペプトーン」に變化す、

さて腸中にては「ペプトーン」砂糖、脂肪小球、糜粥の水分等を小腸の絨毛より吸收して一分は毛細管内に攝取せられ又其の一分は血液と共に全身を循りて營養を主るなり、

四、食物の種類

食物は原素に因りて大別すれば無機物と有機物の二種にて之を鑛物質、動物質、植物質の三つに分つ、成分上より之を分つときは有機物にては蛋白、脂肪含水炭素の三つに分ち、無機物は鑛物質なり此等の成分を概記すれば

蛋白質は炭素、水素、酸素、窒素、硫黄より成り動物の肉類中に多く含有す、

脂肪質は炭素、水素、酸素より成り動植物共に之を含有す、

含水炭素も炭素、水素、酸素の化合物にして澱粉其の重なるものなり、

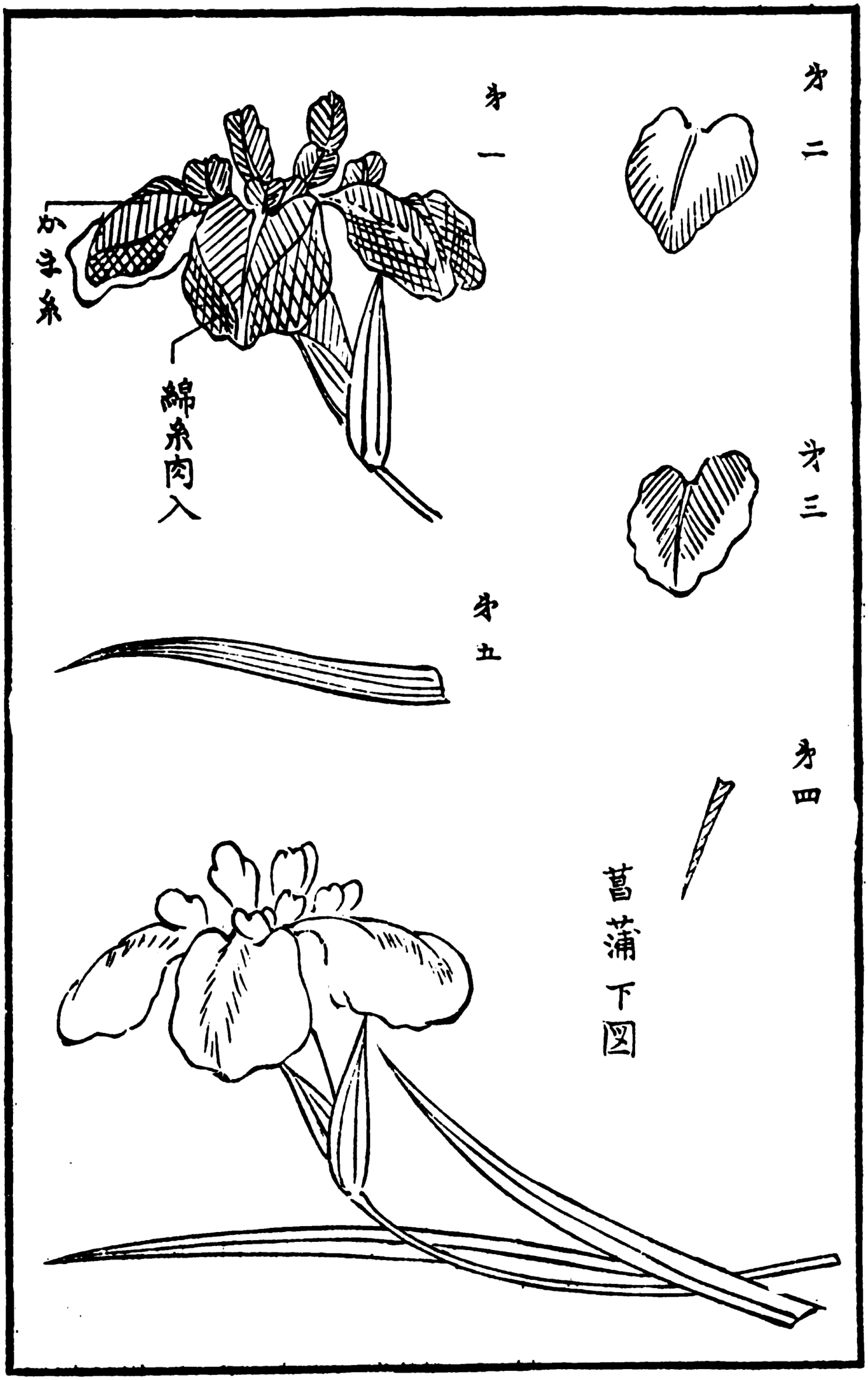
鑛物質はカリウム燐酸、食鹽、鐵、石灰、水等なれども其の重なるものは食鹽と水なり、食鹽及び其の他のものは種々の食物に附帶して體中に入るなり、水は水素、酸素の結合物にて直に飲むの外植物質食物に附帶して體中に入るなり、

刺繡

菖蒲搓糸縫ひ方

上村百世子

是は搓糸縫ひで御座います矢張り肉入れで有りますから、先づ其肉入れの方法を申ます、第一圖に示したる如く白の木綿糸で二重に肉を入れ(左右の瓣共)小なる上部の瓣には一重入れ、萼も一重肉を入れます、花を縫ひますには白色又は紫色で普通いたしますから、紫色を用ひて縫ふのを申ます、方法は紫かま糸を出し、合せか或は三本を二つ割りにして合せ、左撚りしたるもので、第二圖に示したる樣に肉側の方の針を込ませて外側の方を開かせて、下の肉の出ぬ樣ににほひの所をのこして縫ひます。第一圖に有る如く、左右の瓣とも縫ひ、次にかま糸の白を用ひて第三圖に有る如く紫で縫ひました上に縫ひます、左右の瓣とも致しましたらば、紫と白との二すが合せのたづな撚りにして、白で縫つて有る中程より針を出し、紫で縫ふて有る中程のすこし上より針を出して糸を掛ます、あまり込まぬ樣に平に見ゆる如く致します、次に上部に有る小なる瓣を紫の糸で(花瓣を縫ひたると同じ糸)割り縫ひにほひをのこして致します、次ににほひを黄色のかま糸にて第四圖に示したる樣にはすに縫ひ、次に萼を縫ひます。是れは草色の淡きを用ひましてはすに縫ひます、葉は前に在るのは淡き草色を使ひ、後のは濃きを用ひてはすに針目をあまり短く無き樣注意して平らに縫ひ其上に草色を割り合せにいたしましたるものにて第五圖に示したる如く三本引掛まして綴じます、枝は草色の淡きを出し、合せか或ひは三すじ程ぬきた


才一
才二
かま糸
綿糸肉入
才三
才五
才四
菖蒲下図

るものを合せて左撚りに致しまして縫ひます、枝には小撚りを入れて其上に致します。

實驗 牛乳日本料理（第五回）

清水鈴子

▲章魚衣かけ

小章魚の足鹹からぬほどに鹽ゆでにいしましたものを、程よく切りまして、（鹽ゆでゝなければ、薄醬油で煮ます）別に上々のうどん粉をれいの如く牛乳で溶きましたものへ入れてまぶし、それを油にてあげるのでございます。加益には、山椒、胡椒、生姜などがよろしい、これは取合ものによろしうございます。又章魚に限らず、何か貝類などもこの傳で試みられます。

▲雜居煮

初め牛乳へ食鹽をすこし入れて火にかけますと、玉子の白味の半煮のやうにとろりとなりますからこれを作へて置きまして、さて別に慈姑、銀杏、馬鈴薯、むしりこんにやく、人參、里芋、蓮、など其期節に應じたものを程よく切り、鍋に少し油を煮立せおいて、これを入れ、また豆腐をよく水を切り、右の品と共に鍋に入れ、これに砂糖、みりん、醬油などを極うすく加へ、いりつけまして、火の通つた頃を見計つて、先の牛乳をかけ、火より下して器にうつします、又一法は右の野菜を油にいためましてから、醬油の代りに味噌を用ゐるのですが、此塲合には豆腐は加へぬ方がよろしからうと存じます。

▲乳麵

極上のそうめん適宜、湯煮いたします、これを水にうつして、直ぐ手を入れず右箸にて掻きまはし、その水を捨て、又水を入れ次ぼて手にてもみ洗ひ、幾度も水を取りかへます、かくて白味噌をよく擂り牛乳にて溶き水のふにてこし、とろりとなりましたものを右のそうめんに掛けて出します、加益にせり、みつば、椎茸、銀杏、くわゐ、などを用ゐます。

▲麩饅頭

ウドン粉を牛乳にて溶きまして、白砂糖を加へ、手では丸められぬ位柔かにいたしましたものを、こんどは焼麩をぬる湯にひたして置、水をよくきりたるもの（水をきるには、板の様なものに乗せ、上から布巾の如きもので押てとるのです、かくすれば麩は幾分か平たくなつてよろしい）へ右の粉を箸にて取り、一つづゝ包みまして、ヘット油のやうなので揚げます。これはマア菓子の一つですが、若しその白砂糖を用ゆるところを、白味噌でも用ゐますれば何かの取合せものになりまする。

▲糸衣

章魚の衣かけのやうに同じやう、鮪の骨のない處を細く作りまして、これを牛乳にて溶いたウドン粉にまぶし、油にて揚げ、照り醤油などをもちゐて頂戴ます。加益を用ゐますれば、山椒、胡椒なんなりとも、あなご、かつを、はも、平目などの魚類またこのでんを用ゐられます。此時は魚を湯にお通しなさい、またこの衣かけをすましにいれてもよろしうございます、加益はこのみ次第。

吸物も悪くはありませぬ。

尚茲に御注意いたして置く事があります、前にも申上げました通り、魚類の生臭は牛乳を用ゆる料理に適しませぬけれど、何時迄も精進ものばかりでもあるまいと、ぼつ〳〵生臭物を出すやうにいたしました、で今魚類を用ゐます場合は、凡て煮湯に通すことにいたすのでして、かくすれば甚だしき臭は失せてしまひますから、決して牛乳に用ゐられぬ事はありませぬ、又魚の種類によれば、鹽をもつて洗ひますと臭みのとれるものがございます、で是等の魚類を用ゐますに別段そのことは記しませぬから、下に魚の料理法がありましても、臭みをとる方法のないとて、決してそれを致さぬ譯ではございませぬからすべてこの項をお忘れにならん様におねがひ申して置きます。即ち魚類を用ゆる時には鹽にて洗ふか、湯を通すのでございます。

▲新蛤飯

小さき蛤の肉を湯煮し、水にてざつと洗ひ、笊にあげ布巾で能く水氣を去り、火を引く前に飯の上に置きます、さてこれを食べまする時、牛乳を加へました味噌汁をかけて膳にのぼせます。

▲別山焼

温かい御飯を手にて少しもみまして、それを能き大さに握り、串にさしてそれに胡椒味噌をぬりて、火の上にかざして焼く事、丁度焼團子の如くいたします、で程よく焼ましたなら、これを茶碗に入れ、別に仕立おいた牛乳ばかりをかけますか或は豆腐を牛乳にて摺り、火を通したるものをかけお蓋をして出すのであります。

▲はもじる

はもを骨切りにして、油にて揚げ、さゝがき牛蒡みつば、せり、きくらげ、茸、うど、白瓜などを入れ味噌汁にいたします、又食鹽に少量あるか無きか程の白砂糖を入れ、すましと致してもよろしい、勿論牛乳を用ゆるのであります。

▲蟹ふは〱

雌蟹の子のある時、甲をはなし子並に背甲のぐるりにある子をとり、身を共にすりまする、これに牛乳食鹽を加へまして、火にかけとろりとなりましたものを、金杓子の比ひですくひ、薄味噌でしたてました汁を碗にとる前に入れ、その上に汁をかけかくし生姜などにて出すのでございます。

▲やどり蟹

蟹のふは〱を製へました後の甲をよく洗つて置きまして、僭何でもよろしいから淡白な魚の肉をえらみ、山の芋のすりたるもの、牛乳を固めたるもの若くば粉牛乳を加へ、合せて右の甲に入れ、こしきに入れて蒸します。蒸しあがりたるものは、すまし汁などに入れて召食れば結好です。

▲手製かすてら

まづ牛乳に山の芋、うどん粉、白砂糖等をよろしく合せて、摺りませ、かすてら鍋にて焼きます、そ

の分料は、二三度御實驗の上お定めなさるがよろしい、私がこゝに認めますのも、前申す通り、二三度づゝ實驗しましたもので、これなれば惡くない、食られると信じたものをお進めするのですから、實は未だ定まつた分量と申すものはないので、いかにも無責任らしうございますけれど、全く諸嬢と共にかかる種類の料理法を研究する、手前がその問題の提出者にすぎませぬから、どうかその御積でご覽下さるやう、重ねて御願いたします。

▲葛とぢ

極上の葛、白砂糖を牛乳にて溶き、葛餅の加減にて煮る、色の變つたのを度として重箱の樣なものに入れます、入れる時、核のない葡萄の實を投じ、水で冷します、かくして箱を離し、程よく切りましたものを、わさび酢、しやうが酢、若しくは三杯酢の比ひにてたべます。

▲蒸栗

生栗の大きな果をとり、澁皮をよく去りまして、わさび下しにて擂りおろします、又上等の葛を牛乳にて溶き、これに加へよく合せ茶碗に入れて蒸す、食べますには上にすましをかけるなり、砂糖を置くなりいたします、

又別に一法があります、銀杏、麩、揚こんにやく、椎茸、蓮、芋、くわゐ(期に應ぜる)の類を茶碗にいれ、右の栗を上よりかけて蒸すのであります、蒸すにはいづれもこしきを用ゐます。

▲鱈吸物

棒鱈の肉のよき所をとり、細かく切りて湯煮いたしまして、湯より上げたらば、俎の上にて庖丁の峰の方を向けてよくたゝき、これを器に入れ、ウドン粉を加へ、牛乳にて程よく溶き丸め、胡麻油もしくはヘット油にて油揚とするのです、揚げましたものは、西洋紙の樣なものゝ上にとり、すまし吸物にして用ゐます、すましは醬油がなければ食鹽、鰹節は用ゐませぬ、わりねきの類少々あしからず。

また鯨の肉をざつと湯煮した上、かくしても宜敷い。

▲葛うすわた

吉野葛また久助葛、何なり品よきものを器に入れ牛乳にて溶き、中に玉子の黄味ばかりを加へ、少し食鹽を投じ、鉢に入れたまゝこしきの中で蒸します蒸しあがればこれをすまし下地へ、金杓子のやうなものですくひ入れ、客に出すのでありまする。

▲衣白魚

生の白魚をざつと洗ひ、水を切り、別にウドン粉に玉子の黄味をわり、牛乳にて溶き、それを白魚とくるみ、本胡麻にてあげるのです。

▲衣蒟蒻

蒟蒻を小口切にいたしまして、ざつと鹽湯煮し、のち水にてもみさらし、牛乳にて溶きました葛粉もしくはうどん粉にてくるみ、油にて揚げます。

▲梨子羹

梨の實をすりおろし、すゐのふにて裏ごししまして、寒天と合せ、箱に流すこと、寒天ところ天をよせる樣にいたします、水にひたして冷しましたならば、よき程に切り、砂糖を加へたる牛乳をかけ、匙を添へて出すのでありまする。

▲からげ汁

つねみそ、小茄子を二つにわり、中に山椒、けしなどを入れ、紫蘇の葉でつゝみ、干瓢にて之を結へ右の味噌に入れて煮るのです、煮あがつて火よりおろす少しまへに牛乳をいれると例のごとくいたします。

▲糸瓜みそ煮

糸瓜の若きものをとり、よきほどに切り、擂り味噌と牛乳にて煮る、みそは白きを用ゐますれば尚の事よろしい。

四季の臺所（三）

中川雪枝

十月

飯

『松茸飯』 この炊ぎやうに二様あり、一は松茸の新鮮なるものを撰びて、よく洗ひ、笠茎ともに細かく刻み、米とゝもに釜に仕掛け、味汁に副味を添えて食し、一は松茸を甘く醤油煮にし、其汁へ米を加へて炊ぐなり。

『栗めし』 これまた二様の炊ぎ法あり、生栗をざつと鹽茹にし、殻と澁皮を云り、よきほどに割りて仕掛けたる米の上に置き、炊ぎたる後まぜ合はせるもあり、又生の殻と澁皮を去り、其のまゝ米とゝもに炊ぎ上げるもあり、乾栗は能く水に浸し、柔かになりたる所にて、生栗と同じやうに炊ぐ。

『椎茸飯』 椎茸を水に浸し、能くやはらげ、そを細かに刻み、味淋(或は砂糖と醤油)にて味をつけ、其汁に水を加へて、米とゝもに炊ぐなり。

酢

追々時候は鮨を歓迎す、左にばら鮨の仕方、二三種を記さん。

『針魚』 針魚を水洗ひにし、三枚におろし、その一枚即ち骨をとり、鹽をあて、暫時そのまゝにし、水にて洗ひ、細づくりにして酢に浸し、やがて取出して酢を絞り、薄焼玉子、刻み椎茸の三品、飯にまぜてばらずしとするなり。

『章魚』 湯煮し、足一本づゝはなし、小口に薄く切り、酒醤油にてザッと味をつけ、汁氣をよく取り椎茸、三ッ葉、獨活、さゝがき、うす焼玉子など加へて鮨となす。

『松茸』 松茸を笠茎ともに細かく刻みて、例の如く味をつけ、煮上げ、汁氣を取り、鮑あるひは、赤貝などの薄鹽の薄つくり、金絲玉子など、まぜ合せてばらずしに仕上ぐ。

野菜

この期に於て多く青物市場に現はるゝ、二三の野菜を取出て見ん。

『胡蘿蔔』 これは愛嬌のある野菜なり、惣菜には大根、油揚、芋、蒟蒻などゝ、ノッペイにす。

△太煮 其名の如く大きなるものを厚く切り、

適宜に風味をつけて煮るなり。

△浸し物　若きものは葉莖ともに湯煮し、胡麻にて食す。

△和物　白あへ、芥子また罌粟あへ、胡麻味噌或は胡桃味噌あへにす。

『牛蒡』　胡蘿蔔を女と見れば、牛蒡は男とも見るべきか、惣菜にはもぎ牛蒡の煮しめ、きんぴら等。

△けんちん巻　太き牛蒡の皮を、庖丁にてよく刮げ、五六寸ばかりに切り、ざつと湯煮し、竪に庖丁を入れてぐる〳〵切廻はし、平になりたるを、おし延して、椎茸、三つ葉などを並べ、端より巻き、そを油にて揚げ、小口切にして皿に盛る。

△笹がきよせ　例の如くさゝがきにし、うどん粉に湯葉をすり混せたる中に入れ、油にて揚ぐ、取合せには、椎茸、岩茸、しめじ茸、三つ葉、芹、根芋、獨活、葱、菊菜何にてもよし。

△大錢煮　よく上皮をころげ、一分ぐらゐに十はかり皮め際まで庖丁にて切込み、飯のとり湯と水にて湯煮し、取出して牛蒡のシンに穴をあけ、其處に細き湯葉を通して後先を結び、さて味淋五分、醤油三分、水二分位の加減にてよく煮つめ、蓋物に入れて客に出す。

『葱』　おひ〳〵風味を加ふ、惣菜には汁の實、酢味噌あへ、鍋燒の相手などよし。

△難波煮　鰹節の味汁にてつけ合せよき物と煮たる中へ、餅を入れたるものを云ふ。

△酢味噌和　一寸程に切り、よく湯煮して酢味噌にまぜ、鯨の平小切、鮪の賽の目、赤貝またさるぼう貝などを加ふ、惣菜には油揚などよし。

△田樂　よき白根のところを一寸ばかりに切りこれも幾つも串にさして燒き、その上に味噌を塗るなり。

『百合根』　これは湯煮して、梅肉あへ、木の芽あへ、酢あへ、鹽煮、小豆餡あへ、もろみかけ、煮しめなどにして食す。

『松茸』　名所として京都の稻荷山名高し、熊手か

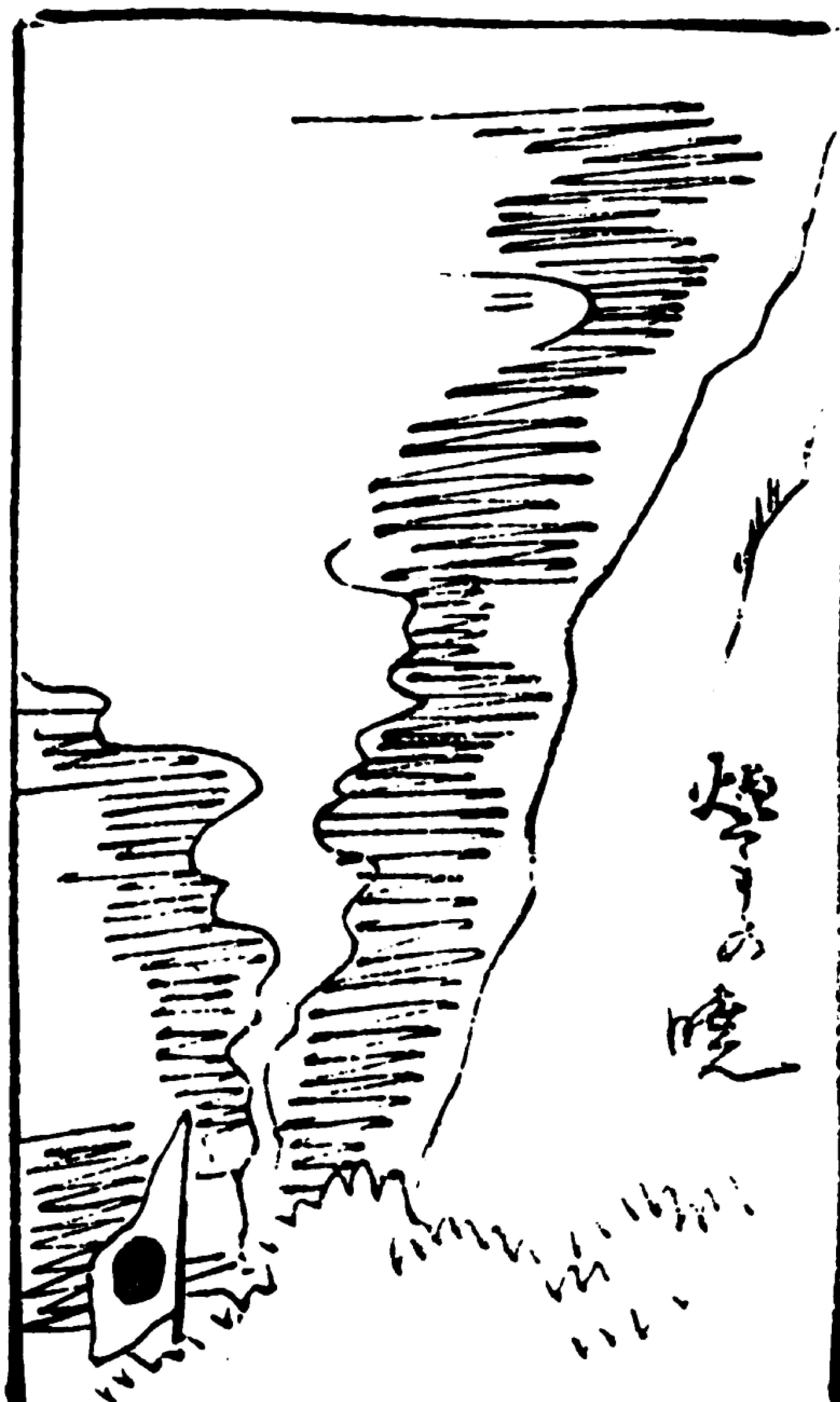
かげて一日の山遊びも妙ならむ。

△蒸松茸　笠茎ともに蒸籠にて蒸し、生醤油または山椒味噌、山葵味噌にて箸にす。

△土瓶蒸　これは土瓶に水を半分ばかり入れ、其水を沸らせ、其中へ松茸を全のまゝ入れ、蓋を覆ひ口を塞ぎ、でと〳〵音するを待ちて松茸を出し、そを割きて、柚酢醤油にて食す

△煮松茸　よきほどに裂きて、空鍋にてざッと煮つけ、これに柚酢醤油をかけ、また胡椒の粉をふるもよし。

△焼松茸　割きまた切りたるを金網にのせて焼き、或は濡紙に全のまゝ包みて煨灰の中に埋め、よき時分に取出し、水に浸して紙を去り、そを引裂きたるものを、柚酢醤油また生醤油にて風味す。



△粒煮　芋の子とも見るべき小さき松茸を、根をすてゝクルリと圓く粒の如く剝きたるを、數多く空鍋に入れて煮りつけ、よくかき交せ、醤油、酒、味淋等にて味をつけ、汁の溜らぬように煮、胡椒の粉多くふりかけて賞翫す。

△龍眼もどき　これも小さき松茸を圓剝にし生麩にて一つ宛包み、榧の油にて揚げ、あしらひには、木茸、獨活、岩茸百合根、三ツ葉、芹、銀杏、海松、青海苔、牛蒡何にてもよし。

△けんちん巻　太き松茸を笠際より切り、根元を取去り、ざッと湯煮し、薄く千切れざるやうに剝廻はして平にし、其上に饂飩粉を塗り、栗、木茸、

三ッ葉の莖などを置き、端より卷きて、胡麻また榧の油にて揚げ、小口に切る。

右の外味噌煮、葛煮、田樂、浸し物、三杯酢などにして、風味いづれもよし。

汁

『初茸』　つまみ菜をはなして、汁の實とす。

『燒鮎』　つけあはせには根芋などよし。

『芝海老』　松露を添ふ。

其外身蜆に萵苣、むすび干瓢に刀豆、鮑の薄切に青昆布、鯊の片身おろしに銀杏大根などは、この期の汁の粉としてとり合せよきものなるべし、副味は青山椒、柚子などを用ふ。

吸物

『ゑそ』　骨切にし、松茸をあしらふ。

『黑鯛』　切身にして粒初茸をあしらふ。

『章魚』　ひら〳〵に切り、小茄子四つ切を加ふ。

『蛤』　剝きたるに靑昆布を添ふ、

膾

この期に於ける魚類は、鱸、めじ鰹、鯒、針魚、鮪、いなだ、きはだ鮪、鰯、鯊、鮭、鯉等なるべし。

鱸、きはだ鮪は平づくりにし、めじ鰹は賽の目、鯒鮪は薄作、針魚、鰯、鯊、鮭、鯉は細づくり、いなだは皮ながら細づくりにし、鰯は頭と骨とを去り、鱸、めじ鰹は山葵醤油、鯒は辛子酢味噌、鮪は二杯酢、針魚、いなだは蓼酢、鰯は生姜酢、きはだ鮪、鮭、鯊、鯉は生醤油にて食するが通例のやう也、あしらひには山葵、紫蘇の實、大根の短冊切等適宜に用ふべし。

刺身

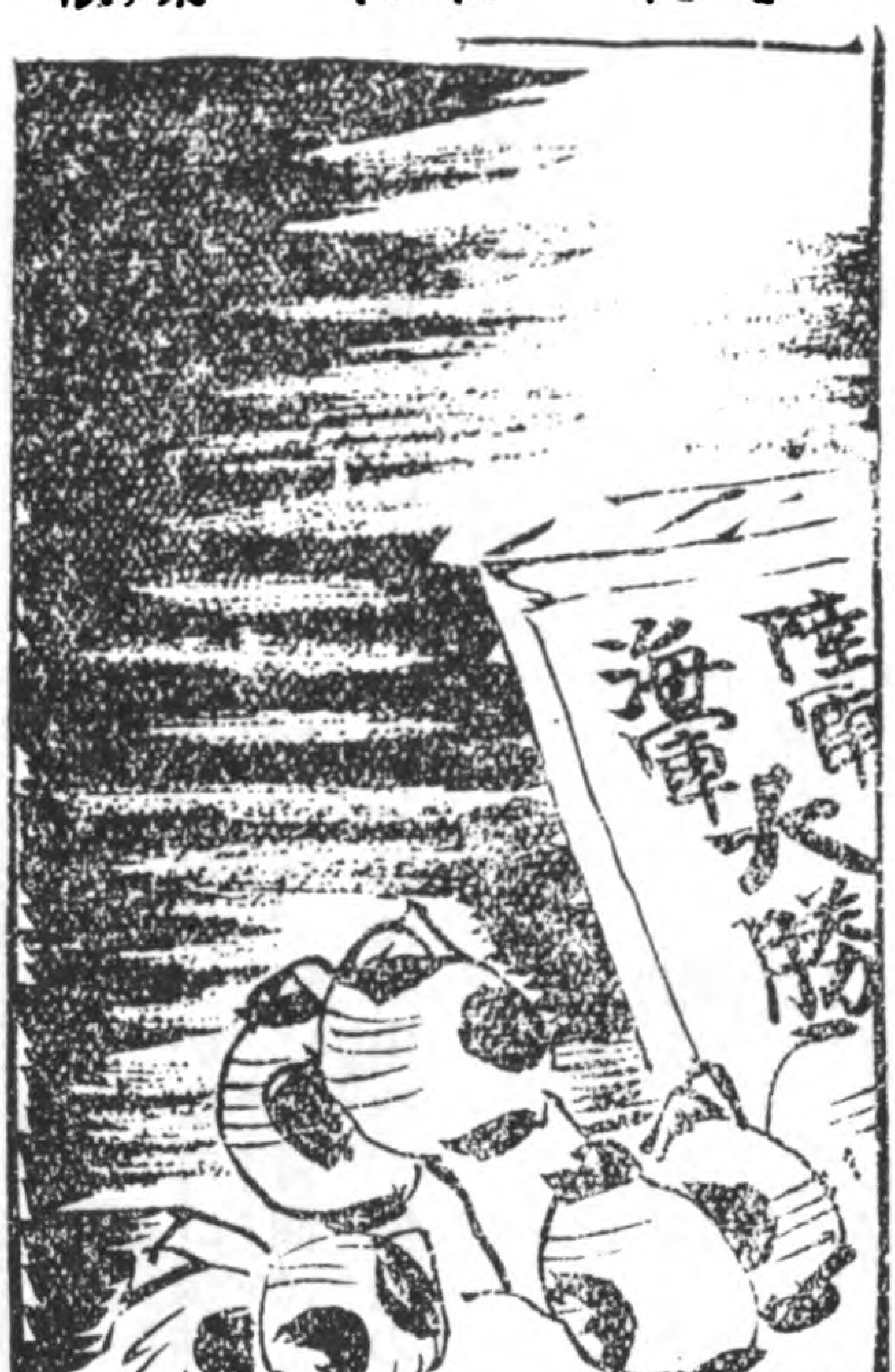
『鯒』　細づくりにし、鮑の纖うちをあしらひ、生姜酢にて食す。

『鯛』　紙鹽にし、薄くつくりて、煎酒酢にて食す、紙鹽とは美濃紙などにて包み、その上より鹽を引く也。

其の外赤貝、ばか貝、針魚など時候の物なり。

和物

『百合根』　零餘子を加へて、梅肉にてあへる。
『柿』　小角に切り、茗荷を湯煮して立に切りたるを添へ、青味噌にてあへる。
『小芋』　四つ半に切り、松茸の笠を薄く切りたるを合せ、柚味噌にて、
『赤貝』　赤貝を薄くへぎたるに、茗荷を繊にうちたるとを、山葵味噌にて、
『榮螺』　細く切りたるに蓮根らん切を、胡麻味噌にて、
『身蜆』　蜆のむき身に葉人參の五分切をまぜ、山椒味噌にて、
『伊勢蝦』　その茹でたる肉を裂き、腦漿を去り、味醂に少し鹽を加へ、酢にてあへる。
なほ條分とて、鮹の黑胡麻あへ、身蜆の青あへ、松茸の白あへなど、三色の趣向また面白からずや。



『刀豆』煮物　實の入りたる豆をこはれぬやうに湯煮し砂糖に鹽を加へててり燒にす。
『柚』　皮をよく茹で、味淋、鹽、砂糖にててり燒く。
『初茸』　莖を切り、笠に鹽をふりかけ、空鍋にて煮付け、青海苔をかけて出す、
『いなだ』　これを酢煮し干芋莖の煮しめを加ふ。
『燒鮒』　煮浸しにして、蓮根の鹽煮をあしらふ。
『鰯』　三枚にへぎて、其肉を器に入れて蒸し、水氣をしたみおろし、山葵あんかけにて出す。
又丸のまゝ腸を取りて蒸し、生姜酢にするもよし。
『章魚』　やはらかく煮て、じねん薯のうま煮をあしらへば妙。

『慈姑』　串にさし、胡麻醤油に酒を加へて塗り、つよき火にて焼くなり。

炙物

『刀豆』　茄子の鴫焼の如くする、一風味あり。

『子持鮎』　ほんのりと焼きたる上に、山の芋と蕃椒味噌のませたるを置きて、更に焼くなり。

『鰤』　一夜鹽にして焼き、青海苔をあしらふ。

『鰹』　小賽に切り、糀に柚の皮をすりませ、醤油にてときたるを付焼にす。

『きはだ鮪』　葱の白根を繊にうちて炮烙に敷き、火にかけて少し焼けたる時、鮪を刺身やうに作りて上へ並べ、そを焼きて色の變りたる時、器に取出して煮返し醤油をかける、これを傳法焼と稱ふ。

『鯰』　生醤油に胡山椒を交せ付焼にす、鯰の利久焼とはこれなり。

『小鱸』　尾首を取り、蕃椒味噌にて焼く。

『鮑』　角に切りたるを、山椒味噌にて焼く。

揚物

揚物また、おひ〳〵季節に向ひたり。

『紫蘇の實』　穂の莖をのこして、一本づゝ精進あげにす。

『生薑』　莖を一寸ばかりつけ、四つ割にして、

『松茸』　蕾のうちよし、立に薄く切りて、

『鱧』　骨切をなし、そをまた細く切りて、

『鱵』　三枚におろし、その肉を、

『鯒』　細く切りて、

『鰶』　骨をとり、身をたゝきよせて、

『伊勢蝦』　皮を剝き、首をとり、尾をつけて、

『鮃』　肉をたゝき、山の芋と饂飩粉に鹽を入れてすり交せたるものへ、銀杏、木茸の類をつき加へて衣なしにあげる、一種かはりたる料理なり。

浸し物

『長芋』　繊に切り、ザッと湯煮し、生醤油にて、

『水菜』　湯煮し、からし醤油にて、

『黄菊』　花をちらし、ザッと茹で、蕃椒酢にて、

『紫蕨』　太き莖を揃へて湯煮し、からし酢にて、

『萵苣』亂切にし、生姜を細く切交せ、酢醤油、
『蓮芋』小口切にし、酢醤油にし、胡麻振掛く、

香の物

この期は甚だ不景氣なり、
『小茄子』こゝには季生のものを云ふ。
△達摩漬　二つに割り、中身をとり、甘鹽にて押漬にす、其形達摩に似たるを以て、
△辛子漬　鹽をから目に二三日漬け、ざッと日に乾し、茄子を漬けたる鹽水にて芥子を掻き、麹を入れてよくかき交ぜ、壷などにつけ込み、よく押つけて目貼せば、長き月日を貯ふを得べし。
『紫蘇の實』よく穂の先に虫の居るものなれば注意し、鹽水にてよく洗ひ、そをまた清水にすゝぎ、水を切り、芥子漬にす。



なほ牛蒡、生姜の味噌漬、山葵、柹の糟漬などよし

献立の一例

『本膳汁』赤味噌にて鮑、蜆、焼豆腐、或は白魚蕪の輪切に乾海苔を揉かけるもよし、
『同膾』赤貝、揉松魚、夕顔、青海苔の二杯酢、或は鯛、鮑、伊勢海老、山葵、芋莖、
『同壺』白味噌にて大牡蠣、慈姑、木茸、
『同刺身』鮑、榮螺、生姜味噌、或はいり酒にて鯉の細づくりに岩茸、三島海苔、山葵、
『焼物』海老の鎌倉焼、
『平』雁、人参の皮剝きて丸く切りたるもの、芹の根、
『茶碗盛』葛煮の初芹と山葵、
『大猪口』きん玉子、揚牛蒡の味噌かけ、

[illegible]木村順吉
藥劑師歌橋又三郎先生發明（特許出願中）

二十世紀大改良温体具

疝氣すばこ。産前産後の必要はら帶

登録商標



K. U. Gürtel

福壽帶

一名くすりおび

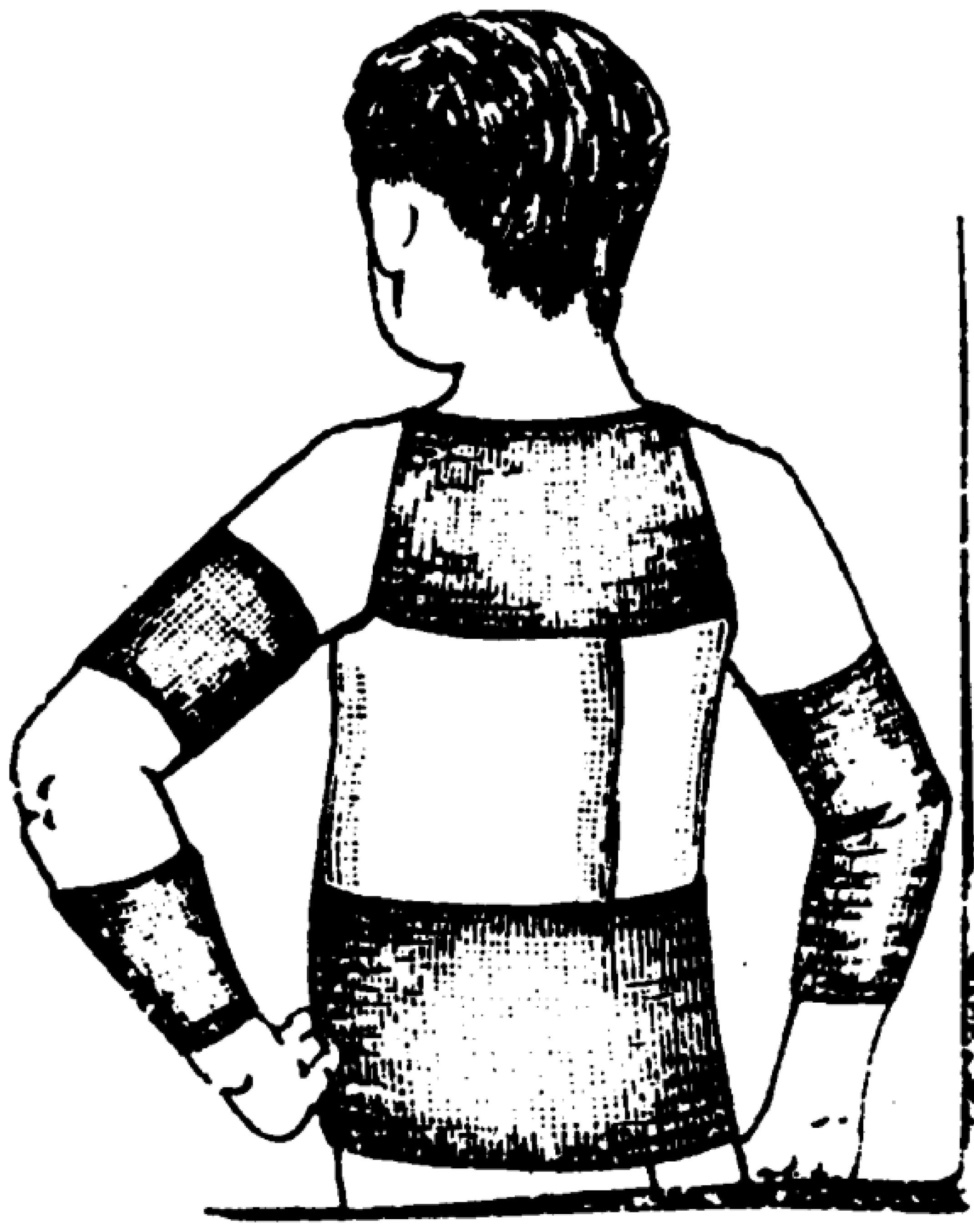
（價　定）

一號五十錢　二號七十五錢
三號九十錢　四號一圓五十錢
五號二圓　小包料十錢

其他大小名種御注文に應じ調製仕候

●福壽帶くすりおびは健康保全の目的に適し身體局部の防寒要具なり●防寒、保温、驅蟲防疫消炎等の効あり●總て寒冒によりて起る處の種々の病を豫防す●胃加答兒、腸加答兒、子宮病、腎臟病、膀胱加答兒、咽喉頭加答兒等に効あり●動物電氣を刺衝するの効力有により電氣帶の代用をなす●特に冷性の人又は小兒の腹帶として常に用ゆれば腹部温めねびえせず小便を遠くするを以て寢小便の癖ある者に奇効あり●四季の變換する時殊に入梅の節に最も必要とす●害虫を驅除する効あるにより單人軍屬旅行者には最も必要なる衛生具なり●産前産後に用ゐて母子の健康を保全す男女老幼とも四季の別なく腹帶として使用すれば無病健康なるべし●効能を主として處飾を省き美麗なる箱入に製造しあるも廉償なるを以て姙婦、産婦旅行者等への進物用に適當す、くわしくは能書に有

福壽帶ヲ身體各部ノ疫患ニ應用シタル圖



處方調劑
ヘモグロビン大販賣
諸藥品販賣
特約大販賣店

東京日橋區駿河町十一番地

發賣元　歌橋輔仁堂

東京牛下宮比町尾澤藥店。
横濱市辨天通二丁目丸善藥店
其他各地有名藥店にて販賣す



報國婦人會（口繪參照）

一 記 者

日露の平和一度び破れて、世界に例しまれなる大戰爭端なくも開かれ、大和猛雄の多數が各々その擔へる護國の重任を盡すべき時機の熟したる已來は、出て軍に從へるものはいふに及ばず、否らざるものも内に外に、朝に野に、適宜の方法によりて君國のため鋭意自己の職掌または義務を盡すに努めつゝあることは言ふまでもないが、獨り男子のみならず、巾幗社會に於ても、交戰後は頓みに活氣を呈しきたりて、微力ながら恤兵に、慰問に、あるは救助に、あるは授產に、あるは看護に、あるは犒軍に、その纖手をあらゆる方面に伸ばしつゝ軍國の事業に後援を與へて居る。而して現今活動しつゝある全國幾十種の婦人團體の中には、數年前の設立に係るものと開戰後に至つてあらたに組織されたものとの二種あるが、こゝに記さんとする『報國婦人會』は後者に屬すべき團體の一であつて、今春來都下に於て新たに一旗幟を飜へしつゝ働いて居るものである。

然らば本會はいかなる性質の團體なりやといふに、一口にいへば、一種の恤兵團體といつても解らぬでないけれど、その起源及び現況に關して少しく記いて見やうと思ふ。さて日露戰爭後間もなき本年三月頃、今日はたとひ女子なりとて悠々坐食日を送るべき秋にあらじ、何とかして報國の微意を盡さばやと

て、樺山伯爵、谷子爵、山地子爵、乃木男爵、阪井、佐藤、別役、輿倉、平非等の各夫人等相謀りて恤兵主義の一團體を設けんことを企て、その後志を同うせる姉妹達を集めて組織されたのが、即ちこの報國婦人會である。『出征軍人の被服の一部を裁縫し、それより得たる工賃を以て恤兵及び其他の救助に充つる』といふのが設立の主旨で、會場を内幸町なる黒住敎會の内に設け、存立の期間はまづ日露交戰中とさだめ、會員の數は未だ二百にも滿たぬ小團體ながら、理事の樺山伯爵夫人、谷子爵夫人をはじめ會員一同いづれも名よりは實を求め、溢るゝばかりの熱心を以て、手順好く業を執られつゝあれば、人員の寡きに比して成績は見るべきものがあるさうだ。會場の設備より會員の作業、服裝等にいたるまで、ひたすら節儉と勤勉とを旨とするの外、いさゝかも華奢に流がれ虛勢を張るやうな風のないところは、よく報國恤兵の意を得たるものと認められる。平常ならば荒き風をもいとふべき貴夫人令孃の、現時の時局に顧りみて、一旦決心の臍を固め、甞つて斯會を起されたる已來は、風雨炎天も厭はゞこそ、自用の器械を携へ、日々會場に出勤し、技藝の練習にはげみ、成績の優劣を競ひ、談話を交ゆることさへまれに、晝餐時間の外は殆どミシンの音響のたゆる間なきまでに勤勞されつゝあるを見れば、古への後鉢卷、玉襷の面影は、面のあたり視るべからざるまでも、何となく想像に浮んで來るやうだ。

約五十疊許りの廣さもあらうかと思ふ會場内には、十五六脚の裁縫臺を据ゑて置いて、數十名の會員は朝八時より夕四時までこの臺を圍みつゝ一生懸命に作業して居る。原料の服地を小山のやうに積累ね、下縫をする人もあればミシンを掛ける人もあり、紐を通す人もあれば釦を附ける人もある。作業は隨分細かい忙しい作業であるけれど、種類は整然と極つて居て軍人の襯衣、洋袴、脊負袋の類を裁縫するのみの事なれば、これは女子には頗る適當したる業務であると思ふ。すこし練習さへすれば誰でも出來ぬ

といふことはない。近者はいづれも巧者になつて、教師の手を要せざるは勿論、いかに嚴密なる檢査を受けても、縫直し抔といふものは稀れに、仕立方の如きも一體に叮嚀に、丈夫で、耐久力に富み、坊間の請受品とは餘程撰を異にする所あれば、被服廠の係官も滿足を表するやうになつて來たけれど、はじめの内は却々巧く出來ないので、特に數名の授業者を雇入れて習はせたさうだ。また現在の會員をば一、二、三の三班に分けて、各班をして相競ふて作業に勵ましむる方法を執つて居るので、自然工程の進捗を速かならしむる。なほ會員中には日時を定めて來ることの出來ぬ人もあれば、一の便法を設けてさういふ人は、作業熟達の上は、自宅に於て裁縫しても差支ないとのことである。こゝに同會の役員たる理事、幹事並びに評議員諸氏の氏名を記せば

理事　伯爵夫人樺山登茂子　同子爵夫人谷　玖璃子
幹事長前子爵夫人山地謙子　幹事男爵夫人乃木靜子
同　平井　豊子　同　松村　琴子
同　山川　操子　同　木村まん子
同　豊島　文子　同　横井　光子
同　吉田　定子　同　阪井　春子
同　佐藤　猶子　同　別役ユカ子
同　與倉　鶴子　同　土佐さと子
評議員　子爵　谷　干城　同　阪井　重季
同　佐藤　正　同　別役　成義
同　平井　信義

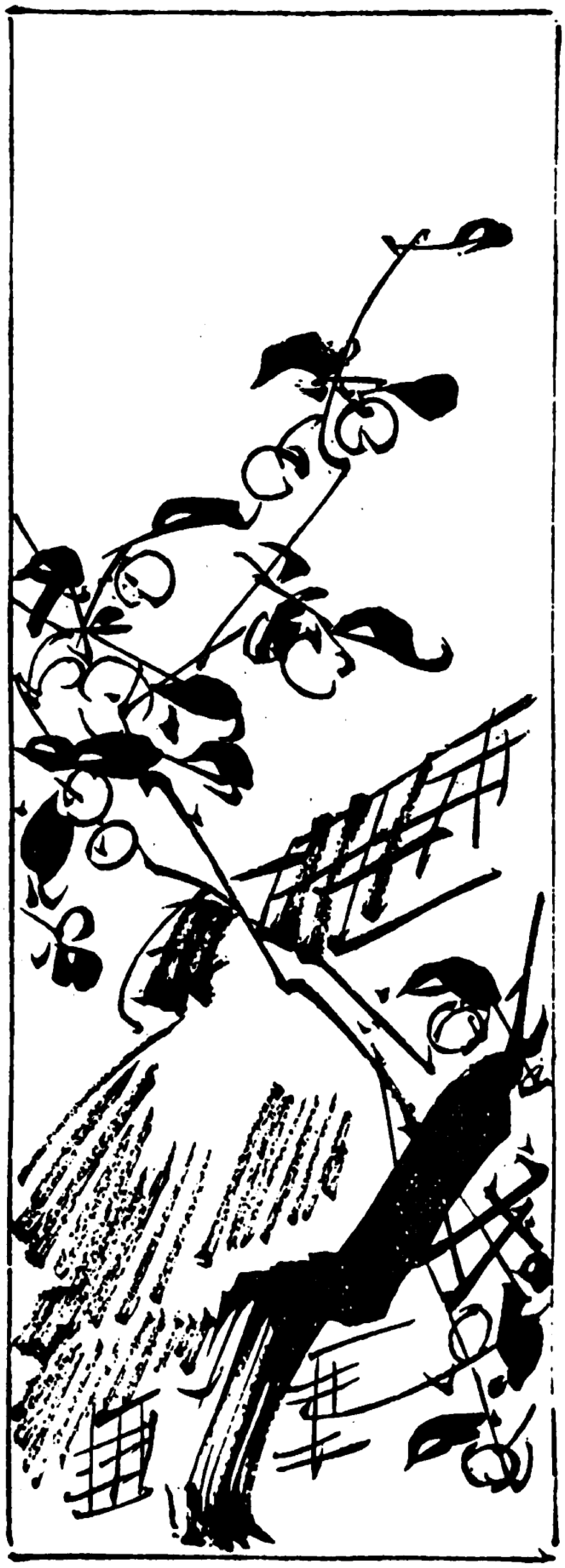
この他に會員と稱する人は百五六十名あつて、中には一人の米國婦人さへ加入つて居る。右役員の外會員中には名譽だの、特別だの、通常だのといふやうな區別は設けない。また會費抔といふものを要せない。會場へ出て作業の手傳ひをする人は、誰でも會員となり得るのだ。會場に往つて見ると、頭上霜をいたゞける貴夫人や、束髮の奧樣は、年わかき令孃と入交つてひとしく骨折つて居られる。年齡や身分や、服裝には差異もあれ、心魂は孰れもおなじ報國恤兵の鎖を以てつながれたる一團の大和撫子は軍國多事の折柄なれば、家事も定めし忙がしかるべき

に、枉げて力をこゝに割き、時も金も吝む色なく、日々數十名づゝ交番に會場に來りて作業を執るのである。殊に去八月の如きは、燬くが如き炎暑苦熱をも忍び、着衣の流汗だらけになつて了ふのをも厭はで、二千服の襯衣袴下を仕上げたといふ事だ。これは會員が原料を自宅へ持歸つて、家族のものにも手傳ひさせ、一人で三人前の業務をした人が多數あつた爲めであるとの事なれど、兎にも角にも殊勝の至りである。旅順に、遼陽に、その他滿韓の各地に出でゝ征戰に從ひつゝある我が雄將猛卒は、日夜その肢體に纏ふて居る襯衣の裏には、いふにいはれぬある珍貨の縫込まれてあることを發見し得たかどうだか聞きたいものである。

現時恤兵を目的とする所ろの婦人團體多きが如きも採る所ろの道は殆ど同一である。本會のやうに會員の勞力を以て恤兵資本とする方法を執るものは他に見當らないやうだ。本會は軍人の被服裁縫を引受けて、被服廠より下附さるゝ工賃の内より時としてその一部分を差引くこともあれど、工料の全額はいつも殆ど恤兵費として寄附するといふ事で、一寸面白い趣向である。創業の當時は彼是少なからぬ費用がかゝつたとのことなれど、それは大抵發起人の方の持寄で以て辨じたさうだ。原料の服地だけは被服廠より下渡さるゝけれど、これを縫ふ絲とか、針とか紐とか、釦とかいふものは自分持である。此等は所得の工賃、會員の寄附金等にて之れを補ふて居るが、間々自費で辨ずる人もあるさうな。ミシン器械の如きは會員は可成自宅のものを持參して間に合せて居るが、中には新たに購求された人もある位だ。今春開場以來九月初めまでの成績を聞くに、調製された服數は、兎に角數千領の多きに達するさうだけれど、何分少數會員の力では多大なる需要に應じかぬるより、同會に於ては、此際心ある婦人の續々來りて入會し、如上の作業を幇けてなるべく仕立高の増加せんことを望んで居る。

本會の作業は赤十字社の内に設けられてある篤志看

護婦人會の繃帶製造と好一對の事業であつて、恰かも時局に對する我が貴婦人界の活動の一端として見て差支ないのである。唯だ本會の方は創業日なほ淺き事とて稍々小規模であるのだ。何事にまれ兎角虛飾に陷り易きが上流婦人の常なるを、本會は斷然この弊を擯けて、あくまで質素に、あくまで熱誠に鐚一文の報酬だも求めずして一意軍國婦人たる責任を盡しつゝあるは喜ぶべきことである。希くば同會が存在するその間は、いつまでも斯主義を失墜しないやうに望む。否な時局平和に歸へりて解會する後に至りても斯精神だけは何とか遺して置きたいものである。否、能ふべくんば報國婦人會そのものも此儘永設の團體と爲して益々發達進歩せしめたいものだ。昨年度の豫算に據れば、陸海軍兩省を併せて、被服費は經常費だけでも五百五十五萬七千九百餘圓に達して居るとのことなれば、これに要する裁縫賃も却々少額では濟むまいと思ふ。故に之が節減策として、本會の如き團體を將來各鎭守府及び師團所在地等に設けて、無料若くは廉價に軍隊の被服を裁縫する事業を起したら如何であらうか。獨逸聯邦の某國では現にこの方法



を探つて試みて居る所があるさうだ。男子が血税を拂ふ代りに、女子も平素國家に對して、此位な義務を献げるのは當然の事ではあるまいか。此點より考へて見ると、吾輩は本會に對して、その擴張と永續を望まざるを得ないのだ。

滿洲所見錄

第二軍附從軍記者　園田紅村

一　滿洲の家庭

滿洲人の家庭の狀況を申述べます前に、先づ家屋の搆造の大略から申述べて見ませう。

御承知の通り、滿洲は、冬が誠に寒うございますから、家屋も之に應じて防寒的に出來て居る、石や土を以て四壁をキッチリ塗り付けて僅かに一方だけ出這入りの口が開いて居るだけです。そしてこれは我國の長屋風に製らへてあつて一棟に四五戸の家庭が并んで居るのです、家の高さも僅かに二間位しかありませんから、遠くから見ますと、全然土穴同然でございます。

家の壁は、前に申した、土か石で造つてあり、屋根も土で固めてあるのもあるが、たまには、黍幹や、麥稈のやうな者で葺いたものもあります。ところで、内へ這入つて見ると驚いた、何故つて云ふと、家具が一もないことです、もつとも、鍋や湯沸や茶碗に箸ぐらゐはあるけれど、其他は何も無いといつて宜しい、日本のやうに、簞笥、長持、鏡臺なんて、そんな洒落たものは一つもない、そんな者どころか、朝晩必要な、火鉢もなければ、茶簞笥もないのであります。

右は貧民の家屋の狀態でありますが、中以上になると、少し趣が違ふ、其風は、先づ屋敷の周圍は、石か煉瓦の高壁を築いて以て、一見、城壁の如な觀がある處がまゝある、其内に例の長屋が幾棟も立てられてあるが、其家は大厦高樓とは、云へないまでも隨分大きい家がないでもない、けれど其室内の有

樣は、下層住民の家屋と大差はないのです、只少し奇麗なのと、不潔なのとの差別がある位に過ぎません。

門は、家に比較しては、甚だ大きい、これは、門を高くして三公を出すと、昔しの人が云つた、故智を襲ふて居るわけでもあるまいが、なにしろ、巍然たる大門が聳へて居る、それはよいけれど、何時でも、チヤンと閉めてゐるのには、驚くの外はない、用があるときは、開門々々と幾度も呼ばなければ、開いてくれないのです。この門を閉めるのも壁を高うするのも盜賊の闖入に備へたのでせう。支那は至る所に馬賊のやうな山賊が多いから、何時其襲擊を蒙らないとも限らないからです。

扨て、滿洲で一番働くものは、男に限つて居るのです、耕作の事は、固よりのこと、炊事や、掃除や、何でも彼でも皆男がやつて居る、女は、何も致しませぬ、農業や牧畜のことに、從事するなどゝは思ひも寄らないことです、何故と云へば、彼等は、足が小さい其大さは七八才の子供のやうで、其步行するときは、宛然鶩の步くやうで厶います、こんなことだから、どうして〳〵勞働に服されませうか。

彼等は、前に申した通り、臺所も務めなければ、掃除もしない、彼等の役目は、唯々內にあつて、子を產むのばかりでありませう。云はゞ日本の藝娼妓同樣不生產的の動物だと申しても、強ち酷評とは申されますまい。しかし、只一つだけは、取り柄があります、何だと申すと、刺繡の技に秀でゝ居ると云ふことです、見たことはありませんが、大相うまいと云ふことです。

要するに滿洲の婦人に就いては、愛想が盡きる點が多い、これらが亡國の素因を爲したのかも知れない。さてこの可憐の亡國婦人を、如何に敎育して人并みの人間と爲すかと云ふことは、實に問題でありますが、結局我日本政府でも、これを引受けて、開發誘導の任に當り、至る所に先づ小學校を設けて、強制的に男女の少年を入學せしめ、新智識を與へると同

時に、其固陋の風と、因循の俗とを矯正せねばなるまい。

しかし、これとても中々骨が折れませう、何故かと申すと、満洲地方は、女に限らず、男子すらも、教育の無い、教育どころか目に一丁字の無いものばかりである、それでこれから満洲を啓發しようと云ふには、先づ男子の方から、先きに教育せなければならないと云ふ必要もあるし。又満洲の女子は、家にばつかり引籠つて居て、決して外出をしないのである、他人に顔を見らるゝのを深く恥とする相だ。長恨歌に楊貴妃を歌つて、養はれて深窓に在つて人いまだ知らずと書いてある、これで見ると楊貴妃は、十七八歳の花盛りまで、嘗て人に顔を見せなんだと見える、されば、満洲の今の風俗も遠く昔から在り來つたことだらう。日本の氣障な髙襟式海老茶式部の如に、生意氣に片言交りの英語を囀り乍ら、自轉車などで、處構はず駈け廻るのも困るが、満洲の婦人の如に、因循で家にばかり隠れて居るのも随分厄介だ。

婦人の風俗に就いて、一寸申上げますが。満洲の婦人は概して、體格が大きくて、色が白くて、眉目美い婦人が多いやうで厶います、先づ頭髪の風から申し上げますと、總髪を一つに束ね、不恰好な、束髪風に後の方に結つて、目の荒い網を之れに掛けて居るさまは、丁度日本で一時流行つた束髪を見るやうですが、あれよりも、餘程不様で厶います。

耳は兩方とも子供の時から環を吊ら下げて居る、盛装した時は、派手な銀簪を花の如くに二本位挿して居て耳の環にも銀の飾りを澤山くつ着けて、小さひ子供の様な靴を穿いて、鵞の行列も宜しくと云ふ鹽梅に、市中を練つて歩く有様は、我等の目には、どう見ても純然たるポンチ繪だ。衣服は、淺黄の巾の廣い筒袖と、同しく巾の廣いズボンとを着て居ます。併しこれは、大連灣附近や、金州城内等で見た婦人の有様なんであります、それ以北には、決して一人の婦人をも見ない、思ふに金州大連灣邊は、早く我軍

の占領に歸し、既に永く我仁政に浴して、我兵の秋毫も犯す所ないと云ふことを知つて居るから、四民其堵に安じて、斯く婦人までも逃げ隠れせずに居るのだが、北方も追々我仁政に懐いて、婦人も其姿を現はすやうになるのだらう。

私は、此大石橋邊の婦女の有様を是非諸孃に御知らせしたい考へで、大石橋病院に入院中、實は市中まで疾を勤めて行つて、婦人の探險に出掛けたが、市中至る所を探して〱、とう〱一人の婦人を見當らなかつた。

余は日本の文士で、敢て非行を其身に加へるものでないが、是非婦人を一見さしてくれないかと、土人の物の解り相な奴に頼んだけれど、街上婦人あるなしと云つて、どうしても見せなかつた。彼れ是れする内に一軒例の城廓的の屋敷があつた、鐵門が鎖してあつたが、恰も好し、私が通り掛つた時其門が内からギーと明いた、これ倔強と思つたから、突然内へ飛び込んだ、主人は別段拒む風はなくて私を入れて居た、又門を閉めました、其家の構造は、表の通りに併行して一軒の母屋見たようなものがあり、其奥には、大きな長屋風の家が軒を違へて二棟ほど建てられてあつた。

こゝこそ姫君でざんなれ、とぬき足さし足！ とまでは行かないが、そつと窺いて見たら、失望落膽！ 内は空屋で、安達が原は此處なるか、堆きものは、生ま〱しい人の骨！

そんなことは、全く以て嘘だけれど、婦人は愚か、猫一匹も居ないで、唯蒼蝿がボン〱して居るのでありました。ア、忌ま〱しいと思つたけれども仕方がありませんから、復た門を開かせて出て行つた。行くこと四五丁、表を餘程離れた裏長屋の如な、見すぼらしい一軒の家に、小兒の泣き聲がするのである、占めた！ 小兒の居る位なら無論其母たるべき者が居ない筈はあるまい、こゝ一番見ものだと思つて、足早に進んで既に其家に近づかうとするとき、出たり出たり、五六匹の大きな、土佐犬の如な意

地の悪い犬が、ワン〳〵〳〵と、四方八方から私を包圍攻撃をしたのであります。もう噛み付き相な見幕、私もこれには、膽を潰して仕舞ひました、何故とおつしやい、只白色に赤十字の着いた、病衣を一枚着て居るのみで、身に寸鐵を帶びて居ないのです嘗て身を離したことのない、ピストルでさへ、生憎今日は持つて居なんだのです。既に噛まれようとした途端に一人の支那人が飛んで來て、犬を追つ拂つてくれたから、危い處を遁れて、小兒の泣いて居る所に行つて見ると、又も落膽、十四五の男の子が五つ位の女の子の泣くのを、宥め賺して居るのでありました、家の内を窺いて見ても何も居ないから、仕方なしにとう〳〵歸つて來たのであります。

追々王澤に潤ふに隨れて、婦人も顔を出すだらうと、考へますから、追つては、諸嬢のお目を汚す節もあらうと存じます。

滿洲人の家庭と云ふ題目では、餘り漠とした事に爲りましたが、要するに、滿洲も矢張東洋的の男尊女卑でありませうが、女は家に尻を据ゑて居て、男のみが汗水垂して働くのでありますから、内實は、極端の女尊男卑になる譯で厶います。

序に今一つ申して置きたいのは、支那人の家の不潔な事です。甚だ尾籠でありますが、土臺支那では、廁の設けが厶いませぬ、で家外は至る所、黄金の花が一ぱい咲いて居ると云ふ有樣、誠に以て鼻持のならない有樣で厶います。

それに又蠅の居ること〻云つたら夥しい、どんな小さい部屋でも幾千萬匹の蠅が居るのであります、晝でも蚊帳でも吊らなくちや、とても寢られないのですが、夜でも燈火をつけて置いたら、ポン〳〵出て來て堪りませぬ。それに又南京蟲や床蟲と云ふ奴が出て、人を惱ますのには、閉口で厶います。

それから、今一つ嫌やなのは、古人が之を親むこと芝蘭の如く、これを惡むこと蛇蝎の如し、と申した、この蝎です、これは四五寸位の虫ですが、これに遭られると、早く外科手術を施さなくちや、往々死ん

で仕舞うと云ふことで厶います。

二　滿洲の男子

前の題で女子のことは、略々申上げましたから、ここでは男子のことを、少しばかり話して見ませう。筆級を分てば、幾らにもなりませうが、先づ上流の人と、商人と、苦力、この三つに分けた方が宜しうございませう、上流の人とても相變らずの支那人のことでありますから、日本の上流の人など丶、比べものにならないことは、勿論で厶います。

商人　家に店を出して居るのと、大道商人との二種あります、屋内商人は、店先きに、財恒に足る、財源繁茂など大きく赤い紙に書いて貼つてあります、種々な鑵詰を賣つて居るのもあるし、紙や茶などを賣て居る所もあれば、金州城でも熊岳城でも、大石橋でも、日本の詰らない田舍店の方が、餘程增です。大道商人は、麵包類や素麵、鷄卵などを賣つて居る、鷄卵一個の價が二錢五厘、平生は一個七厘位の者だと云ふことです、もつとも相互では、十錢に付十個位で賣買する相だが、日本人と見ると中々廉くはまけない。

苦力と申しますと、日本では、土方人足、車夫馬丁の仲間であるが、其汚いこと丶云つたら、何ともお話しになりません。蒜、韮の如な臭いものを生で食ふから、口の臭さいこと、頭痛がする位です、それに又、食物は黃粱の飯を食べて居るので厶います、吾々の殘飯でも、やらう者なら、平身低頭して喜ぶので厶います、そして川の水でも沼の水でも、濁つて居るのも構はずに、ガブ／＼飲むさま、全然牛馬同樣人間の種屬にこんなのがあるかと思はれる位です、これに比ると、東京の立ん坊の方が餘程上等です。

今一つ可笑しいのは、馬丁ですが、これは、金州邊では、牛と騾と驢とこの三種を繼ぎ合せて、一つの馬車を引かせて居る、中には牛と騾と豚とに引せて居るには、噴き出さずには居られないのであります。そして竿の端に長い綱を付けた鞭で、これを御しながら、ウイ／＼、チヤ／＼／＼、アダ／＼

〳〵と掛聲して、牛馬を驅つて行く樣は、日本などで、見やうと思つても出來ない圖であります。苦力一人の一日の賃銀七八十錢、馬車一臺八圓で厶いますから、彼等は我軍隊の爲めに、實に多大の恩惠にあづかると申さねばなりません、それで大石橋邊では、米一升の價貳圓、梅干一個金七錢、兵士一日の入費平均八圓に當る相で厶います、何んと驚き入るではムいませんか。

三　滿洲街道所見

滿洲を旅行して、一番先きに目に付くのは、どんな山でも僅かに草が生へて居るばかりで、樹木が絶えて無い事であります、禿げだらの高山が至る所に突兀として、聳へて居るのは奇觀で厶います。
だが土地は隨分膏腴の處と思はれます、碌に肥料も施さないのに、至る所、粟、黍、玉蜀黍などが、青青と繁茂して居るのであります。
それから最も意外なのは、井水が清潔で且つ寒冷であることです、八月炎熱燒くが如き候、井水を汲み

上げて、手をこれに入るれば、餘り寒冷過ぎて、手がしびれる位で厶います、日本ではこんな冷水は、何處にもないのであります。川の水は、山に木が無いせいか、至て少ない、けれども中々清冽であります。
それから、よく目に附くものは、貞婦の旌表であります、これは、大きい石門の如うな者で、貞婦の出でた時、勅命によつて、これを閭門に旌表したのであります。支那には、昔しから、貞婦や、節婦が往往表れたと見えます、遂此頃の事であるが、滿洲の年若い姉妹の婦人が露兵に辱かしめられたのを、悔やしがつて、深淵に身を投じて、相果てたと云ふことが、我國の新聞にも見えて居たやうでありました。
これによく似た話は、昔朱氏の二人の女が、山賊に追ひ掛けられた、其身を汚されるのを厭ふて、斷崖に身を投げて、死んだと云事は、或著名の本に見えて居る。我國の兩國橋邊の投身の如きも、あんな下らない事の爲でなくて、些とは節義の爲にやる樣ならば、幾分か人意を強うする所があるかと思はれるけれど。

日本武士の妻

雨來庵

題して武士の妻といへど、そは武人の妻たるべき道を論せんとにはあらで、只武人の妻なるものが、如何に麗はしく、吾國二千五百年來の史上に、飾られたるかを叙せんとて也、就中、美人と英雄、女子道と武士道との關係は、最も多くの趣味を印跡し、錦上更に一段の光彩を添へて、歴史は常に之が爲に賑ひぬ、されば我國の武人は、夙に忠勇剛毅なりしが如く、その妻女の精神も、亦自ら果斷剛骨の風を帶びて、淸節德操の堅固なる、優に男子の頭上に超絶して、貞良温柔以外、別に氣慨なるもの丶、遙に武士の面影を存したるありき、其事の史論めきたるは今暫く説かず、只日本婦人の龜鑑とも見るべき、古來武人の妻女が、如何にして當世に、其典型を留めたるかを究めんとす。

抑も神代の古きは措て問はず、歴世の皇后が、賢明能く天皇を補佐し給ひて、仁慈能く下を御したるは言ふ迄もなく、神功皇后の如き、勇武實に一世に超絶したるものありき、降て垂仁帝の朝に至り、時の皇后狹穗姫は、兄の謀叛を天皇に告げ奉りて、密に皇室の安全を謀り、身は奔て城中に入り、終に兄と共に無殘の燒死ぞ遂げられける、蓋し皇后の如き、能く恩讐指顧の間に處して、一毛動せず、一死猶且つ女子の德操を透徹したるもの、眞個に日本婦人の淸鑑なるかな、而して身は彼の怒濤狂瀾の間に投じて而も三軍の危急を救ひたる、日本武尊の妃橘姫の行爲は如何に、今も吾妻の名は、關東の地にゆかりを留めて、世に憐れの勇ましき物語をぞ殘しける。

されば上を見習ふの下とてや、斯丶る志操は疾に武將の婦人間に傳はりて、世に種々の譚を殘し丶も亦宜ならずや、斯くて武人の妻女とし云へば、必ず夫と共に其名の汚る丶を第一の恥辱となしぬ、降て源平時代に於ては、愈々此美德をして、專ら婦女子間に發輝せらる丶に至りき、彼の常磐御前の如き、甘

んじて仇家の妾となり、自己百年の貞操を殺して、以て源家の興復を後代に期したるは、言ふ迄もなく身を殺して仁を爲したるもの、其心寧ろ憐なれずや土肥實平が妻は、順逆興廢の道を說きつ、夫を勸めて源賴朝に從はしめ、嘗て一戰石橋山の敗陣にすら志を枉げず、賴朝主從に糧を贈りぬ、彼の瀧口の粗豪漢たる、遠藤武者盛遠をして、荒法師文覺たらしめしものそもや誰ぞ、彼は源渡が妻、世にも稀なる美人のモデルにして。又節婦貞女の典型たる袈裟御前にてありき、彼が道ならぬ横戀慕に逢ひて而も夫に代て命を捨てにき話は、今も猶前代未聞と語り合ひける、之に續いて、源義經の妾白拍子靜は、



鶴ヶ岡の一曲に、鬼のやうなる鎌倉武士を翻弄して、そが愛人たる九郎が爲に、其寃を唄ひし健氣さは、到底尋常婦人の摸し得べからざる、男性的俠骨を示して、猶餘りあるに非ずや、其他巴御前の勇、北條政子の智、何れも後世の典範となすに足るべき、事蹟一々擧げ來れば、紙幅爲に長からん程、古來武人の妻女は、寔にや節義を重んじて、勇敢偏に男子を瞠着せしめぬ、蓋し是れ武士道感化の致す所、如何に士道の精神が、女子道と深く相關聯して、錦上更に一段の美花を添へたるかを見よ。吾人更に降て、鎌倉室町の武家繁昌時代に於て、之を見る、此時代に於ける武人の妻女は、偏に其地位境

遇を重んじて、夫れぞれ自家の面目を全うせんと競ひぬ、松下禪尼が其子、時賴を諷刺せんが爲に、自障子の破れを繕ひたる事蹟は、今も猶人の知る所、事頗る鎖事に屬すと雖も、而も是れ鎌倉勤儉主義の基礎を開始したる、豈是が爲に非ずとせんや、楠夫人が其子正行を奬勵して、能く三代の忠義を全うし鹽谷高貞い妻顔世御前が、一首の古歌に能く高師直が橫戀慕を退けたるが如き、何れも其淸操なる高潔心を以て、實に中世前半の武家婦人が志操を代表しにき。

斯くて應仁以降の戰世となりては、武士の妻女は一入健氣に、一層勇敢の域に進みぬ、そは言ふ迄もなく、時勢の感化、境遇の轉移よりして、世上一般の狀態に添ふたれ共、畢竟するに古來日本撫子の美德を、繼承したるものに非るなからんや、越前の將朝倉義景は、織田信長と戰て敗北し、終に同族の爲に弑せらるゝの不運に逢ひて、其家臣たる鳥居與七郎も、亦三千餘の旗下と共に、あはれ美事の戰死を遂げ畢んぬ、此際此時與七郎が妻某氏は、年猶若くして容姿殊に麗はしければ、理も非も知らぬ織田の軍卒、矢庭に捕て壓へ、あはや怪しかる擧動に及ばんとせしが、妻某は佯つて面を和らげ、殊更愁眉を作りて言ひけるやう、妾が父や夫や、此たびの戰に討死して、今ははや賴り少き身となりぬれば、進みて御意に從ひ申すべき筈なれど、尙母御と姉御との此世に在しませるありて、何處如何なる里に身を逍遙ひ給へるにや、此頃仄に風の便に聞けば、猶此越前の國境なる、或る在所に身の果敢なきを喞ちて、賤が伏屋に詫びしく暮しつる由、あはれ此上の御情には、筆と紙とを貸し給はれ、軈てそを送り屆けらるとだにあらば兎も角も其時にこそ、嬉しき御意にも從ひ參らせんずと、暫し一通の書狀を認め終りて、突然片邊の古井に身を投じて相果てぬ、之を見居たる衆多の軍卒、驚きあはてゝ拯ひ上げゝれども早や事切れて復生くべうも見えざりける、さても此態あはれに思ふ程に、彼の書狀を披き見れば。

世に經ればよしなき雲ぞおほふらん
　いざ入りてまし山の端の月

との一首の歌ぞ記るされぬ、追の軍卒顏見合せて、何れも其貞烈の勇しきに感じ入り、暫し鎧の袖を濡しけるとぞ。

斯くて天正永祿の頃となり、世は益々暗澹たる風雲に掩はれて、矢叫びの聲、劔交ふる音の四方の巷に充ち滿ちて、六十餘州の山河は、只血腥き風の吹き荒むのみとなりぬ、されば此時代に於ける武士道は全く地を拂つて亂倫無道の極みを盡しゝかど、獨り女子道のみは非常に發達して、志想の高尚なる、行爲の勇敢なる、義氣の旺盛なる、多く此時代に見るを得べかりき、若し夫れ古往今來の史を通じて、武士の典型、女子の摸範を求めんか、木村長門守重成夫妻は、實に其第一位にてありき、彼れ重成死する歲二十三、夫人十八歲、絕世の容姿を以て、大阪城中第一の絕品と稱せられたる、智仁勇兼備の英雄兒に嫁す、其好耦素より羨むべきのみ、夫人は眞野氏

の出にして、豐後守賴包が女なり、天來の美貌はいふ迄もなく、資性溫良、才識聰敏にして、當時貞烈無双と稱せられぬ、斯くて花の朝、月の夕、夫妻相歡會すること僅に三歲、偶ま元和三年夏七月、關東五十餘萬の大兵、四方援けなき大阪の孤城を包圍して、之を攻むること愈々急なり、曩には單身江戶城に使ひして、而も大阪の威嚴と君命の重きとを持して、あはれ東國武士の肝膽を寒むからしめたる彼は、早くも君家百年の長計を思ふて止まざりしが、此時全く敗殘の孤城を顧みて、運命の久しからざるを知り、心竊に決する處やありけむ、渠れ食を絕つこと數日、面色自ら憂ひを含みぬ、夫人見て之を察し溫言靜に之を慫慂していふ、去年今福の戰は、眞に天下の視聽を聚めて、關東五十餘萬の師と雖も、容易に手を下し難かりしは、皆人の識る所、是我家の名譽のみならず、君が勇武實に一世に超絕したれば也、今や社稷の存亡宛ら累卵の危きに似たり、此時に臨んで將た何をか願はん、宜しく男子一生の面目

を盡して、當に其死を潔うすべき也と、重成聞て感憤、直に手兵を率ゐ、長曾我部盛親を助けて、井伊直孝を若江の陣に衝く、夫人別るゝに莅み、竊に萬斛の血涙を呑んで、笑て夫壻が決死の行を壯にし、後ち一書を裁して之を陣中に贈り、身は靜に白刄の下に刎ねぬ、其書にいふ。

一樹の蔭、一河の流れ、これ亦多少の縁と承はり候そもおとゝせの比より偕老の枕をなして、唯影の形に添ふが如く、思ひ參らせおもはれまひらせ候、此頃承り候へば、此世限の御催の由、蔭ながら嬉れしく存じ參らせ候、からの項王とやらんは世に猛き武夫なれど、虞代の爲に名殘を惜み木曾の義仲は松殿の局に別れを歎くとかや、されば世に望みつきたる妾の身にて、せめて御身御存生の中に最期いたし、死出の道とやらむにて奉待上候、必ず〳〵秀頼公多年海山の御鴻恩、御忘却なきやう願上げまゐらせ候あら〳〵めでたくかしく。

と、嗚呼何ぞ其言の悲壯淋漓なる、重成書を得て日頃の決心愈々堅く、幾段の勇氣と猛志とは、此際全く新に喚起せられて、寧ろ絶對的氣勢を示さんとはしぬ、重成更に進みて若江の堅壘を衝き、井伊直孝と戰て大に之を破り、後ち馬首を回らして、悠々自刎して斃る、家康首を撿して涙を揮て嘆じていふ、長門守は眞に天下無雙の名將なりと、豈偶然の嘆辭ならんや。

夫れ斯の如く、戰國武士の妻女が、日常其地位名分を明にして、思慮節操の優に一世に超絶したるもの畢竟武士道の感化に非ずや、彼の沈着能く孤城を守りて、北國の驍將佐々成政の圍みを破りたる、前田利家が家臣奥村助右衞門の妻の如き、乃至戰國時代の妻女としては、毫も間然すべからざる智勇と仁慈とを具へ、當時賢婦人の令聞高かりし、明智光秀が女細川忠興夫人の如き、貞烈質に千古に卓絶したるものありき、獨り光秀が女のみに非ず、其妻妻木氏の如き、德高く貞操堅固にして、才色兼ね備はり、

眞に當代有數の佳嬪と稱せられぬ、されば武人の妻女としいへば、同じく夫の所行に傚ふて士道を歩み專ら其體面を傷けざらんことを欲したるが如き、抑も時代の趨勢ともいふべきか。

斯くて女子道は近世期文運の隆盛に逢着し、愈々其精華を發揮して、從容閑雅苟も事に臨んで謬まらず其志操の高潔なる、把持の勇健なる、武士道と共に誠に日本婦人千歲の好模範にてありき、彼の二代將軍德川秀忠の乳母大婆殿の、嘗て本田正信を愼戒し大に勤儉主義を皷吹して、德川初代の驕奢を戒飾したるが如き、春日局の將軍家光の乳母として、德川十五代の基礎を固めたるが如き、其他義士で名高き原惣右衛門が母、堀部安兵衛が妻の如き、何れも義の爲め主の爲に其子や夫を奬まして、武士の體面を保たしめにき話の、後見誰かは龜鑑とせざるべき、其他湯淺元禎の母、小出大助の妻など、而も能く治平の婦人として、家を整へ子女を敎育したるの行跡大に見るを得べかりき、婦人美德の士道に伴ふて、近世に發揚したる亦大ならずや、要するに女士道の第一義は、貞良温順能く事に處して、死も且つ辭せざる勇氣と淸操とを把持するに在りて、苟も朝に甲家に行きて夕に乙家に歸るが如き、浮薄淫奔紊節不貞の徒は、所謂女人の皮を被ふ禽獸にして、到底人類を以て律するの限に非ず、殊には自己の操を破りて他に操を立つると云ふが如き、屢々史乘に見る處なりと雖、これ亦斷じて不可ならざるを得ず、例へば義を成さんが爲に一方に不義を行ひ、能く施さんが爲に能く盜むと同じく、何人か能く之を後世の典範と爲し得べけん、彼の廉耻を重んじ、自己の體面を保つといふこと、是亦女子道の神髓たらざるを得ざる也。

往年新渡戶博士、英文『武士道』を著して、吾國武士の精華を中外に發揚し、大に歐米人の賞讃を博したり、予は切に望む、博士其人の如き、筆を武人の妻』に染めて、日本武人の妻の面目を活躍せしむることを。

軍國の片影　二

笠間醉雨

紅一點

昨日も雨、一昨日も雨、その前の日もずつと雨であつたが、今朝は忘れたやうに快濶と晴れ上つて、如何にも人の氣を引立るやうな快い天氣となつた、六月二十二日のことであつた、土佐國土佐郡役所には、何事であらう？未明の天の猶ほ微暗い時から門前には大なる國旗を交叉してあつた、それが折からの風に翩翻と大空に閃いて居る。

緑滴るばかりの若松の植込、眞珠の露を飾る一面の芝生、構内は寂として水を打つたかのやう、人ツ子一人影さえ見えず。

正面の時計が今六時を指した其時、年比は十八九と見える、顔色の眞黒な、目のぎよろりとした紺絣の青年が、足早にのめるやうに歩んで來て、ぐいとばかり國旗を仰いで其下を門内へ拔け、四面をぐるりと見廻して、

『オー、早かつた！』

と、獨言ちて、口元には薄氣味惡い微笑さへ浮べて小さな揃つた眞白な猿のやうな齒を現した、そして腰の新しい手拭で額の汗を拭ひながら、何所を目的ともなく、構内をぶらり〳〵と歩んでゐる。

すると、また其所へ、麥藁帽子の、これも同じ年比な、顔色の生白い、前垂がけの番頭らしいのが急躁しく入つて來た。が、これも四面を見廻して、俄に悠然と構へ、扇子片手に、やがて所在なげに、冷しさうな木蔭に蹲踞んだ。

續いて、赧顔の眼ばかり凄く光つてゐる漁夫らしい若者や、黒面蓬頭の爪際の泥垢に染つた百姓や、鼻頭へ喰ひ込むやうに眼鏡を掛けた近眼の書生じみたのや、さては剃り立て頭の青々とした、柿衣の法衣を纏うた道心や、孰れも血は燃ゆる二十歳を前後の青年が一人と云はず二人と云はず、殆んど踵を接

して集つて來る。

集つて來る者は、是等の青年ばかりではない、軍服に身を固めた士官も來る、軍曹も來る、軍醫も來る、郡長さんも來る、書記も來る、巡査も來る。構内は、今や人を以て充たされ、幾多の喉の振動は潮の聲の如く、騒々しさは其國松魚漁のときのそれ！

正に是、國に事あるの時、恰も國民兵の召集でもさるゝ秋かのやう、否、兵になるのは自今からで、今日は徵兵檢査の其日である。

やがて八時ともなつたと思ふ比に、鈴が鳴つたのを合圖に、舍內から一人の有髯の軍曹が出て來て、愈々檢査に取り掛かることを告げた。そして、胸部の物入袋から、一綴の書類を取り出して、一々受驗者の名を呼び、二十人を一組として舍內へ導き入れた。

始め、身長、胸圍、呼吸、聽力、視力と夫れから夫れへと檢査を受けて順次に交替して行くのである

が、最後に聯隊區の司令官榊原少佐の出に到り、合格か不合格か何れかの宣言を受けるのである。で、時節柄のことゝて幾多の壯丁は孰れも勇み勇んで受驗するのであるが、別て合格したるものは喜悦溢るるばかりの面色して雀躍して歸つて行く、中に氣早の者は、歸途に洋傘で擔ひ銃をやつて行くのもある號令をかけるのもある、さては互に擧手敬禮と滑稽れて笑ふのもある。が、また之と反對に不合格の者と來ては、何となく幅の利かぬやうに、失望の二字を額へ現はして、悄然と打萎れて歸つて行く。

斯の如くにして最初に呼ばれた一組の檢査は了へた。第二に呼ばれた二十名も了へた。第三のも了へた。

で、軍曹は其癇高き聲を張り上げて今は第四次の受驗者の名を呼んだ。――高井三之助、內村平太郎――と二人は聲に應じて直に軍曹の前へ並んだ。

次に吸田德之輔と呼んだ。が、何うしたものか返事するものが無い。

更に聲を高めて、吸田、吸田、吸田德之輔と叫んだ。

矢張、應へるものはない。

で、軍曹はちよつと首を捻つた。これは、今度の兵役を免れうと思つて欠席したのではあるまいか、さて、何うしたのであらう、必定、兵役を厭がつてゐる不埒な奴に相違ない、此際は、近眼を胡魔化しても、何うかして兵に爲らうとする者さへある。それに逃げてゐて來ないとは以ての外の曲者だ、國賊だ……と頭腦の單純なる軍人の氣質として、斯樣なことを胸に浮べて、何となく怒氣味となつて、炯々とした双の眼を一層瞋らしたのであつた。

けれども、軍曹は何と思つてか、今一度吸田、吸田と幾多の鼓膜も破れよとばかり聲高に叫んだ。

すると、其時であつた、門の柱の裏の方から、ハイと優しく應へて蓮歩を運ばす妙齢の處女があつた

幾多の視線は云ひ合したかのやうに、此婦人に集注した。

これや、實に萬綠叢中の紅一點! 處女の徵兵檢査! 殆んど有り得べからざることである。

怒れる髯の軍曹も、此女には甚く胸驚かされて、暫時呆氣に取られたかのやう、默つて凝乎と其婦人の顏を打目戌つた。

元より剝出の田舍娘、これと云ふ柄ではないが、面長な、淺黒い、眉の濃い、口元の締つた、何所となくくつきりとして男らしい顏付。けれども、頭髮の銀杏返、鳴海絞の浴衣、赤い帶、それは何うしても女のもの。

やがて、軍曹は首を傾げて

『汲田とはお前か。』

と、念を押した、

『ハイ、私でございます。』

と、さも羞しげに小聲に答へた。

『何うしての!』

『何うしたと被仰つて、私が汲田でございます。』

と、女は面伏になつた。

『イヤ、汲田は汲田かも知れないが、徳之輔とはお前か。』
『ハイ、私が徳之輔で。』
『えつ、お前が、えつ。』
と、ばかり軍曹は更に驚いて、身を反らした。
多くの群衆も、亦あまり事の奇怪なのに、呆氣に取られて、何れも耳を欹てゝ彼の女の言を聞いてゐる。群衆の多いにも拘はらず、彼女の語はきつぱりと何れの耳へも聞えたのである。
『ぢや、左に右そこへ並んで……』
と、軍曹は他の男子と共に隊列の中へ入れて、やがて、舎内へ導いた。
司令官榊原少佐以下検査官の面々は、彼女を見て驚かないものはなかつた、怪しまぬものはなかつた、例の軍曹は司令官の前に至り、正しく棒のやう立つて何をか告げた、そして、間もなく彼の女だけを別にして、屏風の裡に招き、そして、規定の検査を行ふた。が、正しく女性と判明したのであつた。

で、彼の女は検査官の前へ再び呼び出されて審問を受くることゝなつた。
正面にあつて、卓子を前に椅子に凭れてゐた司令官榊原少佐は、真白な八字髯を捻つて、
『朝倉村の汲田秀清とはお前の兄か。』
と、書類の上に目を注ぎながら、斯う云つた。
『ハイ、私の兄でございます』
と、彼の女は耳まで紅くして首垂れた。
『ぢや、徳之輔とは全くお前か。』
と、少佐は、徳之輔といふ男らしい名の、如何に思つても受取れぬ節あるのを第一の疑問として、斯う尋ねたのである。
『ハイ、私も徳之輔と申します』
と、低く弱く。
『私もつて、まだ外に徳之輔があるのかえ。』
と、少佐は鋭き眼を光らして、切り込んだ。
『ハイ、私の兄も矢張徳之輔と云つたさうですが……。』

と、云ふを待たず
『え、えッ、お前の兄も矢張徳之輔？、そりや、妙だ、不思議だ、一體、ど、どう爲たんだえ、え、えッ、お前の兄は………。』
と、甚く急き込んで云ふ。
『ハイ、私の兄ですか、既う疾くに死にました、私の生れない前に。』
と、輕く受け流した。
『えッ、お前の兄の徳之輔は居ないのか、死んだのか。』
と、少佐は、不思議さの念が胸一ぱいになつた。
やがて、取り止めなき問答の末に事は火を覩る如く明になつた。――彼女は土佐郡朝倉村新平民汲田秀清の弟徳之輔と名乘つてゐる者であるが、正物の徳之助、則ち彼の女の兄の徳之輔といふのは生後二年を經て死亡したのであつた。が、片田舍の呑氣な癖とて、死亡屆も面倒臭いと云つて、それなりに打捨つて置いたところへ、其後折よく一女子が生れたが、これも矢張り同轍で出產屆をも拔にして、それに亦無雜作も無雜作、亡男徳之輔の名を其儘此女子に付けたので、宛然で男の徳之輔が女に生れ化つたやうになつてゐたのである。けれども、戶籍面では先の徳之輔が今猶ほ生存してゐるかのやうになつてゐたので。
やがて、檢査官の一人は彼女を頭の上から凝乎と見入つて
『何故、お前の家では、死んだ生れたの屆を出さなかつたのだらう？』
と、徐に言つた。
彼女は、ちらと檢査官の顏を見て、
『何故と被仰つて、よくは知りませんが、大方父などは……私等の家なんかは、高が新平民で、人樣からは犬か猫よりもひどい物ゝやうに思はれてゐて、迚も人間の仲間入は出來ぬものですから、何んの、そんな者が死んだつて、生きたつて、孑孑が生いて、また死ぬやうなものなどと……思つて、

一向構はなかつたのでございませうよ………。』
と、如何にも眞面目くさつて云ふ。
『うむ、お前の父樣なんか其樣なこと云つてゐたか知らないけれど、なにも新平民だつて、吾々と違つた所は少しもない、矢張り當前の人間だ、それを犬か猫のやうに思はれてゐたのは昔のことだ、開化ない先の世のことだ、今時新平民も華族も士族も何にもありやしない、同じ目も口もある人間だ、犬や猫のやうなものなら、徴兵の檢査も何にも受けることは出來ないのだ………。』
と、笑ひながら云つた、そして、その戸籍法を無視した不都合をも懇々戒め諭して、やがて、一應引き取るべく命じた。
彼女は、其一語、其一句に默つて輕く首肯いてゐたが、そつと左手を顔に押しあて丶、そして、何と思つてか、
『私は殘念で………』
と、きつぱり云つたが、急に口を噤んで了つた。

『殘念?何が。』
と、少佐は片手を卓子の上へ載せた。
『外のことでもありませんが、私が男でなかつたのが悔しいのです。男だつたら斯樣な耻も搔かなかつたのです。』
と、聲音は少し震えて居る。
『なんだ、お前が男だつたら、何うかするといふのか?』
『ハイ、男なら、私年齢がちと若うございますけれど、知らぬ顔で亡兄の代りに兵隊さんになつて、戰爭に往つて、少しでも働きますのに。……それが、私、女に生れて殘念で殘念で堪りませんの………新平民でも、矢張同じ人間だと先刻何樣かゞ被仰いましたが、私、男に生まれてゐたら、屹度兵隊さんになつて、戰爭に往つて、人並らしく働いて、そして、立派に人間のお仲間入を爲て見たいのです、……それが、私、女に生れて……』
と、甚く感に堪へざるもの丶如く、ぎり〳〵つと烈

しい歯軋の音さへさせた。
人よ、嘲ける勿れ、笑ふ勿れ、賤しむべき怪しき新平民の娘と。此時此心、蓋し日本婦人の光輝ある精神の發揮したそれではあるまいか。

國旗と軍旗の話

梧陰生

一國の國民が其國旗を尊重する所以の原因は全く國旗其物が、國家の成立や、國體や、國民精神やを標榜せるからであることは多言を要せない。吾人國民が、國家又は皇室の禮典祭祀などのある時には、必ず毎戸國旗を掲げて慶祝若くは哀弔の意を表することを懈らないのは、國民表忠の義務であるからである。ソコで軍旗に對するも亦、同一の觀念を以て迎へるべきであるのに、大國民と謳歌され、强國と稱揚されつゝある我同胞の多數が、軍旗崇重の念の極めて冷淡なるは、諸外國に對して甚だ慙づべき至りであつて、殘念ながらこれは非文明的だと言はなければならぬ。

軍隊に軍旗あるは、猶一國に國旗あると同じことである。國旗は、一國の存在を明かにし、其主權を代表するが爲めに、國家が外國に向つて缺くべからざる必要條件であつて、則ち國權の表彰、國體の反影である。故に既に國家が世界の一隅に割據する以上何れの國を問はず、皆一定の國旗を有して居るのである。而して國民の或者は心血を濺いで國旗の神聖を汚されぬやう常に武裝し、閫外の國民また國權上常に心を用ゐて、多大の注意を拂つて居るのは、國を愛する國民當然の心情より流露せる忠誠であつて世界萬國ともに易らないのである。軍旗なるものは一國統治權の要求による必然的隨伴者、若くは先行者とも云ふべき軍隊の精神を主宰する公明至誠の軍神であつて、上將校より下一兵卒に至るまで、之に許すに一死を以てするの節操は諸外國とも皆其揆を同うして居る。特に我國の軍隊は　大元帥陛下に對

し奉ると同じく、軍旗に對して常に忠節ならんことを冀ふて居るのである。斯う言ふやうに、一は國權を代表し、一は軍隊精神を標榜するのであるから、二者の性質、用途を異にし、從て彼是一樣ならぬけれども、其神聖にして犯すべからざるは、即ち一であつて、其尊重すべき點に於ては無論輕重區別あるべき理由はないのである。同じく崇重と云ふ。サレど想ふに、國民の軍旗を尊ぶのは、單に感謝の意味に出でたる慰藉的尊敬のやうであるから、僅かに時局の間に於ける一時の現象に止まるの傾きがある。要するに軍旗なるものは軍隊の占有に屬するものであつて、之が崇重の義務は、特り軍



人にのみに限り、一般國民は毫も關知しなくとも差問ないものと思惟するやうの觀念があるからである之は軍旗の理義を解せない俗人の考へであつて、寧ろそれが誤解であると言はねばならぬ、此誤解がツマリ自然觀念の冷淡に傾く原因であるから、此一事は國民の大に注意して矯正しなければならぬ點であらうと思ふ。歐米人は、軍旗に對して滿腔の熱誠を献げて之を尊敬し、拍手喝采を以て送迎すると云ふことである。近來我が社會上の狀態を見るに、夫の出征軍人の行途を壯んにするの意志から、或は國民祝捷の丹心から、國旗と軍旗とを交叉して、街衢または軒頭高く掲ぐることが、一の流行となつて居るが、

彼等は衷心から軍旗の神聖を崇重し、國家軍隊のためにに敬意を表するの意に出でたるものとすれば、誠に喜ぶべき徴候であるけれども、或は遠征軍隊の連勝の氣勢が、國民意志に一種の刺激を與へて、好奇心から出たものではあるまいかと思はるゝ點がないでもない。之に反して普通一般の國旗を尊敬するは愛國の至情より迸る自然的尊敬であつて、その崇重の念慮は殆ど永久的に渝らないのである。かくの如く國旗と軍旗に對する國民の觀念に相違のあるのは甚だ謂はれのないことであつて、二者孰れも吾人國民が當然爲すべく、盡すべく、國家皇室に對する、國民表忠の義務と言ふことに留意して、軍旗崇重の點に就て、此に記臆に存せんことを望むが爲め、聊か此に解説を試みて、讀者の參考に供したいと思ふ。

偖て軍隊なるものは、國家の交戰權を行ふ獨立の主要機關である。國家と軍隊とは恰も鳥の双翼車の双輪のやうな關係を有つて居て、決して二者の一を分つことの出來ないものである。有史以來、今日に至るまで凡そ五千年、此間邦國興亡の迹を看來れば孰か國旗の興亡に非ざらん、孰か軍族の勝敗に非ざらん。想ふに國威の消長は必ず國旗の榮辱と伴ふものであつて、國運隆昌なる時は、國旗の光彩燦然として輝き、國家の權威衰ふれば、軍旗の影、幽然として其光暗く、國家獨立を保てば國旗も共に獨立を保つべく、國家獨立を失はゞ、軍旗も共に獨立を失ふと言ふ事は、世界の興亡史が事實を證據立てゝ居るのである。

而して國旗の意匠は、各々國民理想のあらゆる要素を蒐めて之を形象に表はしたものであつて、決して偶然の創意から造られたものではない。例ば米國の國旗は獨立戰爭を紀念せんが爲めに、同盟十三州に象りて紅白十三線を緯となし、そが上部の一隅に四十八個の白星を點出したのは現在州數を表はしたものである。佛國の三色旗は、共和革命の時、人心を興起せしめたる自由、平等、博愛の三主義を表彰したものだと云ふ。英國旗の創意は聯合建國に當り

大不列顛、愛蘭土、蘇格蘭三州の徽章各一部を取つたものであるから政治上に伴ふて國旗は一變遷を經たものである。支那の黄龍旗は、該國民の常に理想とする靈的動物を象つたものであつて、黄龍は古より王者に喩へられた靈獸であると云ふ。斯う言ふ風に各國旗とも、能く國體を象り、又能く國民精神を表はしたものである。我が日章旗は遠く皇祖天照皇大神の明德を稱へて、旭陽の輝々として六合に照臨するに象つたものであつて、其國民理想の高尙且つ意義の純潔森嚴なる一事は、固より外國旗と日を同うして論すべきでない。

本朝旗の起原は、史籍の考證すべきもの甚だ乏いのと、未だ精細なる調査を遂ぐるの閑を得ないので充分に立證することの出來ないのは遺憾であるが、惟ふに已に遠く太古に於て旛てふ目標を用ゐられて居ることは、慥に認めらるゝのである。人皇卅九代齊明天皇の朝「蝦夷の酋長に旗を賜ひて禮容に用ふる旗を儀仗と云ひ、征戰に用ふる旗を軍器と定む。」とあるより稽ふれば、當時の旗は、單に式典祭祀上の裝飾に供用されたものであらう。越へて桓武、淸和の御宇、源平二氏に赤白の布旗を賜はりしは、蓋し武家常用の旌旗の濫觴として見るべく、以來社會人智の開くるに從ひ、人々の旗に對する觀念、理想の變化は、赤白以外に諸豪族の家旗を作るに至つたのである。是に於てか錦旗は　皇室を代表し、家旗は將軍或はそれ〴〵武家を代表されて居る勿論この家旗は諸家の戰には毎に陣頭に押樹られた一種の軍旗であつて、之に對して勇士がいかに尊敬を拂ひしかは想像に餘りあるのである。兎に角太古の單純なる標幟が今日の國旗、軍旗となるまでには、無論種々の變遷沿革を經たものと言はねばならぬ。

日章旗が我が國旗と定められたのは、明治四年十一月であるが、此が起原は、實に安政元年七月なのである。初め幕府新たに兵制を定めて、洋式軍艦を作つた時には、未だ一定の國旗と云ふものはないのである。從つて船艦に我國籍を標示すべき徽章のな

い所から、當時賢明の聞え高き、島津齊彬侯の創作を採つて、即ち日本の船印は、總て白地に日の丸の旗を用ふべき布令を發したのである。サレど國權代表の國旗の名稱を附することは無論出來なかつたのである。然るに革命てふ活勢活力は、瞬轉の間に閃めいて、大和民族の破天荒活動は、乾坤を破碎し、政體と改造し、あらゆる泰西開化の輸入は、斯の機會に於てせられ、而して驚くべき割合を以て、社會は秩序的に發達し、物質的の進歩となり、文明漸進の反響は國民思想の發達を催新して止まず。國權觀念ます〳〵盛となりて、茲に改めて日章旗を我が國旗と定められたのが、即ち國旗の沿革である。而して日章旗が已に國際上、世界の日本を代表して、萬國から禮遇せられ、又其國民よりも均しく尊敬せらるゝのは、全く世界が日本の文明を欽仰するからであると言はねばならぬ。かく日本が僅々卅餘年の間に於て、國體美を發揮し得た所以のものは、ツマリ皇上の御稜威と、國民の忠誠義烈及び純潔なる國民特殊の信念とに依るのであるから、國家將來の進運に伴ひ、ます〳〵皇威を宣揚し、以て國旗の光譽を發揮することは、國民究竟の責任と言はねばならないのである。

軍旗また の名を聯隊旗と稱し、古の錦旗から轉化したもので、明治三年五月を以て制定せられたのである。之が用途は其名の示す通り純然たる軍事用の標章であるから、軍隊以外の一般國民は、ツマリ使用のないものである。そが理想は國旗のソレと同じく、旭陽を中心として皇威の光明を表し、周圍に十六條の光線を射出せしめたのは、コレぞ國民報國の至誠に象つたものであると言ふことである。

軍旗は軍隊の精神を標榜し、軍隊の行動を統一する司令であるから、萬國共に神聖として之を崇重することの厚さは勿論、之に對する國民の觀念は最も熱心を以て崇重されて居るのである。殊に我が軍旗は萬世一系の皇統を繼がせ玉ひたる大元帥陛下が兵馬の大權を總攬し玉ふの意義から、其統屬と責任

とを知らしめんが爲めに、陛下御自書の隊號さへ書て與へられたる貴重の品である以上、陛下の神聖にして犯すべからざると同しく、軍旗も亦神聖犯すべからざる威嚴を具ふるは言を俟たないのである。且つ國民が奉公の誠、崇髙の忠、嚴格なる義務心は恰も自然的確信となつて、國民の心底に銘刻されて、先人後人共に天に二日なく、國に二王なしてふ觀念意思は牢として破るべからざれば兵隊は常に軍旗の樹てられたる處は　陛下の在す處、軍旗の前は玉座の前に異ならないと云ふ感想を持して居る、從つて軍旗の神聖は、萬國のソレに比して固より同日の論でない。斯う云ふ關係に於て日本軍旗の光彩燦然として六合に輝くことの、決して偶然でないと言ふことを悟るのである。

憶ふに人間道義の上乘なる忠君愛國の熱腸より迸り來る大節大義は、大和民族自然の本能であつて。決して理性の指導するものでないのである。サレば軍旗の樹てられたる處には、必ず愛國心の伴はぬと云ふことなく、愛國心の熾なる處、軍旗は名譽あり光輝ある歴史を重ぬると言ふ事實は、殊更ら説明するまでもないのである。千秋萬古仰で易らないのは富嶽の高潔である。古往今來觀て飽かないのは櫻花の純美である。若夫れ潔にして美なる人間の至情を動かして長へに渝らざるは忠君愛國の事績であらうと思ふ。吾人國民の勇敢なる祖先は、磅礴たる神州忠孝の精神を皷吹し、世道人心を千古の下に維持し來つたのであるから、現代國民の軍旗の下に立ちて、報國の義心を皷舞せざるものは一人もないのは、ツマリ國民教育の賜ものであると言はねばならぬ。聯隊長が軍旗親授に當りて、臣等死力を竭して國家を保護せんと奉答するの意は、所屬軍人を代表して、その精神志操を遺憾なく表白したものである。更言すれば他日に忠勇の兵士を作り、國家の必要に應じて、軍旗の下に勇敢なる働きを實行するてふ自信と責任を言ひ現はしたものである。昔の武士は君侯の馬前に特勳を建てんと冀ひしも、今の兵士は軍旗の

下に屍を横へるを無上の名譽と心得て居る。故に此神聖なる軍旗の一たび陣頭る飜さるゝや、幾千の貔貅同一の軍旗によりて統率されて、恰も手指の動くやうに活動し、全隊の聚散離合劃然として統一を失はず、縦横の連絡、成形井然として一糸紊れず、首尾相救ひ、左右相援け、而して萬一犧牲の窮地に陷り、或は軍利あらざれば、軍旗は水火に投じ、又は裂き棄つる等、臨機の手段により消滅し去りて、決して之を敵手に委することを爲さぬのである。若し軍旗が敵の鹵獲に遭ふやうの事ありては、其聯隊若は師團の恥辱は勿論、國家の不面目は之に比すべきものはないのみか、軍旗は復び賜はることが無いのである。サレば忠勇なる將卒は、千難萬苦を冒して敵に當り、一意軍旗と榮辱汚隆を一にすると云ふ念慮を持し、楯を携へて歸らずんば、楯に載つて歸ると云ふ精神に歸するのである。之に反し露西亞の軍隊にては、軍旗は單に其部隊の標識に過ぎないから從て軍旗は其軍隊に向つて、何等の精神をも與へないので、自然之と死生を一にしよう抔の死守の感を抱く者は絶無の姿であつて、軍旗の進むに當り、止て進まざるものあり、軍旗に先ちて退却するものありて、軍旗の尊嚴は、到底同日の談でないと云ふことである。

古は軍旗なるものゝ制なく、但だ將軍宣旨を奉じて征討に臨むの時、錦旗節刀を賜はるを恒例とされてあつたのである。此錦旗は　皇室を代表して　天皇の御親征を意味する貴き品で有て、今日の軍旗と同性質のものゝやうに考へらるゝのである。また臣下が專用せる軍旗體のものは、葛原親王に下されし赤旗、六孫王經基に賜はりし白旗に濫觴し、爾來戰國の時代に及んでから、旗の使用は漸次複雜となつて、北條氏の魚鱗の旗、楠家の菊水旗、新田氏の中黒、足利の中白の旗などは歴史上著明のものである其他八幡菩薩、或は權現等、思ひ〳〵の文字を記したのもありて、一に威靈を假り、武功を誇つたものであつて、其いかに家旗に重きを置いたかは想像さ

る丶であらう、明治の首めに於て、從來使用の種々の旗章を廢して、天子親ら兵馬の大權を握らせ玉ふより、玆に一定の軍旗を制定され明治七年一月十三日を以て先づ近衛第一、第二、聯隊に授け給ひ。踰えて十一年十二月、當時六鎭臺と稱へられた東京、仙臺、名古屋、大阪、廣島、熊本等の各聯隊に授與されたのである。目下の處では其數も逐次累加して、實に四十八旗の多きに達して居る。

　抑も聯隊は軍旗を授けられて、始めて成立するものである。されば軍旗なければ軍隊は成立しないと云ふことは殊更ら說くまでもなく、從て活動する事の能はざるものである。故に隊の編成を奏上すれば軈て　大元帥陛下から親しく軍旗を其聯隊に授け給はるを例とされて居る。此式は最と嚴肅であつて、當日には聯隊長を首め、其聯隊に屬する將卒は正裝して式場に整列し、其他衛戍地の各種の兵隊は申すまでもなく、皇族、元帥、大臣及び內外の文武官等概ね參列するのである。陛下式場に臨御し給ひ、侍

從武官長軍旗を捧げて扈從す、聯隊長は數名の將校を隨へ、肅々として御前に進みて、御手づから授け玉ふ軍旗を拜授するのである。其時　陛下には玉音高らかに

　步兵〇〇聯隊編制成るを告ぐ、仍て今軍旗一旒を授く、汝軍人等協力同心益威武を宣揚し、以て國家を保護せよ、

と仰せらる其いかに軍人の忠誠勇武に信賴あらせらる丶かは推し測らる丶であらう。此勅語を拜して軍人たるものは忠義報效の心一層熾んに振躍換起せざるを得ないであらうと思ふ。聯隊長は畏みて「謹て勅語を奉じ臣等死力を竭し誓て國家を保護せん」との答詞を奉つて、玆に忠誠を誓ふのである。

　偖て軍旗は平生いかなる個所に仕舞置くかと云ふに、常に聯隊長の室に藏めて、隊長自ら之を保管して居る。若し隊長不在なるときは、周番の中隊長代つて保管の責に任ずるのである。而して軍旗の在る處には、常に一名の古參少尉と旗護下士二名と、

若干の軍旗護衛兵とが置かれてゐつて、嚴重に守護して居る。尙軍旗中隊と稱して之を護衛する中隊がある。此中隊は仲々權力を與へられてゐるもので、軍旗護衛の間は、軍旗に對して又　大元帥陛下に對し奉りて敬禮するの外、何人に對しても決して敬禮を行ふことはないのである。

ソコで軍隊の精神主腦とする軍旗の送迎は、どう云ふ風であるかと云ふに、頗る嚴格なものであつて先づ奉迎式に就て云へば、第一に軍旗中隊は其收め置ける室前に至りて横隊に停止し、其間旗手少尉は旗護下士二名を隨へて室内に入り、恭く軍旗を迎へて出で來り、其中隊の正面に立つて、少しく之を前方に捧ぐるときは、幾千の貔貅忽ちにして襟を正し滿場肅々たること恰も　大元帥陛下の御前に立てるが如くである。中隊長は着劍を號令して捧銃の敬禮をなさしめ、自ら刀を以て敬禮し、曹長は刀を捧げ、皷手と喇叭手は足曳の譜を吹奏し、終れば中隊は立銃となり、士官以下は肩刀となつて、順次定位に復して行進を開始するのである。其奉送式は此手續を前後したまでゝあつて、概ね奉迎の式に同じである。

軍旗に對する軍人の信念如何は、直に以て軍紀の弛張に關し又軍隊の成形上決して輕事でないと云ふことは、殊更ら叙說するまでもないのである。サレば軍旗上の美譚として、古來中外に語り傳へられたるものも多いが、近く例をこの回の日露戰爭に索れば、彼の常陸丸遭難の當時、須知中佐が後備聯隊長として幾多の兵士を率ゐて征途に上り、未だ一兵をだに交へず、而かも尺寸の戰地をも踏まないに、不幸對馬海峽附近にて敵艦に遭遇して、事の爲すべきやうなきを知るや、可惜忠烈武勇の兵士を犧牲にすることの忍びない處から、旗手を麾いて先づ軍旗を燒棄し、其旗竿を折つてから後ち、部下に自由の行動を命じ、而して從容自ら居りて名譽の戰死を遂げたのであるから、彼の沈勇果毅にして擧措の周到であつて、一點批難のないのは、眞個に帝國軍人の儀

褒といふも決して過褒でないのである。謂ふまでもなく、軍旗は軍隊の戰史である。サレば其大なる名譽を負ひ、赫々たる光明を放てる軍旗の破傷或は血痕に蔽はれ、又は全く旗形を失ひたるものを仰ぎ見ば、誰人も先人の忠勇武勳の紀念として、自ら敬虔の念を生じ、轉た愛國の志操を惹くものあるを思ふであらう。

米國通信

在桑港　澁谷馬頭

一、日本女子教育家の渡來

◎日本女子大學校の麻生正藏氏が、先般當地へ着きまして、それから、東部へ赴かれました事は、先便に申上ましたかと存じます。

◎去る七月中には、角筈女學校長とやらの勝田某女史が、渡來なすつたが、此方も間もなく、東部へ御出になりました、英國へも渡つて、女子教育の狀況や、家庭の有様を、實地御調べになると聞きました。

◎金田まさ子とか仰しやる女教師も、御出になつて、今に當地に滯在せられますとのこと。

二、米國婦人日本より歸る

◎ストルジ博士の夫人は、御夫婦で長々日本に漫遊中で御座いましたが、八月の始めに、無事に米國へ歸着、逢ふ人毎に日本人の好意を謝して、これからは在米日本人の爲めに、一層盡力致しませうと、語つて御出になられます。

三、米國婦人日本へ向ふ

◎桑港でキヤメロン孃と云へば、誰知らぬ者ない熱心な女宣教師で、禁酒禁烟等を唱ふる社會改良家で御座います。

◎キヤメロン孃は、是迄長老教會一名支那教會に、長らく勤めて御出になつて、支那女子及び日本女子の醜業婦に陷つて居る者を、其教會に引取つて、説諭を加へ、改心させて、正業に就かせた數は、隨分

多數に上ると云ふ事です。

◎孃は八月の五日に、桑港出立、故郷なる英國スコットランドに向ひ、次に歐州大陸より、支那に廻り、最後に日本に行つて、普く日本國中を見舞ふ考へであると申します。

四、歌人ハリス夫人

◎和歌を詠せられるハリス夫人、即ちハリス神學博士の夫人は博士と同道で、此秋日本へ向はれる事になりました、博士は日本朝鮮支那のメソヂスト教會の監督として、長く日本に留られると申します。

五、不埒な黒髮女子

◎奈古と云ふ日本人の旅館に宿泊して居て、髮は黒く體は小く、どう見ても、日本女子としか見えないこの女子が、日本人の料理屋を飲み廻り、一度にビール數本を平らげましたとのことで、此女子今は暫く見えませぬ、日本語を一つも話せぬ所で、西班牙女子である事が知れました、スペイン人で、男女とも日本人と異ない樣な者がまゝ見えます。

六、在留日本婦人運動會

◎米國女子の出すぎるに引かへ、日本女子の餘りに引込みすぎるも宜しからずと、或邊から發起して、標題の如き懇親會兼運動會を開くことになりましたさうです、但し醜業婦は、加入させぬ事です、とは勿論の事です。

七、米人の求婚廣告

◎七月末の桑港日本新聞廣告案内に、一米人廣告して曰く「英語を話す日本婦人に、面會を望む、但し結婚の目的にて云々」と林駐英日本公使の談話でもきゝ傳へましたのか、林公使或英人に戯れて、日本人の籍に入るには、日本女子の聟になればよいと仰しやつた事があります。

八、女子を用ゐる新聞社

◎佛國のフロンドと云ふ、いかめしい名の一新聞は、上は社長から、下給仕小使に至るまで、女性ばかりで、男性と云つたら、牡猫一疋も居ませんのは、誠に珍らしい事ですか、桑港にても、夕刊新聞エヴ

ニングポストと申します小新聞は、記者は別物として、事務員等は皆女ぞろひでやつて居ます。

九、無妻主義

◎桑港に二つある日本新聞の一つは、日米と云ふ、其現今の持主安孫子久太郎と云ふ方、他は新世界と云ふ、其前持主なる副島八郎と云ふ方、此ふたり共に、無妻主義の實行者であるのは、どう云ふ次第か、桑港駐在の上野日本領事及び戸澤正金銀行支店長は、彼等の無妻主義に付き、只今大に心配最中です。

十、米國婦人作日本軍歌

◎ウルフと云ふ米國婦人、日露戰爭に感ずる所あり、二曲のマーチを作り、二十五錢づゝに賣り、其賣上高を、日本兵の恤兵金として寄附する筈です、其マーチは「マーチ、オブ、ミカドス、メン」と題して有ります、取あへず共益商社樂器店へ、一部私から送つておきました。

（をはり）

秋の衣裳

暑い寒いも彼岸まで、とかいへる其暑さも今日此頃は頓に薄らいで、朝夕は單衣のみにては事足りかぬる折さへあれば、季節に相應しき衣服に關する消息を傳へませう。

▲絣の袷　近來流行するものゝ内、所謂平民的の品は新琉球とも新大島とも稱する木綿絣で、一見大島の本物かと思はれるばかりの出來、價は二圓から三圓三十錢位。又伊勢崎銘仙は米澤琉球と共に相變らず好評で、非常に持囃されて居る、此の銘仙の絣は最初試驗的に賣出したものであるが、其後種々變り色の物も出來、且つ米澤よりも地質の餘程丈夫な處から、廣く嗜好に投じたものと見え、一二年來流行の勢を強くした、其の色合の茶、葡萄、濃納戸、錆鐵等が多く袷なり綿入なりに使用されて居る、米澤琉球は黒地に白の絣のみで、着て見た處の體裁は頗る宜しいけれども、何しろ屑糸を以て織つたもので、

伊勢崎銘仙程に丈夫でない、伊勢崎の方は一見絹糸ばかりの樣であるけれども、實は木綿が交へてある、それ故一つは地質が丈夫であるといふことだ、價は伊勢崎は上等物七圓内外普通四圓五十錢以上五六圓位、又米澤も上等物七八圓位なるが並の品となれば矢張四圓以上五六圓の見當である。

▲縞物の袷　男向の縞物では結城紬が頗る好評で、縞柄は大名、棒縞、矢鱈、薩摩、筋格子、胡麻殻、三筋、亂立、金通など種々で、地色も藤、鐵、栗鼠、皮など種々ある、元來此の結城紬の柄は重に男物に出來て居たのであるが、近頃では女向にも前記胡麻殻以下の珍柄を出すに至つた、此珍柄の結城は所謂お神さん向で黒繻子の半襟をかけて着るべきもの、樣になつて居る、價は九圓以上十一圓位、又木綿縞で一寸體裁の宜いものは新銘仙であらう、是は男女何れにも向く品で糸入のも出來て居るが、價は一圓七十錢位から三圓位迄で平常着とするに最も適當なので昨年以來大に持囃されて居る。又綿お召で一見本物のお召の樣に頗る精巧なもの、中にも、九重お召、精華お召、常盤お召などは、廣く人に知られて居る、其常盤お召といふのは紋お召の柄を模したもので一反五圓以上もするが、縞の綿お召は四圓以上六圓位である、尤も本物の縞お召は價十圓以上十二三圓位であるが、堅縞の極淡泊とした柄が持囃されて居る、又紋織お召で若い婦人向として流行の物は小紋の上に小紋を重ねた樣な柄で、葡萄とか鐵とかお召鼠とか、總じて斯ういふ樣な燻んだ色の物が流行界に勢力を有つて居る、價は先十八圓位。

▲セルの單物　普通の品所謂綿セル地の價は一圓四五十錢以上である、只セル地も面白くないから何か外にと望む人には富國織が宜からう、これは三四年以來の流行で、地質は絹糸紡績で糸の撚が強くしてあつて一見した處は紋のないお召の樣である、價は十圓から十二圓位、舶來のセル地で昨年以來流行の物に絽織セルといふのがある、是は其名の如く絽目のセルで贅澤向ともいふべき初秋の單衣地で、價は

七八圓見當、尤もこれは昨春獨逸から始めて輸入したもので、まだ多く行渡つては居らぬ相だ。

▲小供の着物　小供の衣服も近年は夏冬ともに絣類が流行であるが、左りとて縞物の勢力がなくなつた譯ではない、孰らかといへばまだ〳〵縞物の需用は遙に絣の上に出て居る相だ、けれども絣が一體に歡迎さるゝことは双子縞にまでも絣を竪に織出した物が出來て居るので知られる、で、双子織も小供の着物とするにて斯る柄が多數の好みに適するとのことだ、木綿絣の價は久留米でも伊豫でも先づ二圓以上二圓五十錢前後の見當であるが、双子縞ならば一圓二三十錢位で可なり宜い品が手に入るとのことである。

また〳〵書けば書くことに限りはないのであるけれども、本年は時節柄、一般の機元などでも緊縮の方針を採つて居る旁々、是といふ新柄もない相であるから、先づ此邊で筆を擱くことにします。

○新刊批評

▲セバストホール　クリシヤ戰爭に於けるセバストホールの地位は日露戰爭に於ける旅順港の形勢と相似たり難攻不落と銘打つたるセバストホールも英佛兩軍の劇烈なる攻擊に逢ひて遂に陷落しぬ知らず旅順最後の運命は如何假令今日明日を支ゆるも遠からず同じ災厄は旅順要塞の上に落ち來るべし此書元と露帝亞歷山三世の手著にかゝるを以て往々露西亞的臭味の厭ふべき點なきに非ざれども敗軍を敗軍として率直に描寫せるところ頗る愛すべし今の露西亞皇帝陛下果して「旅順港」なる一書を著はさるの勇氣あるゝや否や譯者は内田旭山春鴻田中花袋柳川春葉の四氏にして行文流麗にして解し易し時節柄一讀すべき好讀物といふべし（定價三十八錢小石川隆文館發行）

▲三尺劍　柳川春葉後藤宙外登張竹風泉鏡花小栗風葉田中花浪外數氏の軍事的短篇小說を集めたるものなり秋の夜長のつれ〴〵に讀みもて行くに中々に興多し（定價四十五錢同上）

▲瑠璃草　瑠璃會といふ歌文の會のひめ達がうるはしき水莖の跡を集めたるものなり才藻湧くが如き歌才筆流るゝが如き文の此の集中に少なからざるは賀すべし製本甚だ優美に出來たれば乙女達の机上を飾る瓶花の下に置きて朝夕の翫讀に供しなば定て興味あらん（定價五十五錢日本橋區文友館及大阪東區南本町杉本書店發行）

▲家庭のしるべ　家庭に必要なる裁縫指南、茶道、通俗法律、料理法、式法、素人醫者、一口話等を揭げ小說また甚だ面白し殊に裁縫指南を小說的に記述したるは乾燥無味の弊を防に足るべき一新案といふべし家庭の讀物として最上の雜誌といふべし（定價一册郵稅共十三錢神田表神保町東京堂發賣）

小説

曙

山岸荷葉

（上）

今だに獨天下でゐる、四歳になる田鶴子が、毎朝の習はしは、

『ねえ阿父樣、熊を見に行きませうよう。』

『あゝ、行きませう、行きませう。』

父なる人も快く起つて、倶に門を出つゝ、朝の散歩をして來るのながら、この夏も會社の方から、些の暇を得たので、向ふ一週間といふ極を以て、昨日東北の方へと旅に赴かれた爲め、今朝は田鶴子が滿足するだけの散歩が出來るかどうか、自分は疑ひつゝ起きたほど、遁れ走せに寢床から跳ね出した田鶴子は、直ぐに父の書齋へ駈け入つて、まだ覺めぬ目を擦りながら、

『阿父樣、熊を見に行きませうよう。』

いつもは着物も更め、顏も洗つて、『お早うございます』をしてからの請求なるに、寢惚けてか、それとも側に父の居ないのに吃驚して、矢庭に此所へ入つたものか。自分は田鶴子の爲る處を見やうと、後から留守の書齋へ行つて見れば、南向の窓の長椅子に尋ぬる人の影もないのに、けろりとした顏の、

『母様、阿父様は？』
『阿父様はお留守ですよ。』
『お留守……？』
『お留守つて、田鶴さん、お家には入らつしやらないのですよ。』
『えゝ！』と吃驚したといふよりは、いつそ涙の破れ出さうな眼をしてゐる田鶴子。
『あれ、貴女知つてゐるぢやありませんか。阿父様は昨日から、些の間遠くへ入らつしやるので、貴女お玄關までお送りして「行つて入つしやいまし」をしましたのに。』
『あゝ、阿父様、鎌倉へ行つたの？』
とさも〳〵思ひ出したやうに。
『いゝえ、鎌倉へ入らしつたのぢやありませんけれどもねえ……』
『鎌倉だつたら、田鶴ちやんも連れて行つて、阿父様さう言つたはね。』
『えゝ、仰つたとも……。而して、今度は直にお歸りなのよ。で田鶴さんがお留守の間大人しくして入らつしやると、お歸りには御褒美をたんと〳〵持つて入らつしやるお約束ですよ。』
『あゝ。泣くと阿父様の入らつしやる所まで聞こえるんだつてね。』
『さうですとも。泣き聲が聞こえては、お土産を持つてお歸りなさらないつてよ。だから大人しくして入らつしやいよ。』
『えゝ……えゝ。』と誠に大人た頷き樣をしたが、間もなく、
『あゝ、だけども田鶴ちやん、熊を見に行きたいんですものを。』と鼻を鳴らして母に纏ひ付く樣。自

分はその見上げた田鶴子の顔に頬摺をして、
『だから、阿母様は今朝御自分だけの御用は早くして、貴女と御一所に川端へ行かうと思つてゐましたのよ。』
寸時默つてゐた田鶴子は、
『あゝ、母様と御一所に川端へ行くの？』
『母様とぢや、否ですか？』
莞爾とする時、この頃になつて、どうやらその味噌歯になりかけた恵比壽歯大黒歯を少し現しながら、頭を振り〳〵、
『うゝむ、否ぢやないのよ。』
『ぢや、お衣服を着更へて直ぐに行きませう。』
『あゝ、行きませう、行きませう。』
と、其の言葉は毎朝の父なる人が口吻をそつくり寫したのがをかしく。
稚くとも女性の事とて、田鶴子は袖の附いた『袂のお衣服』が大好きながら、父は全く裏表にそれが嫌ひなので、朝の散歩には常に、田鶴子の方から負けて、白茶のリボンで袖口を飾つた潮染の『改良服』を着る事になつてゐる。今朝もその『改良服』を大人しく着て、
『さあ、行きませう、行きませう。』
例の口吻で頻に促す、自分はまだ束ね更へぬ髪を辛くも撫付けて、帯だけ結び更へつゝ、
『田鶴さん、行きませう。』

『さあ行きませう、行きませう。』

一歩先へ玄關へ出て行つて、ちやんと母の吾妻下駄を履脱へ揃へて置く。

『どうも難有う……。』あら、田鶴さんの下駄が出て居ませんね。』

言ふ間もなし、ひつたりと抱き付いて、

『田鶴ちやん、、、、かたぐり……！』

　何ですつて？』

その謂ふ「かたぐり」とは肩車の事なのに、

『あれ、「かたぐり」は阿母樣には出來ません。あれは阿父樣でなくちや……。』

『あ、「かたぐり」は阿父樣の專賣だつてねえ。』

いつ聽いてか、生ん氣な事を言ふ田鶴子。

『田鶴さんは、本當に生ん氣ですわねえ。』

『え、？』と解せぬらしく。

『い、えさ、田鶴さんはお轉婆だつて言ふい。』

『「かたぐり」をしやうつて言ふから？』

『さうさ……。ですから下駄穿いて入らつしやい。あの、お盆から下した木履が可でせう。』

『え、。』頷くに任かせて鈴の入つた朱塗の駒下駄を出して遣れば、雀躍をしてそれを穿く。

『大きな聲をして「行つて參る」つて、仰い。』

田鶴子は、一番高い調子を出さうとして、眼を怒らし、小鼻をふくらませ、天を仰ぎながら、

『行つて參る。』

家内には答もなし。雁の婆やが精出して流に物を洗ふ音。

『婆ちやん、聾だから、もう一度仰い、大きな聲して。』

『行つて參る……！』

なほ聞えぬかして家内には應じない。却て隣の門から知己の婢が出て、

『おや、お田鶴さん、お早うございます。御運動ですか。』

『行つて參る！』

『へえ、行つて入つしやいまし。』

其方へは莞爾して、母の方に、

『ねえ、婆ちやん聾だわねえ……。』

（中）

四時もなほ三十分とはならない頃。

濃霧の内に新しき兩國橋の朧々、滊船もまだ通はぬ隅田川の面靜にして、眠つてゐるやうに下る筏の三つ二つ。葭原雀らしき聲が遙の洲から聞える。

岸に寄つて來る漣に、靑物の揚場に繋ぐ舟の少し動いて、游泳場の戸は明かず。電柱に殘りの光は星のやうにきらめいて、長い〳〵蛇か何ぞの横はつてゐるかと見える線路の、果は倶樂部の角に消えて。共用栓の龍の口に潤はなけれど、疾くも商業の支度をするは市場の一二軒ばかり。朝の風のなほ冷かなのを覺えて。

『何所のお家も、寢ん寢してるわね。』

門を出る時にさう言つた田鶴子は、母に手を曳かれながら、小さき木履に曉の路を刻む時、極低い調子ながら、其口を突いて出るのは、

『……名は樣々に別れても、立つる功は富士の嶺の、雪は消えても消え殘る、名は千載の後までも。』

『おや！』

『窓より近き品川の、臺場も見えて浪靜……』

『逢ひましたよ、田鶴さん。』

『あゝ！』　と始めて氣がついたやうに、

『間違へちやつたねえ、田鶴ちやん。』

『をかしいわねえ。』

『をかしいわねえ……。』

此方の顏を見て笑つてゐる。

『もう一度間違はないように、唱つて御覽なさい……。』

『否よ。』　と冠を振る。

『どうして、否、いつも唱ふぢやありませんか。』

『だつて母樣、をかしいつて笑ふから否よ。』

『笑はないわ、間違はずに唱へば。』

『さう……。』

やをら唱はうと意氣込んだ折、丁度其所の小兒科の病院の門の敷石に、田鶴子が仲好の『熊』といふ大犬が寢て居る。雜種で、耳は垂れてゐるが、脚の長い。而して獵犬のやうな悧口さうな所のない、極鷹揚なので。

『熊がゐましたよ、田鶴さん。貴女の來るのを待つてたんですよ。』

『あゝ、ゐた〳〵。』と大喜びで駈出し、又振向き、

『お菓子は?』

『母樣、持つて來ましたよ。』

『さう……。』

帶の間から出して、ビスケットの紙包を田鶴子に渡せば、此方は丁寧に一つ〳〵遣る。熊は總身に智惠の廻り兼ねた大犬の、名ほど强くないだけ、また愚頭々々して、くれるものを喰べてゐる樣。

『何父樣と御一所の時も、矢張かうやつてビスケットを喰べさせるのですか。』

田鶴子は得意らしく頷いて、

『えゝ。熊はね、母樣、ちん〳〵も何もしないのよ。馬鹿よ。』

『本當に何も藝をしないのですね。』

『だけども、田鶴ちやん、熊好よ。』

『何故、好?』

『だつてもね……。』と鼻の下を伸ばして、眼を寄せながら、

『こんな顏をしてるから、田鶴ちやん、好。』

『熊の顔までして見せずとも、好いぢやありませんかね。』

何かをふと見付けた田鶴子は、

『母様、あ、あ、御覧さいよ』。

小な指の指すところは丁度一つ目の橋の上。濃霧は漸く晴れて、横雲の縁は金色に彩られ、東



の天には一杯、紅を流して。覺えず手を曳いて岸邊へ駈寄るほど。

『赤いわね……母樣。』

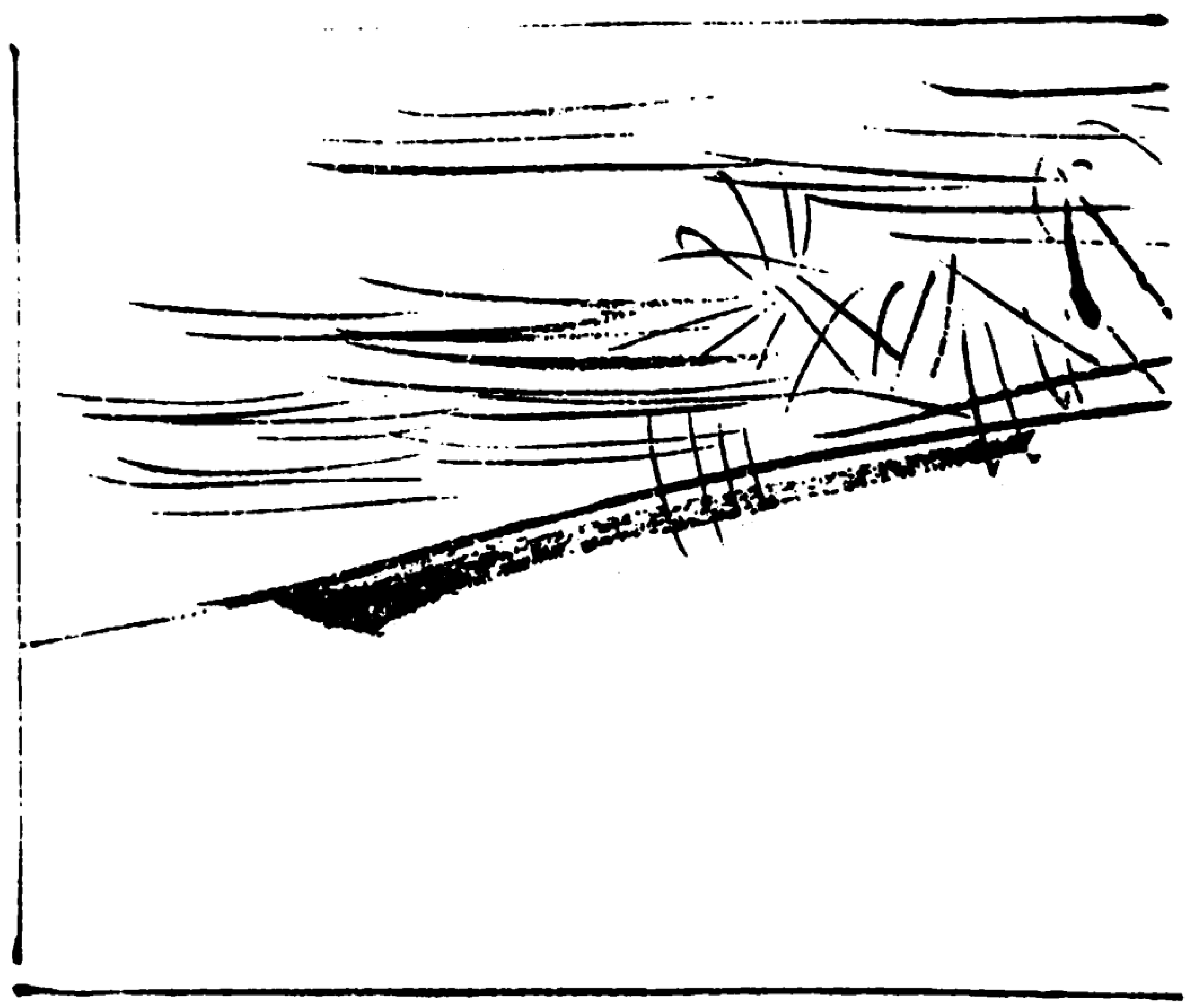
『眞赤ですわね。』

『大勝利の旗、見たいね、母樣。』

横雲を破つて昇る朝日には、田鶴子の聯隊旗と見たのにこそ理あれ。今は全く、川の面も、橋も、船も、家も、樹も、人も—田鶴子も母も、けやけき光に包まるゝ。

『奇麗、奇麗ねえ、母樣……。』

『奇麗ねえ。』



（下）

『あゝ、母樣……。』と不意に呼ぶ。

『何です。』

『鎌倉でも赤いお天道樣、見ましたね。』

なるほど去年の夏、かの地に避暑して、由比ケ濱邊に日を拜んだ事の、その折も母子一所に。

『あゝ、さうね。よく田鶴さんは覺えてゐますねえ。』

『鎌倉……海へ入りましたねえ。』

『あゝ入りましたね。田鶴さん、貴女は阿父樣に抱かれて、初め怖い〳〵つて、さう言ひましたねえ。』

『で、田鶴さん、怖い〳〵つて言つたら、阿父樣、波を蹴りましたねえ。』
『さうしたら、どうしましたつけ。』
『波はね……。』と首をすくめて、上目を使つて、舌を出しながら、
『べろ〳〵〳〵つて言つて、逃げて行きましたねえ。』
『さうしたら、田鶴さん、どうしましたつけ。』
『また波が來たけども、阿父樣、波蹴つたもんだから、波、逃げて、べろ〳〵〳〵つて行つて仕舞つたから、もう怖かなかつたの。』
『さう、きついわねえ。而して海へ入りましたねえ。』
『え〻……。海の水、冷たかつたわ。』
『さうでしたらうね。で、面白うござんしたか。』
『面白かつたわ。』
『どんなお衣服で海へ入りましたつけ。』
『あ〻、あの、改良服……。このリボンの附いたのぢやないの。白いのよ。白い改良服よ……お家へ行つたら着ませうね。』
『あのお衣服は、もつと暑くなつてから。』
『さう……。』
『而して海で何を取りましたつけ。』
『貝を取つたのよ。田鶴ちやん、喞筒の中へ貝を入れたら、水が出なくなりましたねえ。』

『田鶴さん、田鶴さん。』
と水を指して、なるべく早口に、
『こゝへ、今入りませうか。』直に水へ飛込む樣にすれば、田鶴子は慌てゝ引止めて、
『こゝへ入つちや、堪らないわ。』さも高慢に言ふ。
『何故、堪らないのです。』
『だつて、鎌倉よか、お水が、段無いぢやありませんか。』
自分は吃驚して見せながら、
『そんな事を言ふものぢやありませんよ。段無いなんと言ふと、市場の人が來て怒りますよ。』
『さう……。』と一旦は目を圓くしたが、
『だけども鎌倉、田鶴ちやん、好よ……。』
『鎌倉そんなに好ならば、また行きませうね。』
母が首を傾げると、田鶴子も同じやうに小首を傾げて、
『行きませうね……。』
『阿父樣がお歸りなすつて、伺つて見て、行きましよ。』
『えゝ。また、祖父樣と、田鶴ちやんと、母樣と阿父樣と……それから、濱や浦と……伯父樣と……
行きましようねえ。
祖父樣は海、嫌ひだから烟草だけ吸ふのね。氷は高價いつてね、芥が入つてるからね、田鶴ちやん喰べないわ。また……母樣と、お魚屋に鮹が、こんな〳〵顏をしてるのを、見に行きませうね。

あゝ、また牛を見に行きませう、ね。お乳をぶらんこぶらんこ下げた牛が、澤山々々歩いてましたね。また、草を遣りませう……。甘味い、甘味いつて言つてましたねえ……。また、牛の乳を飲みましよ。何でしたつけ、水天宮樣……？　不動樣……？　澤山々々鳩の居たとこ。』

『あゝ、あのお宮は八幡樣よ。』

『さう……。』例の大人て頷きつゝ、

『水天宮樣だつて、田鶴ちやん、間違へましたね。』

『また八幡樣へ行つて、鳩に豆を遣りますか。』

『觀音樣と同じだわねえ……。』

と言つて居たが、よく〳〵行きたくなつたものと見えて、飛び付き樣に、

『さあ、行きませう、行きませう。』

『えゝ。今から鎌倉へかい。』切に上目を使つて頷く。

『今からはいけません。もつと〳〵、暑くなつて、阿父ちやんもお歸りになつてから……。ね、分りましたね。』

『うゝむ……。』と鼻を鳴らす。

『分つたでせう、ね。田鶴さんはよく分るんだもの、ね。それまでは、毎朝かうやつて、母樣と川端へ御運動に來るの、ね、よく分つたでせう。』

さも、つく〴〵と考へて見たかのやうに、

『もつと暑くなつて、阿父樣が歸つて來たらね……。』

『さうとも……。よく分りましたねえ。』

兎角するほど、日は高く、早や『熊』の姿はなくて、今朝初めての電車は來る。

『段々、暑くなつて來ますから、田鶴ちやん、歸りませう。』

田鶴子はきよろ〳〵と四邊を見廻して、

『騒々しいから、歸りませう。』と例の大人て、踵を返す。

『婆ちやんは、何してゐるでせうね、田鶴さん。』

『乾度、一人で淋しがつて、泣いてるかも知れないね。』

『早く行つて、だまして遣りませう。』

『さうしませう。』

漸く人の出入する市場の横、某子爵の邸前に乞食が佇んでゐる。田鶴子は指して、

『乞食さん……憎らしい顔してるわね。』

すた〳〵と歩を運びながら、例のうら覺えの、

『君の御稜威の、、、、うつくしま、高千穗、高雄、高砂と、わふぐ、いゝいこどもに比べては、新高山もなほ、高し……。』ふいと振返り樣。

『母樣、鎌倉へ、皆して行きませうね。』

（完）

心の罪

岡みち子

あゝ、夫程に御親切にお勸め下さるあなたのお志を無に致すでも御座いませぬし、又私のやうな者をそうまでに仰しやつて下さるといふその松浦樣とやらを不足に思ふなどでは猶更ら以て御座いませぬけれど、實は少しく心におもふ事のありまして私は一生を獨住みと決めて居りますの、イエ〳〵、よく世間にある、西洋熱にかぶれたの何のと、そんな淺々しいのでは御座いませぬ、實は……實は、私は心に消えがたい或る罪を犯しましたの……、私の口づから斯樣な事をお話し致すもさて辛らいことながら、夫程迄の御厚意をお斷りの仕樣のなさ、何も打ち明けて申上げませう。

數へて見れば、もう十幾年の昔、私が幼な友達にある床しい人が御座いました。同胞といふものが有つたなら斯うもあらうかと思はるゝ程、それは睦ましいので御座いましたが、お互に一つ〳〵と取る歳もやがては重なつて、私が十五の春といふに其人はかねて志願の繪畫の御修業に上京せられまして、それより後は只だお手紙の交換に懷かしさはなか〳〵に勝さるのでありましたが、それかと申て其頃の私の心には只お友達としてその人を懷かしいと思ふより以上には、決して何の念もなかつたので御座いました。もと當地である畵師に付て學ばれてあつた頃から門弟中にぬきんづるその人が斯道の才は豫ねて聞き知つても居りましたが、更らに京都に大家の門に數年研磨の苦を積まるゝに至りましては、名玉はいよ〳〵その本然の美質を玆に發揮して、その技は忽ち世に知られ、その名は當時の繪畫界にかまびすしく、希代の天才

の、絶世の妙技のと、賞讚の聲は新聞雜誌に又人傳てに百里を隔だつ私の耳目にも入るやうになりました。それに引かへて私は、僅に小學校教師の敢果ないよすが、お足許にさへ追ひつき得ぬそんな少さい身をかくてもその人はなほお見棄てなくて、以前に變らぬやさしいお便りに、それは隨分身に餘る程の事をもいふて下されたのでありましたが、愚な私は、幼少い時に兩親に死別れ祖母の手一つで甘やかされて育ちました故か、人並外れた幼ない心、十五六の頃迄も際さへ有れば、姉樣作りに餘念がなくて、是には每度祖母に眉をひそめさせました位、どうやらこうやら教師とも呼ばるゝやうに成りましてからも、幼ない生徒達を集めて遊戲の稽古などには心から面白くて、同僚の誰彼がよるとさわると戀の愛のとなまめかしい雜話は耳に入れやうとも致しませず、たゞお轉婆の、遊び好きの、突飛者、男文字の優しい美しいお玉章を讀んで、人知れず胸を躍らすといふやうな、そんな娘らしい心はさらに無かつたので御座いますもの、今から思へば嘸ぞ物足らぬやうな御返信ばかり致して居つたので御座いましたらう。

處がそうこう致すうちに、ばつたりとそのお便りが斷へました。

はじめの程こそ、例の他愛ない心に別に氣にも止めず、うか〳〵とも過しましたが、それも半年餘りとなりましては、流石にいぶかしく、例にない此方からお尋ねの手紙を出しましたに、待つても〳〵お返事はなく、いよ〳〵心がゝりに存じて居ります矢先、思ひもかけず或る處からその人の御結婚成されたといふことを承つて、そしてその奧樣といふはその人が就て教を仰がれた恩師の令孃で、つまり師の姓を冒して其家の養子となられたのであると聞きましたその時に、まあ如何した心機のはづみで御座いましたらう

私の心の奧の何處やらから何故ともなくある不愉快な念がむら〳〵と湧き出ました、何かから自分のものでも奪られたやうな、口惜しいやうな、腹立たしいやうな、はゝ勝手らしい、其樣なことを思ひ得るや

うな身でも何でも有りませぬに……、この我ながらも解りかぬるあやしい念はわけもなく日々にひろがつて、言ひ知れぬ胸苦しさ、今更らにその人がはなやかな世の名聲を思ふにも、磊落なその氣風、凛々しい面ざし、何れも是れもいよ〳〵床しさを増すの種とならぬはなくて、あゝ私は、何も甲斐ない後となつて、堪へがたいまでにその人を慕はしくも覺え初めたので御座いました。

敢果ないがいかに此道の常とはいひ乍ら、さりとは餘りに敢果ない酷い戀に、私は竟に甘夢の味は知らず、唯だその苦さをのみ嘗めたので御座います、秋子さんは如何したわけか近頃は俄に大層女らしくしほらしくお成りなされたなど〳〵、冷評半分に口の惡い學校の同僚にあやしまれました程、是迄の晴やかなかろ〳〵とした心は頓と何處へやら、始終忘れ難い或る思ひに、便りないやうな、哀しいやうな、深い深い奥底に心はいつか滅入つて仕舞ひましたので、………

それがまあ忘れもしませぬ、あの一昨々年の夏の初め、私は例の通り一日の課業を卒へて、色の褪せた蝙蝠傘に夕日を除け乍ら、新町の通りを急いで歸へります途中、彼方から勢よく走つて來ました二輛の人力車の、初めのは、思ひもかけない！　お髭もいつか立派に出來、お服裝も變つてこそあれ、何の〳〵見ちがへませうぞ、ハッとして、思はず私は立ち止まりますと、彼方もお氣が付かれたか、摺れ違ひざまに屹と私の顔を見られましたが、人力車は其まゝ走つて過ぎて仕舞ひました、後のは奥樣で御座いましたらう、上品な美しいお方の、可愛らしい赤樣を膝に載せておいでゝしたが、跡にひとり私は、胸が躍つて顔が熱つて、暫しは其所に立つたまゝ人力車の行衛を見守つて、涙はいつか頬に流れて居るので御座いました。

往來といふことに氣が付いては、われと耻かしくも、夢中に途を急ぎまして、我家に着くがいなや、自分

の部屋に馳けこんだなり、私はわけもなく泣いて〳〵泣きました。
そこへ又その夕、車夫の持つて參つた無名の手紙は、いぶかる迄もないその人の手跡、再び意外の思ひに、私はしきりに騷立つ胸を押さへて、戰く手元に封を開いて、讀んで見ますれば、例の才ばしつた書ぶりに、實は所用かた〳〵先頃中より歸鄕して居るにつき、疾にお尋ねしたいとは思つて居り乍ら、いざと成れば何とやらむ心に堪へがたい或る思ひのして、兎角う惑うてのみ、遂に空しく今日迄も過ごした次第、御緣盡きねばこそ圖らずも先刻途上にお姿を認めては、又一しほの懷かしさ、今は何事も忘られて、是非ともしみ〴〵と御目にもかゝりたく、此方からまゐること當然乍ら、それには少しく都合の惡いこともあり、且つ明朝はまたどうでも歸京の途に上らねばならぬ身のいとまもなし、誠に失禮乍ら何卒今夜の何時迄に下名の處へまで來ては下されぬか、昔の友をお忘れなくば、と筆を止めて御座いました。
をかしや、今更ら斯樣お手紙に釣られて、何をのこ〳〵と嬲られに出懸ける程の秋子と思召してか、彼方こそまこと昔の好誼お忘れなくば、以前のやうに氣輕う尋ねて來て下さるに何が御遠慮、但しは錦を飾つた今の身に此のやうな破屋へはとのお心か、憎くや、口惜しや、と私はそのお手紙の端へたゞ「今の秋子は昔の友をも忘れ果てゝ候」とばかり書き添へて、使者に渡しましたが、私の心は此時からます〳〵亂れて、やがてはその頂上にも達したので御座いました。
恐ろしいものは涙の後の女心とやら、戀しさ餘つての恨めしさ、憎さも添ふては、あゝあの人といふものが此世に無かつたなら、私にこんな苦しい思もなかつたであらうものなど思ふにつけても、若しひよつと、何か急な御病氣でも出て……、あゝそうなつたらいつそ私の心は爽快するであらうにと、うと〳〵と、ゆめうつゝの境に時々あるまじきことを想ひ浮べては、又はッと、何故に私は此樣な恐ろしいことをおも

ふのであらうかと、われに返へつては覺えず身震ひも出ました程、自分で自分をたしなめ乍らも、思ひに亂れ思ひに餘る度毎に、心はいつか知らず〳〵に、咀ふともなくその人を咀ふやうなことを思ふやうにもなりましたの。

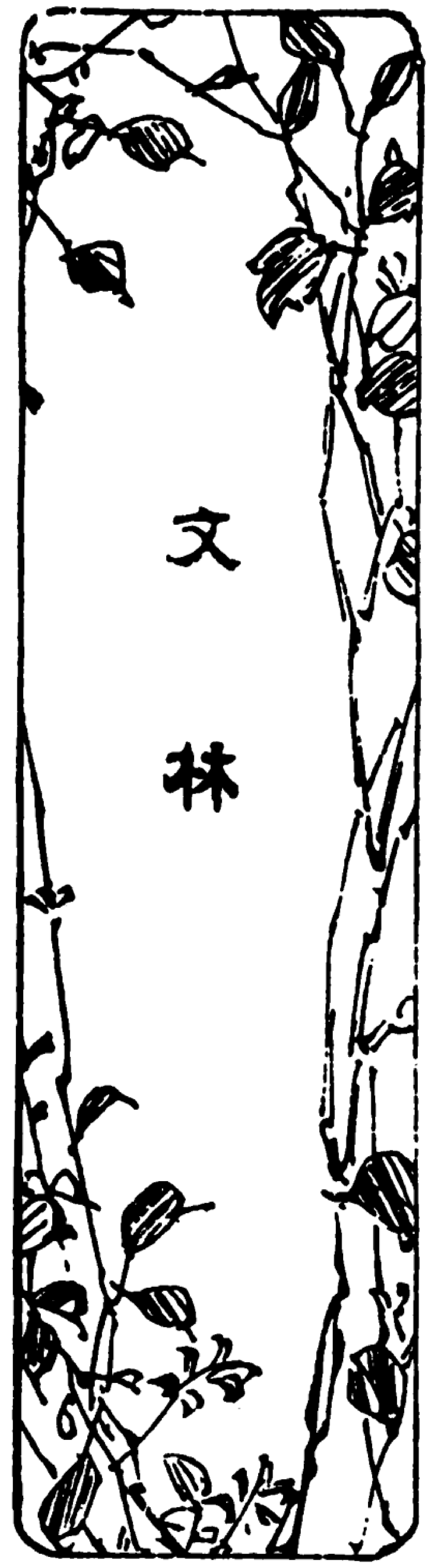
恐ろしい女、惡魔とも人でなしとも、嘸ぞあなたもお呆れ遊ばすことで御座いませうが、淺果な女心の取り亂しては、內心如夜叉と古い比喩も眞實その時の私の身に思ひ當るので御座いました。而しそうは申すものゝ、あゝ思ひもかけませんでした、餘りに意外で御座いました、間もなくその人が御病死成さらうとは……。

學校の教員室で何心なく取り上げた新聞紙上で、ふとそれと讀みました時の私の驚き、若しや是が私の念が屆いたといふものではあるまいか、と思ひ付くと共に、肢體はわな〳〵と震ひ出し、胸がつまつて、眼がくらめいて、私はそこに氣を失なつて仕舞つたので御座いました。

それは、よしや私が咀つたからと申て、左樣な不正に與して下さるやうな神樣は御座いませぬから、その人の御病死も全く偶然ではありましたらうけれど、それにしても苟りにもそんな淺ましい思ひを暫時なりと持つて居た私の心、人には見えずとも、萬能の神の御目には慥に大なる罪として見認められては居りますまいか、世擧つてその人の御病死を惜しむを見聞くにつけても、多大の抱負を捨て、最愛の妻子を殘して、空しく御他界成された當の人の御無念、後に殘られたお方のお嘆きやら、又そのお子のゆくすゑなど、それからそれと思ひつゞけて、私の罪はます〳〵大なるやうに感ぜられ、是丈でさへ既に堪へがたいのでありましたに、又一方には、いかにも私の想ひました通り、こう成つては今迄私の胸全體を掩ひ盡したあやしの念の雲は名殘りなく消え去りましたけれど、それと同時にあらはれそめた意識の光はす

べてをみな我が迷とばかり照し出して、何も自分の心からよしない人をも恨らんだのであつたと悟つて見れば、恥かしいやら面目ないやら、あゝすまないことをと慚愧の念のいよ〳〵高まりまするにつけ、其人と睦ましかつた昔はあり〳〵と目に浮んで、たゞお名殘をしい懐かしい、今はもう泣いたとて悔んだとて何とならうとおもふ程、いふかたのない淋しい哀しい心地に、せめては形身のお繪筆のあと、八つ橋織の白絹に匂ひこぼるゝ芙蓉の花も、御身が姿によそへてなど、むかし戯れのお言葉を思ひいでゝもなつかしいその手布を犇と私は胸に添へて、氣も消え〳〵に、ならばどこ〳〵迄もその人のあとを追ふてもゆきたいやうな、やるせのない思ひに物狂はしう、果ては神經衰弱とやら申す病に陥りまして、唯だ一人の年老いた祖母にまであらぬ嘆きをかけましたが、圖らずもあるお人のお手引きによりまして、尊い神様のお敎へを承り、すべてを御前に懺悔して御救ひに入る事の出來ました今、せめては彼の世の人におわびのこゝろ、又一つには一旦それ程迄に思ひつめました自分の心に對しても、私は所詮一生を獨り住みの覺悟、波風のあらい世の中にかよわい女の身一つを、例へば此先如何様な憂目に逢ひませうとも、それは自分が嘗て心に犯した罪の報と甘んじて受けますつもり、外ならぬあなたのお勸めにそむきまするは全く右の次第、何も御存じなければこそ、その松浦様とやらが身に餘つたお言葉を承はるにつけてもそら恐ろしい、私の罪の逐一をどうぞお傳へ遊して、御憎しみも御さげすみもなか〳〵に罪滅しの一つ、あなたも重ねてはもう〳〵何も仰しやつては下さりますな、私の心は破れまする。

（をはり）



高崎元彥君の戰死を聞ける時

典侍　高倉壽子

國のためつくさん時とすてし身の
名はよろつ世にかゝやきぬへし

正風君のみこゝろを思ひて

君のため國のためとはいひなから
思ひやらるゝ親のみこゝろ

元彥君の戰死したまへるときゝて

典侍　柳原愛子

なきかすにいると聞こそかなしけれ
もとよりすてしいのちなれども

師の君の御心をおもひやりて

もとよりもかくあらんとはのたまへと
こゑのみてなく時もあるらん

のこります妻子を見てもたらちねの
みおやのもりやつゆけかるらん

權典侍　千種任子

君のため御國のためにたふれたる
其名はくちし千世のすゑまて

權典侍　小倉文子

たくひなきいさをゝたてゝしら波の
かへらすなりし君をしそ思ふ

權典侍　園祥子

君か身は仇の城のへにたふれても
たまはいくさの勝まもるらむ

權典侍　姉小路良子

みいくさのかちときまたて國のため
　くたけし君かみこそをしけれ

高崎少佐君の戰死したまへりし時詠み給へる師の君のみうたをうけたまはりて
掌侍　小池道子

鬼神も泣かさらめやは子を思ふ
　やみにまとはぬ親のこゝろに
權掌侍　北島いと子

君かためたてしいさをのかゝやきぬ
　身はから國の露ときえても

高崎元彦君の戰死したまへるをいたみて
權掌侍　津守好子

をしめとも猶あまりあり此たひの
　高きいさをゝつたへきくにも
權掌侍　藪嘉根子

この時と身を大みよにさゝけたる
　君かほまれは千代もくちせし
權掌侍　吉田鉦子

君親のをしへまもりて身をすてし
　ほまれは高く世に殘るへし
命婦　生源寺伊佐雄

例なきこのみいくさにあらはせし
　君か譽の高くもあるかな
權命婦　平田三枝

勇ましくかちときあけてふるさとに
　かへりまさん日まちにしものを
權命婦　吉田愛

たくひなきこのみいくさに勇ましき
　ほまれのこしてゆきし君かな
芝山松子

わきいつる涙とゝめんよしそなき
　國のみためとくちにこそいへ
田中竹子

心にはあきらめなからいくそたひ
　かへらぬことをくりかへすらん

故高崎少佐の戰死を悼み　下田歌子

もの丶ふの鏡となりてくだけたる
　波間の月のかけのさやけさ

父君のみこゝろをくみ奉りて

かなし子は國にさゝけてなけきさへ
　見せぬみおやの森の木高かさ
津守好子

たらちねの親の心はいかならん
　殘すほまれをきくにつけても
中村秋香

なけくことと泣くことなしの言の葉は
　なくにもまさる嘆きなりけり
坂正臣

もゝとせの命にかへて萬世に
　くちぬいさをを殘す君かな
北里闌

なか〳〵になけかぬ君か目の中に
　あふるゝのもはなさけなりけり
植松有經

もの丶ふの道を君こそつくしけれ
　これもみおやのみかけならすや

出征の折新橋迄見送りまゐらせける當時の事とも思ひいてゝ
遠山英一

勇ましき君か門出の笑顔こそ
　やかて此世の別れなりしか

故少佐の書翰を見て

かへらしとちかひし君か雄心は
　此一ひらの文にみえけり

又父翁の　大君のみをしへ草をしをりにてさきたちし子を何かなけかんと詠ませ給ひし歌を見て

なけかしと君かいひにし言の葉を
　聞きて泣かさる人なかりけり
遠山稻子

身を立て道を行ひ名を後世に擧けて以て父母を顯はすは孝の終りなりと云ふ語のあるを思ひて

人の子の道をつくして君のため

くだけし玉のゆくへをそ思ふ

故少佐の偉功を樹て給ひしも其父翁の御心を盡して年頃教へ導き給ひし効果のあらはれたるなりと思ふに

此の父に此の子ありてふ古への
言葉を君か上に見るかな

靈前に供へられたる金鵄勳章を見侍りて

えてかへる其日を待ちしみしるしの
手向となるか悲しかりけり

故少佐は陸戰隊に加はり戰死せられしなりと承りて　　鈴木小舟

わたつみの海をはなれて山よりも
高きいさををたてし君かな

靈前にて

めゝしとなわらひたまひそ物ことに
涙もろきは老のくせなり

故高崎少佐の遺詠の新聞紙に出でたるを見て　　根岸澄江

國を思ふ心の花そ匂ひける
書き殘されし言の葉草に

父母にあひまつりて

いたつらに只涙のみこほれけり
いひなくさめん言葉なくして

元彥が春日分隊長に補せられて出でたらんとする前夕内より鴻二羽賜へりけるを頒ちつかはすとて　　正風

おほかりのこのたまものゝみむくいに
うちてさゝけよしこのあら鷲

よにありがたくめで度ためしかなとおしいただき昨夕よみてたまへりて

わが家のとほつみおやの神の名を
おへるみふねにのるぞうれしき

ふねの名の春日の山の高きなを
あけてかへらんときをこそまて

教の庭

正三位子爵 黒田清綱先生撰
（代撰菊池武則先生）

山家霧

天

東京々橋区南鍋町二丁目七番地　渡邊名加子

すみのほる月はたかねにみえなから
なほ霧ふかし山かげのいほ

地

東京府荏原郡大井村二百八番地　三好珍子

さをしかの妻とふこゑはさやかにて
きり立こむるみ山へのさと

人

大阪東区横堀六丁目木村庄平方　木村春江

子を呼はふましらやいつこ立霧の
中にこゑする小野のやまさと

甲

あし曳の山路のきくもみえぬまてけさたつ霧の深くもあるかな　東京　比田井元子

さらぬたにさびしき山のしたいほをいかにせよとか霧の立らむ　三河　永井さい子

山さとののき端の松も見えぬかな夜きりやふかく立わたりけむ　山口　村上操子

ころもうつ音はきこえてやまさとのありとはしりぬ霧立わたる　秋田　古瀬惟子

わかいほのしたゆく人のみえぬまであさ霧ふかし秋のやまさと　三河　山内経子

乙

ことさらにとざゝぬ己か山まとを何とあききりの立かくすらん　熊本　日高かず子

もの思ふこゝろもはれぬ山さとにいふせきまさるあさ夕のきり　長野　小泉みつじ子

みちのくの山霧ふかく立こめてたとるやとりもみえすなりける　神川　瀧井あさ子

山里に八重きりふかくたてこめぬたひ人いかにゆきなやむらん　水戸　茂々代子

麓のゆくそばのかけ橋見えぬまてゆふぎりふかし谷のしたいほ　本所　三阪きやう子

山さとのしばのをり戸は朝なく／＼となりまとほく霧たちこむる　長野　小泉たつじ子

初かりのこゑのみそらにきこゆなりきりたちこむる山すみの庵　近江　馬淵なみ子

秋さればきり立こめていほりさへ見えすくれゆくみよしのゝ山　大和　栗山たか子

見渡せはゆきゝもわかす霧こめてかせに晴れゆく柴ひとのいほ　和歌山　白鷗女史

いさよひの月見むかたもなかりけり霧にくれゆくあきの山さと　東京　林艶子

よのさまもしらてすみぬる山里をなほ秋きりのたちへたてつゝ　東京　渡邊初子

朝日子の影さすころもきりふかみまた夜をのこす山かけのいほ　麻布　林環子

霧こめてしつか柴のと見えねともはた織る音のもれきこゆなり　長野　中村さき子

よのうきをへたてゝすめる山里にまたもとさすかけふのふか霧　熊本　田代綾子

山さとはきり立こめてわかれとも聲あるかたやふもとなるらむ　東京　岩谷淺子

世をさくるこゝろなけれとこのころはきりたちこむる山の下庵　茨城　飯田古宇子

朝日かけ尾の上の松にさしなから なほ霧ふかしをちのやまさと　東京　上村茂々子

　肥後　徳永廣子

山のいほに夕霧ふかくたちこめて なくかりかねの聲のみそきく　肥後　千知波楯子

すみ竈に一筋みゆるけふりさへ きりにかくるゝをのゝやまさと　肥後　徳永尚海子

山住のゝきはを霧のたてこめて あはれもふかきあきのゆふくれ　茨城　飯田ます子

きりたちて見えすなりぬる山里に聲もかすかにゝはとりのなく　牛込　後藤喜代子

賤かやのせとのおい松かけもみえす むかひの山は霧とちてけり　熊本　田代艶子

もみち葉のにしきも霧につゝまれて みる目わひしき山すみの庭　大和　栗山俊子

さらぬたにさひしきものを山のいほ霧たちのほる秋はきにけり　神田　疋井滿武子

さひしさも山家はいとゝまさりけるきりたちのぼる秋の夕くれ　和泉　福原菫子

見わたしの高根は晴れて山さとはとなりもわかすこむる霧かな　埼玉　澤田房子

霧ふかきやまのほそみちわけゆけはしつか伏屋に駒のいなゝく　肥後　佐々有鄰子

足引の山のもみちのあやにしきたちこそかくせけさのあさきり　埼玉　横田やな子

賤か家のけふりもたゝすなりにけり ゆふきりふかし山際のさと　秋田　細矢はる子

山里はきりたちこめてみえね ともしをりにやせんにはとりの聲　下野　井上滋子

はたらひに水くむまこの俗うたの節おもしろくきりに消えゆく　松山　すゝしろ子

ねくら出るみ山からすの羽かせよりうすきりはるゝ秋の山さと

下谷　椎野秀子
とふ人もあらぬ山かをなほさらにうきよにへたつ秋のあさきり
三重　神田みよし子
山住のにはのまつかきあきされはたつ霧さへも世をへたてつゝ
福井　松本はま子
ともし火のありとは見えて夕きりのたえ間しらるゝ山かけの庵
名古屋　若原濟子
むらからすねくらあらそふ聲くれてきりになりゆく山本のさと
東京　山田蝶渓子
わけのほる峯の朝きりはれそめて栗のなり月はあらはれにけり
松山　田村多夏子
高嶺のみとほくのこしてたつきりのうみの中にも家はありけり
東京　岩谷梓子
あつさ弓はるはかすみのおく山のしはのとゝさす秋のゆふきり
前橋　林殷子
きり深き山をたとりてみわたせはほのかにみゆるさとの芝か家
札幌　小山かく子
菊植し山家のあたりきりやふかき花もつをとめそてのぬれたる
肥後　徳永多瑠子
霧ふかくとふ人もなき山さとはくものうへにそすむこゝちせる
武蔵　田中雛子
あさ霧にてらのみとうのかけきえてかすかにもるゝ覚貝のこゑ
三河　柳原てる子
山かつのしはの戸ほそはうつもれてふかくも立てる秋の夕きり
下谷　河合きさ子
立いてむかたもなきまて山里をいくへへたてぬきりのやへかき
松山　山崎国子
きりわけてとひくる人もなかりけり葎葉にうもる深山邊のさと
福岡　嶋岡美津野子

なきわたる鶏をたつきにしられけり霧にかくるゝ山もとのさと
東京　ちよ子
柴人のゆくへも今はわかぬまてみねにもをにもきりそこめつる
三河　加藤順子
なかむれは霧立こめしたえ間よりほのかに見ゆる小山田のさと
長野　岡田千穂子
みせはやなみやこの人にうすくこくきりたちかくす秋の山へを
三河　榊原きく子
となりさへ見えぬはかりに霧こめてうたふ小鳥の聲のみそする
東京　相川娣子
しみつくむけさの朝霧ふかくしておほつかなしや谷のかよひ路
北見　中川伊代子
軒はよりきり立ちこめてそま人のゆきゝもわかぬあきの山さと
埼玉　横田音羽子
しつの女か都に出てかへるなりゆふきりふかしをのゝやまさと
宮城　渡邊しげ子
尾はなさく花房山はきりこめぬなきゆくかりやいつちまよはん
長野　山本直枝子
さなきたにおそき朝日を立こめてきりに小くらきやまかけの里
秋田　古瀬りく子
山さとはきりたちこめてわかれともうすつく音や家ゐなるらん
神田　山田静子
手綱ひく馬士のさとうたきこえつゝすかたは霧の立かくしけり
長野　山本甚子
山さとは朝なゆふなにきりたちてよそめさひしき秋のくれかな
磐城　木幡たり子
山里に霧立ちこむるおきの夜は冴えにしつきもおほろにそ見ゆ
長野　小泉餘念子
さなきたに秋はさひしき山さとにきり立わたりほのくらきかな

栗のほのきはみそめにしうら山にきりたちこむるあきのやま里　上總　白石良子

立こめしあさきりふかくいつこにか鹿のなくなる聲そきこゆる　神田　荒井千代子

もみちせしさほの山へを立隱すきりこそふかきうらみなりけり　埼玉　町田かつ子

立こめし霧になかはゝ見えすなりぬ深山のさとのしつか伏屋も　大阪　小川治子

山里のゝころなかめもなかりけり秋のゆふきりもゝへへたてゝ　山形　香澄露子

こゝろまていとしめやかにものうきはあきゝりこめし山の一家　東京　敷島うた子

霧ふかみわか山のいほもこのころは路迷ひてやひとのとひ來る　埼玉　戸田折香子

やま里の木々の梢はもみちすれと霧立ちのほりかけもほのかに　長野　吉田次子

朝ゆふへきり立ちこめて山さとはいよゝ人あし絶えにけるかな　小石川　黒崎えつ子

月かけをたよりとせしにこのよひはくもともわかすまよふ夕霧　東京　齋藤春美子

きりふかき此の山里のしつかやにさひしくきこゆきぬたうつ音　福井　今井たつ子

初雁のわたりそめにしあしたよりきりたちのほる秋のやまさと　丹後　秀子

小倉山みれに夕きりたちこめてにしきのもみち見るよしもなし　秋田　伊東やす子

みきひたり何方をみてもしけりあふ山もかすかに霧たちにけり　秋田　伊東よし子

しけりあふ山もかすかに霧たちて見えつかくるゝしつかふせ庵　麹町　石川薫子

鏡山うすきりくもろきのふけふまつの月ほそのすかたゝになし　熊本　黒瀬こま子

山もとのうきたつきりにおもひいつ潯陽の巷にたちしけふりを　本郷　青木たま子

初きりのたちこめしよりいとゝなほみやこにとほき秋の山さと　名古屋　不破きみ子

ちりをよそにたちいる山の朝霧はなほうきよゝの隔てともすれ　東京　山本茂子

あきふかくあはれをそふるやま里の夕きりかくれしかそ鳴なる　肥後　秋吉輝尾子

立こむる霧にくもりていふせくもひろなほくらししつか山ふみ　肥後　岡山登壽子

霧わけてとふ人もなきやまさとはつまよふ鹿のこゑはかりして　富山　清江子

しほ〳〵と我にもあらすみかへれは霧たちこあり山もわか家も　陸前　前田河みさを子

山さとのありあけかたにたつきりに聲のみわたる厂のひとつら　陸前　前田河千年子

山さとの夕くれかたにたつきりはつきにさはれる雲とみるらむ　松山　上原のふ子

谷川のみつもかくれてやまさとの軒端はきりのうみとなりけり　長野　山本民年子

なかむれは夕きりふかく立こめて槇のいたやを月さすはかりに　肥後　佐々小琴子

犬の聲をしるへになしてわけいれは霧の八重かきむすふ山さと　京都　白川愛子

やま里はふる秋きりにとさゝれてさなからくゝる心ちこそすれ

朝きりをおほろにまとふ山の庵 御はたなきひて繪にもせまほし
長野 大町 かほる子

霧ふかきのきはをくたる柴人の こゑもまれなるあきのやまみち
埼玉 横田秋子

賤の男かひきゆくこまもみえぬまて 霧たちのほる小山田のさと
山梨 [illegible] 武子

賤か家のかきれもみえすなりにけり 霧たちそむる小山田のさと
福井 平田そて子

旅人のやとりしつらんしはの戸も 霧立つなかに夜はあけにけり
富山 白 百合

杣人のころもの袖もしめるらむ むあさゆふはれぬきりのやまさと
静岡 竹内みつ子

新つまのゆふけそなへてせこをまつ 山かのゝきに霧おそひくる
下野 井上貞子

牛をおふうなゐのこゑは とほさかり軒はにつゝく山のあさきり
福岡 山川敬子

山のはに煙たちそふきりふかみ 里のなかめもさひしかりけり
埼玉 田中花子

もみちはのにしきをつゝむ秋霧の やへ垣つくるやまさとのむら
東京 金原 たまき子

やまてらにいち夜をあかしなかむれは かすみこめたる秋のみ社
三河 白井よし子

きりふかきやまのおくなるしつか屋に 夫婦なかよくきれを打音
埼玉 澤田榮子

深霧にまよひ入りたる山みちに うれしくもきこゆむきつきの音
埼玉 澤田伸子

見渡せは四方のわら家は霧ふかく たなびきわたる秋のゆふくれ
東京 横井しづ子

大阪 山中ふさ子

うつもれてよにはしられし朝夕の けふりはきりのおくの山さと
大阪 山中ます子

吹おろす高ねのあらしたえにけり のきはをのほる谷のうすきり
野州 壬生 すみれ子

山荘のあたりいち面かゝりたるはれ間たに なききりのうきはし
日本橋 神戸壽惠子

霧こめてまかきの萩もたえ〴〵に こゝろもひめる山さとのには
薩摩 松原みれ子

八千草を尾の上に虹とうつしつゝ いまたちのほるたにの夕きり
本郷 井上桂子

さを鹿の聲はかりしてをのへふる すかたを見せぬさとの夕きり

電信

天

かりかねのつはさの文は昔にて
ものいひ交すよとはなりけり
埼玉縣大里郡花園村小前田 町田かつ子

地

千里をも遠しとみしはいとのねの
かかる世しらぬむかしなりけり
福岡縣久留米市藏島町 蟻岡美津野子

人

うみ山のとほきところも隔てぬは
このはりかねのたよりなりけり
松山市萱町六丁目三十三 田村多豆子

甲

みいくさの勝をしらせる針金のたよりいかにとまたぬひはなし
秋田　古瀬惟子

いなつまの光のまにも知らるゝはいとを傳ふるたよりなりけり
山口　村上操子

乙

針金にいくさたよりやひゝくらむ舞ひ立ち昇るつはくらのむれ
周防　堀たれ子

雁かれのそれならなくに針金をつたふたよりのはやくもある哉
神田　山田靜子

夢のまに千里をへつるとも道のたよりきくこそたのしかりけれ
茨城　飯田ます子

いく千里とつ國までもはりかれのいともたよりの早きみ代かな
三河　榊原てる子

いく千里へたゝりぬるも時のまにたよりなすへき道はひらけぬ
長野　小泉たつじ子

一すちの糸のはりかれときのまにちさとをかけて通ふことの葉
三河　榊原きく子

くろかれの糸すち通ふことのはは千里の外もとなりとそおもふ
長野　山本直枝子

糸かれのたゝ一すちのちからもて言の葉かはす世となりにけり
長野　小泉みつじ子

あきつしま外くにのことおしなへて時のまに知るいなつまの文
下野　井上滋子

はりかれを便りに通ふ言の葉のはやきしわさにおとろかれぬる
水戸　茂々代子

針金に御代のほまれやひゝくらんやしまの外のそらのはてまて
長野　中村佐代子

秋田　細矢はる子

やたまよりいともはやきは稲つまのたより千里にかよふ言のは

このたよりきくたひ每にふる里に事やありしとむれさわきつゝ
東京　四屋やす子

北の海つくしのはてのきはみなくたよりもはやきはりかれの糸
紀伊　白蘭女史

かけわたすいと針金のいとはやくたよりを聞そうれしかりけり
近江　馬淵すゞ子

梓弓はりたるいとのおとつれはそらとふとりもおよはさりけり
三河　山内經子

いにしへは百々日にわたる厂のつてとふとき御代になれる電信
東京　荒井滿武子

いなつまの傳ふ信りはいとはやくまたゝくひまも千里來にけり
東京　山田婦美子

いなつまのたよりあらすは海山をいかてか母とへたてすむへき
薩摩　松原みれ子

あた國にかちしいくさも針金のたよりあらすはとくしらめやも
近江　馬淵なみ子

はり金の糸のたよりをけふもまたまつことにして文をみるかな
大和　栗山俊子

いく千里へたつる國のおとつれもたゝひとすちの糸にきく哉
大和　栗山高子

海山をへたてゝひきしはりかれのいともかしこき君か御代かな
埼玉　横田音羽子

ひに月にすゝみゆくよははり金もひかてたよりを取かはしつゝ
東京　渡邊郁子

あら海の底にしつめしはり金のたよりもはやきよとはなりけり
東京　渡邊名加子

はりかれをつたへ〳〵て海山をへたつるともとかたるみよかな
陸前　前田河千年子

陸前　前田河みさを子

大御代に生れしことの嬉しくも千さとのたよりときのまにきく
武藏 三好 妙子

みいくさのその有様もいなつまのまたゝくひまにきくそ嬉しき
埼玉 澤田 伸子

百千里へたてし國にゐなからもかちいくさ知る御代のうれしき
肥後 德永 萬壽子

千里へし人のうへさへつかのまにとへはこたふるみよそ貴とき
肥後 德永 多瑠子

すゝみゆくみよの恵やつかのまに千里のとものたよりをそきく
肥後 德永 廣子

みいくさの勇ましきをもつかのまに千里の遠方に聞そうれしき
東京 林 艶子

海山をへたつるくにもときのまにたより通はすはりかれのいと
東京 林 環子

一筋のはりかれなれとつ國のたよりかよはすわさのおかしき
東京 青木 たま子

これなくはいとゝ遠けき海陸のかちいくさたにとくはしれまし
和泉 福原 菫子

滿洲のみいくさふりもはりかれに言かよふ世のくしくもある哉
松山 上原 のふ子

とへはとく答ふる御代のはり金をむかしの人に知らせてしかな
東京 後藤 喜與子

つかのまに千里をかよふはりかれのいとたよりよき君かみよ哉
熊本 日高 かず子

數しれぬをちこち人のおとつれもたゝひと筋のいとにしるかな
京都 白川 愛子

あやしくも一筋かれをそらにはりうみ山こえてかよふことの葉
三河 永井 さい子

時の間に千里をかけてはりかれのいとくすしくもこと通ふかな
肥後 佐々 小寧子

おもふこと糸はりかれをたよりきて千里にかよふわさそ妙なる
東京 椎野 秀子

針かれのしらせも遲きこゝちせりいくさの便りひゝにまたれて
靜岡 竹田 みつ子

いくち里へたてゝかよふはりかれは飛鳥よりもはやきおとつれ
山梨 標 武子

幾千さと身はへたつとも時のまにことゝはるゝそ嬉しかりける
下谷 河合 きさ子

はりかれの早きたよりにとつ國も我ひのもとのこゝちこそすれ
東京 金原 たまき子

ちさとまて言の行かふよとなりてとつ國くにもとなりなりけり
三重 神田 みよし子

いく千里へたゝるくにゝすむひとゝこととひかはすかれの糸筋
三河 加藤 順子

一すちのいとのたよりにみ軍のかちを知らるゝことそうれしき
長野 岡田 千穗子

異國のけふのことをもけふきくは糸のたよりのあれはなりけり
札幌 小山 かく子

電信をうつたひことにおもふかな飛脚たてにし御代もありきと
茨城 飯田 古宇子

朝な夕な千里へたつる友かきとかたるもうれしゐなからにして
長野 大町 かほる子

うみ山を遠くへたゝり居る里もゆふへをまたてたよりするなり
橫濱 寺田 光子

みいくさの君しのふ夜半の文のつて胸おどらせつこゝろ騷くも
熊本 田代 綾子

千里まてまたゝくひまに音つるゝこれのたよりそ奇しかりける
長野 田島 みよ子

張かれてつなに傳へてことのはをちさとの外にやるそうれしき
肥後 佐々 有鄰子

いなつまの光るかことくおもふ事千里ゆきかふおもしろのよゝ　肥後　秋吉輝尾子
いく千里へたてし國の友とちとくもことはのかよふうれしさ　肥後　岡山登峯子
ひらけゆく御代のためしか針金も言葉つたふるよとなりにけり　陸前　前田河千年子
朝な夕な軍のかちをきくこともはりかれつたふ御代なれはなり　横須賀　岩橋花子
針金のいとかけわたしをちこちにものいふ世ともなりにける哉　東京　神戸すゑ子
待わひしふる里よりのてんしんによしあし事のたよりをそしる　埼玉　横田やな子
針金のいとのたよりもつかのまにことたる御代に成にけるかな　埼玉　横田秋子
はる〳〵と引はりかれの糸なかく思ふこゝろのことたりにけり　名古屋　不破きみ子
東のまに勝ときしれていとうれしたゝひとすちにおもふみ國の　長野　小泉餘念子
あつさ弓いとかれつたふ音のはは矢よりもはやし千里もゝさと　長野　山本民年子
いなつまの光りの間にもいく千里音のはかはすかれのいとすち　秋田　伊東よし子
よの人のかす限りなきてんしんもほそき金をはたよりにそする　磐城　木幡たり子
電報を取る手おそしとひらき見ればいとし我か子は名誉の戰死　熊本　田代艶子
をち方の人のたよりを時のまにかよはするこそくすしかりけれ　三河　白井よし子
たのしさやみ軍人のたよりをははやくつたふるてんしんのいと　東京　岩谷淺子

稲つまのたよりこそけに樂しけれ夕へのいさなけふのいさをし　秋田　古瀬りく子
金の糸それもたのましいな妻のたより嬉しきみよにもあるかな　東京　山本箕子
いなつまのたよりに今は千里路の遠くもとなりの心地こそすれ　福岡　山川敬子
またたきのひまに傳ふるわさにさへ軍のさまはまたれぬるかな　神戸　清水薫子
いく千里へたてしくにと電信のおとにたよりをかはすみよかな　松山　山崎きやう子
時の間に千里をかよふはりかれのことたらひ行く御代そ嬉しき　大阪　小川治子
はり金にいかなるたよりやひゝくらんひれもす思ふ背の君の上　神戸　大橋濱子
山かはを遠くへたつもはりかれに戀しきとものたよりきかるゝ　埼玉　澤田伸子
みは千里へたてゝゐれとやすらかにときをゝすしてつたふ針金　大阪　長野悦子
いくち里へたてしくにも束のまに友のたよりをきくよなりけり　長野　山本基子
しきしまの道は千里をへたつともふみにそ代るかれのいとすち　東京　荒井あき子
數千の路はおろそかひやくまんの外くにまでもたよりをそきく　東京　荒井千代子
つかのまにせんちの事をしりうるもたゝ電信のゆゑにありける　東京　田中蓉子
居りなから遠き千里の花に月にたよりきくこそうれしかりけれ　肥後　千知波橘子
時のまにきくそうれしき百千里へたゝるくにのひとのおとつれ

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

仲秋月を觀ざるの記

天

東京市牛込區二十騎町二十八番地塚本方　四屋やす子

「年毎に見る月なれどこの月の今宵の月に似る月ぞなき」との御製も、げに空高くすみのぼりたる影の、松の木のまをもるゝさま、露おもげなる萩の下葉にやどるさまなど、たとふべきものもあらずなむ。遠征の將士が幾多の艱難をなめつゝ、もろこしの野に露營せるさまを思へば、いたづらに月にあくがれぬべき秋にもあらねど、久しく逢はざりし友、今年暑中の休にて、めづらしく歸省したりしが、さはる事のありて、未だいでたゝであるを、月よくば招きて一夜を語り明さん。軒近くみのりし柿も色づきぬ、園の栗の實も笑みこぼれぬ、折よくばふりしつま琴とりいでて、たへなる友のしらべをもきかばや、雲なかゝりそと、まち渡りたるけふの日に。あやにくや、朝の程よりふりいでたる雨、をやみだになく、ふりつゝ暮れし空ながら、いと明るうなりたるは、月も中空にやゝどりけんと、いとうらめし、あゝ月は又來ん月もみちぬべけれど、ともに見ばやと思ふ友は、やてが千里の外に立ちはなるべきを。

地

下谷區御徒町三ノ三三　岡田柳子

三日月の頃より待ちし今宵なれば、心ゆく限り眺めてましと思ひしからに、とくより秋の七草庭もせに移し植ゑ、今やまさかりにもなりて、とりどりに匂へる姿、いと艶なるに、月もさゝば如何計り、床しからまし

など、思ひ續けつ、日一日天津空のみ、仰ぎゐたりしに、口惜しや、夕つ方より浮雲立ち迷ひて、三つ四つ二つほの見えし星の影さへ、漸に消え行き、果は晴るべくも見えずなりぬ。あゝ恨めしの雲よ、一年に今宵計りの眺めなるを、いかでつれなく立隠すらむ。今しも床しき秋草の花は、色香愛たう咲き亂れ、竹垣の彼方には、月のでしほを松虫の、聲面白うなきつゝあるを、暫しだに俤見せてよと、願ふも今は甲斐なくて、空しう曇り行空を、眺めやりぬ。さはれ、思へば遠き唐の野邊は、砲煙たえず立登りて、電の光いと凄まじうはためき、いつはつべくも見えざるを、天津み神も愛ましてやおはすらめ、扨こそみ國の空も曇りはてにしなるべけれ、あゝなどか恨みむ、中々に戰ひのちまたの様を、忍べよとてか、あゝ今宵如何にあるらむ。露營の勇士。

人

東京市牛込區岩戸町八番地　比田井元子

なべて月としいへば、いづれあはれならぬはあらねど、わきて今日いづらん影よ、げにいかばかりさやかに世をてらすらんと、ひたすらに待たるゝ心には、まだ暮れやらぬ空の程もなつかしう、夕餉も例よりは早う終へつ、光さすらん庭の塵をはらひ、かげの宿らんよすがと思へば、草葉に水さへそゝぎしを、いでやとあくがるゝ夕つ方より、みそらのけしきいとあやしう、鳴る神の音とゞろきそめて、まてども／＼かひなき空の、いつ出づらんともおぼえず、うたていかばかり、我も人もまちわたりけむをと、わびしさ限りなう、とかくしてねやに入りぬる後までも、心はたゞかの雲の中に、ひとりさえわたるらん光をのみしのばるゝぞわりなきや。

出陣中の兄君に贈る文

地

札幌北一四七の一　小山かく子

九月一日發、遼陽包圍軍の行動、千軍萬馬の間にお認めなされしとは思はれぬ計りの詳しきお手紙、漸く昨日夕方拜見仕り候、例により御兩親樣と正吉を聞き役に、小妹は讀み役を相務め申候。

御申越しの新刊雜誌、煙草、罐詰其他共早速取揃へ御送附申上べく候。

過日遼陽陷落の報當地に達せし時は、思ひ〳〵の趣向を企ておき候市民の感情は、一時に激發して、至る所感謝の念にみたされ、煙火の打揚げとなり、提灯行列となり、武者行列となり、老幼男女相混じて萬歲を叫ぶ爲に聲をからしつゝ、醉へるが如く市中をねり歩きし有樣、お目にかけたかりし事に御座候、常に內氣者よと兄樣のお笑ひなされし良吉すら、辨慶七ッ道具の假裝にて、はね廻り申候。

宅にては其頃御來遊の大和田健樹先生新作『遼陽の陷落』を合唱し、父上の音頭にて、家內一同帝國萬歲を三唱し、併せて兄樣の御武運長久を祈り申候、此書のお手許に達する頃には、奉天攻擊開始せられん抔と父上お噂致し居り候。

我等家族一同が兄樣に對する希望と同情とは、每便申上候如く、飽くまで平素の御信仰を堅く守り、常に生死を念頭の外におき、萬事を攝理の神の聖旨に托して、終りまで、勇ましき大和武士の模範的人物たらんとを祈るのみに御座候。御兩親樣始め、正吉良吉は申すに及ばず、お隣りのお信樣、役所の方々よりも宜しく申候。かしこ

人

宮城縣柴田郡槻木町　渡邊しげ子

今宵月影何となうあはれなるまゝ、母君武夫共々庭に出でゝ眺め入り候ふ。物語りはしなくも西の空に移り候ひしところいとなつかしき御文遼陽より到着いたし候ふ、思ふ心やかよひけむと詠みいでし人の胸のほども思ひやられて嬉うこそ候へしか。恩賜の銘刀初めて血を染めの一節さながら軍談きく心地のして、武者振の後姿いかなりしならん。武夫の雀躍するも理りに候ふ。父君も叔父の君も打揃ふて健に候へば、御心安う思召さるべく候ふ。昨夜は祝捷の爲め提灯行列催され候ふ、篠をつく大雨轟くばかり湧く歡聲、そが相和りて地上六尺數萬の火と凝りたるかと怪しまれ候ふ。全市擧ての狂喜、手にかけて落したる兄君等の御喜びいかばかりかと察上まゐらせ候ふ、今年は流行病もなく、氣候もいと涼しくなり候へば、此方は何も御氣にかけられまじく、たゞ寒山の尖とやら、實に程遠き戰地に候へば、御病氣等あらせられぬやう、御用意遊ばさるべく、母君もくれ〴〵の御たのみに候ふ。尚御所望の繪はがき、明朝送上まゐらすべく候、九月八日午後七時半、月淡雲にかくれ庭には虫の聲しきりなる時認め申し候。かしく。

中秋月を見ざるの記

北海道　なだまき

秋もやう〳〵深くなり行けば、草葉の中に鳴く虫の聲、落つる桐の葉、野邊の錦、まがきの菊と、いづれ劣らず、文人の歌袋こやすしろは多かれど、中にもまさる秋の月、殊には一年に一たびの望月、ましてや年ごとに、必ずしも雲はれ、天明に、殘るうらみなき迄面白き月を見るとのみは、定まらぬものをや。強ひて言はゞ、仲秋無月の憾を遺す年の方、むしろ却りて多からん。誰か今宵をあだにせん、とらへて文作り、歌詠まんと思ふ折しも、東の空に一群の黒雲出でにけり。あなやと見上ぐるまに、次第に廣がりて、月の出づべきひまもなし。あなつらにくの黒雲よ、今宵のみは殊更に、山の陰にかくれ居よ、やよ風、なにとて黒雲の群をば吹き散らさゞるとうらめど聞こえぬか、一重の屏風にへだてられ、明るき光見ぬ悲しさ、寶の山に入り、空しく歸る心地せられ、しばしは空を眺めつゝ待てど螢の光ももらさばこそ、たゞやみ夜に、草葉の陰に夜もすがら、鳴くなる虫の聲すのみ、あはれそなへし神酒にも、宿るまらうどのかげなくて、さびしく風に吹かるゝのみ。

宮城　渡邊しげ子

今宵は葉月のもちなり、兄君の世を去りたまひしは早や三とせのむかしとなりぬ。さても思ふことおほきよひにもあるかな。野邊の住居の秋としなればいとものがなしきに、その夜はまさりて月かげさえ渡り、なく虫の聲うらがれ行くなど、いみじう哀れに聞えてけり。病の床に臥したびにし兄君、月こそ見えれとのたまふ、戸をおしやればやう〳〵に重き頭をまはして、眺め入り給ひ

ぬ。あゝよき月かなとのみたまひて、その瞳はあやしうかゞやき、はら〳〵と涙をながし給へり、さてしばしするに、いと心地よき様にてやす〳〵と眠られにき。

その夜、月隠るゝ頃ほひなりき、あはれ兄君はなき數に入りたびぬ。悲しさいたはしさ譬かんもおろかなりしよ。けふぞ此ころなどかたりあひて今宵も母君と泣きぬ。月をや慕ひてゆかれしな、あはれこよひは月影いさゝかも見えず、月あるが悲しきか月なきが戀しきか。月に影はうつさずとも、せめては昔したふ料にもやせんものをとしのばれて、

横濱　寺田光子

み情け深き父母の君は、我身の衰へゐるをいたはらせ給ひて、かの地、此地とみ心づくしの程うれしく、乳母と共に逗子の濱邊に身を養ひて、歸りし去ぬるかの日、父母の君は、我面がはりせしをいたく喜ばせ給ひき。然るに此頃、又もや病魔に襲はれぬ。只うつ〳〵として、日毎に心慰むは、月明き夜の虫の音、夜ふくるまゝにいよ〳〵しげき其聲をきゝては、歌よみ文かく事をのみこよなき樂しみとはしつれ。そも始の中こそ、病ひはやう〳〵重りて、床につく程となりてより日數もへぬ。指折り數ふれば十五夜の月そも今宵となりぬ。我一人うなづきて去年樂しかりし事思ひいでゝは、涙にむせびぬ。弟妹と山に入りて、薄求めて歸りし夕ぐれ、母君がお料理のかず〳〵をそへて、月をまち、遊びし夜の、そゞろ浮びいでられて、おき上らんとすれど、頭重うして只心あせるのみ、今は夢か現か、我にかへりて今更ながら、あだり見まはせば、そこには母君と愛らしき弟妹の話しごゑのみなりき。アゝ去年の我身なりせば母君もろとも樂しきまどゐしつるものをと、又も涙は頬をつたはりぬ。

東京　松川ちよ子

兼て待ち設けし仲秋の望月。今宵はいかならむ。今朝は快晴とまではゆかざりしも、まづ〳〵晴れなりしかば、或は清光を拜し能ふらむ。さあらんには、皆々まどゐして、望月のくまなき物語だにして、日頃の鬱を散ぜばやと、何くれと供へものいそしみつ。暮れそむる程より空のみうち眺めゐたりしに、口惜しや、雨をふくむ雲幾重となく重なりて、物しめやかに、星の光さへ包みおほはれぬ。まして、我のみ獨雨知り顔に枝蛙のかしましく檐に啼けるも、折にふれてわりなくつらし。夜は靜かにふけゆきて、遠き寺々の鐘の響き、まつ虫の聲の細りゆくも哀に悲し。萩の上葉を音づるゝ力なき風は、遂に天津み空に渡りて浮雲を拂はんともせざりき。遺憾胸に漲りて空しく佇立する幾時。あゝ月に叢雲、さりとはよくもいひける事よ。さりながら人も亦かゝる浮雲の如きものにさまたげられてこそ、人生にいとも貴重なる忍耐てふ勇氣起り、心の玉さへ磨かるゝなれと、み空の雲こそ拂はれ、かき亂れし胸いとゞすが〳〵しうなりつる時、尚頼寂漠として梧葉の散る音あり。

東京　石川瀧子

垣根の朝顔小さくなりて、葉がくれに一花咲けるいと憐深し、憐今夜十五夜の月見んと朝の程より様々の用意しつゝ暮るゝを待ちし甲斐もなう、夕つ方より空薄雲かゝり、雨さへ降り出でなん景色なり、夜になりやう〳〵薄雲濃くなりきて、光ゆるくかすかに星の影二つ三つ見ゆるのみなりし、此景色にてはよも今夜月出でまじと、姉君の宣ふに心も穏かならず、今暫し〳〵と薄雲の傍に明るきあたり眺めつゝ心だのめし甲斐もなう、八時九時を過れど月は遂に出で來らで、只世は闇なりし。花瓶に挿せし薄、紫苑淋しげに風にゆらぎつゝ、團子、初栗、初柿、衣かつぎ、枝豆などの供物、われはむなしく其前に坐して、打沈みぬ、憐今我と同じ

思にかの薄明き空を眺めそらだのめして團子、初栗さま〴〵の捧げ物むな數雲の佚へとなりしなかこつ人幾人かあらむ、など思ひ浮べつ、淋しさにつれ又も思ひ起すは亡き母の事なりし、蓬が下に鳴く虫の聲耳に滿ちて愁情を助け、風なき庭に音するは桐の葉の散るにやと心細く、咲き殘る月見草かすかに夜目に色見えつ、憐むべし八月三五の夜は遂に月なく、梧葉影中一聲の雨空敷灑ぎ來りぬ。

富山　清　江　子

今宵は望月なればとく〳〵との、母君の仰せに、晝すぐる頃よりそこはかとなく清めつくし、眞白になびく背戸の一群すゝきかきわけて、いともいとも趣あるを、月見の御料にさしそへて、今か今かとぞ待ちわぶる。

折柄晝のわざ終へて歸らせ給へる父君、あたりじろ〳〵とながめては、打ち笑ひ給ふに、こは何事のおはすらむと問ひまつれば、空を指ざして、またなくおかしがり給ふ。

母君も妾等も、いぶかりてありける程、薄雲やう〳〵廣ごりて、はては雨さへ降らん氣はひ、あまりの事にあきれはて、かたみに顔みあはせて、力なき笑みもらしぬ、かくて、九時すぐる程までも待ちにまちわたりし月は上らず口惜しき事いはん方もなかりき。

肥後　德　永　廣　子

四つの時、その姿のかはるとにはあらなくに、月としいへば八月の望の夜の月をこよなくめづるは、古も今もかはらざるを、ましてて我山里は岩限の峯の松がえに、鏡かけたらんやうに、うるはしくさえわたる月影に、終夜うきよのものともおもほえず、さまざまのたのしみに、末は古人の歌のこゝろなど思ひうかぶも、年ごとなるに、今年もはやくより待わびつれば、たまたまに秋ももなかとなりて、名にしおふ月は今宵なるに、あやにく空かきくもりてうるはしき月の姿は少しも見えず、雨さへ降り來ん氣合なり。すぎにし去年の秋の夜は、いとたのしくなかしく打集て夜をふかしけるも、今宵なりしかなど思ひ出ては、いといまはし。げにもげにも、月にむら雲、花に風の言の葉も、今宵のさまならんと詠むるに、峰は松風のおと千草にすだく虫の音ことさらにあはれふかくて。

年ごとにたのしくみつる月の影
　いかで今宵はかきくもりけん
月影とともに心もすまぬ夜は
　なく虫のねぞあはれいやます

磐城　木　幡　た　り　子

指折り數ふれば、妾が病の床につきしより、茲に五ヶ月、天高く馬肥ゆるの、最とも爽かなる、秋の季節は來りぬ。世の人の多くは、此の季に逢へば、日頃の病も療ゆと言ふなるに、嗚呼いかなれば、神は妾をして病ましむるか。獨り怨みつゝある折柄、妹のやさしき聲『今夜はお月見です、月はよくさえて居りますが、姉さん御覧なさる事が、出來ないでしょう、復わるくなるといけませんから』『なにお月見です』と起きむとせしが、如何でか得べき あゝ怨めしや、數月の間も、病の床にある身、やつれやつれし此の姿、『あら姉さん、危うございますよ』と、馳けつく妹の手を握り『妹よ、噫、くやしい、もしも健かであつたなら、たもと連れて、築山の邊り、共に今宵の月を、賞でらるゝだろうに、あゝ怨めしや此の姿』熱き涙を振りかくれば、彼れは、何の言葉もなく、涙見せじと顔を掩ふ。間もなく母の呼ばゝる聲『姉さんまたすぐに參ります』と、坐を立ちて、出でゝ行く、見送る眼にも、見返る眼にも、共に涙。

和泉　稲　原　菫　子

花、紅葉とあはれつきせぬなかに、とりわけおかしきは月夜にな

ん、今宵は望の夜、いで月見せんと端近ういざり出でゝ、空のみうち仰ぎ、風や吹き出でん、雨もや降らんなどゝ、静心なきに、夕すぐる頃より、あなにくや、空俄にかきくもり、雲立ちまよひて、あはや一陣の狂風吹くよと見る間に、ぽつりぽつりといと大粒なる雨ふりきぬ。軒の玉水の音すさまじく、見る間に庭は海と、あはれ千草の花やいづこ、垣根にすだく虫の音もいと心細げなり。待ちにまちたる甲斐もなう、あたら仲秋の月を暗夜にすごす事の口惜さよと、ひとりかこつ折柄、誰が玉章をかけてきつらん、あはれになつかしき雁金の聲、故郷の空やいかならん。

東京　金原玉城子

年比住ふるしたる家は駿河臺高地なりければ、かれてより秋の望中の月を見ばやと、客人まちつけてむと、そのいそぎに、庭の木竹をも手いれつくろひなどして、ことしは向ひの大松の木のまよりのぼらむまどかなる影を、やだ鏡かけたらむやうにあふがむとこれかれ友なる人にもちぎりおきて、ゆひをりかぞへつゝまちに待つるこよひしも、あやにくなる夕霧の八重垣作り出で、いぶせさはらひがたく、わびつるほどに、小雨ふり出て、軒の玉水たまく\おとづるに、心さへかきくらして、むごくなるよかなとなげかはしく思ふほどに、四五人の友もき逢て、おなじ心になげく、されどこよひはみやびたるひとのつどひたれば、いへのうちはくらからで、とりく\にをかしき遊びことせましといふほどに、ひとりがふところなる笛出してふきすさむに、

こゝろあらばそらの浮雲はらふべく
ふきとほさなむ君がふく笛竹

またひとりがきんの琴ひくに、

君がひく琴のしらべに大ぞらの
くもはらふべく風もふかなむ

かのふりにしうつぼの琴ならば、風もふきがたからむと皆わらふもをかし。

名古屋　不破きみ子

秋立そめしより、待ちわびにし望月も、はや今宵とはなりぬ。いでや、心ばかりの觀月のもよほしせばやと、例よりとく起き出て朝のわざをも、いとかひく\しくすまし、かねてひかせおきつるうるち米の粉取出し、古しより芋の名月とさへいひなしければ、其名によする芋の形、或は月の丸形にも似せつ、ふと弟妹のこと思浮べ、幼き者の、味よりも、色にこそ、心ひかれ、よろこびせんと、些少の紅さし加へ、紅白にとは、つくり上げぬ。夕されば、父母弟妹と共に、軒もる月に端居して、或は語らひ、或は食し、果は己が腰折れ和歌の材料にも、せばや等、心は月の上にのみ、通はせつ、短き秋の日あしさへ、遲しと待ちわびつる午後の三時ともおぼしき頃、あたり薄ぐらく成ぬる程に、急ぎ空さしのぞけば、こはそもいかに、くるゝにあらで叢雲の打承なるよと見るま程なく、雨さへ繁く降りきたりて、老行く秋の哀しらるゝぞうたてき。

庾公ならねど我も又、樓に登ることの懶くて、むなしくふし戸に入らんとする折しも、隣家の墻を隔てゝ漏れくる琴の調、いと面白く聞ゆ。

長野　佐藤とめ子

こぞのなか秋は、たゞ身一人にて、書齋の窓にちりばかりの雲だになき明かき月をめで、今宵友ありしならんには、殊更に興ふかかりしならんものをとなん、かこちたりき。されば此年は、あらかじめ、友が許に、なにがしがなりどころにまかりて、夜もすがらさやけき月をめで明さばやと、一通の玉章送りつかはせしに、友もこよなう樂ならん、されば九月何の夜を卜し、相共に歌を交はし文をつゞりこゝちよう一夜さやかなる月の下に語り明さんとなんいらへありたりき。

いよ〳〵其夜は來りぬ。されど心なき雲は、東南の山の端にあらはれて、見る〳〵ひろがりゆき、果はみ空をかくし、あたりは全く闇の幕におほはれぬ。にくしや今ははや秋雨の蓮の葉うつ音さへ聞えつるようになりて、雨はいよ〳〵つようなりぬ。されば友がかれごとも氷のあはなれば、いまはしさのあまり、友が許をおどろかしつるに、友は既に心をおとして、菲齋の丸窓にしよんぼりと雨をうらみがほに寄りそへてさへありたりしことよ。

されど空しく臥戸に入るも、なんとなう殘りをしければ、友が心づくしの茶をすゝり、菓子を食ひ、筆とりて、情を寫し、強ひて興を添へたれども、うたはずゝます、句も又おだやかならねば、いたし方なく、空しく、臥戸に就きたれども、夢は未だに仲秋月なきをかこちて、ふと目をさませば、ふすまもる光に、さては宵の名殘に情なき雲をおしわけ、今しみ月の出でしなるらめと、れまきながらにふすまおしあくれば、こはそれならで、はした女の燈をけし忘れしにてありけり。されば口をしさは猶もやる方なく再び臥床に就きたるに、時もおそければにや、間もなく夢の境にと歩をはこびき。明けて朝まだき昨夜の事どもを胥きつゞらばやと思ひかへせば、いとゞをかしき事にて、之を物するだにも、一人笑みつゝもありたりしよ。

札幌　小山かく子

午後四時すぎより柿と栗との生ひ茂れる園の片隅に、四五枚の莚など敷きつめ、中央に縁臺二つ重ねし上に花毛氈をうちかけ。周園に四五脚の椅子おし並べたり。御馳走さへ運ばれたらんには、お月見の宴、お歌の集ひ、今にても差支なかるべしと思はれぬ。六時の鐘のなり響く時、友の顏一つ二つ見え初めぬ。されどわれは俄に惡寒を覺えて、背は冷水にてもうちかけられたらん如き心地となり、席にすらえ堪へず、本意なくも友を殘して一人寂しきベツドに入りぬ。時を移さで醫師の來診あり。母の問ひにマラリヤなりと答ふる聲を耳に、服藥、發熱等、其苦しさに煩悶しつゝ、心はいつしか夢のうちにさ迷ひ行きぬ。

やがて眠り醒むれば、氣分すが〳〵しく、心地なか〳〵によし。眼をあぐれば枕邊近き丸窓にうつりし竹の葉影淡く、明月の名殘を留めぬ。われ鉀いよ〳〵冴え、想漸く動きて、身は猶雨戸一枚かいやるの勇氣なかりき。あはれうらみ多き仲秋の一夜!

東京　中田花子

春は花、秋は月見とぞ人はいふなる。花なき春はなけれども、月なき秋あるを如何にせん。花を見て美しと言ひ、月を見て麗しと言ふ、其言の葉は違はれど、春は何となう人の心浮き立ち、秋はもの淋しきに人の心も自ら沈み勝ちになれば、花と月とは又其趣な異にす。花を見て悲しといひ、月を見ておもしろしと言ふものはなかるべし。

あゝ待ちに待ちたる今宵の月は遂に出でざるか。月よ、心あらばいでゝ、惱み多きわれに、汝がうるはしき姿を見させてよ。あはれいれなき月なるかな。蟲も哀れを感ぜしか、もの悲しげに草間に啼きて汝をうらむにあらずや。汝が爲めに咲きし萩も、芒も、今は力なげに首垂れて、そが秋に白露を宿せるにあらずや。あゝ悲しきかな。

肥後　岡山豊燕子

ゆびをりかぞへつゝまちにしかひもなく、くもりがちなる空のけしき、いとものうきことのきはみにこそ。盛の花も一夜の嵐にはかなく散り、さやけき月もむら雲におほはるゝならひとは申ながら一年中のわけてうるはしき八月十五夜の月を、いぶせくもおほひかくせしむら雲の心にくさよ。嗚呼人生のはかなきも、ことばりならずや。花はちれどもまたも咲く春やあらん、月はくもるともまた晴る時のなきにしもあらず。獨り人のみ一度死ては二度生を受ることあたはず、あはれはかなきかな。いつも月に對ひては、此感な

きにしもあず、ましてくもりはてたる月においてをや。

てる月にかゝれる雲のなかりせば
いとゞ樂しきこよひならまし

周防　堀　たれ子

待ちし葉月十五日、夜は明け離れぬ。よべよりの空いさゝか打曇りて雨模様の空のたゝずまゐたゞならぬに、今日の天氣如何あらんなど危まれしを、思ひの外に晴れ渡れるものから、母上の喜は更なり、妹等も嬉々として朝まだきより騒ぎ立ち、心合ひたる友誘ひ交はし、小萩海あさりなど用意をさく〳〵怠りなし。我も母上の手傳をなし參らせつゝ、早く日の暮れよかしと祈るに、あな無情、空の色俄におどろ〳〵しく曇りて、風さへ吹き出づ、皆々あなわりな心もとなど思ひ騒がるゝを、暮れ行くまゝにいよゝあはたゞしげに雲の走り行くなめり。噫無情、雲は遂に空一面にひろごりてあや目も分かずなりぬ。『一年一度の今宵の月、樂みに樂みて待ちしものを、思ひきや此雲、あゝ雲よ〳〵、汝はなどかくまで無情なる』と叫びしも理なり。

思ひ起す去年の今宵、懐しき祖母君と明らけき月下に侍りて、御肩たゝき參らせつゝ、此地の昔話り、はた君の幼な物語りなど承りて夜の更くるも打忘れしが、噫思ふもあだよ、げに憂世の夢は、切めて月に寫ろふ影あらば、懐しき君の姿こそ月の鏡に寫れかしと祈りしを、月や昔の月ならず、噫！あはれ、誰に見よとてか晴にも白う匂へる垣根の菊、あゝ菊、菊こそ祖母君の御名なりしよ、打から雲井に泣き渡る雁金、汝に心あらば我が心中を傳へてむものなと慨然空に嘯ゆば、天地は漸く更けたりと思しく、虫の音幽に悲しむ如く泣くが如し。

武藏　松本まつ子

年ごとにくもりがちなるもなかの月を、ことしは見はやさんと、ゆびをりかぞへて人ごとにまちつるそらの、よひよりむら雲立おほひて、今にもひと雨降りぬべく、かきくらしたるに、こよひとちぎりし友どち來合て、せむかたなのよや、さらばこよひはもちなるみひかりをみざるのうたよみてあそばむとて、うたひ出たり。

大そらの雲ふきはらへしなと風
としに一夜の月を見るべく

かくてもあすのよのいざよひに心やりてあかしてむと いふほどに鳥のこゑきこえてしのゝめになむ。

東京　山口琴子

ひとゝせの内に、八月十五夜とゆびをりかぞへて、ともどち打ちつどひて、こと引歌よみなどして、山のはより出んみ光りをまつに名だゝる月も出ず、軒ばを過る松風のまつにかひなき今よひの玉をかくして、いかにせんと、うたてもかゝるうきくものはてなきことをくりかへし、われひとりごとながら、いたらぬ里はあらじながむるおのが心のかづならぬまゝにやなどわびごといひて、せんかたなくあかしぬ。

肥後　千知波橘子

三日月のころよりまちし今宵かな。といにしへ人のいひけんもうべなりや。此の中秋の月は、久かたの雲ゐの庭をはじめとして、天さかるひな人までも、みやびの友達うちつどひ、酒くみかはし、あるは言のはをつらね、玉の小琴をかきならしなどして、限なくてらす月影をながめあかさんと、待うけし最中の秋のもちの夜なるを、口をしや、宵のほどより空うちくもりて侍りしが、やがて風さへくははりて、雨ふりいでぬ。いかでいく十の人たちれたましくもおぼゆらん。今宵にかぎる雨の八重雲こそ、千秋長秋のうらみならめ。あまりの口をしさにかくうめきいでぬ、

まちまちし今宵の月をこゝろなき
雨の八重くもおほひかくしつ

肥後　佐々有鄰子

今日は舊暦秋の最中の觀月の夜也、昨日は秋季皇靈祭なりければ、官國幣社をはじめ、府縣郷社も共に祭式あれば、參詣せぬものこ

そなかりけれ、夕月かげの駒ひきたてゝ乗り行は軍人なるべし。男女の群は、征露の人々の武運をいのる族なるべし。世はさまぐ、人は心こころなりけるを、片山すみの伏いほは、とふ人まれにして、只鶏犬を友とし、秋も央になりぬ。名にしおふ今宵の月を見んと庭に水そゝぎ、ちりはきて、待ちつるに、待ちつる友は訪れで三つ四つ二つ雨の足こそ音つれけれ。あなにくや、年に一夜の観月も、雲につゝまれ、風さへくははりけり。あな口なしとおもへどかひなし。

まちまちしかひこそなけれ久かたの
雲にかくれて月はいにけん

京都　井上とよ子

過ろ月よりの好天氣にて殊の外暑く、雨降らまほしき今日此頃なれど今日の雨、うれしとや云はむ、かなしとや云はむ。さはいへ、今日は十五夜、あゝ今日の月、満々たるべき、秋月なるにくき雨のふりきて、明くあるべき今夜の月を、かくさんとす、にくき雨ならずや、されど古語にも、花にはあらしとて、月花人、凡そ體あるものには、皆それぐに、さまたげの入ぞうたてき。かく思ひつゝ今年は雨後の月をも見ずになはりぬ。

出陣中の兄に贈る文

東京　三好珍子

去月何日御認めの委しき御文、誠に御嬉しく、待ちに待ちし事とて母君はじめうちより、くり返し卷き返し拝見致し候。伺ひ上候てもむれつぶるゝばかりの激戦に、度々臨ませられ候ても、露ほどのお怪我もなくいと御壮健に過させられ候由、何よりノヽ御目出度全く御幸運の強き御事とは存じ上候へ共、一には十年以前、恨みをのみ給ひて、いざぎよく御戦死遊ばされし、父君の守らせ給ふ御事と、御手紙をそなへつゝ、皆々御靈前にひれふして嬉し涙にかきくれ申候。このことききこしめさば、草葉の蔭にても、いかばかりか御満足に思召らんと存じ上候。國民一同鶴首いたし居候旅順陥落も遠からず候由、又昨夕の號外にては遼陽も日本の占領に歸し候との事、やがては荒野にしげき露も、かゞやく朝日に消えはてゝ、御目出度御凱旋の御事と信じ上参らせ候。申上ろ迄もなく候へども、君にさゝげ給ひし御兄上の御身は、母君始め覺悟の上に候へば、こなたは決してくゝ御掛念なく、御國の爲御忠義遊ばされ、大晴家名を雲の上まであげさせられん事、母君ともぐゝかげながら祈り居申候。しかしながら、めざましき御はたらき遊ばし候にも御命ありての事なれば、おそろしき病の敵におそはれ給はぬ様、くれぐゝも念じ上参らせ候。御不自由の物在し候はゞ御申越遊ばされ度、別封御送附申上候菓子は戦捷につき新らしく出來候由にて御珍らしくと存じ御覧に入参らせ候。申上度事山々に候へども、又後の御便にと殘しおき候。先は右御返事かたぐゝめで度かしこ。

宮山　済江子

朝夕は袖ふく風も冷かに、小萩の露ほろぐゝと、なく虫の音も心ある身にはいとゞあはれに聞え申候折柄、御なつかしき御兄上様には御恙もなう日々御奮戦の由、一同よろこび居候。わきても父君母上には號外の出ろ毎に、御老體をもいとはせ給はで、門の邊に走り出で給ふ御有様。まことにまことに、雄々しく見受けられ申候、又御兩親様には、兄上の御奮戦あそばして、名譽の勳章いかめしう飾り給ふやうにと、明暮祈り居られ候。

今朝の新聞紙にも、兄上の御事細々と載せられしを、御兩親様には幾度となうくりかへしくりかへし老の眼に涙浮べて悦び居られ候乳母も今朝參り候。雑話の中幾度となう、これでこそ私が御育て申した甲斐があつたと、是も悦び入候。兄上様よ、必ずぐゝ御兩親様、さては弟等の事をば御心配なく、天晴名譽の月桂冠を得させ給へ、及ずながらも、妾一家の事はよしなに支配致すべく候。前日御送附の満洲雑吟、いと面白く拜し申候、砲煙彈雨の間、綽々として餘裕

ある雅懐、古の名將さへ想ひやられて誠に奥床しう存じ候。なほ申上げたき事は限りもなく侍れど、此度はこれにて筆とめ參らせ候。かしこ。

出陣中の父君に贈る文

下谷　岡田柳子

征衣の袖を放ち參らせしは、去にし皐月にて候ひしが、桐の一葉も散りはてゝ、早秋の最中になり候ひぬ。父君には、其後屢々戰ひに臨ませ給ひし由におはせど、御微傷だに負はせられ給はずとかほのかに承り、先づ安堵致し候。實に神のましますみ國なればにや、我み軍の向ふ所敵なく、破竹の勢もて進みに進む日の本の、高き譽れは、外國迄も響き渡り候嬉しさ、たとへむ方もなく候へど、其御勞苦の程を忍び奉れば、轉涙のとゞめあへず、實に國の爲君の爲とはいへ、斯計りに、我將卒、我父君には、御苦勞遊ばさるものを子たる者いかで暖かきふすまの數を重ねられ候べき、哀れ父君よ不束ながら身は帝國の軍人の家族の端にも連なり居り候へば、二つなき命を鴻毛よりも輕ろしとなす益良武夫にたくらべて、耻ぢざらむ事をこそ勧め候べけれ。ゆめかまへて後をな顧み給ひそ。只邦家のみ爲め、天晴御武功たてさせ給へや。今や漸く秋たけて沍寒の候に向はんとす、廣漠たる荒野原を吹きすさぶ嵐や如何にはげしく候半、申す迄も候はねど、御身御大切になし給ひて、病魔におそはれ給はざらむやう、祈り上候。かしこ。

出陣中の兄に贈る文

周防　堀たね子

峯の櫻未だ蕾なりし頃別れ參らせしが、何時しか櫻花潔く散りしも、昨日と思ふ間に、綠色濃き木の梢も、錦色彩る頃と相成候處、扨も虎伏す荒野の秋景色や如何に候はむ、月影明けき夜半の野營、月は何處も同なれど如何に眺め給ふらむ、「抜劍斷水水更流」噫、いつも君が月下の友なりしよ。それ、あはれ無情の秋風、今や我が忠勇なる武夫を訪れて、廣き荒野を赤き心の錦に染むるらむ、さは云へ其錦よ、やがては日の御旗の愈赤く輝く基とも思へば、嬉しくも又悲しくも候、當地は皆無事に暮し候間、御安心下され度候、殊に父上は愈々健にて、毎朝毎夕、植木鋏離されず、隣の御老人と張合ひなされ候故にや、日ましに若くならるゝ様など申して、皆々笑ひ申候妙さんも父上の手傳に忙はしく、中にも兄君の愛で給ひし紅葉は「父樣の御手植だから」と心盡しの甲斐ありて、今年は例より赤く染候を見るにつけ「父樣に見せ參らせなば」など申され候、剛さんも此節は征露大將軍氣取にて毎日隣の忠さんと御庭の築山占領に御熱心、妙さんも其度毎に看護婦の任に當られ申候、噫秋の錦の紅葉の下に、小さき日章旗飜し愛らしき軍服に洋劍持ちたる小士官、白の改色服に下髮長く垂れたるリボンの上に、冠れる赤十字の小看護婦の姿、餘りの愛らしさに此間寫眞を取りたると、稚妙さんよりの紅葉なも添へて、送り申候「御土產に軍艦など持き添へて」と云ひつゝ寢し二人の笑顔、幽に「父樣」と一聲又すや〳〵噫風死して醒種の氣低う迷ふ滿洲の荒野に、あはれ兄君は如何なる夢をや結び給ふらん。

小石川　松川千代子

益々御健やかにて皇國の爲御盡し遊ばされ候御事、こよなう嬉しく存上候。御兩親樣始め皆々事なく暮し居り候間御安心下され度候。さても仇なす敵打靡け給はんとて、西の空遙に勇み立ち給ひてし後は、戰へば勝ち攻むればとるてふ此連勝には、幾多悲慘の歷史を懐いて遼東の野に瞑せる戰士も、尠なからざるべく積る恨を晴さんものをとて、喜び征かれし御兄君の御滿足は、今更申上ぐる迄にも候まじ。定めしけふ此頃は殺氣みちみちたる滿洲の荒野に北風に嘶く駒にむちとりて、御奮戰遊ばさるゝならんと、御察し申すだに勇ましう感ずる程にて候。さるにても御苦心の程やいかにおはすらむ。置あまる霜のたゞ中に、戈を枕に夢さへ圓かならざる御事、さこそとおし量り參らせ候。私事もとより不束なる身には候へ

共、日本國の女子と生れ、此秋に當りていかで空しく過し申すべき。力の及ぶ限り父母君に仕へ、家の業を助け參らせ、いよ〳〵志す道を勵まん覺悟にて候へば、夢にも家事などは、御心にかけさせられず。いかで御身大切に、天晴れ軍人の本分を全ふせられ、目出度く御凱旋あらん事ひたすらに祈り參り候。

和泉　稲原菫子

萬里の異鄕の死地におはして、しかも日々御勇壯に御任務をつくさせらるゝ兄君よ、我軍はいつも連戰連捷、今は早遼陽占領の一大快報に接しまつりたる、實に萬歳の至りに侍り。都も鄙も皆きそひて戰捷祝賀の意を表しまつらぬ處とては侍らず、いとも目出度事になん。忠勇なる我が軍人には、實に向ふ敵の侍らぬぞ理なれ。こたびの役は南山役の比にあらず、御負傷者もいと多大なるとか、定めて第一野戰病院へも夥しき入院者にて、日夜御手術に御從事御餘念とてもあらせられぬ御事と、新聞見る度に御噂のみ申暮し侍り、何卒負傷軍人の一日も早く快癒せられんを、御同然に祈り居り侍り。追々寒さに相向ひ侍れば、折角御養專一に、國家の爲御盡力給はらん事をのみ只管祈り參るになん。尙ほ故鄕は皆々恙なく暮し侍り、わきて御兩親樣には御すこやかにて、日毎に新聞號外にあくがれさせ給ひて、地圖などくり開かせられつゝ、今日の占領地はこゝなり、彼柄には定めて雄々しく、ふるまひつらんと、御滿足斜ならず拜し參る嬉しさ、大に御心安うおぼし給ひてよ。御地は十月より降雪のよし、御冬物丈は殘らず、去月に御送り申し侍りけれど、こたびは、勝魚の佃煮と其他玉鑵、小包として本日軍醫部へ差出し、御送り申し侍れば、一ヶ月後には、到着いたす事と存じ居侍るになん〳〵。

熊本　黒瀬こま子

袖吹く風のやゝ寒さを覺ゆる折から、此頃の月かげさゆる夜半には、君國の思ひの外に他念なき兄上樣も、さすがに家鄕の思なきにしもおはしますまじと、はるかに忍び參らせ候、御兩親樣は御氣色さえ〳〵しく、日々兄上の事のみ仰せ出され候、妾は御敎訓のまに〳〵學の窓にいそしみ居候まゝ、御心やすう御思し給ひてよ、まもや兄樣、先日來の大戰は、さぞかし勇壯の極みに候ひつらむ、兄君の御働きもさこそと存じ參り候、妾はいつも戰報を聞く度每にあな男子ならましかばなどと、よりなき事を思ひめぐらしては、はた兄上の軍の人の數に入らせ給へるが嬉しくて、いやまし雄々しき御はたらきあらむことを祈り居候。妾女子なりとて兄上樣の錦を着て御かへり遊ばすを待つにあらず、香ばしき功名の吹きくるを待つのみに御座候、何卒なまくさからぬ風に犯かされ給はぬ樣、御國のため、御身御大切に御自愛あられむ事を願ひ參り候

愛媛　高橋茂子

朝夕はや、はだ寒くおぼえ、殊に秋雨勝の此の程、如何に勇みにいさむ御身なりとも、また〳〵御心のむすぼるゝ時もやと、深く〳〵御察し申上候、さても御武運強く渡らせられ、度々の御奮戰にも御身に少しの御恙もなく、いよ〳〵御忠勇御熱誠に御進軍の由、あつぱれ御名譽の程、此の上もなく御目出度存參り候。今更申までもなく、兄上の御嬉心はさる事ながら、殘る家族の喜び、實に〳〵何にかたとへ申さむ、世に此うれしさ、はた愉快にます者はよもあらじと朝夕申合せ候。御年はめされつれど、御兩親にも、み國の連戰連勝に、此の程は何となく御喜びのみ顏にあらはれ給ひ折々の御話にも、兄上の御身なとて、とやかく御心配の御樣子は少しも見うけ申さず候まゝ、何卒後顧の御患なく、なほ〳〵君のみ爲につくされ給ひ、いよ〳〵み國の大勝利と歸し、一日も早く御凱旋あそばさむ事、今より一日千秋の思に待ち奉り候。なほ時候不順の折柄、よく〳〵み心し給ひ、軍人にはわけてもきらふ病てふ惡疾にばかりは、決して〳〵なかされ給はぬやう、くれ〳〵も神かけて祈り參り候。

君は只君のみ爲につくしませ
殘る我身は親につかへむ

上總　白石貞子

草木も枯れむばかりの暑さ、いかゞおはしますらむと、御案じ申上居候處、兄君様にはことのほか御壯健にて、益々御勇戰のよし先日の御紙面にて承知致し、こよなう嬉しう、一同いさみにいさみ、御國の御爲め、御家のため、御高名あらむ事のうはさのみ致し、皆々慈なう侍れば、御心やすめ給ひてよ。殊に、姉君様には、日々に篤志看護婦人會にて、繃帶の道を御勵み給ひ居候。又雪犬の養育に付ては皆々心を用ひ居候へば、御安神給はり度候、家事は萬事伯父上様御心付被下候間必ずそれ等の事に御心なやまし給はぬ樣被遊度願上候、いつぞや某々占領の時などは、ことの外の御祝ひにて皇國いづれの所にても、提灯行列、扨は、旗行列などにてなか〳〵の大祝ひにてこれあり候。さて、正義公道の我み軍は畏くも大元帥陛下の御稜威と、忠勇義烈なる將卒とによりて、向ふ所敵なく、連戰連勝にて、み國の稜威は、朝日の上る如く輝き候事、いとゞ嬉しく、兄上様には、かゝる未曾有の戰ひに臨ませ給ふ御ほまれ、此上の事や候べき、御心をゝしくましまして、天晴の御名譽を立てられ、目出度御凱旋のほど神かけ祈居候かしこ。

兵庫　合田いま子

秋風の吹き初め候て、少しは凌ぎよく相成候が、戰地は如何に候哉氣候不順の地とて、御凌ぎも嘸々と存候、先日の御手紙に地熱百二三十度に達すとの事、肌を撤げ、團扇忙しく、木陰に憩て、尙暑しとして堪へざるに、炎天終日の行軍、飮料水も少くして、小便も飮みたき心地すと、アゝ氷を飮み、水をあふり、尙汗を拭て終日なを、背に重きを負ひ、肩に銃して寸隙なく、此暑さに耐へ、此不足に堪へらるゝも、君に捧げ國に殉ずる身なればこそ、此苦みも何んのその、意氣衝天に亘らせられ候も、日頃餘り健かならぬ御身とて、語り合ひては母上と只涙のみに御座候、さは謂へ妾とても軍國の女子、涙は決して悲しみの涙にあらず、女々しきの泣にあらず、兄上が御病氣にて友達の功名手柄を聞き、一戰報傳る毎に拳を振ひ齒嚙みして身のはかなきを喞たれしを、妾等も共に一日も早く御出陣御手柄の程を神に祈りし昨日の苦しみにくらべ、今は胸も遺憾なく滿洲の野に縱橫せらるゝの滿足とを思ひ合して、何んとなく涙の溢るゝを覺えず候、手紙書く机の上を光々と照す月は同じ光を滿洲の野に落すらん、今や如何なる思に偲ばせつらん。

山梨　樗武子

あら金もやく〳〵と云ふ、此頃の暑さに、日々出づる海陸快戰の號外、賣る人の玉なす汗をものともせず、都大路を十文字に、かけ廻る樣も、思ひやらるゝ今日此頃、兄君には荒鷲のたける野に、名も知れぬ草を假りの宿として砲を枕に安からぬ夢を結ばせ給ふ由、夜中の寢ざめに、冴え渡る月を御覽じ給ひては、遠き大和の後守る、御祖母樣をや案じ給ふらん。されども御出征の節、仰せ給はりいる言の葉、能く〳〵守り、決して決して後顧の御憂など御座なく候まゝ御心置なく萬難に堪へさせ給ひ、君恩の萬分の一をも報ひ給はんこそ、常々陰ながら祈る所に御座候。御老母樣にもいと〳〵御機嫌美はしく、心なき朝顔は人の不在も知らで、老いますゝ人の心慰しに、兄君御在宅の節より、一入麗はしき有樣故左樣書きしるし又兄君にも御任務の傍ら、例の御風流なる御詠吟も、あらせ給ふめれば、御ひまもあらせ給はば、御送付下さる樣願ひ置けなど、仰せ候へば、何卒御覽に入れまほしく存じ候まゝ、御送り下され度願上奉り候。

末筆に御座候へども、祖母一人妹一人を殘してなど仰せ給ひし御言葉、君が常々猛き御心にも似つかはしからぬ、仰せ事と、今更口惜しく存じ候、わらはとても日の本の女子、たとへ如何なる事有之候とも、軍國の女子たる本分は、必ず〳〵つくさまほしき覺悟に候へは、祖母樣などの御事はいさゝかも、御心にかけ給はず、

一意專心皇國のため御勇戰相成、衆にぬきんでし御功蹟あらせ給はんを、後に殘りし祖母君及び妹の、日々念ずる所に御座候。且つ願はまほしきは御國のため、御太切なる御身にし侍れば、くれ〴〵も御自愛遊ばされ度、先は胸間に美はしき勳章數多飾られて一日も早く御凱旋の程をぞ偏に待ち侍るになむ。かしこ。

東京　松澤まつ子

庭の淺茅におく白つゆ、露をよすがに泣く虫の音、何れあはれならざるはなきに、まいて清き月のさし出でし折は、一入物こひしき此頃、兄上には虎臥す野邊の草枕如何なる夢を結び給ふらむ。篝火消えて邊り靜けき陣屋の夜半、秋の上風のそよふくにも御心馳遊ばすらむと推し來れば、たらちねの御側に濕きふすま重ぬる身にも、何となう夢安からずおぼえ申候。さても此目出度御國に男子と生れながら、かよわき身の悲しさに、あたら貴き月日を花にうかれ月にゑひてはかなく終る人の數ある中に、我なつかしき兄上には、年頃の御心づくしの甲斐有りて、御國の爲、大君の御ためにいそしみ給ふ御譽れよ、大和櫻と散らせ給ふとも香りはいや長しへに殘り候はめ。

父母君は老いますとも、弟妹は幼くとも、私とても大和のなでしこたる武士の妹、心の限り仕へ侍らむ程に、かまひて〳〵御心にかけ給はで如何なる烈しき嵐の中をもいとひ給ふなと、此庭なる門の紅葉木の下に妹がせちに祈り上參り候。次にさゝげ參らす此シヤツは、夜な〳〵御上忍びまゐらせつゝ燈の下にてあみし物に侍れば何卒御用ひ給はり度候かしく。

東京　岡田ちか子

いさましき鈴の音共に抛げ入れし號外は、待ちに待ちたる遼陽の占領をつげぬ。嬉しさたとへん方なくてなん。さはれ此戰ひよ、世界の強國と誇りし敵兵の、死を決して守りし地なれば、其苦心其艱難いかばかりにてか候ひつらん、幸に我軍人の勇敢なる、よく其敵を打ち靡けて旭の御旗高くかゞやかしつるいさをしは、何にたとへん、あゝ懷しき兄君も、このみいくさ人につらなり給へる嬉しさ、いと〳〵言ひしらずなん、今や戰局益開けなんとするを、兄君よいよゝみ劍きたへ給ひて天晴日本軍人の勇武を世界に示し給はんことをこそ願はしけれ。

肥後　千知波楠子

かねて事しあらばとのたまひて、朝夕みがき給ひし、心の玉のひかりあらはれて、今度出陣なしたまひし。兄君の御心のほど、おしはかり侍りぬ。されば、いづくの陣にても、いといさましきはたらきをなし給ひしとかや、新聞に、日露戰爭實記に、その消息をきくごとに、父君母君をはじめ、妾のよろこびいかにぞや、されどゆくてはるけき遠征の、いつをかぎりと定めなき軍の場に起ふしして、鉾を枕の夢路にも故郷にのこり給ひし、かぞいろの御身の上や見給ふらん、家をわすれ身をわするは武士のならひなれど、御身はおほくの人の上にたちて指揮をなし給ふ司に侍れば、かろがろしき振舞なきやう、父君ののたまひしことあり、生はかたく死はやすしと、妾も男に生れしならば、兄君ともろともに、出征し、いづくのはてまでも、皇國に仇なす敵軍をうちはらはんものを、かひなきは女の身ぞかし。あはれうらゝの山のそれよりも、高きほまれをあげたまへや。風のおとづれなしたまひてよ。かしこ。

出陣中の父君に送る文

大阪　木村春江子

別れ參りてより早半年餘、何處の空におはします覽、そよとの御便も給はらぬにつけ、一入御懷敷存候處、今朝の號外によれば、南山の役に、拔群の勳功遊ばされ候由、皆々大に喜居候。再び見えじ、親とな思ひそ、子ありとしも覺えずと宣ひしは今更に侍られど、梅樣愛樣達へは父君兄君より戰の有樣御報知あるに、我らとて軍人の娘、御文見しとて御言葉承りしとて、いかで女々敷心の起るべきや。連戰連勝の報は絶えず、新聞に掲載有之候得共、其は只一軍の動作のみ、親しく當り給ひし御勇戰の始終承らぬこそ

本意無事の極に御座候へ。爰元母様御病は御全癒遊ばされ候、倹坊は殊の外壯健と相成、去四月より通學致居候「僕の父様は神様になられるんだ、もうお歸り遊さないよ」、と、いと誇顔に申居候、噫神様、名譽の戰死、誠に目出度事には候へ共、功ありて猶無事御凱旋遊ばされ候はんには、如何に嬉しからまし、とは、明暮の思ひ、我等遺族のひとしく願ふ所に候を、無心の稚兒の言葉の程、中々に悲しく存じ候、

思來れば、數限り無く、揉言湧出で候へ共、御叱りを蒙る事もやと是にて惜しき筆止め申候。

御旨に脊き奉りし罪いと深けれど、何事も戀しさの餘何卒御推察の上一度の御音信給はり度伏して御願ひ申上候。かしこ。

出陣中の兄君に贈る文

武藏　田中蓉子

炎熱焼くが如く嚴しく彈丸雨あられと降る中とて、何でおそれん、御國の爲には、身をも惜しまじなど、のたまひし御言の葉に、ましていかばかり露營の夢も安からず、朝夕御身心を勞せらるゝ事たえま無らんと、御察申上候。こなた母君始め、親類皆健かにて、何つも春風そよぐが如く晴やかに候へば、み心安め給ひてよ。さて此度の戰にのぞみて、いやしくも秋津島根に武夫と生れさせられ、大君の御恩萬々の一をだに報ひ奉らるゝは、實にこよ無き幸に候はずや、されば妾とて大和のをみな、など後顧の御うれひをやせさすべき。ちかひて寸光を惜み、たゆまず務勵みて、御兄君に劣り、妾の力におよぶ限り御母君に孝養致し申さなむ。されば御心おき無く、尙一そうの御勇氣を以て國家の爲に盡し、大和武夫の雄々しさを外國までも輝しまさん事を、只管願上候。何事も御身第一に候へば、朝夕御注意が上にも御注意遊さん事を神かけ祈上候。かしこ。

肥後　德永廣子

田の面をふきわたす風も、秋のけしきのそなはり侍るにつけては戰地の様、ことさら心にかゝり侍るを、まいて御出征あそばし給ひつれば、思召もいかばかりかおはしますらん。かれて愛國心にとませ給ふが上に、御氣性にましますす兄上様の御身として、いかなる敵の英勇もおそれしめ給ふらんと、御うはさのみいたし居候なりから、新聞紙の號外に、遼陽占領の報知あり。兄上様にはもしやの事おはしまさずやと、御きづかひ申上しが、今日の新聞に死傷の姓名しるされ候ひしゆゑに、今や勝ときの聲あげさせ給ふらんこと、御目出度、御心としていかばかりすがすがしくましまさん。御浦山しき事にこそ覺えはべれ。亦も進軍あそばして、露軍の營の破れ候はんには天皇の御ため、國家のため御名譽におはしますこそ。いと貴きかぎりに祝上奉るになん。かしこ。

出陣中の弟に贈る文

肥後　佐々布鄰子

はしむかふ弟のみことは、日露戰爭に召集されてより、けころもなき春の中空に、韓國にわたり雨雪をしのぎ、海上數萬里の他邦の風土に晝夜あかしくらしますらんことをおもへば、なつかしくもあはれなり。此ごろは大石橋も、ふみわたり、遼東の野も露をはらひて、滿洲の地も半ば草かりとりたまひしとぞ承る。天皇の大御ゐづは天よりたかく、地よりあつき、一天四海にみちみちて、あますところなきものから、わが弟のみことよ、祖先の君は、文祿の役に豐臣大閤の朝鮮征討の先鋒隊の將校となりたまひて、八道に鬼とりひしぐ武士の名を朝日の本にかゞやかしし祖先の君の子孫にして、此度の征露軍の第十二師團の一兵士、勇氣をふりたて、天皇の御稜となりて、天下の人に祖先の名をけがしたまはぬ事を、妾が朝夕の願ひのみかくなもかしこ。

長野　佐藤とめ子

先頃は、壯快なる玉章にあづかり、勇んで拜讀仕り候、さて、其許には、何等異る無く、熱心に軍務に御つとめの由、陰ながら兩親様はじめ妾ども安心致し居り候まゝ、御心安う思召されかし、アゝ其許よ、汝は、過ぎつる月の出征の時は、出師の令を一時千秋の思ひに

待たれ、肉躍り骨動くとか云ひつゝる士氣を満面にあらはして、從軍の途につかせられたれば、其後は何、嘸さぞかしと推察致し居り候御承知の通り、正義の爲、東洋の平和を保たん爲の戰なれば、其許等は五千萬のはらからにかはりて、身を犠牲にそなへて露助と戰ふべき境遇にて、なべての民草は、皆其許等を信頼致し居り候よ、さすれば其許等の責任こそ、げにげに、重大なりと存じ候、さればよ、汝、大和魂をこめ居る日本男子として恥ぢざるやう、ねがはまほしきは、其許の擧は云ふ迄もなく、父上や母君様、次では、拙なれど妾の名までも、世にあらはす様のいさをしをあげさせられ度くくれぐれも出來得る限りは、此事一ッ是非共御聞入れあらせられ度、愚姉一生のねぎごとにて候。あなかしこ

短文

日沒に對して

札幌　小山かく子

流るゝ雲を七色に彩り、身自ら眞紅の焰を放ちて静に西山に沒し去る夕陽の光景が、昨日も今日も永久までも變ることなく、繰り返されてゐる事に想到すれば、我如き遅鈍の人間も何となく、呑氣な、優長な、然も莊嚴な精神が養成され、從つて優美な、寛容な氣風も發達するであらうと感じられたのである。時に鳥の舞ひ、雀の歌ふのも、必竟夕陽の徳を讃美するためであつて、叢から聲を合して鳴き出す虫の音は、多分、僅廿四時間の別れではあるが夫を惜むためであらうと思はれる。

評曰　老練の筆致、

糸すゝき

前橋　竹のふし

あれたる庭の片隅に、五色の花を外に、静に生ひ出でしは、これなん妾が日頃愛ずる糸游にぞある。照り續く日毎の暑さに、他の花はしぼみても、色をもかへぬ深緑、嵐の荒ぶ其折を吹くがまにまに逆はぬこそ床しけれ。やがて暮れなば幾千筋の其葉の上に置く露を、かよわき腕に支へつも、憐き樣なくつくろへば、露の毎々月の映じ、一入添ふる美しさ、其趣中々に紅もゆる花等に類ふべくもあらず。かく優しく忍べる糸游にして、一度逆にふれてんや、忽ちそを傷けて己が眞の道をふむぞうれしき。あはれ女の心もかくこそありたけれ。

評曰　優しき筆の走り哉

可憐の妹

こはぎ

姉の欲目か十人並の下にはつかぬきりよに生れ、小學校時代から、友とあらそひなどせし事もなく高等女學校も成績よく卒業して、そーして。立派な媒酌人のありて嫁ぎて、御兩親のよろこび一方

ならざりしを、二人のこゝろは變らねど、健康の勝れぬために、あはれ、なま木の枝はさかれぬ。そは一昨年の事なりき。されど妹の夫をしたふ情は今もます〳〵あつく、時々送る文の面にも、去にし事をくり返したる可憐の言の葉のみ、讀む姉の腸はちぎるゝ思ひ、そを常に見らるゝ父母の御心はいかならん。あゝ人の忘るべからざる敵は病なる哉。

評曰　可憐の文

愛らしき馬子

前橋　林　廣子

獨りとぼ〳〵と、たんぼのあぜ道をひろひて行くに、清き流れのいさゝ川チョロ〳〵と絶間なく、其の前は松原、下には、一面の草で、折々は虫の音さへもきかれた。で、面白きまゝに足の運びも知らず行くと、一本の松が根に腰を下し、馬を木につないでやすんで居つた一人の馬子があつた。口もとのしまつた一見只の馬子らしくもなく、こなたを向いて、ニッコリと笑つた時の愛らしさ、妾は外に友とてもなかつたから、つれ〴〵に種々の話をしたのである。「家はどこ」「前代田村だよ」「父さん母さんもご丈夫なの」「否否父は已の十の時死んで、今は母が家にお針をして居るの」「外には誰も居らんの」「あゝ兄さんは先々月召集されて、戰地へ居つてるの、だから、己と母と二人ぎり」「まー、そーですか」と云ふたぎり、暫しは言葉も出です、男の子は元氣よく、己も大きくなつたら、兄さんのやうに兵士になるんだ、と、いよ〳〵眉をそびやかして我に見せるのであつた。年は十三、如何にけなげな馬子ではないか。「一人の母御を大切におし、そしてね兄さんの御無事をいのつておゐでよ」と、云ひつゝ別をつげた。少時歩いて顧ると、もはや馬子の姿も森のかなたにかくれた。只鈴の音と、馬のいなゝきとが、たん〴〵遠くに消えて行くばかり。

かの寫眞

兵庫　合田いま

拆木城に大勝したので、直に其安否を聞いて自分が寫眞一枚を送つた。何か面白い御手紙があるだろーと日一日と持つて居つたが何んの便りもない、其内に遼陽の激戰は始つた、急激の進行で返事を書く間も音信する間もなかつたのであろーか今に遼陽の快戰報と共に雄筆を拜見するもであると樂んで待つて居つた、が、然し無駄であつた。時は九月四日午後三時……一葉の通達書に目はくらんだ、ヤット氣を取り直して、誰かの戲れではないかと疑つた。

「一歩兵伍長清水淸一、拆木城に名譽の戰死す云々……」

ア、心をこめし寫眞も幾分の勞を慰めんとした手紙も、あたら受取る主のなくて砲烟の中に彷徨たるか。

女子のつとめ

都筑夏子

易きが如く、難きが如く、輕きが如く、重きが如く、略せば一枚にも書き得べく、十枚にも盡し難し、されども緊切にして重要なる者を上げん。

未婚時代

他日妻たり母となりて家庭を處理し、内助の功を上げんとせば、先此時代に於て修養せざる可からず。父母の命に隨ひ、兄姉の敎を守るは云はずもがな、柔順にして事に屈せず、温和にしてもの

に恐れざる氣風有るを要す。富貴たりとも裁縫料理の業を忘る可からず、世に是等の事は下女の持前なりとて顧みざる人有れども、こは甚だしき僻見なり、學術手藝は身分に應じ相當の修養ある可きなり、

學びて始めて道を知る、學ばざる者の德無きは憐むべきも、學びて人を侮り、己が才をたかぶらんとする者多し。こは未だ眞の道を學びたる者とは云ひ難し、德は寶物にあらず、己を守る者なり。人に知られんよりは己先づ自ら是を知れ。要は只己を知るに有り、進で淸少納言たらずとも、退きて賺女たるに有り、かくて眞の女なる可く未來人の妻となりて耻ぢず、母となりて愧へざるなり。

既婚時代

前に修養したる事を應用し、手腕をあらはす可きは此時代なりとす。今は修養時代にあらず、應用時代なり。されど根底より修養心を除き去らば、遂に動ける器となり終らん、故に修養と應用との兩方面を兼ぬ。六ヶ敷事前に倍せり。一擧一動は直に兒童に感染し、一言一句も假初に出來す、堅く操を守りて其間を融和するも女なり、外には夫を助け、内には子女を敎育し、下女と主人との職を兼ぬること女なり、其他數へ來たれば實に多く、其雖きや比を見ざるなり。されど身は妻たるを忘るべからず、内助の功なきは妻にあらず、かく至難の事有りて初めて手腕をあらはすべく、修養の甲斐有りと云ふべきなり。

自ら才を上とせばおのづから落ちん、世に些とばかりの才をたのみて夫を凌がんとする者有り、苦々しき事と云べし。才を夫に讓りて已まず行へば内助の功もとめずして上らん、要は夫をして内顧の患なからしむるやう、又子女を敎育して圓滿なる家庭を作るに有り。

戰死せし軍人の遺族

茨城　飯田ます

「新聞」と云ふ意勢よき聲が玄關にひゞいた。すると同時に「ドレ今日の戰報も大捷であらう」と云ひつゝ出で來りしは此家の次男で、年は十六七歲のいと勇ましげな少年である今新聞を手にせしが、何か思ひ付いたらしく獨言の樣に「先づ父上に御覽に入れた上讀むことにしやう」と奥の方に行かれた。暫くすると帝國萬歲兄上萬歲と云ふ聲に續いて、老人若き婦人の聲にて一齊に萬歲と叫んだ聲もきこえた。あゝ何たる勇ましい家庭であらう、こはこれ此家の長男陸軍少尉齋藤小四郞の此度○○攻擊に加はり數度の奮戰に勳功を奏し、中尉に昇進し、又○○背面攻擊中、天晴なる戰死を遂げられたるにより、金鵄勳章功五級に年金三百圓を賜ふとの記事があつた時の家内の有樣であつた。

あゝ我れは此時胸塞がりて何事も云ふこと能はざりき。誰とて最愛なる我子の死を聞きては如何なる名譽の事なりとて悲むは人情の常なるに、家内一同君の爲との一言のみにて涙一滴落さぬ心の中、泣かぬは泣くに勝る思ひ、我は如何にして我が涙を止むべきか。忠君愛國の爲めに戰場の露と消えし中尉は、かゝる勇美なる家庭に生え育ちて大和魂を養成したるによればなり。善良なる家庭よりは善良なる人物を出すとは斯の如きを言はんか、あゝ名譽なる軍人遺族の模範たる齋藤一家、とこしびに健全なれや。



短歌

所感　　　　肥後　小野常子

わたし野の露のしこ草うちなびき
　　羽音をゝしく飛ふ軍鳩

評。鳩とび、風船あがる。文明的戰塲の實况、いひえて雄々し。

風さむう日はくれなむを渡しもり
　　うれひもつ子よとく舟いたせ　　板橋　田中菘子

評。うれひもつ子のおもやせたる、渡守のおいほけたる。あなあはれ。あないたはし。

懐友　　　　薩摩　松原みね子

松かせにむかしの夢はさめはてゝ
　　ゆめにみし友さらになつかしき

評。こひしきは友。はかなきは夢。

川納涼　　　近江　馬淵なみ子

ゆふすゞみ橋をへたてゝ隣りとち
　　語りあふなり川つらのやと

評。かたりあふらむは何。まちとほき旅順の陷落と、心にかかる二百十日。

夜鹿　　　　東京　三坂きやう子

秋のよの松のあらしはしつまりて
　　峯にふもとにさをしかのなく

評。調はたかし、峯に。想はひろし、ふもとに。

田代艶子の君に　　東京　四屋保子
君は早忘れましけむまなびやに手にきりあひて通ひつる日を

田代綾子の君の御寫眞を見て　　同
うるはしき君かうつしゑそのかみの幼なおもわも偲はるゝ哉

題しらず　　山梨　標武子
今はとて親はらからのむせぶ聲に心のこしてよみち行くらん

鴨綠江架橋　　大阪　長野悦子
ありなれの川にかけたる假橋をふみとゞろかしますらな渡る

虫　　埼玉　戸田折香
かへりみれば鎭守の森に月澄てくさはら三里たゝむしのこゑ

霧　　長野　佐藤とめ子
旅の個かきうろおちに路とひてゆふ霧ふかき野みちわけゆく

なでしこの花　　下野　井上倫子
妹のりボンに代ふる花やなにかきれに咲けるなてしこよけむ

軍人　　水戸　茂々代
たとひ身は海のくつもとなりぬとも濵より高き功績のこさむ

菊黄白　　越後　佐藤家子
霜の色にくちなし色にさきいてゝ菊の花そのにほひあらそふ

寄杉祝　　肥後　服部倫子
神路山千枝のほに杉かけふかく君か八千代の色をみすらむ

蚊遣によせて　　三河　榊原てる子
蚊遣火の煙ならねと世わたりもいふせきものゝひとつなり苑

遼陽占領　　前橋　竹のふし
み戦のむかへはやかてくつれけり命とたのむあたのとりても

月　　東京　窪田高子

にしきなす小萩か花におくつゆを玉とてらすよ秋の夜の月

野鶴　　肥後　高野源子

秋ふかく野風身にしむ時しもあれあはれなそへて鶴なくなり

寄秋戀　　大和　栗山高子

風さわくあさちか原の露なして亂れそめしはわかこゝろなり

祖父君の三十年祭なれは朝鮮國より遙拜式をなして　　朝鮮　小森田照子

錦なすもみち葉みてもしのふかなあかき心の君かむかしを

父君の三十年祭にたむけし歌　　豐後　佐藤俊子

父のみの在しむかしをしのふかな紅葉のにしきみるにつけても

出征軍人に贈る消息のはしつかたに　　肥後　岡山登壽子

外つくににほまれをあけて一度はわか日の本にかへりませ君

曉擣衣　　大和　栗山俊子

山里はあきのよなかの寒けきにあかつきかけてころも打なり

閑居霧　　近江　馬淵なみ子

隱れすむ柴のあみ戸をいとゝしく世にへたてゝも霧立のほる

紅葉　　武藏　島田篠子

秋もやゝ深くなりけりふるさとの多摩の川邊や紅葉しぬらん

殘暑　　三河　榊原きく子

たへかたき暑さなる哉秋もなほうちはの風もなまぬるくして

上村司令長官　　下野　井上滋子

あたの船うらみは深き北の海のもくすとなさん時はきにけり

折にふれて　　東京　敷島うた子

捕はれの身にありなからなれくて人にもおちす鳴きりくす

曇れる或夜に　　札幌　小山かく子

み空蔽ふ雲のかなたに月は照れと風ならぬ身の見むすへもなし

島松　　肥後　秋吉輝尾子

菊貰白　　肥後　滿口貞子

わたつみのおきの小島のひとつ松舟こく人のしろへなるらん

寫眞　　三河　加藤順子

から歌もやまとことはも口なしのいろよりほかは白菊のはな

初秋　　長野　宮田眞子

逢こともかなはぬ身には一ひらのこのうつし怎も懷かしき哉

月は清く風はすゝしく夕くれをくさむらことにすゝ虫の鳴く

下野　管問あい子

秋風ににはの梧桐は吹き散りぬあはれうき世の情なき哉

避暑　　下野　菅沼すみれ

山庵に暑さくらん宮人を田くさ取りつゝなかめやろかな

川邊讀書　　同

風淸きいさら小川のきしのへにいほを結びて書よまんとす

扇　　下野　皆すみれ

富士のねの雪の姿ににたりける手なれのあふき暑さ去らすや

夏の月　　下野　菅田すみれ

ほたるとふいさら小川に舟うかへ涼むもうれしなつの月夜は

なつの海　　下野　皆こなみ

うこきなき千尋の海の夕けしきなかめはいつか夏にそありける

親しき友に女鑑をかりうけんとて　　下野　菅沼すみれ

ふみかゝみ君か手にする玉手箱あけて玉はれしはしの間

五月雨晴　　武藏　三好珍子

いとひてしさつきの雨もはれにけりとき洗ひ衣けふやほさまし

夏月　　壬生　松岡さく

夕立の晴れて玉ちるつゆのうへにすゞしく宿るなつの夜のつき

夕立　　同　同

ぬれじとて足を空にもいそくなる市のちまたのゆふ立のみち

今様

寡婦
北海道　小山かく子

散せにし頃に露たれて
十年の昔忍ぶれば
この子賴むといき絶し
まぶたしめりぬ今も尚

夕すゞみ
無名

今日のつとめをなしはてゝ
姉も弟もよりつどひ
洗へば清き我心
夕顔棚の下すゞみ

目しひの君
前橋　竹のふし

いねんとすれど目はさゆる
やみ夜をわたるぬばたまの
かすかにひゞく笛の音は
目しひの君のそれなるか

皇后陛下の第五十五回の地久節を遙に祝ひ奉りて
肥後　佐々小學子

五月の今日の國民は
あらかねつちとよもして
五十五回の佳節を
ひさしきときゆいはふなり

秋月
肥後　秋吉輝尾子

秋のも中のもちの夜に
いとゞ圓にすみわたる
山のは出ろつきのかげ
聖の御代やてらすらん

造花
下野　井上滋子

人手たくみに枝はぶり
その時ならぬ百千はな
花びら花いろ配りよく
まゝに眺むる樂しさよ

閑居
松原みれ子

うき世のちりをさけ來り
我笛とればやまひこも
しづけき庵の夕月に
聲をかへして歌ふなり

秋夜の月
東京　小山染子

池の底まで月澄みわたり
尾花にすだく鈴虫の
さやかに見ゆる遠の里
ふり出て鳴くや聲あはれ

淡路島
山城　鈴木きく子

ともすいさり火二ッ三ッ
霞める影の淡路島
海原とほくきえ去りて
通ふ千鳥のこゑもなし

虫
同

身を墨染めのかれたゝき
昨日も今日もひぐらしの
訪ひくろ人を松虫や
里にきこゆるきりぎりす

深山の百合
愛媛　和氣勝子

鳥の音色も染むばかり
滴水せゝらぐ岩陰に
運命はかなく生れては
綠滴る葉がくれの
優しき風情映すとも
埋れて過ぐる哀れさよ

雨中ばらの花
長野　大町かほろ子

おくれざきなる
情なきあめを
あはれと思ひ
ふりむき勝に
ばらの花
かこつらん
手打らすて
歸りけり

亡き師の君を思ひて

學びのそのゝ母たりし
無情の風にさそはれて
吾等のこしていつくにか
つゆかけふりか消えてゆく

懐古

熊本　黒瀬こま子

吾こしかたを思ほへば
ふりわけ髪の春のころ
花たばかざし友がきと
語り合ひけりおぼろげに
寄せくる年のあら浪に
地もさけなむ夏のころ
彼と云ひはたこれといふ
學ひの道もいやふかく
うつらう紅葉に年はくれ
二七の秋は來りけり
今なほわれを去らされと
ながき夜半を月に泣き
細吹きかへすこがらしに
ありてむなしき冬枯の
うらむろ空のそが中に
いとゞ涙の泉なる
野邊の千草にあこがれて
かたみに手をとり睦びつゝ
さちおほからむ行末を
いつしか家は荒れはてゝ
はからず父は病てけり
不幸に不幸重なれば
いかでか修めむ方もなし
まがきをわたる涼風に
あとけなき世の空想は
うつりにけりな今の樣
星に叫びぬよもすがら
心の糸はみだれけり
草木とともにくちなむか
神はいますか慰みてか
いまは學びの窓にあり
浮きつ沈みつたゞよひし
行手いづこへ沈むらむ
淸きながれに歌ひつゝ
浮世の風のふくまゝに
望みの光ほの見えて
あなうとましやこし方の
運命のするましば舟
あそべ水鳥いつまでも
なびけ汀の糸柳

魔の劍

築地　山崎女苑

野邊に聲あり小川の流
己が榮をほゝえみて
巧の蹤は人にあれど
少女はそれときゝけむか
佇む姿うつくしき
なれが姿は及ばじな
白き小百合をかざしつゝ
やさしく眉目を化粧して
双な胸に秘めてゆく
振分髮の面さしの
瞳のそこに輝ける
人おもはずや僞善と
浮きたる土に根をのせて
かくて我世のつゐの日は
床しき花の口びろを
朝な夕なにうちむかふ
魅魍の双にふれざらむ
聖者が敎に背きたる
小さき胸の悶悲し
水に向へる無邪氣さは
嫉妬の焔僞善の
汝も小百合をもちし子よ
今この秋に色あせて
世に冷却の露重し
嫉妬の烟人を蔽ひて
白き小百合の香のなきを
今ほゝえみの善の子が
鬼面の牙にかむときか
鏡の前の裝ひは
汝が心の武器なるを
粉を裝ひし身のあだは
魅魍の双の貫ぬきし

募集兼題

歌	十一月	風前紅葉、烟
	十二月	歳暮、杖
文	十一月	天長節、秋季運動會
	十二月	家庭日記（三日間）、歳の暮に故郷の母君に贈る文
隨意		短文、短歌、今樣

右何れも募集す、投稿は兼題の規定によるべし。



○愛國婦人會の擴張　愛國婦人會の現在會員は十七萬人の豫定人員を超過し已に廿萬人以上に達せしも尙ほ續々入會者あるを以て此際其向の御內沙汰を奉じて大に其規模を擴張することに內定したるが現今の狀勢にては百萬人の會員を得ることも格別の難事にあらざるべしと云ふ尙ほ同會にては近來同情に富める諸外國人の入會又は寄附金甚だ多きを以て今回英佛兩文の趣意書を廣く諸外國へ撒布することに決せりと

○マクレン孃逝く　日本水兵の母として我が國民一般の欣慕を博せるマクレン孃は去る十三日七十二歲を以て病歿せり孃の經歷に就いては前號の女鑑誌上にも揭記したるが猶ほ追て詳細なる傳記を敍述すべし

○矯風會の慰問袋　日本婦人矯風會にては出征軍人を慰藉せんとて曾て米西戰爭の際米國にて行はれし慰問袋に倣ひ是迄已に數千個を戰地に送りたるが此慰問袋は巾六寸長一尺位の小袋にて中には筆、紙、齒磨、楊枝、手拭、ハンケチ等の日用品を始め聖書小冊子等を思ひ〳〵に入れあるものにて戰地にては何時とはなしに矯風會の便利袋と云ひなすに至れり禮狀續々來る由なるが獨り限りある會員間に募集するのみにては充分に其目的を達すること能はざるより今回汎く社會に訴へ祝捷會の蠟燭代を節して此袋を寄附せられんことを請ふ筈にて先づ神田方面より勸誘せしに忽ち五六千個の申込あり中には非

常に此擧を賛成し特に其店員を以て慰問袋係として盡力せしめ居る篤志家さへありと云ふ、矯風會にては麴町區上二番町女子學院矢島揖子、横須賀中里七十一番地清水富貴子の兩所を以て其受取所となし見本入用の人には直に送る可く又自ら製作の暇なき人には一個六錢の實費を以て讓る由なり

○女生徒身體檢査規程の改正　近來各學校學生生徒特に女學生の身體檢査施行に際し忌はしき風說を傳へたること度々ありたるを以て文部大臣は過日省令を以て檢査規程中の改正をなしたるが其要旨は從來學生々徒の身體檢査は毎年四月及十月の二期に施行するを本則とし滿二十歲以上の學生々徒に就きて四月一回に止むることを得せしめたりしが改正規程に於ては毎年四月に一回之を行ふを本則とせり又從前の規程は身體檢査の際體量を測るには着衣の儘測定せざるを可とすと規程せるが故に特に或は其文字に拘泥して其活用を誤る者なきにしもあらざるが故に改正規程は此等の數文字を削除し此等のことは學生生徒の男女の區別等に依り便宜斟酌して適應の措置をなさしむることとせり

○佐敷町の婦人會　肥後葦北郡佐敷町に於て去七日佐敷婦人會の組織會を開き規約を議決したるが此組織成立するや同町田川區内の篠原なを子、元山もえ子、永良きん子、倉本しげ子は熱心に同區内一般の婦人を勸誘し日ならずして金一圓六十二錢、玄米二俵一斗强、裸麥四斗八升六合小麥二斗七升五合を得直に郡役所に送りたるが其際以上四婦人は素より山口きく子、山下ゆき子、迫本てい子の三婦人は自ら荷車を曳き敢て雇人を要せざりしといふ其執實なる感ずるに餘りあり

○音樂遊戲講習所　神田區錦町三丁目十一番地に設置したるは音樂遊戲講習所は男女を問はず音樂遊戲科の教員志望者又は研究志望者の爲に設立したるものにて課目は唱歌、樂器（オルガン、ヴアイオリン又はピアノ等）樂理、和聲學、教授法、遊戲舞踏なり講習時間は毎日午后三時半より五時半までにて

別に受驗科、專修科等の設けありて志望者の便宜を圖れり會長は伊澤修二氏理事長は山田源一郎氏講師は多梅稚、前田久八、天谷秀等の諸氏なり

○孝行小僧　賢に孝行の德は孤ならず支那の國にも氷上の鯉雪中の筍など天の惠を受たる故事は幾許もありと知りながら倣出來憎いものは是なるに未だ七ッ子の身を以て親父を養ふ稀代の孝子世に現れしこそ嬉しけれ本所區小梅業平町木賃宿下總屋に止宿する大里巳之助(三十六)といふは瓦師の下職なるが不幸續きの爲に家を疊み次男一(六才六ヶ月)を引連れて肩書の宿に泊り居るうち重症の脚氣に罹りて起居さへ心に任せず親子の顋の干上る始末に同宿の者が胸を痛めおれは一錢おれは二錢と少しづゝ鳥目を集め壘の隙間から掻出したる文久までも一緒にして同人に貢げども中々追付く話にあらねば一は子心にも最と悲しく坊が何ぞ商賣して阿父さんを養ひたいと夫は夫れ健氣な言分聞く病人の髭を傳ひて玉を貫く涙の色は恰も芝生の露の命到底草藥の蔭に入るにも那んてとを聞くだけに冥士の障りになりますと親が泣けば同宿も泣き蜻蛉を釣りたい年頃で感心な了簡だ出來るか出來ないか分らねど幸ひ此近所にボールの玩具を拵へて賣捌く所があるから試みに代物を借受け賣りに歩いて見るが好からうと玩具賣りに出したるに朝から晩まで諸方を歩き二十餘錢の利益を得て立歸りしを手始めに毎日毎日稼ぐので親父も何時か藥に有附き病氣も次第に薄らぐより一は益々勵みが出で是非とも本復させやうと小さき胸にも覺悟しては燒くが如き殘んの暑さも更々物の數ともせず尻切草履ビタ／＼と砂埃に塗るゝ足に西日焦げ附く都大路玩具を買へてお吳んなさいと汗を拭き／＼賣行く聲は未だ父母に其玩具を强請つても然るべき可愛らしき口より漏れてなか／＼にいぢらし、寔や天道人を殺さず此事淺草附近までも知れ渡るに及びしかば子を持つ人も持たぬ人も同情の淚禁じ敢ず孝行小僧と名を附けて誰も彼も愛するより日に增して利益も多く今は易々療治を加へて親の病氣を半過ぎまで快方に

向はせたりとは祈らずとても守るといふ神の加護に他ならざるべし猶聞く所に據れば此孝行小僧の手一つにて首尾よく親父を過ぐし居るは最早五十餘日に及ぶといふ

○花聟は八十歳花嫁は七十歳

（米國副統領候補者の結婚）

米國人の氣根が強くて老て益々强壮なるを證明すべき一例は、近着の米國新聞に依て報せられた、それは外でもない今や米國大統領の改選に當てデモクラット黨の衆望を負ふて副統領の候補者となれる、ヘンリ、イ、ジイ、ダウキス氏が八十歳の高齢を以て今回七十歳の寡婦と結婚する事となつた事で有る

今を去る事五十餘年、ダヴキス氏が未だバルチモアとオハイオ間の鐵道に一個のブレーキマンとなりて勞働に從事せる頃メリイランドのワシントンに住んで居たクシユワ氏の娘カザリン孃と親しき友となッた、田舍の舞踏會で此兩人が毎度相手となッて踏ッて居る内に若い同士の胸は忽ち親友以上となり、遂にダヴキス氏から其の兩親に向てカザリン孃を貰ひ受けたしと申込んだ孃は素より之を承諾する心であつたが孃の兩親は孃の心を察せず又ダヴキス氏の人物非凡なるを知らずして「我が最愛の娘を貧賤なる鐵道のブレーキマン風情の者には遣れない」と言つて斷然刎ね附けた

ダヴキス氏は刎ね附けられて大に失望したけれど之れから慨然として奮發し段々に立身して遂に富豪となり米國第一流の政治家となり、遂に選まれて貴族員議院になつたがカザリン孃は其の兩親の見込に從ひてシエハルズタウンの醫師レイノルズ氏に嫁し、ダヴキス氏亦他から夫人を迎へた

それから星移り物換り青年時代の情人が手を分てより相逢はざる事五十餘年、偶然にもダヴキス夫人が其良人よりも早く遠逝しレイノルズ氏も亦カザルン夫人を置て死去したが、過ぐる日五十餘年振りに或る機會で此兩人が相逢ふてから昔日の情焰忽ち燃え上り今は誰れに遠慮もないと云ふので愈々結婚の約成り來る十月を以て花々しく華燭の典を擧ぐるさうだ、イヤ米國人の元氣は又違つた者と謂ふべしだ

豫告!!

◎紙、口繪等に一層の刷新を加へ亦多趣多興なる諸種の材料を精選して外觀の美の微意を表し且讀者の愛顧に添へしめ以て奉祝に酬ひんとす其の要目左の如し

次號女鑑は十一月三日天長節の當日に發刊し表紙、口繪、記事

女子教育所見　文部省視學官　中川謙二郎君
女子の精神修養と入學問題　下田次郎君
天長節　文學博士　小杉榲邨君
女學生の廿四時　白萩女史君
妻の日常試驗　中川柳紫君
奥大將の母堂　吉田光子
露西亞皇室の妖星　田中花浪君
軍事通信 魯艦來　從軍記者　園田紅村君
職業と女子　前田越嶺君
訪問の心得　菊地雪子君
マクレン嬢と日本　秋本芳子君
東關紀行講義　文學士　境野正君
女子教育上男女教員の優加と利完　佛國巴里文科大學教授　ヘンリ、マリオン氏
女子教育の王政復古　阿多廣介君
高山盈子と赤十字事業　宮内省文事秘書官　工藤一記君
女子の修養　島田三郎君
小說　幸田露伴君

定價
一册　前金　拾錢
三册三ヶ月分　前金　貳拾七錢
六册半年分　前金　五拾錢
拾貳册一年分　前金　壹圓
全國無遞送料

廣告料
五號活字二十三字詰　一行　金參錢
一頁　三十二行　金八圓
半頁　金拾圓
表紙一頁　六拾四行　金拾六圓貳拾圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規程
一切前金の事(但郵劵代用一割增の事)●前金領收證は差出不申雜誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年九月三十日印刷
明治三十七年十月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊案一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社　國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話 新橋 特八八番)

わかば會

▲筆の花

筆の花は歌文に關する先覺大家の論說考証を登載す
筆の花には兼題あり競点あり競点は本居豊穎、小出粲、海上胤平、金子元臣の四大家輪番撰評なり
筆の花は毎月十日發刊

壹部郵稅共金拾參錢

わかば會は歌文專修の團體にして毎月一回筆の花及び綠を發刊す
わかば會は斯道初學者のために研究部なるものを設け最も便宜の方法にて作歌の添削を取扱ふ
わかば會規約及び研究部の規定入用の方は郵劵參錢封入御申越あれ
わかば會會幹は…………塙　忠　雄

▲みどり

みどりは袖珍的小册子なり銘打つて曰く舊派を逐はず、新派を拒まず
みどりは毎號歌人傳あり批評ものあり作歌課題あり文章あり
みどりは筆の花の臨時増刊なり
毎月二十五日發刊の豫定

壹部郵稅共金七錢五厘

筆の花及び綠發行所

わかば會

東京市神田區山本町二十三番地

明治三十七年十月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月三十日
第拾四年第拾壹號　第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷